A－Ⅱ－bに分類され、前者にはNo.15、41、47の3点、後者にはNo.21、43、54の3点がある。

A－Ⅱ－aの3点は、外傾角度47°～51°内、器高4.0～4.8cm内、口径は底径の1.9～2.4倍内の坏である。このうち、特にNo.47の坏はA－Ⅱ類の中では最も器高が低く、底径も最大である。これは前述の如くA－Ⅰ類のNo.48、49の坏と重なり合って出土してきたものであり、形態・色調・胎土ともA－Ⅰ類的様相を呈する。

一方、**A－Ⅱ－b**の3点は、外傾角度50°～54°内、器高4.9～5.8cm、口径は底径の2.5～2.8倍内の坏である。概して体部の立上がりが不規則であり凹凸も激しい。

－B類－

実測可能の坏は38点、他に切離し痕を残す底部11片の出土である。このうち第12号ピット出土No.14の坏は、底部が剝離しているため切離し技法が不明であるが、他は全て回転糸切によるものだけで占められる。2～3の底部に箆による削痕が観察されるが、従来から知見する再調整というほどのものでもない。したがってB類は、剝離したものを除き切離し後の再調整を有する坏は一点もない。しかし、同じ切離しで無調整とはいえ、器形のばらつきは非常に大きい。

ここでは、形態や各部位の測定値の比較・検討の結果から**B－Ⅰ**、**B－Ⅱ**、**B－Ⅲ**の3類に分類したが、計測値を考慮した関係上、全体の半分以下の残存状況の坏は除外してある。また、底部の剝離したものや、表採、埋土中のものについても同様の扱いである。したがって最終的には19点について記している。

B－Ⅰ類は、体部の立上がりが比較的急なもので、口径に比して底径が大き目な坏である。No.3、No.14、No.16、No.29、No.39、No.42、No.51、No.53、No.67、No.81の10点の坏があるが、これらの坏は、前述の特徴の他に、体部に若干のふくらみを持つのが普通であり、口縁形は特に一定しない。中には直口気味の形態もある。体部の凹凸については、10点中6点の坏があまり目立たず、残る4点は顕著である。

底径と口径の比は、底径を1とすると口径が2～2.5の間にあり、平均値は1：2.3以下である。このことから全体として底径が口径の半分近くにあることが推察されよう。特にNo.39の坏は、丁度口径の½の数値を示す。外傾角度は50度以下の坏で構成され、No.3、No.67のように体部の立上がりが目立って急な場合もある。この2点はB－Ⅰ類の特徴的な坏であるが、器形的には土師器的様相を呈す。またこの一群にはNo.51のように体部外面に黒斑を有する坏をも含んでいる。

B－Ⅱ類には、No.1、No.23、No.26、No.38、No.52、No.68、No.71、No.72等のものがある。外傾角度は50度以下で、体部の立上がりが緩いのが特徴である。これらは底径：口径＝1：25～3内の比率を示す。平均値は1：2.8となり、B－Ⅰ類との差をみせる。B－Ⅱ類は、底径値そのものが分類1～2内に留まっており、緩やかに立上がる体部辺長が伸びているにも拘わらず、

器高はB－Ⅰ類と大差ない。寧ろ平均値では微少ながらB－Ⅱ類の方が低目である。このことら外傾角が小さくなるのは、当然であり、結果的に底径と口径の差が大きくなったものである。

形態的には、同じB－Ⅱ類の中でもばらつきはあり一様ではないが、口縁は外反する坏が多く、中にはNo.26、38のように体部が底部との境界から一旦横に伸び、その後、斜目に立上がる器形もある。しかもこれらは、器高が低く外傾度が最も強いもので、当然のことながら口径が大きく開く。その結果として、口径は底径の3倍近い数値を示している。No.1の坏は、これらと形態は異るが同様の比を示しており、以下No.23、68、71が2倍強の数値で続く。またNo.52、No.72の2点の坏は、黒斑を有し、特異な存在であるが形態的には同値における他の坏と大差ないものである。総じてみれば、雑な仕上がりであることは否定できなく、またB－Ⅱ類にあっては、C類の坏と形態が類似するものは一点もない。

B－Ⅲ類は、第1号竪穴状遺構内出土のNo.70だけの出土であり、これをもって一群の設定をするのは問題のあるところであろうが、ここでは本遺跡にあって最も小型の坏であることに視点を置きたい。胎土はあまり良くないが、内面に光沢を持っている。また煤状の炭化物が付着しており燈明皿の用途に具したと思われる坏である。

－C類－

実測可能の坏は第13号住居跡出土10点、第6号、第15号竪穴住所跡各2点、第17号、16号、2号、1号焼土・8号ピット各一点、計19点ある。これらの坏は、外傾角度が全て50度以上であり、A・B類とは異る。

19点中、剝離、磨滅のため、底部切離しの不明な2点を除き、全て回転糸切に限定される。再調整を有する坏は9点あり、手持篦削り2点、回転篦削り1点、手持篦削りと外面口縁部分に篦磨きの両様を有する坏1点、篦磨きだけによるもの5点がその内訳である。これらの調整は、技法によってその範囲が大体限定されており、明瞭な区分が可能である。C類は大別二種に分類されるが再調整を有する部分にあっては、更に二分される。ここでは、再調整を有する坏群を**C－Ⅰ**類、無調整の坏群は**C－Ⅱ**としており、前者はその技法によって更に**C－Ⅰ－a**、**C－Ⅰ－b**に細分される。

C－Ⅰ－aは、篦磨きだけの再調整による坏であり、第13号住居跡より4点、第6号住居跡より1点、計5点の出土である。このうち4点は、体部外面の口縁部分に1～1.5cm位の幅で篦磨きを施すもので、切離しは全て回転糸切による。残る一点は、切離しは同じであるが調整の範囲が体部下半にまで及んでいる。(No.28・5・6・7・13)

外傾角度は52～57度内、器高は5.2～5.6cm内におさまり、体部はふくらみを持って立上がる。口縁は内湾する器形もあり、外傾度の急な坏ほど底径が大き目であることが観察される。またNo.13、28の2点は胎土中に雲母を含みながらも精良であり、緻密でもある。

外面口縁部分の調整は当然のことながら全て横位方向の篦磨きであり、その部分のロクロナデ痕を完全に消し去っている。体部の凹凸は、全体としてあまり目立たないが、No.28は調整範囲が広いのにも拘わらず比較的明瞭に残っている。

内面調整については、特に一定したものではないが、横位方向の篦磨きが主体で丁寧な仕上げである。また内面中央部にはロクロ成形の際に生じてきたと思われる突出部分がある。

C－Ⅰ－b類は、端的に言って体部下半に篦削り調整を施す坏群である。第13号、15号住居跡出土各2点づつ、計4点が該当する。No.4は回転篦削り、No.12、32、35の3点は手持篦削りによるものである。このうち、No.12は、外面口縁部分に篦磨き調整があり、両様を有する坏である。技法的には、多様な様相を呈しているが、形態的には酷似している。本遺跡にあって、恰も削り調整を施す坏の規格性ともいえるほどである。

何れの坏も外傾角度51度前後、器高は4.5㎝と同値であり、口径・底径の計測結果も近似値を示す。体部の立上がりは、C類の中では最も緩やかで、口縁は全て外傾し、胎土も良質な坏類の一群である。

C－Ⅱ類は、再調整のない坏群で、第13号住居跡より4点、第2号、17号、1号（焼土）、8号ピットより各一点、計8点である。無調整のこれらの坏は、体部と底部の境界が明瞭であることを除けば、全体としての傾向性を抽出できないほど器形にばらつきがある。

外傾角度50～57度以内、口径の比は（2.3～3.0）：1、器高4.7～6.4㎝と各々の数値がかなりの幅を持っている。ここでは、口縁の外反するNo.9、11、31、60の坏が器高5.1～6.4㎝内であり、外傾するNo.2、8、10、66のそれは4.7～5.0㎝内に留まる。C－Ⅰ類にあって、外反する数点の坏は大き目であったがこの傾向は、C－Ⅱ類にも観察できるようである。この中で、特徴的な坏としてNo.10、31の2点があげられる。前者は、内外面の凹凸や断面等の様子から、巻上げ成形後にロクロを使用した可能性があり、後者は表面観察では黒色処理がみられない。しかし篦磨き痕は観察できる。ただ、何れの場合も確実に断定できるほどのものではない。

(2)考察とまとめ

以上、各類の分類について記したが以下、緑釉陶器をも含めて各々の考察を述べる。その後に、総合的な立場から本遺跡の位置づけをしてみたい。

a.A類について

須恵器A－Ⅰ類は、東北地方にあってロクロ不使用土師器の存在する段階でしばしば共伴する坏として把握されるものに類似している。県内にあっては9C前半期に比定される見分森窯跡群が生産を開始した以降の坏類ともみられるが、それ以前にあっては他地域からの搬入品とも解釈されるものでもある。勿論、9C代にあって在地生産の可能性を持つとはいえ、本遺跡を

含む紫波郡一帯の窯業の確立については、その実態が未だ判然としていないため断定できるものではない。が、紫波郡日詰二日町新田、通称杉の上に存する窯跡群出土の須恵器坏が本遺跡A-I類に似た形態をしているようである。これらの内容については後述するので詳細は省くが、手持箆削り調整を施していると観察される坏をも含むことから、本遺跡の発生以前の段階からの存続の可能性があり、その観点では志波城に想定される太田方八丁遺跡との関連で考える必要もあろうが、今後の報告を待ちたい。

何れにしろ、本遺跡では前記のA-I類と、相対的に底径の大き目な回転糸切無調整の坏A-II-aと明確な共伴をみせていることから、少なくともA-II-a類出現の時期を若干前後する頃に比定されてくるものであろう。本来的には、ヘラ切のA-I類がA-II-a類に先行すると思われるが、第10号住居跡にみられるように、切離し技法の異る坏が三枚重ねで出土している例もあり、消費の場においては技法の差を直ちに時間差として把えられない。一方、秋田県手形山2号窯では、回転ヘラ切と糸切の坏が重ね焼きされた形で出土している。口径に対する底径比平均は回転ヘラ切による切離しの坏の方が大きいものの、口径、器高平均では両者にあまり差がなく、似かよった器形である。これは生産の場にあってもヘラ切と糸切の二者の技法が同時に生産される場合のあることでもある。本遺跡における前述の3点の坏にあっても、切離しの差こそあれ、形態や計測値は殆んど同じであり、同一工人、同一窯内での製作による可能性を示唆する。とすれば、ヘラ切から糸切への過渡期的要因としてとらえることも可能であり、少なくとも本遺跡におけるA-I類とA-II-b類は、大きな時期差を持たずに存在していたことになるし、また切離しの差が形態の変化に全て直結するものでもない場合もあろうことを意味しているといえよう。

手形山2号窯は、出土する坏の成形技法やその他の特徴から、多賀城研における須恵器坏との比定を試み、その結果として9C中期いっぱいか後期初頭に位置づけている。県内における須恵器の編年はまだ確立していないが、機械的に同様の観点で本遺跡のA類をみると、A-I、A-II-a、A-II-b類は、技法や器形の特徴から各々多賀城研の6類-b、9類-a、b類にも比定されよう。6類-bは8C後半から9C後半にかけての年代幅を持つとされており、9類-aはその上限を9C半ば以降、9類-bは10C代を中心として位置づけられている。このことは本遺跡にあっても、おおよそながらも**A-I類→A-II-a類→A-II-b類**の流れを示すとみて大過ないといえるが、A-IとA-II-a類が前述の如くにあまり時期差をみせないようなあり方を示していることから、**(A-I・A-II-a類)→A-II-b類**という変遷観が妥当であろう。

年代については、ヘラ切による坏の絶対数が非常に少ない本遺跡のあり方は、糸切を主体に生産した江刺市瀬谷子法印山1・2・9号窯や、鶴羽衣台窯群が見分森窯群に後続する形として9C中葉から後葉にかけての操業時期に近い頃、即ち多賀城研の編年でいうならば6類-b的な

坏が消滅したかその直前と思われる９Ｃ後半頃を上限とするものであろう。また、下限については、A-II-b類が量的には少ないものの、A-I、A-II-aに後続する形としてみれば、9類－b的な特徴を持つことを合わせて、10C代を中心とする時期と考えたい。

b．B類について

B類は、内黒の土師器坏(C類)やくすべ色を呈する須恵器坏(A類)とは、色調・胎土・焼成・成形技法などで、何らかの相違をみせる一群の坏を指すが、東北北部におけるこの種の坏は、表杉ノ入式にも比定されるC類の坏と共に、桜井氏の第Ⅱ型式、草間氏の後期土師器等と呼称された坏類の範疇とされる類いのものである。これらの坏類は、平安期の特徴的な土器群として把握されているが、長期にわたる幅を持ち、その内容についても複雑な様相を呈している。

一見して酸化焔焼成によると思われるB類の坏は、秋田城の赤褐色土器、多賀城の須恵系土器、胆沢城土師質土器等の名称を与えられている土器群に比定され得るものでもあるが、概念的には、土師質土器に近いとらえ方をしている。B類中には広義の意味で赤褐色土器、須恵系土器等をも包括し、黒斑を有する坏をも含んでいる。また、基本的には、B類に相当する赤やき土器群が必らずしも須恵器生産の系譜下だけに出現してくる土器としてだけとらえているものでもない。須恵器的要素が強い部分にあっては、究極的に須恵系土器と呼び得ることが可能であるとしても、現段階では本遺跡の分類基準上において、従来の知見からする土師器や須恵器とは区別し得る性格の土器群を総称しているのである。

本遺跡にあって、B-I類に分類された坏は、形態のばらつきが目立ち、No.39、No.53の坏のように須恵器的なタイプのもの、No.3、No.67のように体部にふくらみを持ち、急な立上がりをみせるものなどがある。前者は、須恵器製作を意図したものの何らかの理由で赤褐色を呈した生焼きの坏、即ち焼け損じの結果と解釈することが可能であるとしても、後者の器形は、本遺跡出土の須恵器A類との比較において、前者と同様の解釈は出来ない。この場合は、須恵器生産を意図したものとは考え難い器形であり、どちらかというと土師器的である。また、No.51のように黒斑を有する坏が存在することや、須恵器とB類の消長関係が明確にとらえられない部分におけるあり方などから、所謂須恵系土器とは区別され得る要素を持っている。

秋田城（第17次調査）、払田柵址（第10次調査）、北上市相去遺跡等にみられる赤褐色を呈する土器群は、B類の一つの典型ともいえようが、調整を有する内黒土師器坏を伴出する段階にあって、本遺跡のB類もこれに近い時期が想定されるであろう。特に相去遺跡のB_1と呼称される酸化焔焼成の坏類は、B類とほぼ同じ様相を呈しているといえる。

払田柵址ＳＫ60土壙出土の赤やき土器は、嘉祥２年（849年）銘の年紀のある木簡を共伴する形で出土したものであるが、B類に類似したこの種の坏は、既に９Ｃ代に存在していたことが知られる。但し、この場合の赤褐色土器群は、底部に回転篦削り調整を持つ段階のものであ

るから、技法的に回転篦削り調整を持たない本遺跡のB類はそれより新しいと考えられる。多賀城においては、須恵系土器以前の赤やき土器は端的にいえば、須恵器的な形態を有し、量的にみれば、須恵器の焼き損じといっていいほどの出土率をみせるものであろうが、少なくとも本遺跡を含めた前述の遺跡群にあっては、形態的な分類や量的比較などからして同様の解釈は出来ないようであり、東北北部特有のあり方を示している。

更に、秋田城においては、第17次発掘調査の8～9層における篦切須恵器と回転糸切無調整の赤褐色Aと呼ばれる坏が量的に反転する要因の1つとして、須恵器焼成の最終作業行程である還元化を削除することによってなる作業の単純化をあげ、また両者の坏の形態や技法が明確に異ることから、須恵器生産に携わる集団以外の生産品と考えたいとしている。このことは、酸化焔焼成による坏の生産を最終目的とする工人の存在を示唆しており、当時の土器生産の多様化が窺われる。

一方、話は前後するが、払田柵においては第10次発掘調査の結果、Ⅰ～Ⅳ層までの層序が確認されており、内黒土師器・須恵器が層序毎の土器数に占める割合は、上層になるにつれて漸次減少する傾向にある。これに対し、本遺跡のB類の範疇に包括される類いの土器が増加してきている。この場合、坏には黒斑を有するものをも含み、本遺跡と同様である。切離し技法についてみれば、上層にいくにしたがい糸切による坏が増え、篦切によるものは漸次減少する。また、他層との比較においてⅢ・Ⅳ層には再調整を有する坏がみられ、B類類似の坏が須恵器の量を越えるのは第Ⅲ層以降である。Ⅲ層より上層にあっては、糸切による切離しで無調整のものが圧倒的に多い。前年の調査で検出されたSK60土壙はこのⅢ層期に伴うらしいとされており、土壙を含めた形でのⅢ層期における土器組成が9C代の一時期を形成するととれないこともない。前述の秋田城8層は、9層との比較において、須恵器と赤褐色土器とが量的に逆転現象を示す層であるが、遺物のあり方は払田柵址Ⅲ層のそれにも類似している。8層は、削り調整を有する赤褐色土器をも含み、明かに回転糸切技法を中心とする時期にあり、しかも無調整が圧倒的に多い。何れにしろ、払田柵址SK60土壙やそれと同時期の第Ⅲ層の遺物のあり方と推移が東北北部の趨勢としてとらえられ、木簡の時期に関わる9C中葉という年代の一点が与えられるとするならば、赤褐色を呈する坏にあって、回転糸切無調整のものに限定される本遺跡B類は、払田柵址のそれより以前に溯るとは考えられず、他の遺物との共伴関係や県内糸切技法の定着時期と相俟って9C後半から10C代にもかかる時期に位置してくるものでもあろう。これは、相去遺跡B_1類についても同様のことがいえ、当然、11C以降に位置づけられる所謂須恵系土器とは様相を異にするものである。少なくとも岩手・秋田両県にあっては、このようなB類的な坏を主体的に生産した工人が存在していたものであり、他の坏類と同様に各々の目的を持った技術集団が、社会的に容認された形で集落の需要に応じる生産をしていたものであろ

う。したがって、ここでは桑原氏のいうように、単に技術的混乱期としてだけとらえているものではない。が、しかし機能的に大差ない両者が、須恵器生産との関わりの中で、変貌していくことは否定できないようである。

須恵系土器の範疇に属する坏をも含む可能性があるのは、明かにC類とは形態を異にするB-II類として分類された一群である。B-II類は、口縁が外反し、体部の凹凸が目立つ作りの坏であり、全体的な特徴としては、体部の立上がりが緩やかである。器高そのものの平均値はB-I類と大差ないが、体部辺長は伸びており、その分、口径と底径の差が大きい。須恵器でいうならば、多賀城研の9類—b的な形態に近いといえよう。

また、遺構によっては、B類だけで構成される場合もあり、しかもその遺構が本遺跡内では、新しい時期に位置づけられ、B-II類的な坏を主体的に出土することから、所謂須恵系土器出現の時期にも比定されよう。しかし、この場合も黒斑を有する坏をも含み、B-I類のあり方と同様である。黒斑を持つこの種の坏類は、相去遺跡、払田柵でもみられるが、払田柵においては第Ⅱ層に伴うとされるSK91土壙に散見するものである。この土壙では、出土する坏類のうち赤褐色土器が全体の8割近くを占め、切離しは回転糸切を主流とする一時期にある。勿論、ここでは、黒斑を有する坏とそうでない坏とが各々異る系譜として存在するというとらえ方をしているのではない。しかし、黒斑を有すること自体が須恵系土器の概念から外れることは否定できない。したがって、くすべ焼きを省略した集団が9C代に出現して以来、その後の過程の中で、須恵器生産とある一定の関係を持ちながらも、全てが須恵系土器に包括されたものとは言い難い。また、C類の共伴関係で大きな差をみせるものの、ほとんどの遺構にB類の存在を確認できる本遺跡にあっては、この種の坏が一旦、還元焔に統一されるというようにも思われない。

ここで、須恵系土器の年代とそれに共伴する土器について言及するが、須恵系土器は多賀城第15次発掘調査第6層より出土している。最下層から6層までは、土師器坏にあって回転糸切によるものを主体とし、ヘラ切、又は再調整のある坏を混在している。また須恵器と赤褐色を呈する坏が全体の比の中で量的に逆転するのは、第5層である。時期的には、第5層直下の第6層にあたる部分より西暦1000年前後の年代観を与えられる灰釉長頸瓶が出土していることから、第5層の年代は11C初頭以降に位置づけられるとしている。

しかし、6層にみられる土師器坏のあり方は、圧倒的に糸切によるものが多いが、技法や調整の多様性でみる限りは岩手県内にあって、9C代に想定される集落にもみられる様相である。したがって逆転現象以前の同層で初めてみられる須恵系土器の上限がどの程度の時期まで溯り得るかは不明であるが、秋田城や払田柵に限らず、猫谷地の第二様式にも散見する赤やきの坏や本遺跡のB類をも含めた類いの坏が、11C以前の段階では、須恵系土器とは区別されながらも、

それらに類似した坏として存在していることだけでなく、逆に須恵系土器そのものの始源もまた古い様相を呈す可能性のあることも否定できない。

何れにしろ、酸化焔焼成による坏類を総称したB類は、東北北部にあっては、須恵器が退化する以前に既に存在し、その間、相去遺跡のように集落内に窯業の施設を持つ特殊な例もあるが、一般的には、還元焔に統一されるというようなことはなく、本遺跡のようにA類とB類が混在したあり方を示したものであろう。こういう中にあって、須恵器の退化現象が並行してきたものであり、特に多賀城の場合は、須恵器との明確な消長関係をみせた土器群が須恵系土器として把握されてきたものであろうと思われる。したがって、**本遺跡のB類も、究極的には須恵系土器群に混在して、平安時代後期の土器群として変遷していったものであろう**と考えたい。

県内にあって、須恵系土器の範疇にあると思われる坏類は、江刺市瀬谷子、蔦の木、水沢市胆沢城、金ケ崎町鳥海、北上市極楽寺等の諸遺跡で代表される。この時期には、B類類似の坏は、器高が低く小型化への傾向をみせ始める。本遺跡B－Ⅲ類はただ一点ながらまさにこの時期に近い頃にも比定されようが、まだ皿状の坏を明確に伴う時期としてとらえられるほどのものでもなく、下限そのものは大きく下降するものではあるまい。

また、内黒土師器は、瀬谷子遺跡のように11C代にもみられるが、本遺跡にあっては、B-I類的な坏群が、まだC類の坏を伴う一時期として10C代を中心にして考えるならば、B－Ⅱ・Ⅲ類は、それらに後続する形として10C後半から11C代にかかるものとしてとらえたい。

c・C類について

C類は、前述の如くC-I-a・C-I-b・C-II類のタイプに分類することが可能であるが、第13号竪穴住居跡のように多様な出土を見せる場合もあり、技法の相違が直ちに時間差としてとらえられるものでもない。しかし、調整技法やその部位によるなどして明確な器形の変化が観察されることから、生産の場においてはある程度の時間差を持つ可能性は充分にあると思われる。

C-I-a類は、体部外面にも篦磨きを施す坏類であり、その範囲が口縁部分だけに限定されるものと、体部あるいは全面にも及ぶものとがある。前者には破片のものも含まれるが、宮城県多賀城・東山遺跡、秋田県秋田城・野形遺跡、青森県鳥海山遺跡、岩手県百目木、稲荷、宮田、一本松等の諸遺跡にみられ、後者は山形県八森遺跡、宮城県青木脇、青木後遺跡、岩手県相去、高前田、胆沢城、上平沢新田等の諸遺跡にもみられる。

このようにC-I-a類は、東北各地に散在しており、内面における器面調整の延長としてみれば、とりたてていうほどのことでもないと思われるが、他の遺跡にあっては絶対量が少ないのが普通であり、本遺跡第13号住居跡のように単独の遺構から完形に近い形で4点も出土する例は少ないようである。

一方、C-I-b類は、C類の中にあっては器形・技法上で明確に区分される一群であり、本遺

跡において削り調整を有する坏の規格性を連想させるほど類似した坏で占められる。この共通点については分類の項で記したので再述しないが、全体として器高が低く安定した器形の坏である。県内にあって、類似の伴出例は、胆沢城ＳＤ114溝跡出土のものに散見するが、技法的には回転糸切後に回転篦削り、あるいは手持篦削りの二者の調整を有し、器形的には浅目であり、体部に墨書の痕跡を残す例もある。しかし、この場合は極端に器高の低い坏をも含んでおり、また、同様の坏類を出土する他の遺跡にあっても、篦削り調整を有する坏類がC-I-bのような器形に限定されるものでもないようであるから、本遺跡のようなあり方は、まさに生産の場における工人の傾向性を示唆しているものかもしれない。

C-I-a・bの坏を出土する第13号、15号竪穴住居跡は、各々の共伴関係でみる限りでは、Ｂ類があっても、まだ量的に少ない段階にとらえられようが、同時にＣ類にあって未だ旧来の技法を継承しながら存続していた時期にも位置づけられよう。このことはＣ類がロクロを採用し、それ以降に糸切技術が定着した時点にあっても、既に再調整を有さない須恵器の影響にあまり左右されない一面を持ち、独自の生産体制の中で発展してきたことをも意味しているものであろう。

C-I-aとC-I-bの先後関係については、口縁部分に篦磨き調整を有するC-I-aのタイプの坏が、秋田城・多賀城において須恵器とＢ類類似の酸化焔焼成による赤やき土器類が、量的に逆転現象を示す以降の層にみられることや、坏類が回転糸切を主流とする一時期ということと相俟って、C-I-bよりは時間の下降を思わせる。しかし、№12の坏のように二者の調整を同時に有する場合もあり、明確な時間差を示すと断言できるものでもない。客観的にみて、この程度の調整は本来的には、内面調整の延長ともとれることから、無調整に近い技法の坏として考えれば、篦削り調整を有するC-I-bよりは新しいと言える程度であろう。したがって、C-I-aにあって篦磨きが体部、あるいは全面に及ぶ場合は、そう大きな差をみせるものではないと思われる。

前述の№12のように二者の再調整技法を同時に有する坏は、東山遺跡にも見られる。他の坏類の技法や共伴関係からみて、本遺跡の第15号、13号住居跡に近い時期に想定されるものである。県南にあっては、水沢市真城丘上野団地遺跡のあり方に近い時期にもとれようが、東山・上野団地遺跡では、篦切による坏が共伴する段階にあり、Ａ類はさておきＢ・Ｃ類にあって全て回転糸切による本遺跡よりは以前の段階に存するものであろうと推察される。

一方、C-II類は、ロクロ技術上から篦削りの伝統が失われた以降の坏であり、回転糸切無調整による坏群である。C-I類がある特定の共通性の中で、形態的に規格化された一面を持つのに対し、C-II類は形態のばらつきが強く目立つ。またC-I類では半数以上の坏が、胎土中に雲母を含むのに対し、C-II類には一点しかない。雲母を多く含む坏は、胎土が比較的良質であり、作りも丁寧である。生産の場にあって、このような土器製作過程における相違が、調整技法の

有無と相俟って時間差を示すものであるなら、従来の知見からC-I類→C-II類への流れとみることは大過なかろう。これは、C-I類を中心とする第6号竪穴住居跡が重複関係によって、本遺跡で最も古い段階に位置する遺構であることからも首肯される。このようなC-IからC-II類への流れは、阿部義平氏による土師器坏KからLへの流れとほぼ同様であると思われる。糸切痕を残すこの種の坏は、同氏によれば陸奥国分寺塔址知見から、10C前半には確実に存在していたことが知られるという。

ここで、第6号竪穴住居跡とほぼ平行すると思われる第15号竪穴住居跡出土の内黒高台付坏について言及するが、皿状の器形を持つNo.33(写真No.55)は、沼山源喜治氏による胆沢城出土土師器分類結果中の第Ⅳ類Aに相当するものと思われる。これは、北上市高前田、あるいは福島県金重谷地第一号住居跡出土のそれに類似した器形を持つものである。これらの年代については、第Ⅳ類Aが9C後半以降、金重谷地出土のものは9C～10C代と考察されている。高前田遺跡にあっては集落そのものの年代観であるが9C後半から10C代にもかかる時期に推察されている。10C代を中心とされる北上市秋子沢・葛西壇遺跡にもこれに近い形態の高台付坏を出土しているが、口縁部分の外反度合が弱く、付高台の形も異る。本遺跡出土のものは、器形的には前述の高前田・金重谷地遺跡出土のものに最も近く、これらの坏は何れも高台が「ハ」の字状に開き、口縁部は強く外反するのが特徴である。また共伴する土師器も、本遺跡と同様の調整を有しており、時期的に近いと思われる。金重谷地遺跡にあっては、高台付坏に共伴する再調整の土師器坏が回転糸切無調整のそれに先行するものとしてとらえており、本遺跡と同様の解釈に立っている。ただこの場合、金重谷地遺跡では地域差からくる相違であろうが、篦切による土師器坏をも散見し、本遺跡より早い段階の様相を呈す。しかし、おおよそながらも第6号、15号竪穴住居跡のような土器組成は、10C以前からみられる一般的なあり方と解することは可能であろう。但し、その年代については、上野団地遺跡や金重谷地遺跡以前に溯るものではなく、また金重谷地遺跡ほどの幅を持つものではないと推される。今の所、この種の坏の下限については、具体的に明記できないが、その上限については、県内における一般の集落に糸切技術が定着したと思われる頃、しかも再調整を有する段階として、9C代の後半にも近い中葉以降という程度に留めておきたい。

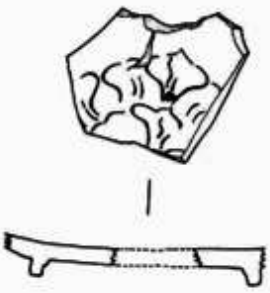
一方、C-II類だけを出土する第17号、2号竪穴住居跡、第1号遺構等は、酸化焔焼成のB類坏と明確な共伴をみせるが、量的にはB類がC類を凌ぐほどである。またC-I類とC-II類が混在する第13号竪穴住居跡のような土器組成は、福島県関和久遺跡Ⅵにも知られる。この場合は、比較的長期にわたる使用の結果とみられるが、本遺跡にあってもC-IからC-IIへの過渡期的変遷の中におけるあり方を加味した上で、同様の解釈にたちたい。

C-II類類似の坏は、県内にあってC-I類に後続する形として11C代を中心とする江刺市瀬谷

子遺跡、同市蔦の木遺跡等で代表される時期まで存続しているようであるが、C-II類のあり方は必らずしも一様ではない。例えば、本遺跡のようにC-II類とB類、あるいはA類を共伴する場合、相去Ⅱ期のように還元焔焼成のA類類似の坏（B_2類）とだけの共伴、一ノ関市下毛下釜遺跡のようにC-II類的な坏しか出土しない場合等、遺跡によって坏類の共伴が異っている例がある。したがって、所謂須恵系土器の出現してくる前段の様相は必らずしも同様の経過を辿ってきたとは言い難く、各々の集落間の差が時間差を意味するものか、それとも広く10C代を通して同時に並行するのかは明言できない。9C代における坏類の共伴関係は、高橋信雄氏の指摘にもあるように遺跡の性格によってかなり異るようであるが、それ以降であっても尚、複雑な様相を呈していることは否定出来ない。C-II類的な坏の年代観についていうならば、前述の陸奥国分寺塔址の関わりと表杉ノ入式土器の範疇として推察されることから10C代を中心とするものとして把握したい。C-II類そのものは、前述のように11C代にも入り込むようであるが、本遺跡にあっては、その確証を得ていない。したがってC-I類に後続するものであるとの年代観を示すにとどめる。

d．緑釉陶器片について　第57図　写真56-a・b参照

Bブロック西側地点Ⅱ層下部よりの出土であり、ほとんどⅢ層との境界近くに存していたものである。この緑釉陶器片は、付高台のある皿形陶器の一部であり、内面に花文が施されている。厚さ約7㎜、大きさ6×7㎝位の底部片で内外面共に緑色の釉がかかっている。断面にみる胎土が灰褐色を呈しているにもかかわらず、釉が濃いためか緑の彩色はあまり暗く感じない。焼成は須恵器的で固く焼きしまっており緻密である。底部の切離しは、回転糸切によるものと思われ、釉の下にその痕跡を残し、付高台と底部の境界にはひびわれが入っている。



第57図　緑釉陶器片 S－½

東北北方における施釉陶器の出土状況は、下羽場遺跡の他に秋田県払田柵址、山形県城輪柵址、同県藤島町の官衙跡、宮城県多賀城廃寺、福島県白河遺跡、岩手県北上市秋子沢遺跡、同市極楽寺遺跡、水沢市胆沢城、盛岡市竹花前遺跡、江刺市落合Ⅱ遺跡等にみられる。このうち白河遺跡、藤島官衙跡、極楽寺出土のそれは細片のため器形が不明であるが、他は椀又は皿形のものであると思われる。全体として量は少なく、特に花文を施すものとなると下羽場遺跡、多賀城、胆沢城だけと更に少ない。なお徳丹城から朱色に近い釉らしい痕跡を持つ丸瓦が出土しており、特殊につくられたものかもしれないとしているが(注1)、若しこれが畿内に多くみられる緑釉瓦に匹敵するほどのものであるならば、これほど中央との密接なつながりをみせる例は東北にはない。全国的にはこの種の瓦塼類は大和を中心とした畿内地方に集中しており、そ

の出土地は寺院、宮城が圧倒的である。これは彩釉瓦を使用した殿舎と階層を端的に示すものであるが、この傾向は緑釉陶器を出土する遺跡についてもある程度いえることであり、東北地方にあっても寺院、城柵、官衙等に出土する例が多い。岩手県内では北上市極楽寺遺跡、胆沢城がその典型であるが、秋子沢、竹花前、落合、下羽場遺跡に見られるが如く集落址内からの出土例も相対的に多い。このことは官窯による生産の施釉陶器が特定の需要に応ずるだけでなく、一般の集落にも供給を始めた可能性を示唆するものであるが、当地方にあっては、中央との密接なつながりを持つ官衙あるいは城柵との係わりの中で、特にそれらとの関係が深いと思われる集落にみられると解釈するのが自然であろう。このような陶器は、いかなる経緯でもって前述の集落にもたらされてきたのかということについては明言できないが、他の一般の集落よりは政治的に強い意図を背景に持つ性格から、そういう中での交流の結果としてとらえることは可能である。『日本逸文延暦21年正月の条』には、諸国から胆沢城に多くの要員が配された記事がみえるが、この他にも尾張、越後等諸所からの人員の派遣についての記録もある。文化の伝播は、そのような政治的な政策の副産物としてだけではなく、現地人の宣撫教化の一環として精力的に行われたことであろうから、その後においても中央から配されてきた人々に負うところが多かったであろう。

名古屋大学の橋崎彰一氏によれば、本遺跡出土の緑釉花文陶器片は、尾張国尾北窯産のものであり、釉の様子や胎土から察して11C中葉の年代を与えられるとしている。尾北古窯址群は、5C後半から13C頃まで存続したものといわれ、猿投古窯址群と共に当時の官窯の代表的なものである。

秋子沢遺跡、竹花前遺跡出土の緑釉陶器片は、具体的な窯名は不明であるが、前者は9C後半から10C代にかけて、後者は京都付近の産とも推察され、11C代に比定されている。落合Ⅱ遺跡出土の緑釉片は釉の加減や断面の胎土でみる限りは竹花前出土のものに似ているが、年代的には不明である。

何れにしろ、本遺跡にあっては11C中葉という年代の一点が与えられるわけであるが、今の所、この緑釉陶器片と直接的に結びつく遺構は確認できず、本遺跡が同時期まで存続していた確証はない。しかし、調査に入る以前の段階で、既に上層部分の削平がかなりあった付近の出土のため、本来的にはそれに結びつく一時期の遺構が、何らかの形であったであろうことは想像される。現段階では、僅かに第1号・23号焼土遺構における遺物のあり方が、一般的に県内で11C代以降に比定され得る時期にあることから、緑釉陶器の存在する時期に最も近いであろうという程度におさえたい

註1　日本の三彩と緑釉（五島美術館出版）、陸奥国徳丹城（岩手県文化財愛護協会）

V. まとめ ―総合的な立場から―

本遺跡では、坏類は全てロクロ成形によるものであり、ロクロ未使用の坏は一点も存在しない。しかも出土する坏類の切離しは回転糸切によるものを主体とし、全体として無調整の坏が多いことなどから、県内におけるロクロ技術定着の一時期を構成することは明らかである。

甕類にあっては、ロクロ未使用の例も多数あるが、県北地方ほどの頻度ではない。未だ窯業跡の未確認な県北地方にあっては当然のこととともいえようが、この種の甕は坏類にあってロクロがかなり定着した以降であっても、比較的長期にわたって存続するようである。

本遺跡に近接する湯沢A・B、稲荷、一本松等の諸遺跡もまたロクロ成形坏で構成される集落であり、遺物の出土状況も類似したものである。これらの集落は、本遺跡と同一の段丘面上に位置し、少なくともロクロ技術が定着した時期にある程度の集中性をもって形成された可能性が強い。このことについては、当時の政治・社会情勢が背景としてくることでもあろう。

したがって、以下においては、まず県内におけるロクロ成形土器生産の概観についてふれ、次に紫波地方における本遺跡の位置づけをしていく。なお、最後には『付記』として本遺跡が出現してくるまでの歴史的背景についてもふれておく。

1. 県内におけるロクロ成形土器生産の概観について（坏を中心として…）

(1) 須恵器について

県内にロクロ成形技術が導入されたのは、現状では城柵・官衙の設置に関わる時期と推定されている。県南地方においては、胆沢城創建期に並行するとみられる水沢市見分森2号窯が今の所、県内最古の窯跡と思われ、ヘラ切による坏を生産していたことが知られる。田中琢氏によれば、糸切による坏は9C初頭の平城上皇関係遺跡出土のものによってみられるのが始まりとされていることから、この段階での須恵器工人は、当然ヘラ切による技術集団と思われる。

伊藤博幸氏によれば、県内で糸切の須恵器が出現する最初の窯跡は、江刺市瀬谷子鶴羽衣台東一号窯とされ、その形態や出土遺物から見分森2号窯に後続するとされている。東一号窯にあっては、出土する坏の技法は見分森2号窯のそれと決定的な差はないが、甕類にあって糸切による技法のものがみられる。糸切技法が一般的になるのは、瀬谷子窯群の法印山1・2・9号窯、鶴羽衣台地区の窯が操業された頃とされ、特に後者は胆沢城用の瓦を生産した窯とも目され、時代的には両者とも試案ながら9C中葉・後葉の年代観が与えられている。

更に10C代に至っては、同じ瀬谷子窯跡群において、長根山・松山等の地区を中心として集中的に須恵器生産が行われたとされ、その切離しは糸切により、再調整のものはない。また、その頃から胆沢城のみならず県北までへも供給範囲を拡大し、この段階で瀬谷子の主たる窯業生産は衰え、水沢市外浦前田、北上市相去遺跡第7地区窯跡のように地方で単発的に操業され出すものとしている。

11C以降については、10C代からの窯業の終焉時間がずれ込む程度であり、この時期に操業を開始されたとみられる窯があるのかは今の所不明である。

本遺跡の存する紫波群内では、現段階で6ケ所ほどの窯跡があったと推定されている。一ケ所は盛岡城に関わる瓦を生産したものとされ、他は土器の生産をしたものと思われる。大正期に日詰二日町新田中島、通称杉の上，同町箱清水堂の前の登窯が発掘されたが、その内容や窯跡の規模についての詳細は不明である。また、矢巾町赤林・都南村油田・同村飯岡山付近の窯跡と推定される地域については未調査であり、範囲確認もはっきりしていないのが実情である。このため、県内中央部の土器生産の実態は判然としない。しかし、杉の上、堂の前の窯跡群が須恵器を生産していたことは確かであり、周辺に土師器をも散見することから本遺跡をも含めた一帯に、志波城・徳丹城の体制の中で、これらの窯群に関与する集落が存在していたであろうことは否定できない。特に杉の上窯跡については、実地踏査によると、東向斜面に焼土断面が露出しており、ヘラ切の須恵器坏や甕片が出土している。また台地上の周辺一帯にも累々と遺物が散布しており、大規模な窯跡群、集落の存在を示唆している。出土するヘラ切の須恵器坏は、胎土が粗く、必らずしも同一とは言い難いが本遺跡出土のA－Ⅰ－a、あるいは太田方八丁遺跡出土の須恵器坏にも類以した形態を持つものである。

更に、同じ台地上の西側には、東北新幹線に関わる杉の上Ⅱ遺跡が隣接しており、住居跡内にロクロピットを持つ遺構もある。全体としてヘラ切の切離しによる坏を主体的に出土する部分に於て、県南地方における胆沢城創建期、あるいは見分森2号窯の存在した時期にも比定され得るものでもあろう。また、杉の上Ⅱ遺跡の北側には杉の上Ⅰ遺跡が沢をはさんで存在するが、この場合は酸化焔焼成による坏を主体とし、糸切によるものを出土する。これは、ヘラ切から糸切に至るまでの集落だけでなく、窯跡もまた同時期に存在していた可能性を示唆するものである。このような推移は、おそらく県南地方と同様9C代からの流れとみて大過ないであろう。

(2) 土師器について

土師器については、沼山源喜治、高橋信雄両氏によって、北上川中流地域を中心とした概況が示されている。これによると9C代にあっては、江刺市宮地遺跡・江釣子村猫谷地遺跡の一部の住居跡・尻引遺跡等にみられるように無段・平底風瓦のロクロ不使用土師器群とロクロ成形坏とが共伴するあり方をロクロ土師器への過渡期的段階としてとらえている。特に猫谷地・尻引遺跡においてロクロ不使用土師器坏と、ヘラ切無調整のものを主体とし少量の削り調整及び糸切無調整のものを伴う須恵器群、少量の無調整のものを伴う内黒土師器群が共伴するあり方を指している。それ以降、漸次ロクロ不使用土師器坏は減少し、ロクロ成形土師器坏にあっては糸切無調整のものへ、須恵器坏ではヘラ切のものから糸切へとそれぞれ主流を占めるに至るとしている。但し、遺跡によっては土器共伴のあり方がかなり異る場合があるようである。

10C代に至っては、糸切無調整のものが主流となり、ヘラ切・ヘラ削り調整技法はほとんどみられなくなる。沼山氏は、その一つの例として北上市相去遺跡をあげている。相去遺跡は、集落内に登窯を有する遺跡であり、その特性が他の同地方の集落にも該当するかどうか問題があるとしながらも、10C代の一つの典型としてとらえている。相去遺跡は、高橋信雄氏によって、共伴遺物のあり方からⅠ期、Ⅱ期に区分され、坏は四種類に分類されている。即ちA1—内黒・ヘラ磨き仕上げ、糸切無調整あるいは回転、手持ヘラ削り調整、A2—内黒、ヘラ磨き仕上げで糸切無調整、B1 —酸化焔焼成・糸切内外無調整・外反度強・黒斑を持つ場合もある。B2 —環元焔焼成・糸切無調整の坏、とある。Ⅰ期はA1 とB1 とが共伴し、Ⅱ期にはA2とB2とが共伴する。何れの場合もB1 とB2 が共伴することはない。またⅠ期は、内黒坏の量や調整技法からみてⅡ期に先行するものであり、この観点ではB1 がB2 より早い段階に出土していたことになる。

なお、この他に10C代の遺跡としては、北上市秋子沢・相去三十人町・葛西壇等の諸遺跡があたるとされている。

11C以降については、所謂須恵系土器の生産と使用が行われた時期としてとらえ、北上市鬼柳西裏・江刺市瀬谷子・同蔦ノ木・江釣子村下大谷地等の諸遺跡が該当する。坏は何れも器高が低く小型で、皿と共に糸切無調整、色調は赤褐色を呈するものである。また、内黒土師器は、集落址にあって少量伴っているのが特徴である。

以上が、北上川中流地域におけるロクロ技術導入後の大筋の流れであるが、セット関係を重視した観点からは、佐久間豊氏による猫谷地遺跡での各様式がある。これによると、9C代にあっては、須恵器は普遍化され、土師器の器種は減少し、坏類ではロクロ不使用のものはみられない。また土師器長胴甕では外面叩き技法に大きな特徴を持つとされる一群を第二様式としてとらえている。セットの内容は、土師器坏、長胴甕、甕、鉢、須恵器坏、長頸壺、甕、赤やき土器坏等である。他の遺跡にあって同じ様式の範疇に属するものとしては、水沢市真城丘上野団地遺跡を挙げている。なお、上野団地遺跡は、小笠原好彦氏によって、実年代は避けながらも土師器坏成形における技法の多様性から、平安時代土師器区分の第二段階（第2類）を構成するとしてとらえられている遺跡でもある。これらの遺跡では量的にはそう多くはないが、内外面に調整を持たない酸化焔焼成の坏が出土しているのも特徴の一つである。

また、これに後続するとされる第三様式は、10C代に比定されており、土器セットとしては土師器坏・長胴甕・甕・鉢・堝・須恵器坏・甕・蓋・赤やき土器をあげている。この段階で出土する赤やき土器は、所謂須恵系土器と全く同じ様相であるが、時代的には不明であるとしている。また、ここでは、赤やき土器と須恵器との伴出関係は、検討を要する余地を残すが相去遺跡と同様であるとしている。

2　本遺跡出現以前の概観

以上、県南地方を中心としたロクロ成形土器群の流れについて記したが、ここで本遺跡の編年的位置を確定する前に、このような県南地方の推移が紫波地方とどの程度の並行関係にあるのかという基本的立場を明確にし、更に本遺跡出現以前の様相についてふれたい。

前述の宮地・猫谷地遺跡の一部の遺構は、その遺物のあり方から時間的間隙性を持たず、漸移的にロクロ土師器に移行していったことが察せられる。この移行期と一部重なるか、あるいはそれをはさむ形で北上市尻引遺跡、水沢市石田遺跡等がある。大別二時期で構成されるこの二遺跡は、宮地遺跡ほどの明確な過渡期的特徴を有しないが、ロクロ採用直後かそれ以降にあっても無段・平底化したロクロ不使用土師器坏を何らかの形で共伴し、ロクロ成形坏が一般的になるとそれが著しく減少していく傾向にある。このようなロクロ不使用坏のあり方は、県南地方におけるロクロ不使用坏の最終段階に想定されるのは当然であり、沼山氏が提示しているが如くロクロ成形土師器坏に直結していくとみることは大過ないことであろう。

これに対し、都南村百目木遺跡は、やはり二時期にわたるが、この場合のロクロ不使用土師器坏は、沈線を有するものが主体である。また県外にあっては、青森県浅瀬石遺跡のように、宮地遺跡のあり方にも類以した出土をみせる部分もあるが、この場合も沈線状の段を有する平底あるいは丸底の土師器坏であり、完全に無段のものはなく、岩手県南地方とは異った様相を呈している。このことは百目木遺跡のように未だ沈線を持つ坏類が、ロクロ不使用土師器坏の最終段階に想定される可能性もあり、ロクロ技術の導入時期そのものに差がないとすれば、紫波地方は県南地方との比較において様相を異にするといわざるを得ない。しかし、段を沈線化すること自体が無段化への志向を高めつつある時期であろうから、そう大きな差をみせるものではあるまい。当然、当地方にあっては、無段・平底になり得ない段階でのロクロ導入の可能性もあるが、類例を持って判断したい。

このように、ロクロ技術導入以前にあっては、県南地方と時期差が多少なりともあることは否定しない。がしかし、ロクロ技術が導入され、須恵器生産が開始された以降については、紫波地方も大体県南地方と同様の推移を経るものと思われる。即ち、当地方の土器類は、直接的には見分森・瀬谷子窯跡群に左右されるものでないとしても、官衙・城柵と共に密接な関係をもって発展してきた体制の中では、相互の交流は容易に可能であろうし、また城柵の創建期に差こそあれ、この程度の時間差で窯業に携わる専門的技能集団が急激に変化することもないであろう。しかも彼等は政治的な背景を持って集中的に移動したであろうから、この時期以降は、大筋として県南地方と同様の推移が並行的に進展してきたものと思われる。土師器にあっても、須恵器とは生産体制が異るものの、ロクロ技術導入そのものについては、須恵器の影響を受けたことは否定できなく、同様の立場に立つことは可能である。ただこの場合、ロクロの導入時

期が須恵器生産との関わりや、場所によって地域差をみせることは当然予想され、沼山・高橋両氏に指摘されるように、『9C代における土器共伴のあり方が遺跡によってかなり異るようである。』という結果になると思われる。このような傾向は、紫波地方にあってもまた、城柵との関わりでとらえる限りは同様の経過を辿るものであろうから、全体的な流れとして当地と県南地方との時期比定はおおよそながらも可能である。したがって、以下の考察については、基本的にこのような観点にたって進めていく。

次に、本遺跡が出現してくる前段の様相について述べるが、基本的には前述した沼山・高橋両氏の見解に沿うものである。ただ、ここでは広く9C代ととらえるものの須恵器窯群と同じような観点を加え、可能な限りに9C代を細分化してみたい。

佐久間氏によれば、第一様式と第二様式は共存することなく、しかもロクロ不使用土器で構成される第一様式は、西暦802年以前に終了していたことになるとしている。とすれば、坏類が全てロクロ成形による第二様式は、それに後続する形で9C代の特徴的なあり方を示すといえようが、このことはロクロ成形土師器もまた城柵・官衙関連の所産としてとらえていることであり、須恵器の生産開始時期と大きな差をみせるものではないと思われる。もち論、須恵器とは異なる生産体制の背景を持つ限りは、各々の様式は共存しなくても、部分的には継続される側面をも持つであろうから、宮地遺跡のようにロクロ不使用とロクロ成形による坏が共伴する形となり、ロクロ成形土師器への移行期そのものは9C前半代に始まったものであろう。またこの過程において沈線を有するものをも含めて無段・平底化しつつあった坏類がロクロ成形土師坏に直結していくならば、ヘラ磨きやヘラ削り等の再調整という旧来からの技法を踏襲する事も又、自然的なことであり、同時に無調整のそれに先行するものとしてとらえることも当然可能である。

このような9C前半代を中心とするロクロ土師器坏は、須恵器にあってヘラ切無調整のものを生産した見分森2号窯、あるいは有調のものを含む杉の上窯群等出土の坏とは成形技法を異にしながらも並行する時期にあり、糸切技法もみられる鶴羽衣台東一号窯の操業時期、あるいは法印山地区操業の開始時期にも近い頃、即ち9C中葉頃までの間に、移行期から転換期までを迎えたものと推定する。

なお、東北地方の糸切技術の採用年代については、山形県で9C末～10C初頭、宮城県多賀城では、再調整を持たないもので9C以降と推定されている。岩手県にあっては、本来的には山形県のそれより溯るとは考え難いが、専門工人の移動が政治的な背景を持ち、集中的に行われたことや、窯業もまた夷俘に対する宣撫教化の一環として強力に押し進められたことを思えば、中央との時間差を考慮しても9C中葉頃までの伝播は可能であろう。城柵・官衙に関わる窯群である以上、自然伝播と異なり、その後急速に導入されることは推察される。太田方八丁遺跡のよ

うに城柵としての特性を有する遺跡にあっては、それ以前であっても搬入品を加えるなどして中央とあまり差のないあり方を示す場合も想定される。しかし一般的な集落にあっては時間差を持って追随するものであろう。

このような背景をもって新しく登場する糸切技法の技術は、土師器にあって直接的に急激な変化を余儀なくされるものではないが、坏類にあってヘラ切と糸切の二者が組み合う変化点を迎えることは当然予想される。土師器にあっても、須恵器の影響に左右されないまでも、ヘラ切と糸切の両者に本質的な差異はなく、導入時点での抵抗はあまりないであろうから、小笠原氏が指摘したように、結果的には二者の切離技法が土師器製作に持込まれた形になり、前代から継承される再調整技法と相俟って多様な出土をみせる一時期が存在することとなる。このようなあり方は、移行期に後続する一つの典型と解され、具体的には前述の第二様式の範疇とされる上野団地遺跡で代表される一時期でもある。上野団地遺跡は、更に小笠原氏の第2段階（第2類）としても把握されているものでもあるが、これは回転糸切無調整の坏類で構成される第3段階（第2類）に先行するものとしてある。同氏によれば、第2段階には他に宮城県東山・白石家老内・多賀城第15次調査6層等の諸遺跡が含まれ、赤やき土器が一定量共伴する。特に多賀城第6層のそれは所謂須恵系土器とも呼称される坏でもある。ここで須恵系土器の存在が論ぜられているが、猫谷地の第二様式にあっても、赤褐色で内外面を再調整しない坏が若干ながら共伴しており、第三様式に至っては、時代は不明としながらも須恵系土器と呼ばれているものと全く同じ坏の存在が確認されている。このことは、相去Ⅰ期でもみられたような須恵系土器に限定されない坏類の存在をも示唆するものである。同時にこの頃にはロクロ不使用土師器坏は消滅し、坏類はそれ以降、徐々に回転糸切のものへと変化していくが、いちおう上野団地遺跡で代表されるような土器のあり方は、ロクロ技術の移行期に後続する形として9C中葉を中心とする時期としてとらえられよう。

本遺跡は、出土遺物からみた限りにおいては、以上のような経緯を経た以降に出現してくるものと思われるが、詳細については以下に記す。

3. 本遺跡の編年的位置

本遺跡は、まさにロクロ技術が定着した時期で、坏類は全てロクロ成形によるものであり、しかもその切離しは回転糸切によるものを中心とする頃である。また、本遺跡でB類と呼称した酸化焔焼成土器が量的に増えつつある時期を中心とした遺跡であり、その上限は、土師器坏で、再調整を有する段階で、沼山・高橋両氏の9C代に位置づけられ、第二様式、あるいは第2段階とも称された範疇にもかかるものでもある。

本遺跡では、坏類を中心とする分類結果として、大別Ⅰ～Ⅲ群に区分される。なおⅠ群は、C類を伴う段階であるが、調整技法の有無から更にⅠ－a，Ⅰ－b群に細分される。Ⅰ－a群

は、再調整を有するC類を中心とし、A類と微量のB類を伴う。Ⅰ－b群は、回転糸切無調整のC類とB類が共伴、A類は微量、Ⅱ群はA・B類が共伴するが、C類は微量、又は共伴しない。Ⅲ群はB類だけで構成される一群である。

本遺跡の上限については、前述の通りであるが、Ⅰ－a群として区分された一群がそれに該当する。

第6・13・15号竪穴住居跡がその代表であるが、この場合は第二様式と同じ9C代とするものの、C類の考察で記した通り、坏類のあり方は、上野団地遺跡よりは新しい様相を呈しているため、9C後半から10Cにもかかる範囲に比定されよう。

当地方にあって、セット関係や土師器甕の成形技法等からみて、第二様式の範疇としてとらえられるものには紫波町上平沢新田遺跡があげられるが、この場合も9C代に限定されず、10C代にも継続していくようである。

また、第13号竪穴住居跡におけるB・C類のあり方は相去遺跡のB_1、A_1のあり方と大差ないが、相去B_2に相当すると思われるA類（本遺跡における還元焔焼成坏）も共伴しており、同時に相去Ⅰ期に相当する段階にあっては、寧ろB_1類似の坏が量的に少なく様相は異る。当然、B類類似のB_1が、A類相当のB_2に先行するというとらえ方は、本遺跡では出来ない。しかし、酸化焔焼成による相去B_1類は、共伴する土師器の様相からみれば、相去にあって須恵器坏の地元生産が始まる以前のあり方としては、B_2類に先行するとしても不自然ではない。更に、本遺跡にあっても、何らかの形でB類を出土する遺構が大多数ではあるが、第2号竪穴住居跡、第8号遺構のようにC類とB類が共伴してもA類は小細片だけが微量の出土というように明確な共伴をみせない場合、また第4号竪穴住居跡のように、B類を主体的に出土する中で須恵器を共伴するというものの、それが黄橙色を呈する焼き損じと思われる坏、あるいは出土する底部片が白橙色を呈する軟質のものを含むなどして、部分的には相去遺跡に近い様相を呈する場合もある。

相去遺跡のように集落内に窯業の施設を持つ時期については、須恵器の項で若干記したが、このような傾向は他の地方にあっても強まっていくであろうから、須恵器坏のこのようなあり方は、本来的には地元の須恵器生産との関わりの中で考えていくべき性質のものであろう。しかし、先述の如く当地方における窯業の実態が判然としない現状では、地元における須恵器生産の初源を裏づける根拠にもならない。ただ可能性としては、本遺跡もまた相去Ⅰ期に近いあり方を示す部分にあっては同様の流れをくむ中での変形ととれないこともない。しかし、本質的には、共伴のあり方は異るものであり、やはりこの傾向は、集落内に窯業の施設を有する特性からくるものなのであろう。大勢としては、この時期に相去遺跡のような流れがあったかもしれないが、ほとんどの遺構に何らかの形でB類を出土する本遺跡にあっては、機能的に大差

ない両者を受け入れた形となり、結果的には相去ほどの明確な差をみせずに混在するあり方を示したものと思われる。

このようなあり方は、紫波地方において、上平沢新田、あるいは本遺跡に隣接する湯沢A・B、稲荷、一本松等の諸遺跡にもみられ、少なくとも当地方における一般的なあり方といって大過ない。これらの遺跡では、坏類にあって篦切技法・篦削り調整を有するものは非常に少なく、回転糸切で無調勢のものが大勢を占め、内黒土師器坏の全体量に対する割合もそう大きくはないのが特徴であり、いわば10C代の一般的あり方ともいえよう。

セット関係からみれば、本遺跡も含めて、土師器坏、高台付坏、長胴甕、甕、須恵器坏、大甕、甕（小型）、長頸壺、B類類似の坏等で構成されているようである。その内容は、猫谷地遺跡の第三様式とは若干異る部分もあるが、遺跡によってはかなり類似している例もある。全体としては北上市秋子沢遺跡にみられるようなセットで代表されるものと思われ、やはり10C代のあり方とみなされよう。この時期はI－a群の坏類のあり方に後続する形としてI－b群が該当するわけであるが、前述の第2号竪穴住居跡、第8号焼土遺構の他に、4号、8号、16号、17号竪穴住居跡等がその範疇に含まれる。I－b群にあって特筆すべきは、I－a群に比しロクロ成形土師器甕の出現率で大きな差をみせることである。

更に、II群の第7号、21号竪穴住居跡等がA類を伴出しながら、C類が減少していく過程としてとらえられ、11C代にも及んでいくものであろう。また以上の時期を通して鉄製品や墨書の坏が普遍化していくようである。

その後、第23号竪穴住居跡のように廃棄された家屋がある程度まで埋没した時点で、当地が再利用され、緑釉陶器の年代観に近い頃にIII群としてとらえられた遺構が並行していったようである。この段階は、本遺跡の最終段階にも想定され、B類の坏だけで構成される。特に、坏類は口縁が外反し、体部の凹凸が顕著なB類を中心に出土する焼土遺構で代表される。第23号、1号方形焼土遺構がその例であるが、性格は不明である。同時に器高が低く、小型化への傾向を有するB類を出土した第1号竪穴状遺構もまた、性格不明としながらも、この時期の典型であろう。III群の段階にあっても未だ黒斑を有するB類の坏が伴出するが、本遺跡にあって既にC類は完全に消滅し、A類もまた明確な共伴をみせない一時期の遺構であることは否定できない。本遺跡にあって、多賀城における所謂須恵系土器として把握される坏類の年代観に最も近い一群でもある。

一方、III群の遺構の北側一部に分布する鉱滓は、焼土遺構と同レベル上にあり、近くから土製のふいごの羽口と思われる遺物も出土している。このことから製鉄に関する何らかの遺構が存在する可能性を想起させるが調査区域内では焼土遺構も含めて、直接的に関連すると

断言できる遺構は検出されない。しかし緑釉陶器片の出土した場所もこの羽口と同じ地点であり、出土層位も同じである。緑釉陶器片は11C中葉の年代観を与えられているが、本来的にはこの時期に関わる遺構の存在した可能性は充分考えられる。若しそうであるとすれば、本遺跡は11C中葉以降にまで及ぶものとなるが、遺構の項でも記した通りB・Cブロック東側は、工事に関係する削平が激しく、場所によっては焼土が削られたり、地山が露出するなどかなりの度合で遺構が破壊されているようである。第1号焼土、第8・24号遺構が、本来的には住居跡に関わる施設の一部と思われる要因があるにも拘わらず、性格を明確にし得ない遺構としてとらえられたりするのはそのためである。したがってB類で構成されるⅢ群が、緑釉陶器片の存在した時期に最も近いあり方を示すものとしてとらえることは可能であるが、前述の如き調査以前の問題を考慮すれば、直接的にこれらがどの程度の並行関係にあるのかを論ずることは避けたい。

ともあれ、この段階におけるB類は、未だ黒斑を有する場合もあるが、A類とは共伴せず、形態的には須恵器の流れをくむ器形にもとれ、所謂須恵系土器にも比定され得るものでもある。また、第一号竪穴状遺構出土のB－Ⅲ類とされた一点の坏は、燈明皿の用途に具された可能性を持つものであり、器形が小型化していく傾向の中での所産とも思われ、広く11C以降という程度におさえられよう。

以上のようなことから、大雑把ではあるが、本遺跡は9C後半から11C代を通した時期までに及ぶ集落址であったと推察する。

＜付記(1)＞

次に、本遺跡のように城柵から離れた地域に集落が形成される要因として、当地方の歴史的背景についてふれてみたい。

歴史的には、志波城が設置されてから8年後の弘仁2年（811年）正月には、「和我・薩賀・斯波」の三郡が置かれ、開拓事業が進み、一郡を置くのに必要な単位集落が形成された経緯がある。このことは、新墾地への人員配置が促進され、未だ局地的であったとしても、その背景には律令制が浸透してきたものであり、城柵、官衙に準ずる集落の出現をも意味する。

胆沢城・徳丹城・太田方八丁遺跡等が何れも水田経営の適地に立地されたこと自体、単に蝦夷地に対する征討・戦闘だけの目的で設置されたものではなく、他に地域開拓行政に便利な立地を志向するようになったことでもあろう。当然、かなり精力的に開田・開畑を押し進めたことであろうし、それに伴って集落が周囲に拡散していくのは自然的なことといえる。

本遺跡に近接する湯沢A・B、稲荷、一本松等の諸遺跡も同じような経緯で発生してきたものと思われるが、これらの遺跡はそう大きな時期差を持たずに、城柵から離れた当地域の広い範囲にわたって存在していたようである。それだけにこのような集落は、建郡の直後に出現してくるものではなく、ある程度安定した情勢を背景とするものでなければならない。なぜなら、

建郡の後とはいえ、内部には蝦夷勢力との複雑な関係をも含み、地域的には依然として半植民地的な様相を呈する場合があり、城柵から離れた地域が集落として安全に存在するためには、それだけの条件が必要なのである。当時の集落を形成する課程としては、単にロクロ技術を持った集団が忽然と出現してきたというよりは、原則的には周辺の夷族を包みながら徐々に新郷を形成していったものであろう。それだけに現地との交流は積極的に行われたと思われる。例えば、弘仁3年（812年）には、夷俘等の『同類のうちより、心性の事にさとく衆の推服するところの一人をえらび置き、これが長となす。』という制度を設け、更に弘仁4年（813年）には、『諸国の介以上一人を選んで夷俘専当となし、遷都の代には更に選下』するなど現地人との交流の事実があり、また懐柔しようとする意図が窺える。にも拘わらず、弘仁8年（817年）には吉弥候部於夜志閇など61人の蝦夷が叛乱を起こしていることが史実に知られる。更に降って承和2年（835年）二月には俘囚であった人々に居住地の郡名を姓として与えたりもしているが、それから2年後の承和4年（837年）四月には、『栗原・桃生以北の俘囚、弦を控くこと巨多にして皇化に従うに以て反覆定まらず、四・五月は所謂馬肥慮騎の時なり、もし非常あらば支禦しがたし…。』との付言があり、岩手県を含めた地方の治安は完全でなく、一触即発の不穏な情勢にあったことが察せられる。実際に同年中と承和7年にも騒乱が有ったようである。

一方、出羽国では、元慶2年（878年）にその地方の蝦夷が大挙して叛乱を起こし、3月には秋田城が焼失するという事件が勃発し、9C後半における日本海側は不安定な時期にあったことが推察される。

岩手県では、建郡後にあってこれに比肩するような大事件が発生した形跡はない。しかし、たとえ散発的であったとしても、三郡が設置され、ある程度中央政府の意図する体制に官轄されるようになっても完全に当地域が統治されていたとは断言できないのである。この傾向は北上川流域の城柵から遠くなればなるほど支禦し難くなるのは当然であり、9C中葉と雖も周辺広くに集落を拡大するだけの基盤が完全とはいえない地域もあったことであろう。

水田開発は、城柵専属の柵戸を中核として推進されたわけであるが、夷族が帰順したり、帰化したりして治安が確立してくるにしたがい、柵外の耕地にも転住するようになる。これらの人々は、開発の進展と共に各々の地に定住し、前述の如く周辺の夷族を包みながら新郷を形成していったことであろう。本遺跡の出現は、当然このような過程を経る中での所産でもあろうが、同時に北上川以西の山際地帯も治安が保たれ、集落の拡散が促進される背景もまた出来上がった頃であると思われる。

当地域が平穏になってくるのは、仁寿2年（852年）にそれ以前からあった志賀理和気神社に対して正五位下が加叙されたあたりからと推察される。このことは当神社を征夷開拓政策の一環として国家統制の中での官社、即ち式内社として認めたものであり、国家として祀る神社

そのものの認知は、国家勢力の浸透と共に、既に紫波地方の掌握が中央政府にも評価されてきたことを物語るものであろう。

県南地方においては、北上市極楽寺が天安元年（857年）に福田事業をも使命とする定額寺に列せられ、水沢市黒石寺にあって貞観4年（862年）12月作の墨書銘を持つ薬師像が製作された頃にも近い。黒石寺の薬師像は、京都の仏像様式を受けた作品であり、本格的な造像が行われたことを示唆している。このようなことから、9C中葉以降になって、文化的・精神的な側面を通して政治的にも安定してくる一時期が想定される。降って元慶5年（881年）5月には、鎮守府官人に夷族が任用されたりもしている。これは現地人との交流がより活発になり、移民中心の開拓から蝦夷の人々による開拓もまた積極的に押し進められたことを裏づけるものである。一般の集落において文字の使用が認められ、墨書の坏類などを出土するようになるのもこの頃からと思われる。

以上のようなことから、北上川中流地域は、当地方をも含めてその大半が国家統制の中に組みこまれ、周辺に集落が拡散する条件は備わり、人心共に安定した一時期を迎え、9C後半には律令体制を支える原動力ともなっていったことであろう。本遺跡は、このような情勢を背景として生じてきた集落と思われ、歴史的にはその上限を9C中葉以降に推察することも可能であろう。

＜付記(2)＞

最後に第8号竪穴住居跡床面出土の炭化材についてふれてみたい。この炭化材片は、日本アイソトープ協会へ鑑定依頼の結果、^{14}C測定値からB・P（Before physics）、1660±85（1620±85）年との実年比が提示されている。なお、（ ）内の数値は、Libbyの値による試算値である。

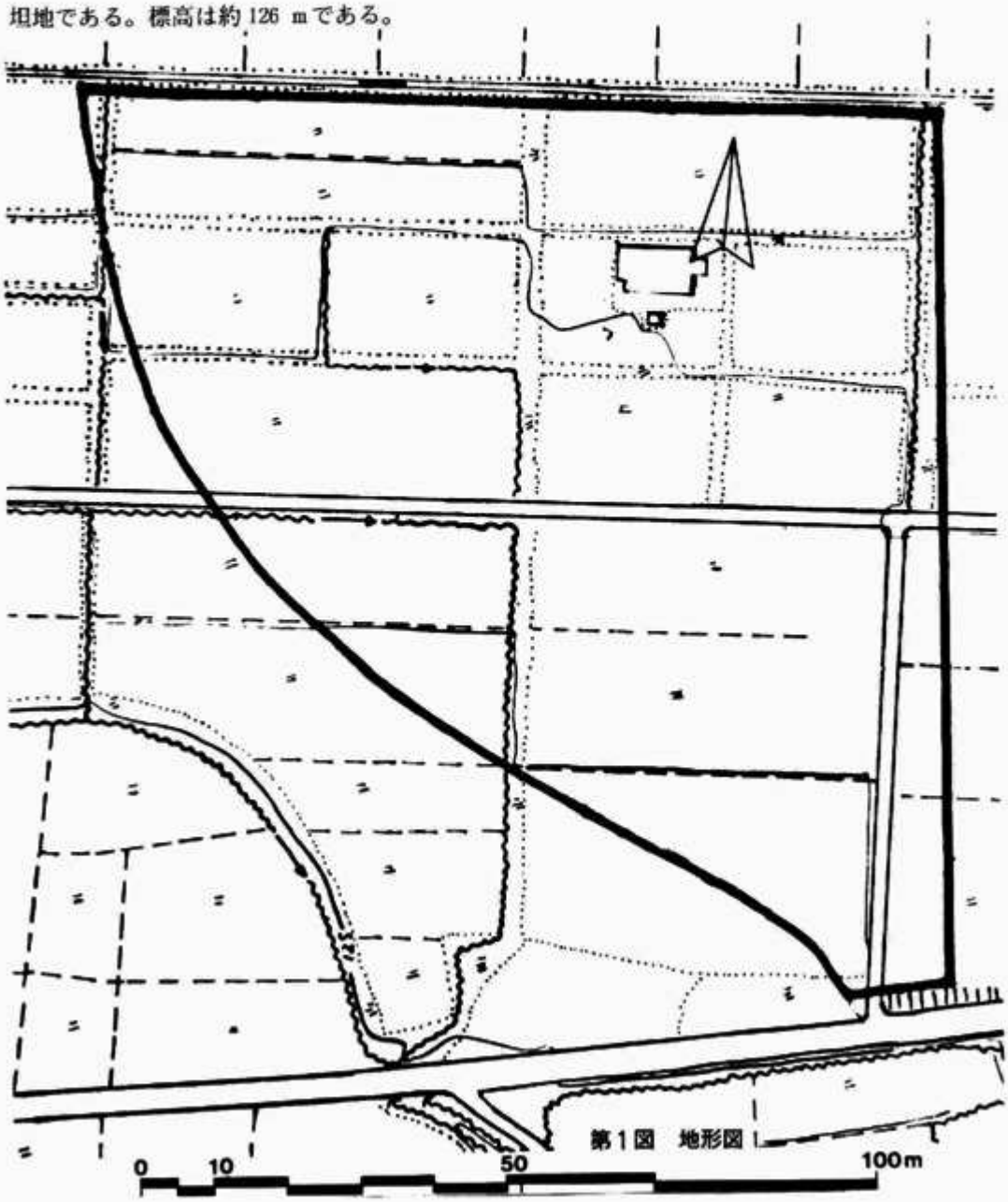
これは、平安時代に比定される本遺跡の実態にそぐわないものであるが、資料の採取と選定が適格であったとはいえない経緯がある。本遺構は、第17号遺構（写真43）と同様、焼失家屋と認定され、多量の焼木材が採取されている筈であるが、調査後2年間放置された中で紛失しており、実際には、唯一点の小細片が床面出土として、他の遺物に混じって残っていたにすぎない。今回、^{14}Cを測定したのがそれである。しかし、焼失家屋の焼木材の一部という確証もなく、本来的にこの遺構と、確実に同時存在していたかという点については問題のある資料であったことは否めない。また、その出土状況についても、単に床面出土というものの、遺構内における採取地点の位値、埋土等との関わりについても不明であり、結果的に層位学的裏づけのない資料でもあった。このような不備な点については、整理者の力量に関わる問題でもあるが、直接的に発掘調査に関与しない整理担当者の限界とも考える。なお、この資料の取扱いについては、本遺跡内の他の遺構にあって、微量ながらも異った時期の土器片が床面上からの出土として把握される例などを鑑み、結論的に同様の観点から、紛れ込みと判断したい。

湯沢（A）遺跡

遺　跡　名：湯沢A（略号YZ-A75）
遺跡所在地：紫波郡都南村湯沢第14地割字間渡54-1 他
調査期間：昭和50年7月1日～9月5日
調査対象面積：5,300㎡
発掘調査面積：5,300㎡

Ⅰ　遺跡の位置と環境

遺跡の位置と地形；遺跡は紫波郡都南村湯沢第14地割字間渡54―1他（下湯沢）に位置している。東北本線岩手飯岡駅の西約2kmの地点で、東流する湯沢川の北約140mの北岸段丘の縁沿いに細長く東西に延びた輪郭をしている。現在は盛岡南インターチェンジの西半分で、東北自動車道下り線から、県道三本柳―湯沢線に出る路線に当っている。地形は開田と水田耕作に依り、段丘崖は大部失われているようである。現状は大部分が水田、一部宅地で、段丘面の平坦地である。標高は約126mである。



第1図　地形図

Ⅱ　調査の方法と経過

調査の方法；湯沢(A)遺跡は、前年の昭和49年10月に、稲荷、湯沢Ｂ・Ｃ、下羽場の各遺跡と共に、重機による表土除去がおこなわれて、遺構の検出がなされている。従って、表土は遺構の検出されなかった地点に集積されていたため、表土の堆積状況については、調査不能であった。表面のクリーニングによって遺構の再検出をおこない、続いて座標の設定をおこなった。座標の設定は、稲荷遺跡で設定した座標をそのまま延長して使用した。従って基準点は、東北自動車道の中心線、ＳＴＡ 622＋00 を基準点とし、622＋00 と 622＋40を結ぶ直線を基準線とした。しかし、遺構の存在する地域が基準点より西へ60ｍ～ 135 ｍ、北へ 113 ｍ～南へ 9 ｍと、かなり広いため、基準点より北 120 ｍ～北90ｍをＡブロック。北90ｍ～北60ｍをＢブロック。北60ｍ～30ｍをＣブロック、北30ｍ～０ｍをＤブロック。０ｍ～南30ｍをＥブロック。基準点より西30ｍまでをＡブロック、西30ｍ～60ｍをＢブロック、西60ｍ～90ｍをＣブロック、西90ｍ～ 120 ｍをＤブロック、西 120 ｍ～ 150 ｍをＥブロックとする30ｍ×30ｍのブロックを設定した。更に１つのブロックを３ｍ毎のグリッドに細分し、北から南へ、ａからｊ、東から西へ03～30の名称を付した。従って３ｍ×３ｍの地区名はＡ・Ａ・ａ03－ＥＥｊ30等の名称となる。

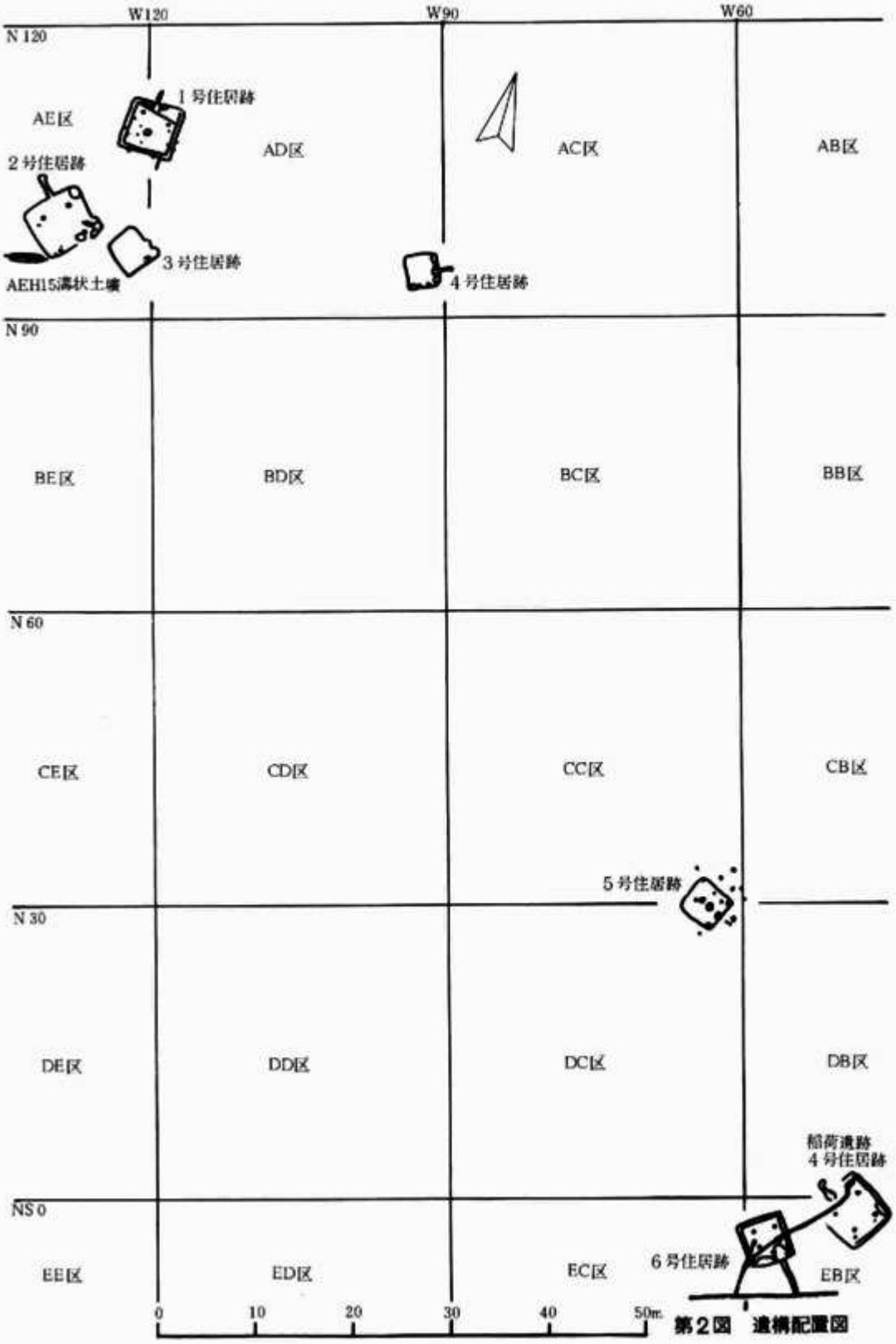
遺構の名称は上記のブロック、グリッドに基づいて付けた。住居跡は北西隅の地点で、他の遺構は中心部の地点で、ブロック、グリッドに合わせたものである。

基準線の方向は、稲荷遺跡同様、真北より西へ 17.0° 傾いている。

住居跡の精査は、畔を十字に残す４分法をとり、埋土の状態と遺物の層位区分を調べるようにした。４分された住居跡内の各区は、北東区をＱ１、北西区をＱ２、南西区をＱ３、南東区をＱ４と呼ぶことにした。又、レベル基準は、インターの中心杭から読みとり、基準杭を新たに住居跡毎に必要な数を打ち込んだ。他の遺構については、埋土の状態を調べるため、ベルトを１本中心部に残して精査を行なった。遺構実測図は、すべて20分１で作製したが、かまどと壁の輪郭、ピットと遺物等を別々に測定して図面記入し、重復による記入困難を避け、調査後整理の段階で合成図面を作製した。

調査の経過；調査は昭和50年７月１日から９月５日までおこなった。遺構の精査は住居跡からおこない、南から北へ進めたが、住居跡の仮称№は北から南へ、西から東へ付けた。又、表土下の黄褐色粘土層は、不帯水層のため降雨後は、遺構内及びその周囲に水溜が出来２ケ月以上も水が引かないため、排水溝を掘るのに大部日数と労力を必要とした。

調査の結果、住居跡６棟、溝状土壙１基が検出された。住居跡１棟は北側の一段高い段丘面に在り、他の３棟は同一段丘面に、他の２棟は更に一段低い南側の段丘面にある。溝状土壙は２号住居の西側に近接して発見された。基本層序はⅠ層は表土で黒褐色腐植土、厚さは不明である。Ⅱ層は黄褐色粘土層で、稲荷遺跡とほぼ同質である。


W120
W90
W60
N 120
N 90
N 60
N 30
NS 0
AE区
AD区
AC区
AB区
BE区
BD区
BC区
BB区
CE区
CD区
CC区
CB区
DE区
DD区
DC区
DB区
EE区
ED区
EC区
EB区
1号住居跡
2号住居跡
3号住居跡
4号住居跡
5号住居跡
6号住居跡
AEH15溝状土壙
稲荷遺跡
4号住居跡
0
10
20
30
40
50m

第2図　遺構配置図

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1　1号住居跡（ＡＥｃ 03）

（遺構の確認）　基準点より西へ 117.26 m～ 113.06 mの地点、ＡＥｃ 03地区、及びその周囲に黒褐色の落込みを確認した。段丘面の南縁に当り、段丘崖の比高は60cmである。遺構確認面は、水田耕田土下の黄褐色粘土層である。

（重復、増改築）　なし

（平面形、方向）　東西4.90 m、南北5.30 mの方形であるが、南壁が東へ60cmほどずれているため、歪みがあり平行四辺形状を呈している。主軸はほぼ北を向いている。

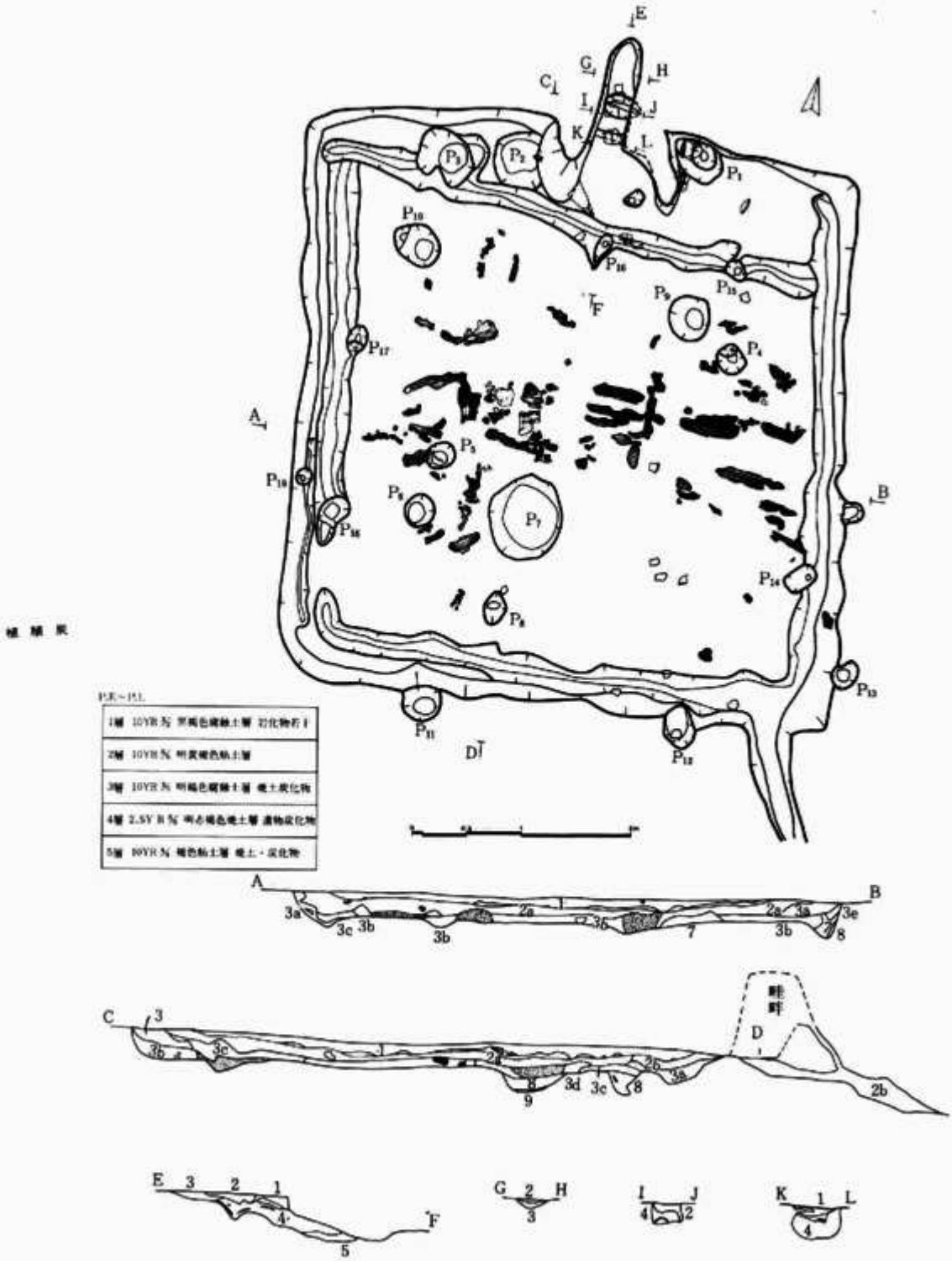
（堆積土）　4層に大別できる。1層目と2層目の間に粉状パミスが堆積している。

1層　10ＹＲ2/3黒褐色腐植土層で、遺物を含む。第2層は、2ａ・2ｂの2層に分れ、10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層で、壁ぎわは少量の粘土を含み、遺物を包含する。第3層は、3ａ・3ｂ・3ｃ・3ｄ・3ｅ・3ｆで、主に床面を覆う。10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層で、炭化物、焼土、粘土、遺物を含む。第4層は7・8・9層で周溝やピットの埋土で、黒褐色腐植粘土混合層である。

（床面）　地山をそのまま使用している。あまり固まっておらず、ほぼ平坦であるが、南に向って緩傾斜している。床面から壁へはかなり急角度で立上がり壁高は20cm～30cmである。壁沿いの施設として、周溝がつくられているが、北壁沿いでは、北西コーナー付近から、かまどの前を斜めに通り、東壁沿いの周溝の中途に通じている。又、西壁下では南端が50cmほど無くなり、その西隣りに1.7 mの細い溝が南北につくられている。東側周溝に1、北側周溝に2、西側周溝3、小ピットがある。南壁東端部が切れて、周溝から南へ延長する溝があり、段丘崖へ通じる排水溝と思われる。又、床面上に多量の炭化材が焼土と共に検出され、焼失家屋と思われる。

（柱穴）　主柱穴と思われるピットは4つある。北側の2は周溝の南側に東西に並び、南側の2は南壁の上場に接して外側に並ぶ。柱穴状ピットは、周溝上に6、東壁外南端に1、Ｑ1床面に1、Ｑ3床面に3ある。主柱穴はNo.9～No.12で、No.9は上場径35～40cm、下場径17cm、深さ50cm、黒褐色腐植土で3ｃ層と異似する。No.10は、上場径37～43cm、下場径14～17cm、深さ44cm、埋土はNo.9と同じである。No.11は、上場径35cm、下場径14～20cm、深さ28cm、埋土は同じである。No.12は、上場28～40cm、下場8cm、深あ30cm埋土は同じである。

（かまど）　北壁中央にあり、壁を掘り込んでつくられている。燃焼部は巾65cm、奥行70cmで、約10cmほど浅く掘り下げている。両袖共残存し、地山の周囲を掘下げてつくられている。煙道は長さ88cm、巾27cm。深さ7～17cmで、途中に東西に細長い深さ約10cmの掘り込みがあり、遺物を含んでいる。煙出の輪郭は確認出来なかった。


E
G
H
C
I
J
K
L
A
B
D
F
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
1層 10YR 5/2 黒褐色腐植土層 灰化物若干
2層 10YR 5/6 明黄褐色粘土層
3層 10YR 5/6 明褐色腐植土層 焼土炭化物
4層 2.5Y 8/4 明赤褐色焼土層 遺物炭化物
5層 10YR 5/4 褐色粘土層 焼土・炭化物
3a
3b
3c
3d
3e
2a
2b
7
8
9
D

第3図　1号住居跡

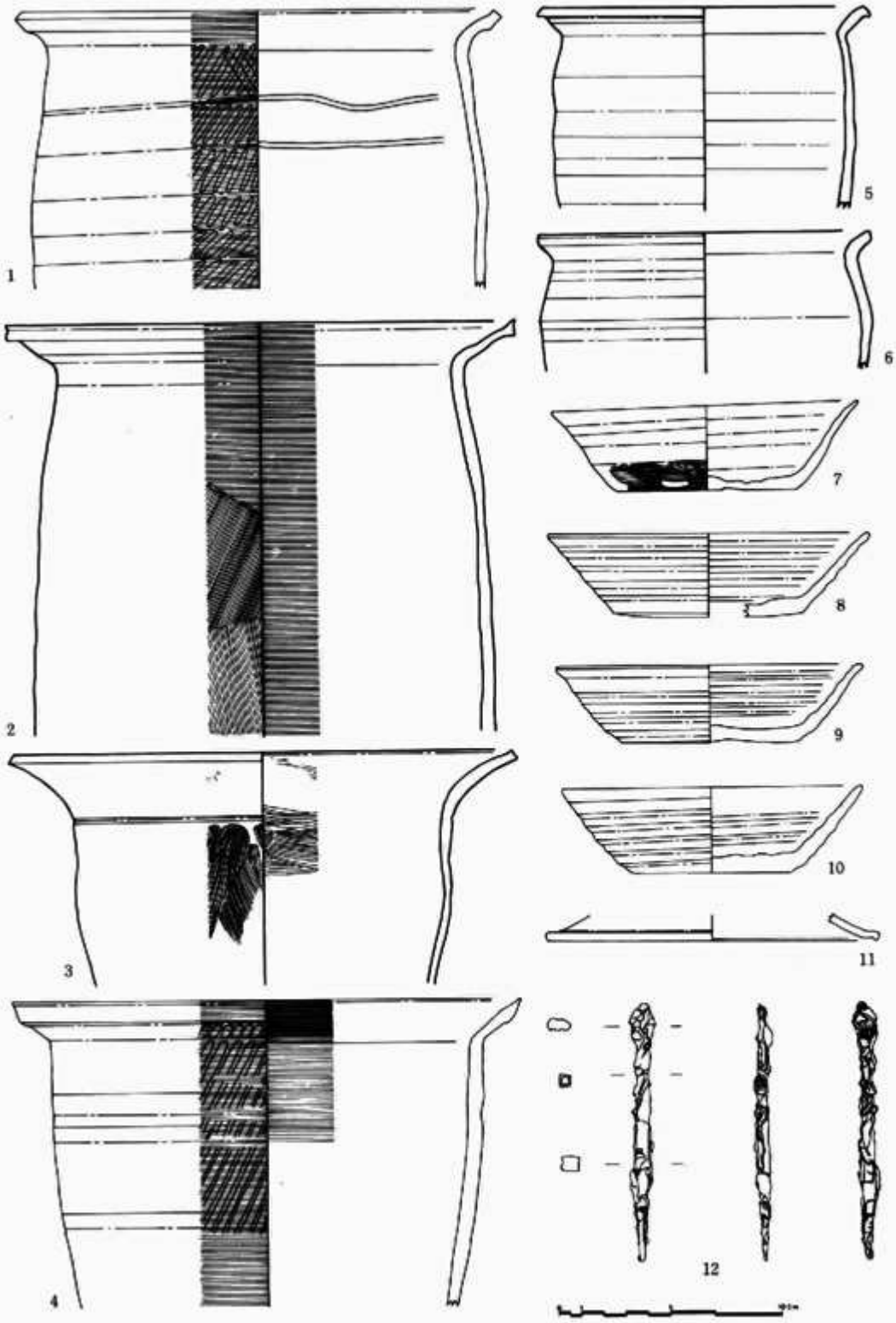
（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットはかまどの東側に１、西側に２、Ｑ３床面に１ある。かまど東側のピットからは遺物が多量に出土したが、他の３からは、遺物の出土量は多くなかった。

（年代決定資料）　土師器甕19点に破片多数、内黒坏２点。須恵器壺１点、坏Ａ類14点と２片、坏Ｂ類３点と３片、蓋１点、鉄鏃１個が出土した。甕は頸部有段１点、他は無段で口端が上に挽き出されるものが多い。長胴甕が12点、小型甕が７点である。坏は回転ヘラ切りが５点、回転糸切りが２点である。

出土遺物

土師器甕（第４図１～６） １は口縁部1/3、体上半部1/3残存で、推定口径約22cm、口縁部高さ1.7 cm、頸部径19cm、残存体部最大径21cmである。口縁部は急角度で外反し、口端は上に挽き出される。外面に陵線がある。頸部に段は無い。外体面は、叩き目痕が横に数列認められ、それを横なでによって消している。内面も横なでである。胎土軟質で砂粒多く含む、色調は浅黄橙色、焼成は不良で、２次焼成を受ける。ピットNo.１西寄り出土である。**２**は、口縁部1/4と体上部1/4残存である。推定口径約23cm、口縁部高さ2.3cm、頸部径 17.4 cm、残存体部最大径21cmである。口縁部はかなり外反し、口端部は強く上に挽き出される、頸部は無段である。外体面は上端が横なで、それ以下は上下のヘラなで、内面は横なでである。胎土軟質砂粒を多く含む、色調は浅黄橙色、焼成不良で、２次焼成を受ける。ピットNo.１出土で、１の下に重なって出土した。**３**は、口縁部1/6、体上半1/6と、体部底部若干の破片で、推定口径約23cm、頸部径約17.2cm、残存体部最大径約17cm、口縁部高さ約３cm。口縁部はかなり外反し、口端部はやや上に挽き出される。外面は上下に刷毛目痕が認められ、それを横なでで消している。内面は横なでである。頸部は有段で、外体面は上下に刷毛目、内体面は横に刷毛目痕がある。底部は外縁がかなり張り出している。胎土やや軟質、色調は橙色、焼成はやや良好。かまど燃焼部出土である。**４**は、口縁部1/5と体上半部残存で、推定口径23cm、頸部19.5cm、残存体部最大径約20cmである。口縁部は内湾ぎみに外傾し、口端部は上に強く挽き出される。口縁～体部外面は叩き目が全面に認められる。内面は横なでである。胎土やや軟質砂粒多く含む、色調は橙色、焼成やや不良で、煙道のピットから出土した。他に計側不能のもの８点と、小破片が多数出土した。**小型の甕（４図５・６）** ７点の内**５**は、推定口径約15.0cm、頸部径約12.8cm、残存体部最大径13.6cm。口縁部は外反し、口端部が上に挽き出される。成形技法は磨滅により不明である。**６**は、口径約15cm、頸部径約13.8cm、残存体部最大径15cmで、口縁部はかなり外反し、口端は上に挽き出される。２次焼成を受け変質、磨滅著るしい。他に５点出土していて、ほぼ同形である。

内黒坏は２個４片で、小破片のため全容は不明である。



第4図　1号住居跡出土遺物

須恵器

壺　1個体分16片の破片で、口縁部下端、体部、底部の小破片である。体部外面は叩き目痕が全面に認められ、内面は横なでである。肩部に灰釉が付着している。

坏A　14点中、口・体・底残存するもの5点、口・体のもの9点である。底部残存のもの5点中、4点は回転ヘラ切り、1点は回転糸切りである。**4図7・8・9**で、**7**は口径13.7cm、器高3.6cm～4.0cm、底径8.0cmで、体下端と外底面に手持ヘラ削り調整が認められ、色調灰色、焼成良好である。8は、口径14.5cm、器高3.8cm、底径8.6cmと7・9より1回大きい。色調灰白色、焼成やや良好である。9は、口径13.8cm、器高3.5cm、底径8.0cmで、色調灰白色、焼成やや良好、3点共回転ヘラ切りである。**8・9**は体下部に調整は無い。又、3点共体壁はほぼ直線的で外傾度は約40.0°である。

坏B　3点と小破片3片である。**4図10**は、口径13.4cm、器高3.9cm、底径7.1cm、外傾度39.0°で、色調浅黄橙色、焼成不良である。回転ヘラ切り、ロクロなで成形無調整である。他の1点は回転糸切りで、成形技法は磨滅著るしく不明である。他の1点は底部欠損のため切離しは不明でロクロなでで成形無調整である。

蓋　（**4図11**）は、つまみと天井部が欠損し、縁部のみ残存である。推定縁径約15cmで、縁端部は下方に挽き出される。色調灰白色、焼成は良好である。

鉄鏃　（**4図12**）完形品である。長さ11.6cm、巾0.7cm、厚さ0.6cm、先端は菱形で長さ約2cm、最大巾1.1cmである。柄は中空である。No.5ピットから出土した。

2　2号住居跡（ＡＥｇ15）

（遺構の確認）　稲荷遺跡基準点より西へ125.17m～133.66m。北へ96.08m～104.0mの地点、ＡＥｇ15地区、及びその周囲に黒褐色の落込みを確認した。1号住居跡の南西7mで、60cmほど低い水田下で、遺構確認面は明黄褐色粘土層である。

（重復、増改築）　用地買収まで用水路として使われていた溝2本が、煙道から北東コーナー、かまど燃焼部から東壁中央までを切っている。又、南東コーナーから南壁東寄りにみられるピット群は、住居跡に伴うものか、後世の攪乱か明確ではない。

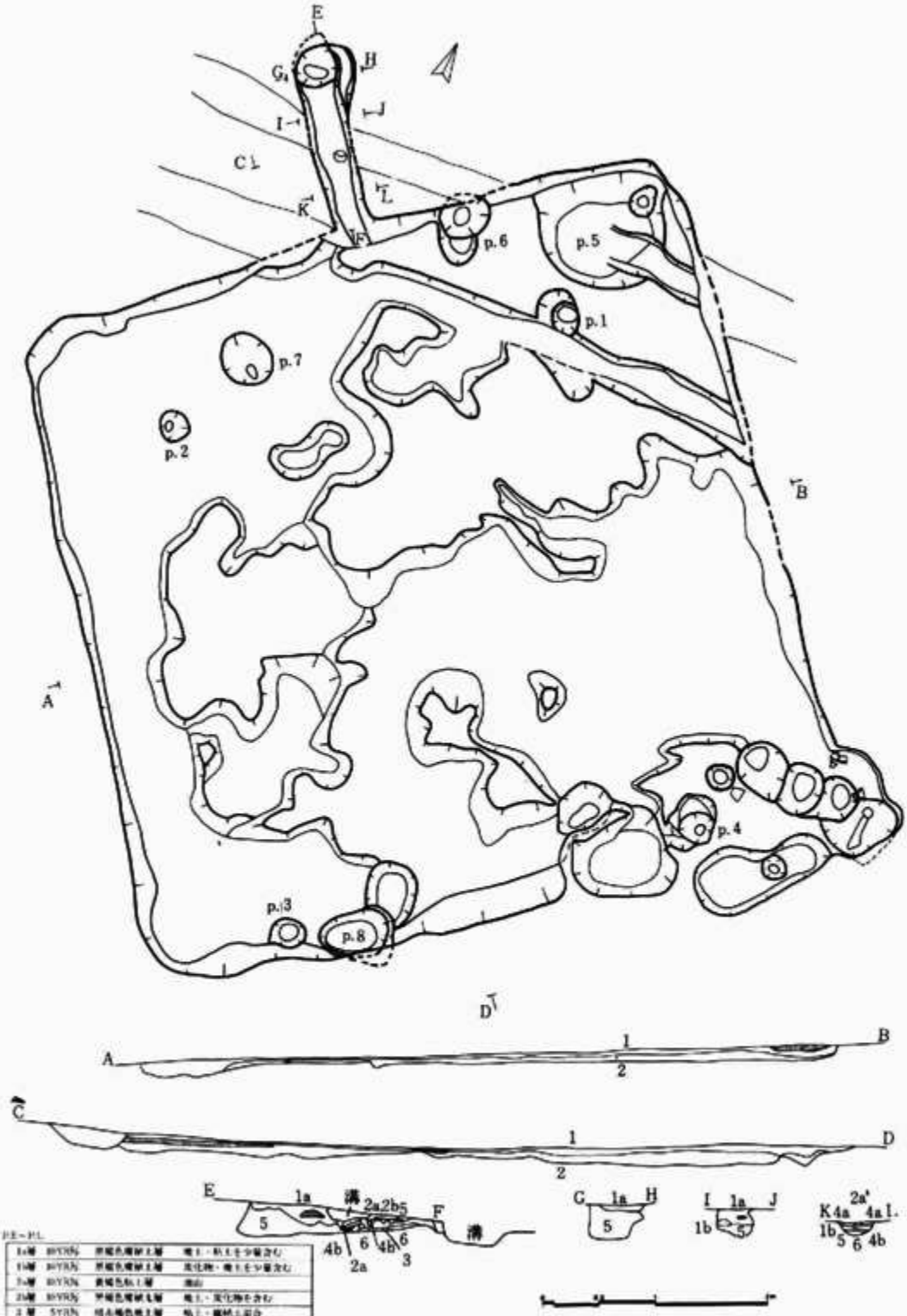
（平面形、方向）　東西6.25m、南北6.70mの方形である。主軸はN－40°－Wで、ほぼ北西を向く。

（堆積土）　2層に分れる。上層厚さ1cm～5cm。下層1cm～14cmで、下層上面が床面と思われる。

1層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性なし、炭化物・焼土・粘土を含む。

2層　10ＹＲ2/2黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし、粘土をブロック状に含む。

（床面）　中央部は固くしまり、周辺は貼床があり掘方がある。床面から壁へはやや急角度



1a層	10YR5/1	黒褐色腐植土層	地土・粘土を少量含む
1b層	10YR5/1	黒褐色腐植土層	炭化物・地土を少量含む
2a層	10YR5/6	黄褐色粘土層	漸移
2b層	10YR5/8	黄褐色腐植土層	地土・炭化物を含む
3層	5YR5/6	明赤褐色地土層	地土・腐植土混合
4a層	10YR5/8	黄褐色腐植土層	地土・炭化物を多く含む
4b層	2.5YR5/6	赤褐色地土層	
5層	10YR5/8	黄褐色腐植土層	遺物・炭化物・地土を含む
6層	10YR5/6	明褐色腐植土層	地土混合

第5図　2号住居跡

で立上がる。壁高は10cm前後である。西壁下にのみ周溝がみられる。

（柱穴）　主柱穴と思われるピットは４つあり、No.１は、上場径25～35cm、下場径15～18cm、深さ45cm、埋土は２層と同じである。No.２は、上場径26cm、下場径６～10cm、深さ44cm、埋土はNo.１と同じである。No.３は、上場径25～32cm、下場径15～16cm、深さ60cm。埋土はNo.１と同じである。No.４は、上場径31～40cm、下場径９cm、深さ50cm。埋土はNo.１と同じである。

（かまど）　北壁中央にある。燃焼部と袖は溝で切られているが、その痕跡もない。煙道は、長さ1.33ｍ、巾30～36cm、深さ６～25cmである。煙出は上場径43～52cm、下場径40～46cm、深さ31cmで、煙道と煙出のみ残存し、燃焼部と袖は既に廃絶されたと思われる。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは多数あるが、埋土の状態、包蔵物等から４つを摘出してみた。他のピットについては、明確ではない。No.５は、上場径 113～115 cm、下場径80～70cm、深さ10cmで埋土は２層と同じである。No.６は、上場径40～45cm、下場径14～19cm、深さ10cm、埋土はNo.５と同じ。No.７は、上場径42～48cm、下場径10cm、深さ25cm、埋土はNo.５と同じ。No.８は、上場径45～60cm、下場径25～45cm、深さ25cm、埋土はNo.５と同じである。

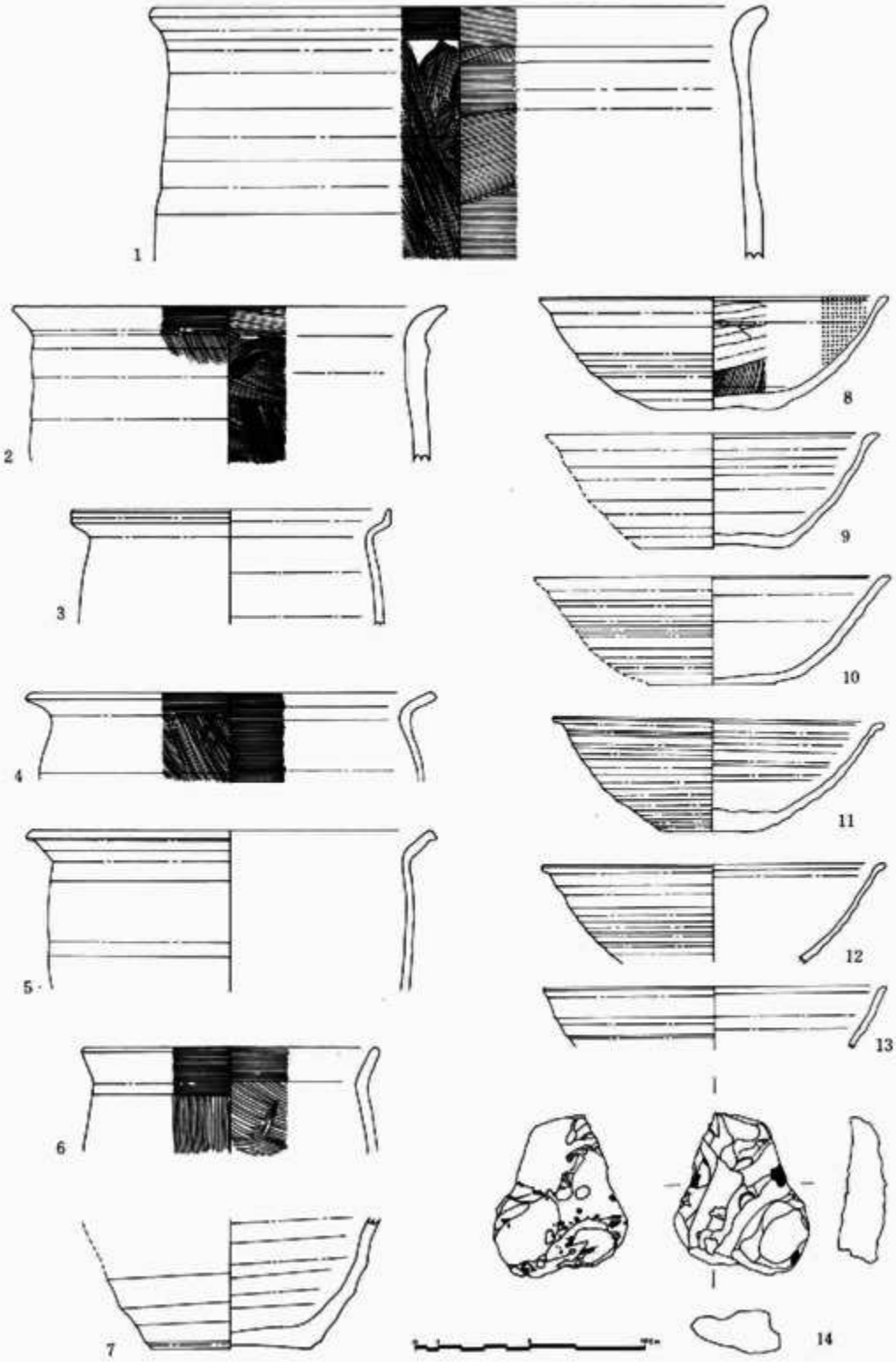
（年代決定資料）　土師器甕が114点、内黒坏が２点と21片、高台坏の高台部３点、須恵器壺が８点、坏Ａ類５点、坏Ｂ類７点177片、砥石破片１、玉髄１、鉄滓１が出土した。甕は口縁部があまり外反しないものが多く、坏はほとんど回転糸切で、Ａ類に１点回転ヘラ切らしいものがある。１号住居跡に比べ、内黒坏と須恵器坏Ｂ類の出土数が多い事が目立つ。

出土遺物

土師器

甕　長胴の甕（**６図１**）は、口縁部1/4、体上半1/4残存である。推定口径約27cm、口縁部高さ1.8 cm、頸部径約25.5cm、残存体部最大径26cmである。口縁部はやや外反し、口端部は、かなり厚みをもち丸みがある。体部は外面が上下ヘラなで、内面横なでである。頸部に段はなく、体壁は直線的である。長胴甕は他に17点あるが小破片で全容は不明である。１点胎部が須恵質のものがある。**小型の甕**（**６図２～７**）30点に66片出土しているが、口端部が丸みをもつものは、長胴の甕と同じ成形技法であるヘラなでや刷毛目痕が認められ、口端部が上に挽き出されたものはロクロなで成形のようである。口径は**２**が19cm、**３**が14cm、**４**が18cm、**５**が18cm、**６**が13cmで、他は11～19cmまである。**２・４・６**が口端丸く、**３・５**が上に強く挽き出されている。７は底径７cmで、体壁はロクロなで成形である。他に２片須恵質の胎部をもつものがある。

内黒坏　（**６図８**）は、口径15.2cm、器高4.9cm、底径5.2cm、外傾度45.0°、ロクロなで成形無調整、回転糸切で、体壁は丸みをもち外傾する。底部に黒斑あり、内面は体部横みがき底部放射状のみがき黒色処理である。他に21片出土しているが小破片で全容不明である。



第6図　2号住居跡出土遺物

高台坏　3点高台部のみの破片で、1は高さ1.2㎝、底径約8.5㎝、2は高さ1.8㎝、底径7.0㎝。3は高さ1.7㎝、底径約9㎝である。1・2は坏B類と同質同色。3はやや硬質で、褐灰色である。

須恵器

壺　8点出土したが、1は甕に近い器形と成形技法でヘラ削りヘラなでが外体面に、横なでが内面にみられる。2・4は外面に直線状の、内外に放射状の叩き目痕がある。3・5・6は内外面に直線状の叩き目痕がある。7・8は小型で体壁も薄く、横なで成形である。

坏A　5点出土したが、みな小破片で全容不明である。1点底部破片があり回転ヘラ切りのようである。1点は内面に黒色の付着物がみられる。他の3点は、体型がやや丸みをもつ。

坏B　（**6図9—13**）7点に177片出土した。**9**は口径14.6㎝、器高5㎝、底径6.4㎝、外傾度40°。**10**は口径15.6㎝、器高4.7㎝、底径5.6㎝、外傾度47°。**11**は口径14.5㎝、器高4.8㎝、底径4.6㎝、外傾度47°。**12**は口径15㎝。**13**は口径15㎝である。いずれもロクロなで成形無調整、回転糸切りで、口縁部は外反するものが多く、体壁はかなり丸みをもち外傾している。

玉髄　原石で加工痕なし、5㎝×3.2㎝×1.7㎝で白色を呈し、重さ33ｇである。

砥石　縦8.1㎝、横6.1㎝、厚さ2.5㎝の破片で、上面が磨滅面。斜長石流紋岩で、陶土化している。

鉄滓　（**6図14**）7.1㎝×5.8㎝×1.8㎝、重さ102ｇである。

3　3号住居跡（ＡＥｈ06）

（遺構の確認）　稲荷遺跡基準点より西へ119.66～124.53ｍ、北へ94.35～99.10ｍの地点、ＡＥｈ06地区及びその周囲に黒褐色の落込みを確認した。1号住居跡の南8ｍ、2号住居跡の南東1.5ｍである。遺構確認面は耕作土下の明黄褐色粘土層である。

（重復、増改築）　なし

（平面形、方向）　東西3.90ｍ、南北3.55ｍの方形である。各コーナーがそれぞれ東・西・南・北を向く。かまどがあったと思われるのは南壁東寄で、主軸は南東である。

（堆積土）　3層に分れ、第2層が床面上に分布し、1・3層は壁沿いに分布する。

1層　10ＹＲ2/2黒色腐植土層、指圧痕つく、粘性なし、少量の焼土・粘土を含む。

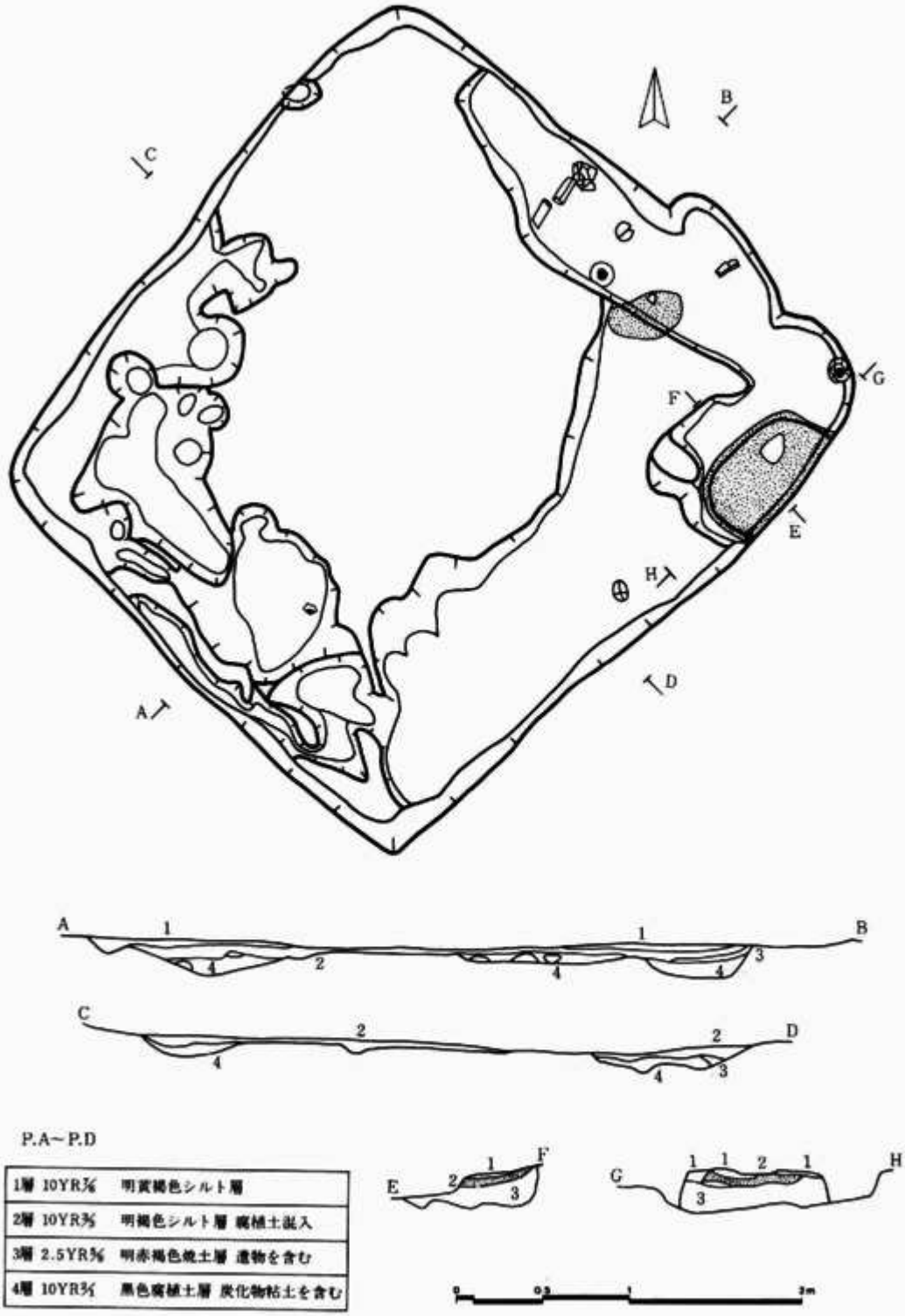
2層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性なし、焼土・炭化物・粘土を多く含む。

3層　10ＹＲ2/2黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし。

4層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性ややあり、上面が床、下面に掘方。

（床面）　中央部は地山が露出し、床面とした様である。周辺は掘り下げて、腐植土を埋め固めて床面とした様である。床面から壁へは緩やかで、壁高は6㎝～10㎝である。

（柱穴）　なし


A
B
C
D
E
F
G
H
P.A～P.D
1層 10YR7/4 明黄褐色シルト層
2層 10YR5/3 明褐色シルト層 腐植土混入
3層 2.5YR5/6 明赤褐色焼土層 遺物を含む
4層 10YR3/1 黒色腐植土層 炭化物粘土を含む

第7図　3号住居跡

（かまど）　確認されなかった。南壁東寄りに焼土が堆積している。東壁中央下にも焼土が若干堆積し、袖石か支脚と思われる焼けた礫が２個あった。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは確認されなかった。

（年代決定資料）　土師器甕33点、内黒坏11点、内外国色坏１点、高台坏３点、須恵器壺３点、坏Ａ１点、坏Ｂ50点が出土した。甕は小破片が大部分で全容はほとんど不明である。坏はみな回転糸切りで、内黒坏は、体下端と底部を調整したものと無調整のものとがある。

出土遺物

土師器

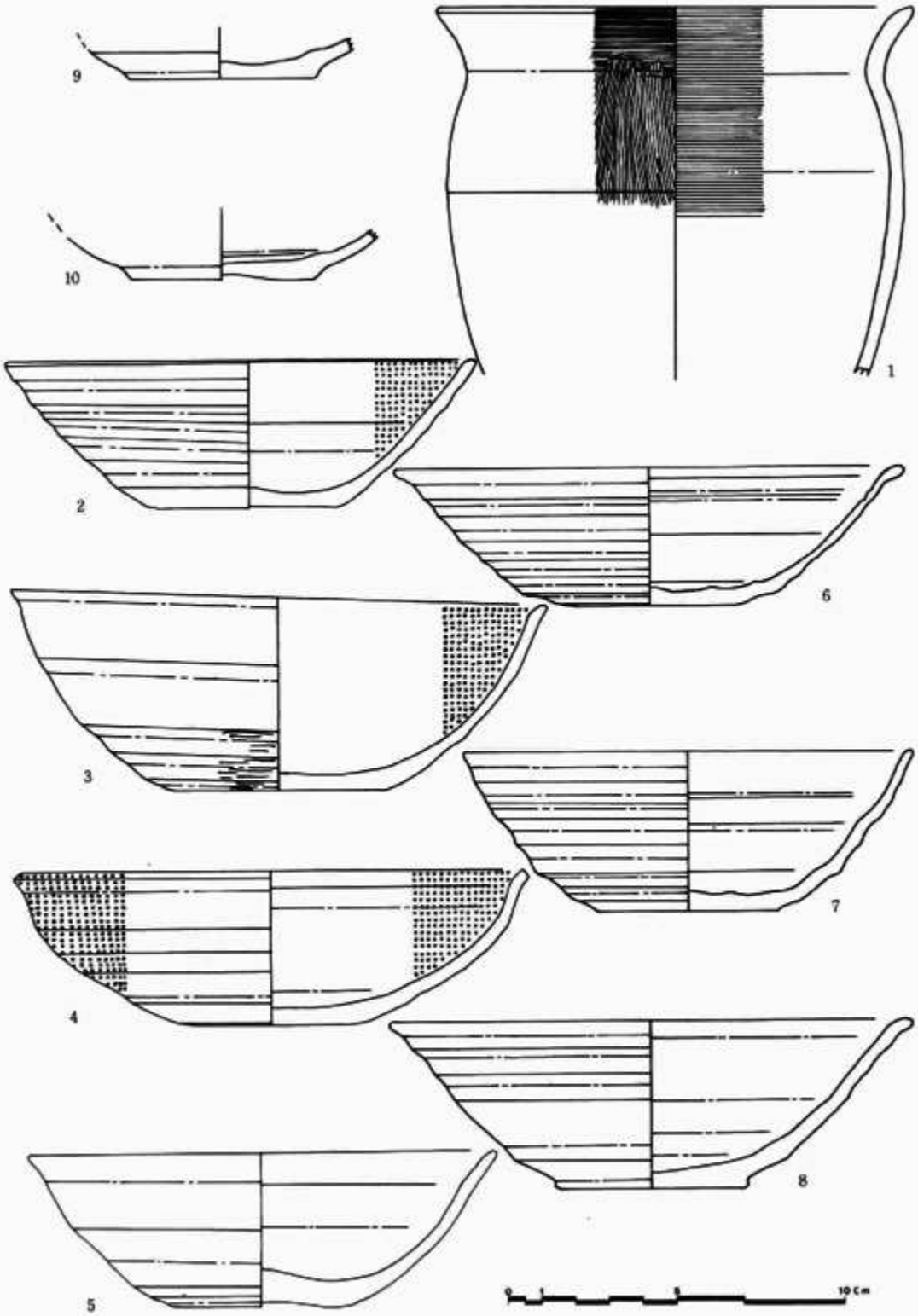
甕　長胴の甕は口縁部１点、体部14点、底部４点が出土した。総て小破片である。口縁部の破片は、かなり外反し、口端は丸みをもつ、体部上端にヘラなで痕が認められる。体部破片はヘラなでヘラ削り痕が大部分で、内面に刷毛目痕のあるものが２点である。底部４点のうち１点は底径8.5㎝、もう１点は底径約9.5㎝で、他の２点は小破片で計測不能である。

小型の甕は14点出土し、口縁部の破片は１点、底部破片２点、他は体部破片である。口縁部破片は、口端部が丸みをもつもので、外体面にヘラなでがある。体部破片はヘラなでのあるもの７点、ロクロなで無調整のもの５点である。底部破片の１つは、口縁部と同一個体と思われ外底面は調整がある。他の１点は回転糸切り無調整である。**8図1**は、口縁部1/2、体部1/2、底部1/4残存で、推定口径約19.2㎝、口縁部高さ2.0㎝、頸部径約17.5㎝、残存体部最大径約18.6㎝、である。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ、大部歪み凸凹がみられる。体部はやや丸みをもち、外面は上下ヘラなで、内面は横なでである。

内黒坏　11点中、体下・底部にヘラ削り調整のあるのは２点、無調整のもの４点、他の５点は不明である。**8図2**は、完形品で口径13.7～14.1㎝、器高4.4㎝、底径5.4～5.6㎝でやや歪みがみられる。口縁部は直線的で、口端は薄くなる。外面はロクロなで無調整で、体部と底部に黒斑が認められる。内黒の黒色処理と磨きは粗末で、黒色汁が滴った痕が３個所、ヘラ先で付けたと思われる傷状の痕が十数個所ある。磨きの方向は体部は横、底部は明確でない。8図3は、口径16㎝、器高5.5～6㎝、底径6.4㎝と大型で、口縁部は外反し、口端は丸い。体部はかなり丸みをもち外傾する。体部下半と底部に回転ヘラ削り調整があり、回転糸切り痕がわずかにみえる。

内外黒色坏（8図4）口縁部、体部共1/3、底部全部残存で、口径約15.4㎝、器高4.6㎝、底径約5㎝、口縁部はやや外反し、口端は丸くなる。体部は下半がかなり外傾（約60°）する。底部は丸底風で、外周の境は不明。内外全面に磨き、黒色処理が認められるが、磨滅著るしい。

高台坏　底部と高台部破片１、高台部破片２である。前者は底径5.4㎝、台の高さ1.1㎝、外底面に回転糸切り痕がある。後者は、高さ1.2㎝と1.0㎝である。



第８図　３号住居跡出土遺物

須恵器

壺　1点は、内外面に叩き目痕、1点は、外面に叩き目痕、内面が横なで。1点は内外面共に横なでの3点である。

坏B　（8図5～10）5は、口径13.6cm、器高4.5～4.7cm、底径5.4cmで、口縁部がやや外反する。6は口径約15.2cm、器高4.1cm、底径約6cmで、口縁部がかなり外反する。7は口径約13.4cm、器高4.8cm、底径約5.5cmで、口縁部はほぼ直線的である。8は口径約15.6cm、器高5cm、底径5.8cmで、口縁部はやや外反する。他に約50片出土した。いずれもロクロなで成形無調整、回転糸切りである。

4　4号住居跡（AD　06）

（遺構の確認）　稲荷遺跡基準点より西へ89.58m～94.42m。北へ92.36m～95.85mの地点、ADi 06地区及びその周囲に、黒褐色の落込みを確認した。3号住居跡（AEH06住）の東方約25mの所である。1号住居跡の南を東西に走る段丘崖が、この住居跡のすぐ北側に達している。遺構確認面は、表土下の明黄褐色粘土層である。

（重復、増改築）　2号住居跡北側を切っている2本の溝（用水路）が、北東コーナーと、西壁中央、南東コーナーを切っている。2号住居跡では、2本の間隔が約1mであったが、4号住居跡では約3mである。

（平面形、方向）　東西3.13m、南北3.57mの方形で、主軸方向はE－20°－Nのほぼ東北東である。

（堆積土）　5層に大別されるが、埋土の大部分は2層である。3層～8層は部分的である。

1層　砂と腐土の堆積層で、調査中に降雨流水により堆積したものである。

2層　10YR2/2 黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性なし、焼土・粘土・遺物を含む。

3層　10YR4/4 褐色粘土層、指圧痕ややつく、粘性あり、腐植土を含む。

4層　10YR6/6 明黄褐色粘土層、指圧痕ややつく、粘性あり、腐植土を若干含む。

5層　10YR2/3 黒褐色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性ややあり、粘土を含む。

6層　10YR2/3 黒褐色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性ややあり、焼土・粘土を含む。

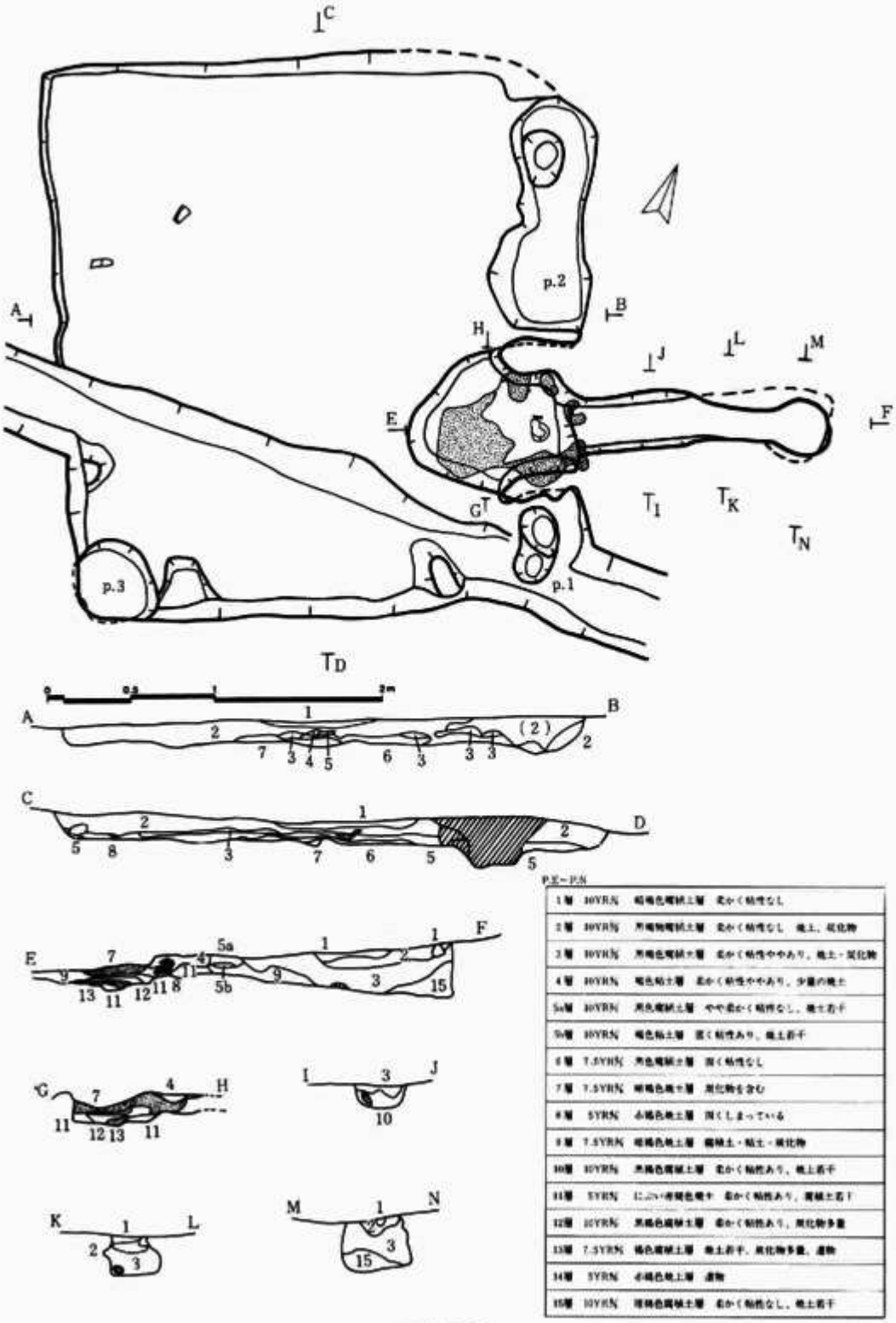
7層　10YR2/2 黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性ややあり、粘土を含む。

8層　10YR2/2 黒褐色腐根土層、指圧痕つく、粘性ややあり。

（床面）　地山をそのまま利用し、柔かい。ほぼ平坦である。床面から壁への立上りは、かなり急角度で、壁高は10cm～16cmである。壁沿いの施設は確認されなかった。

（柱穴）　なし

（かまど）　東壁やや南寄りに、壁を掘り込んでつくられている。燃焼部は巾約50cm、奥行90cmで、約6cmほど浅く掘り込んでいる。焼土が2層堆積され、上層が量も多く、広い範囲に



P.E～P.N		
1層	10YR/6	暗褐色埴質土層　若かく粘性なし
2層	10YR/6	黒褐色埴質土層　若かく粘性なし　砂土、炭化物
3層	10YR/6	黒褐色埴質土層　若かく粘性ややあり、砂土・炭化物
4層	10YR/6	褐色粘土層　若かく粘性ややあり、少量の砂土
5a層	10YR/6	黒色埴質土層　やや若かく粘性なし、砂土若干
5b層	10YR/6	褐色粘土層　固く粘性あり、砂土若干
6層	7.5YR/6	黒色埴質土層　固く粘性なし
7層	7.5YR/6	暗褐色砂土層　炭化物を含む
8層	5YR/6	赤褐色砂土層　固くしまっている
9層	7.5YR/6	暗褐色砂土層　微砂土・砂土・炭化物
10層	10YR/6	黒褐色埴質土層　若かく粘性あり、砂土若干
11層	5YR/6	にぶい赤褐色粘土　若かく粘性あり、埴質土若干
12層	10YR/6	黒褐色埴質土層　若かく粘性あり、炭化物多量
13層	7.5YR/6	褐色埴質土層　砂土若干、炭化物多量、遺物
14層	5YR/6	赤褐色砂土層　遺物
15層	10YR/6	暗褐色埴質土層　若かく粘性なし、砂土若干

第9図　4号住居跡

堆積している。中央東寄りに、支脚に使ったと思われる礫が1個あった。左袖は上場の長さ48cm、巾20cm、床面からの高さ約10cm、下場の長さ54cm、巾24cm。右袖は上場の長さ48cm、巾13cm、高さ約8cm、下場の長さ50cm、巾19cmで南側はピットがあり、抉られている。煙道は長さ1.15m、巾18～30cm、深さ10～26cmである。煙出は上場径34～36cm、下場径34cm、深さ33cmで、煙道との境がはっきりしない。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは、かまどの両脇と、南西コーナー付近にみられる。ピット1は、東西22cm、南北45cm、深さ10cmで下場が2つのピットに分れ、粘土・焼土が混入するが、溝で上が削られているため、上場輪郭と埋土は不明である。ピット2は上場東西45cm、南北138cm、深さ8～20cmで、北側に小ピットがある。埋土は黒褐色の腐植土で、焼土を若干含む。ピット3は径48cm、深さ10cmで、南西コーナーをやや抉ってつくられている。埋土は黒色の腐植土である。

（年代決定資料）　土師器、甕4点に7片。内黒坏1点。須恵器坏A 1片。B 7点に4片。砥石1点、直刀1点、釘状鉄製品1点が出土した。坏類はみな回転糸切りである。

出土遺物

土師器

甕　（**10図1**）口縁部1/2、体上半1/2残存で、推定口径21.6cm、口縁部高さ2.2cm、頸部径約20.2cm、残存体部最大径約23cm。口縁部は内湾ぎみに外傾し、口端は上に強く挽き出される。外体面は上半は横なで、下半は上下なで、内面は上半横なで、下半斜めになで痕がある。頸部は段は無い。胎土軟質粒砂粒が多い。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良。かまど燃焼部出土で、2次焼成を受けている。他の1点は、1と同様の成形技法で、やや肩部が1より平坦な破片である。南西側出土で内面に煤が多く付着している。他に5点体部の小破片がある。

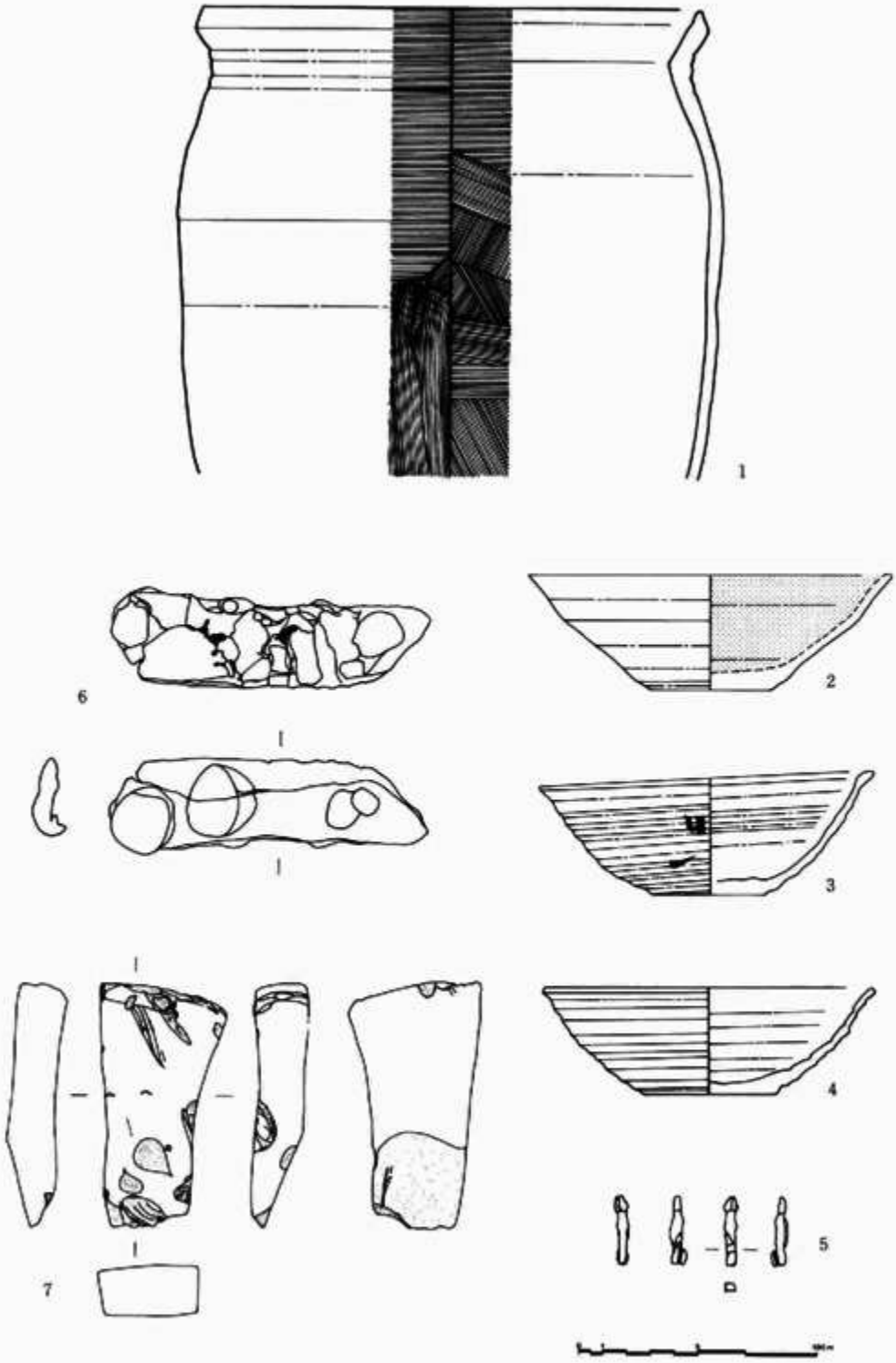
小型でロクロ使用の甕は、口縁部破片1、体部破片3で、口縁部の破片は、やや外反し、口端部が著るしく薄くなる。体部は外面が横なでで、外面に焼土が付着している。他の3片は、ロクロなで無調整の破片である。

内黒坏　（**10図2**）口縁部若干、体部2/3、底全部残存で、外面磨滅、内面剥離が著るしい。推定口径約15.3cm、器高4.9cm、底径5.3～5.5cm。口縁部はわずかに外反する。体部はほぼ直線的に外傾し、上半部でやや内彎する。内面は剥離著るしく内黒処理のみ認められる。ロクロなで成形無調整、回転糸切りである。ピットNo.2出土である。

須恵器

坏A　小破片1点のみである。灰白色で、焼成はあまり良くない。

坏B　（**8図3・4**）**3**は、口縁部1/3、体部1/2、底部全部残存で、推定口径約14cm、器高4.1～4.5cm、底径5.3～5.5cm。口縁部はやや外反し、口端は丸みをもつ、体部はわずか



第10図　4号住居跡出土遺物

に丸みをもち外傾する。外体面に墨書があり、「出」の様であるが磨滅しているため明確ではない。胎土やや軟質、色調はにぶい橙色である。**4**は、口縁部1/5、体部1/4、底部2/3残存で、推定口径約14cm、器高4.5cm、底径約5.5cm。口縁部はやや外反し、体部は丸みをもちかなり外傾する。胎土やや軟質、色調は灰褐色～浅黄橙色。**3・4**共かまど焚口、及び右袖付近から出土した。他に5点に4片出土したが、口縁部6点中4点は外反し、2点は直線的である。何れも体型は無調整である。

砥石　（8図7）縦10.3～8.5cm、横3.6～5.6cm、厚さ2.0～2.5cm、重さ155.5g。硬質泥岩でQ2床面から出土した。直力（8図6）先端部のみ残存で、長さ13.4cm、巾3.3cm、厚さ1.2～0.7cmで、Q2床面出土である。砥石の南西約55cmの所で、両壁の東約30cmの地点である。釘状鉄製品（8図5）両端欠損しているので種類不明である。長さ2.9cm、巾0.4cm、重さ1.5gである。

5　5号住居跡（CCe 06）

（遺構の確認）　稲荷遺跡基準点より西へ61.42～66.39m。北へ28.80～32.51mの地点、CCe06地区及びその周囲から黒褐色の落込みを確認した。3号住居跡の南東83m。4号住居跡の南東67mの地点である。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（重復、増改築）　なし

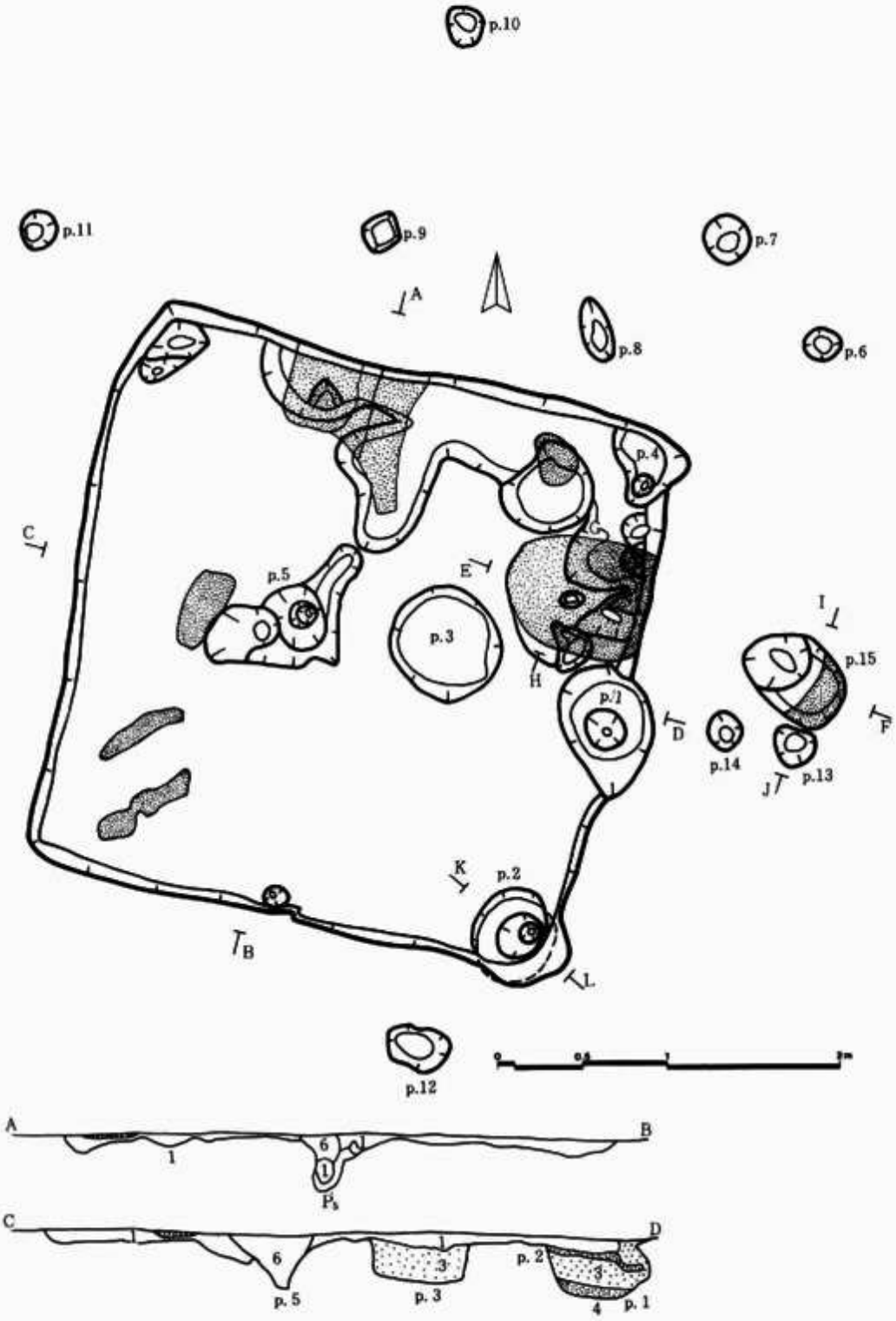
（平面形、方向）　東西3.49m。南西3.29mのほぼ方形である。主軸はE－12°－Sで、ほぼ東向きである。

（堆積土）　遺構確認面が大部削られたためか、堆積土はI層である。

1層　10YR2/2黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性ややあり、焼土・炭化物が広く散乱。

（床面）　地山をそのまま床面として使用している。北側と北東側には、約10cm掘り下げられ、掘り方状の凸凹が認められる。床面から壁への立上がりは緩かで、壁高は4～10cmである。

（柱穴）　柱穴状ピットは、床面にはなく、壁外に9つあり、住居跡に伴うものかどうかは不明である。No.6は上場径17～22cm。深さ19cmの楕円形。埋土は10YR2/2黒褐色腐植土。北東隅より北東へ103cm。No.7は上場径26～27cmの円形。埋土は6と同じ。北東隅より北へ　cm。埋土は6と同じ。No.8は上場径17～35cm。深さ8cmの楕円形。北壁東寄りから北へ40cm。No.9は上場径20cm。深さ10cmの方形。北壁西寄りから北へ75cm。埋土は6と同じ。No.10は上場径22cm、深さ7cmの円形。北壁西寄りから北へ208cm。埋土は6と同じ。No.11は上場径22cm、深さ16cmの円形。北円隅より北西へ90cm。埋土は6と同じ。No.12は上場径24～35cm、深さ8cmの楕円形。南壁東寄りから南へ55cm、埋土は6と同じ。No.13は上場径23cm、深さ25cmの円形。東壁のピット1から東へ80cm。埋土は6とほぼ同じ。No.14は上場径21cm、深さ17cmの円形。東壁のピット1から東へ40cm。埋土は6とほぼ同じである。


p.10
p.11
p.9
p.7
A
p.8
p.6
p.4
C
E
p.5
p.3
H
I
p.15
p.1
D
F
p.14
J
p.13
K
p.2
B
L
p.12
A
B
1
6
1
P5
C
D
6
3
p. 2
3
p. 5
p. 3
4
p. 1

第11図　5号住居跡

（かまど）　東壁やや北寄りに遺物を含む焼土の堆積がみられた。他に焼土は住居跡内に5個所密な堆積をしている。袖や燃焼部は確認されなかった。煙道は確認されなかったが、煙出と思われるピットNo.15があり、焼土・炭化物が包含されている。No.15は上場径45～65cm、下場径40cm、深さ8～12cmで、西半分ピットに切られている。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは4つあるが、1つ（No.5）は後世の攪乱と思われる。他の4は、かまどの焼土を埋め込んだ様な状態である。又、No.1・2は壁を、抉ってつくられている。1は上場径60～70cm。深さ38cmの円形で、埋土は11図。2は上場径55cm、深さ25cmの円形、埋土は11図P・K～P・L。3は上場径66cm、深さ20cmの円形、埋土は11図P・C～P・D。4は上場径45cm、深さ10cmの不整形、埋土はピット3とほぼ同じである。5は上場径50～70cm、深さ35cmで埋土は7.5YR 2/2 黒褐色腐植土である。

（年代決定資料）　土師器は、甕5点に小破片5片。内黒坏3点。須恵器は、壺1片、坏A 2点坏B 6点である。大部分の遺物が、検出段階で表面に露出している状態であった。

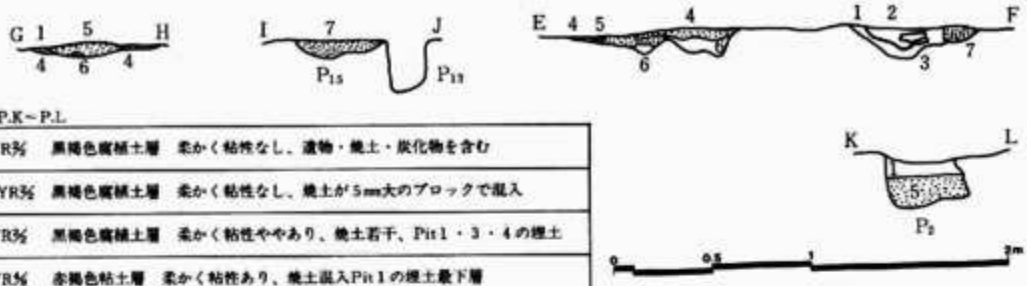
出土遺物

土師器

甕　長胴の甕は、2点と5片である。**12図1**は、口縁部1/2、体上半部1/3、底1/8残存である。推定口径約23.0cm、口縁部高さ1.7cm、頸部径約19.2cm、残存体部最大径約21.4cmである。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。内外面共横なで成形で、かなり歪みがある。頸部は無段である。体部はほとんど丸みがみられない。外面は上下ヘラなで、内面は横なで後、更に上下にヘラなでされている。底部はヘラ削り、ヘラなで痕がみられる。外体面に焼土、内体面の一部に煤が付着している。胎土はやや軟質砂粒若干を含む、色調はにぶい橙色～褐色、焼成はやや不良で、2次焼成を受けている。東壁かまどと思われる焼土中、ピットNo.2の下層焼土、Q1・2の床面、及び埋土表面から出土した。もう1点は、口縁部、体部若干残存で、著しく磨滅した破片である。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもち内彎ぎみになる。頸部は無段である。体部の形成、調整は明確でないが、外面が上下ヘラなで、一部刷毛目と思われる痕跡もある。内面は不定方向に刷毛目痕がある。胎土軟質砂粒若干を含む、色調は黄橙色、焼成は不良である。Q1かまどと思われる焼土中、及び表面から出土した。

小型の甕は3点出土している。いずれも体部と底部の破片で、口縁部が欠損している。体部はロクロなで成形無調整、外底面は回転糸切りである。底部の1つは直径6.6cmである。他は測定不能である。1点はピットNo.2の下層焼土中より、他の2点はQ1かまど跡と思われる焼土中より出土した。

内黒坏　口縁部1/8以下、体部小破片、底部小破片の3片である。口縁部の破片はわずかに外反し、口端部は薄くなり丸みをもつ、口端部外面にも磨き内黒処理が認められる。体部の破

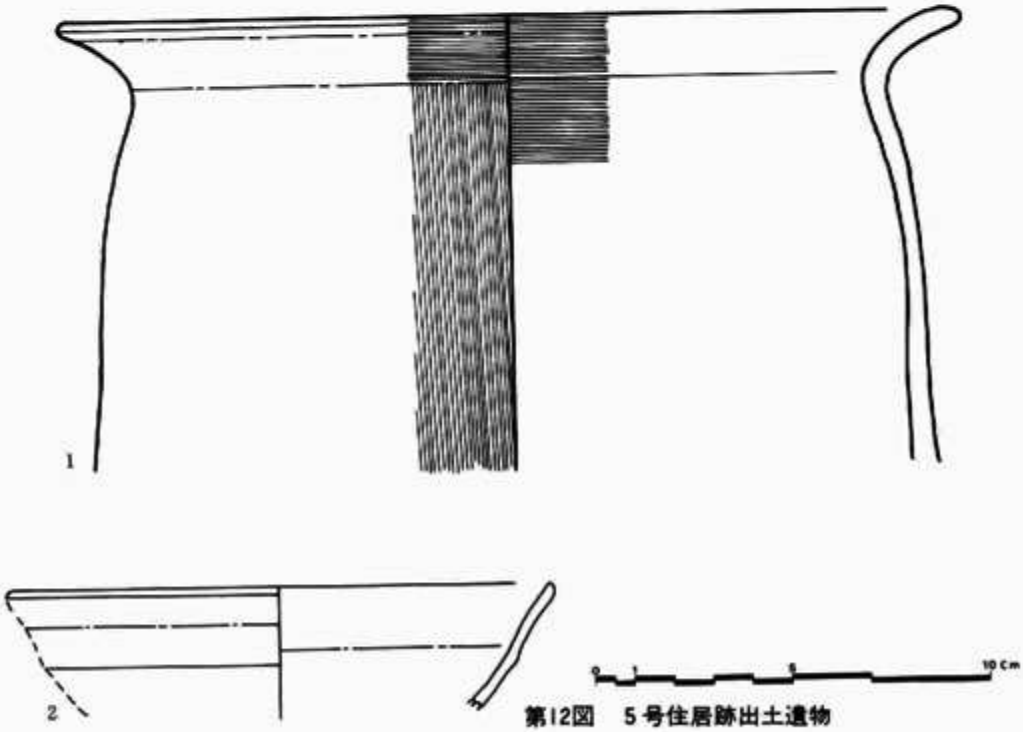


P.A～P.D. P.K～P.L

1層	10YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性なし、遺物・焼土・炭化物を含む
2層	7.5YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性なし、焼土が5mm大のブロックで混入
3層	10YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性ややあり、焼土若干、Pit 1・3・4の埋土
4層	5YR5/6	赤褐色粘土層	柔かく粘性あり、焼土混入Pit 1の埋土最下層
5層	7.5YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性ややあり、焼土炭化物多量Pit 2の埋土
6層	7.5YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性なし、Pit 5の埋土・表土と同じ

P.E～P.H

1層	7.5YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性なし、表土と同じ
2層	7.5YR3/2	黒褐色腐植土層	柔かく粘性なし、表土と同じ、焼土を含む
3層	7.5YR5/6	褐色粘土層	柔かく粘性あり、腐植土混入
4層	7.5YR5/6	褐色腐植土層	柔かく粘性なし、焼土を含む
5層	5YR5/6	赤褐色焼土層	固くしまっている、粘性ややあり Pit 2の埋土
6層	10YR3/4	暗褐色粘土層	やや柔かく粘性強い、腐植土混入
7層	7.5YR3/4	暗褐色焼土層	やや柔かく粘性ややあり、炭化物を含む



第12図　5号住居跡出土遺物

上は11図

片は内面内黒が消えかかっている。底部破片は外面に回転糸切り痕が認められる。内面は磨滅著しく磨きは明確でない、内黒も消えかかっている。埋土上面から出土した。

須恵器

壺　口端部のみの破片で全容不明である。

坏A　1点は口縁部1/8残存で、胎土硬質砂粒少ない。色調は灰色、焼成良好、ピットNo.1出土である。もう1点は口縁部1/8以下残存で、胎土軟質、色調灰白色、焼成不良、ピットNo.2出土である。

坏B　**12図2**は、口縁部1/4残存で、底部は欠損する。推定口径約14cmである。口縁部はわずかに外反し、口端は丸い。ロクロなで成形無調整、回転糸切りと思われる。他の4点も同様である。Q1の埋土から2点、埋土表面から3点出土である。

6　6号住居跡（ＥＣａ03）

（遺構の確認）　稲荷遺跡基準点より、西へ55.56～60.68ｍ。南へ1.50～6.81ｍの地点、ＥＣａ03地区とその周囲に黒褐色の落込みを確認した。5号住居跡の南南東約30ｍ。稲荷遺跡4号住居跡の南西約3.5ｍの所である。遺構確認面は、明黄褐色火山灰層である。

（重復、増改築）　稲荷遺跡4号住居跡の北西隅に発した溝が、この住居跡の東壁中央部から南西隅を通り、住居跡の南約1.5～2.0ｍの地点をほぼ東西に走る溝と合流している。又、西壁中央下にあるピットNo.12から発した溝が、西壁南側を切って、この溝に合流している。

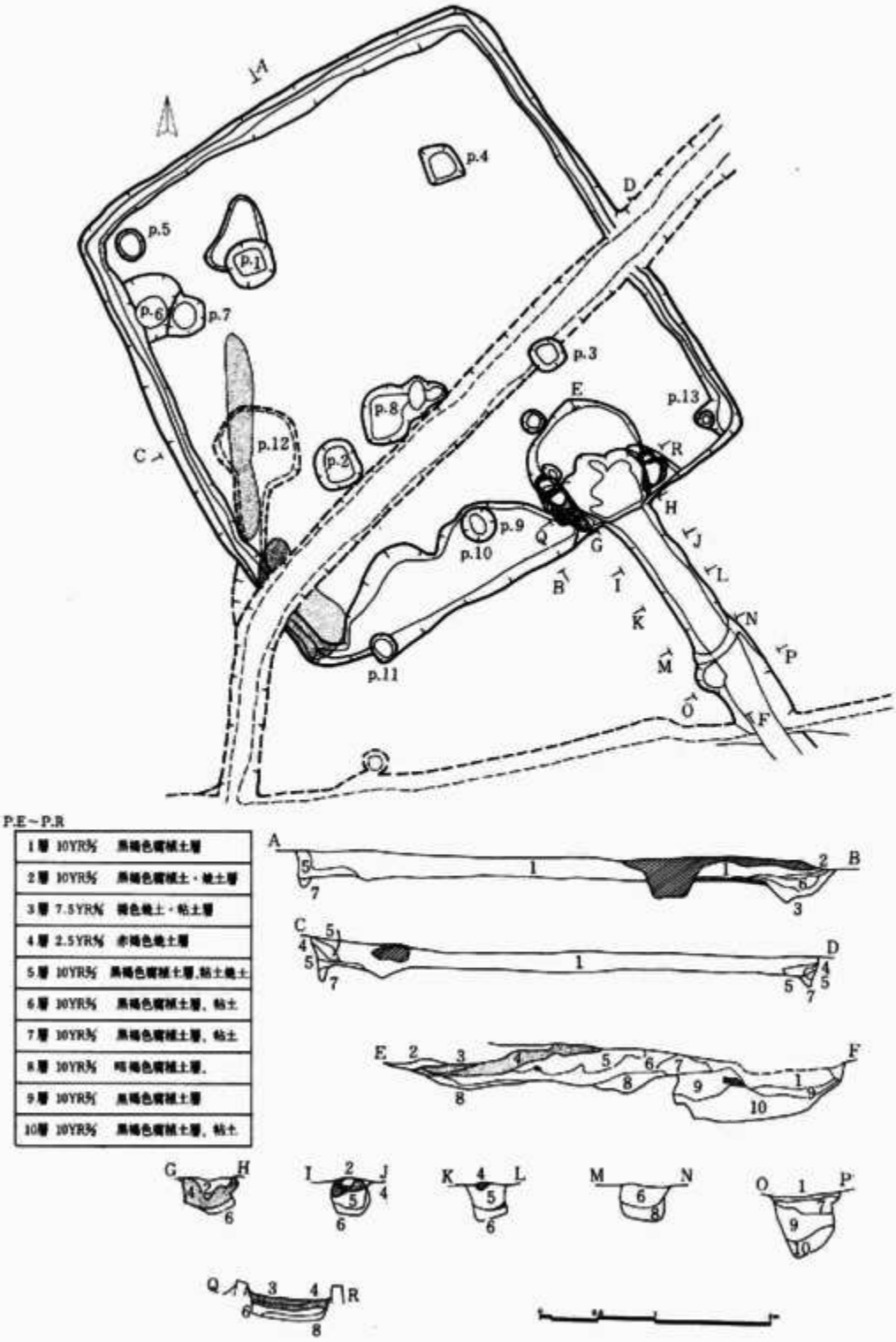
（平面形、方向）　東西4.44ｍ。南北4.72ｍの方形で、主軸はＳ－35°－Ｅでほぼ南南東である。

（堆積土）　床面上はＩ層である。周溝とかまど付近は、4層の堆積土が認められる。

1層、10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、密で、粘性なし、遺物・粘土塊を含む。2層、10ＹＲ2/1黒色腐植土層、粗で粘性なし、炭化物を含む。3層、10ＹＲ2/1黒色腐植土層、粗で粘性なし、焼土・炭化物・粘土を含む。4層、10ＹＲ6/6明黄褐色粘土層、密で粘性強い、壁の崩れ落ちたものか。5層、10ＹＲ2/1黒色腐植土層、粗で粘性なし。6層、10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層、粗で粘性なし、焼土多量、炭化物・粘土を少量含む。7層、10ＹＲ5/8黄褐色粘土層、粗で粘性あり、腐植土を含む。1層に粉状パミスは含まれていなかった。

（床面）　ほぼ平坦で、地山を床面として利用している。かまど周辺は広く焼土が散布し、北・西・東の各壁下には、周溝があり、南壁下は浅いピット状で、底面に掘方が認められる。壁は急角度で立上がり、壁高は16～25cmである。周溝は中央が深く両端が浅くなっている。

（柱穴）　主柱穴は4つあり、4共下場プランはやや方形である。柱穴状ピットは4つある。ピット1、上場42×42cm、下場24×22cm、深さ28cm、北西側にある。ピット2、上場38×43cm、下場23×30cm、深さ25cm南西側。ピット3、上場30×28cm、下場26×17cm、深さ38cm南東側一


p.1
p.2
p.3
p.4
p.5
p.6
p.7
p.8
p.9
p.10
p.11
p.12
p.13
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
P.E～P.R
1層 10YR3/2 黒褐色腐植土層
2層 10YR5/6 黒褐色腐植土・粘土層
3層 7.5YR6/ 褐色粘土・粘土層
4層 2.5YR5/6 赤褐色粘土層
5層 10YR3/2 黒褐色腐植土層,粘土粘土
6層 10YR3/2 黒褐色腐植土層、粘土
7層 10YR3/2 黒褐色腐植土層、粘土
8層 10YR3/2 暗褐色腐植土層、
9層 10YR3/2 黒褐色腐植土層
10層 10YR3/2 黒褐色腐植土層、粘土

第13図　6号住居跡

部溝で切られる。ピット４、上場32×33cm、下場20×22cm、深さ37cm、北東側にある。柱穴状ピットは、№９、上場径20～19cm、深さ16cmで、かまど北隣にある。№10、上場径28～31cm、深さ43cmで、南壁中央下にある。№11、上場径20～25cm、深さ35cmで、南壁西寄にある。№13、上場径14cm、深さ７cm、南東隅にある。

（かまど）　南壁東寄りにつくられ、燃焼部は巾70cm、奥行 100ｍで、床面より20cm位掘り下げている。袖はほとんど失なわれ、袖石が露出している。東袖に２個、西袖に４個、何れも10～20cmである。煙道先端と煙出は不明で、煙道の焼土範囲は長さ約90cm、巾35cm、深さ25～０cmである。煙道先端と煙出は溝によって切られたと思われる。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは４つあるが、№８以外、性格不明である。

（年代決定資料）　土師器、甕５点に18片、浅鉢１点、内黒坏１点、須恵器、壺10点、長頸壺３点、坏Ａ13点、坏Ｂ８点である。甕１点が頸部有段、坏はヘラ切り４点、糸切り３点である。

出土遺物

土師器

長胴甕　口縁部２点、口縁部下端から体上半部の破片１点に、小破片18片である。口縁部の１点は1/8以下残存で、口端部が上に挽き出されたもので、他の１点は1/8以下残存で、口端は丸い。口縁部下端から体上半部のものは、頸部有段で、外体面に上下刷毛目、内面は横の刷毛目痕がある。他の18片は、体部がヘラなで、ヘラ削り痕のある小破片である。

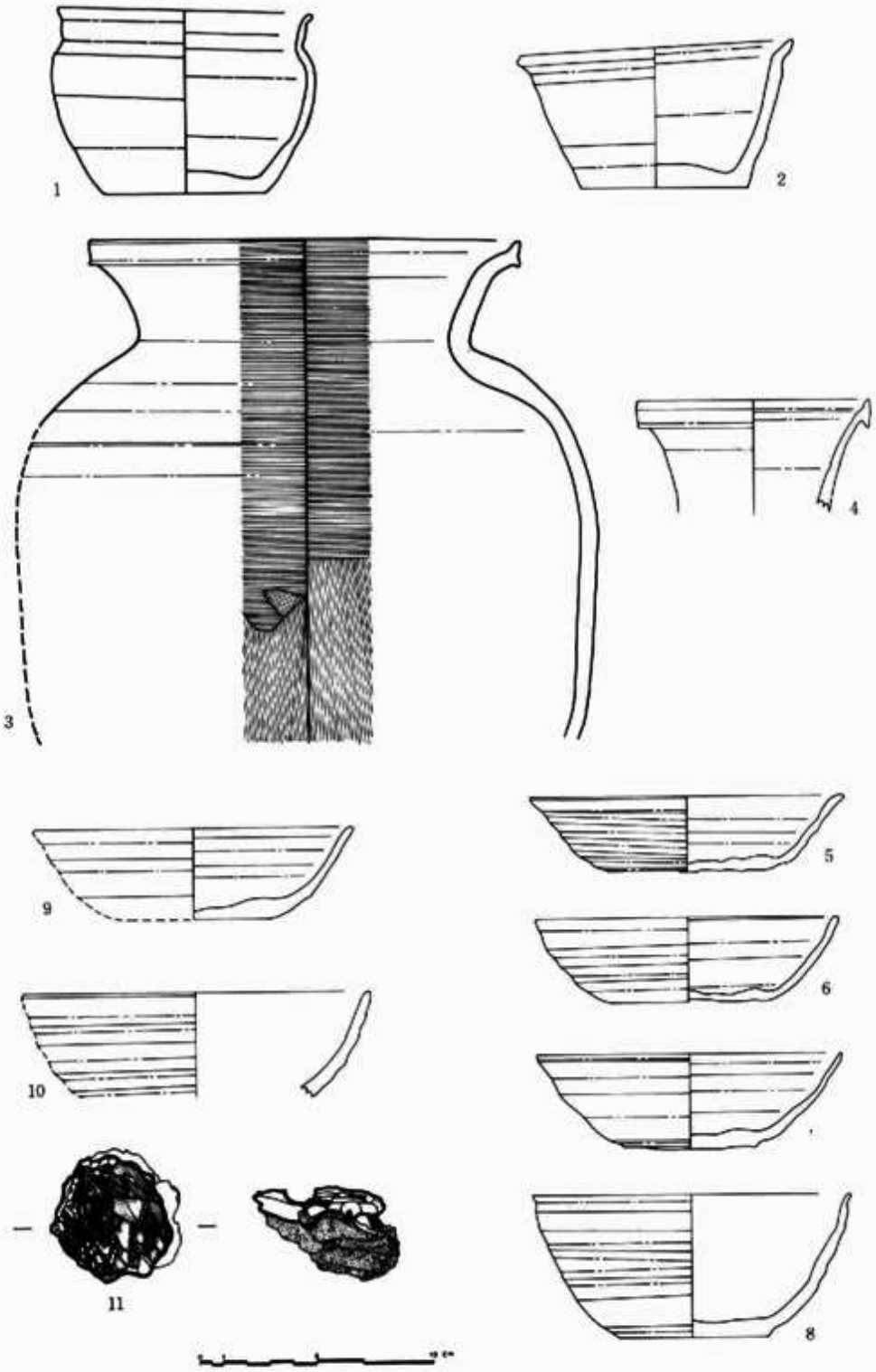
小型甕　（**14図１**）口縁部1/2、体部1/4、底部全部残存で、推定口径約11.0cm、頸部径約10.3cm、体部最大径11.4cm、最高約7.6～8.0cm、底径7.0cmである。外面上半が、２次焼成を受け著しく磨滅している。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ、外体面は上下にヘラ削り、ヘラなで痕、内面は横なで痕がみられる。外底面、内底面共ヘラなでによる調整がある。他の１点は口縁部若干、体上半部若干残存で、口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出される。体壁はロクロなで成形無調整である。前者はＱ２床面、後者は西側焼土から出土した。

小型浅鉢　（**14図２**）口径11.8～12.0cm、、器高5.7～6.3cm、底径7.1～7.6cmである。口縁部はやや外反し、口縁はやや丸みをもつ、手捏成形で、内外面に指圧痕があり、歪み著しい。体部は、外面が上下ヘラ削り、ヘラなで。内面横なで、外底面に木葉痕がある。胎土軟質砂粒を多く含む、色調橙色、焼成不良で、かまど焚口出土である。

内黒坏　口縁部若干、体部1/8残存である。口縁部は直線的で、口端は薄くなる。体壁はわずかに丸みがある。体下端に黒斑がある。ロクロなで、調整は認められない。

須恵器

壺　（**14図３**）口縁部大部分、体上半残存。口径18.5cm、口縁部高さ4.3cm、頸部径14.2cm、



第14図　6号住居跡出土遺物

体部最大径24.9㎝である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出される。口縁部内外面は、横なで成形、体上半部は内外面共横なで、下半は上下なでである。他に肩部破片4点は内外面共横なでであるが、1点は外面に叩き目がある。体部5点の破片は、内外面に叩き目痕がみられ、内1点は内面の叩き目が放射状で、他は平行線である。

長頸壺　（**14図4**）口縁部上半部1/3残存の破片で推定口径約10㎝、頸部径は6.4～9㎝である。口端部がかなり上下に挽き出されている。他に灰釉の付着した体部の破片が2点ある。

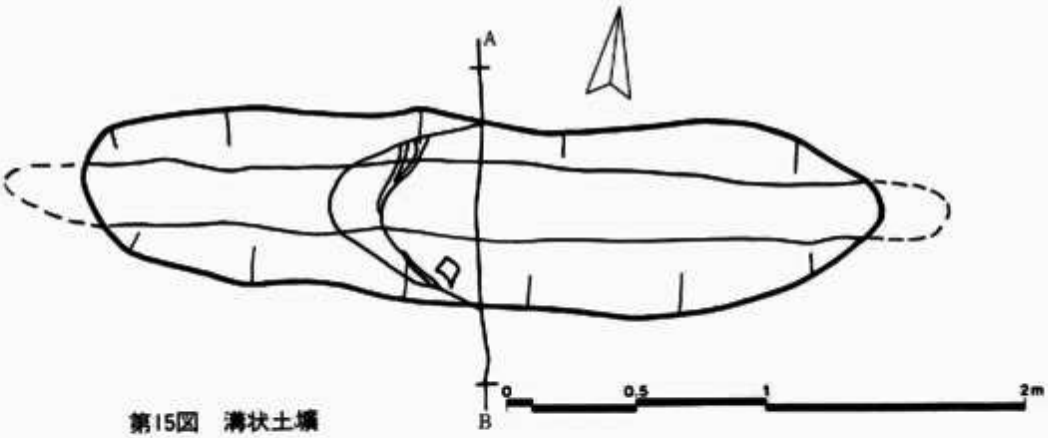
坏A　13点の内、回転ヘラ切りが3点、回転糸切が3点、調整のため切離技法不明のものが、2点である。他の5点は底部を欠損している。**14図5**は、ほぼ完成形で、口径13.4㎝、器高3.3㎝、底径7.3㎝である。口縁部はやや外反し、口端は丸みをもつ。体壁は直線的で凸凹がみられる。外底面は回転ヘラ切り無調整である。外傾度は46.0°で、体下端から底部外周は丸みをもつ。内外表面全体に赤褐色の付着物がある。**14図6**は、口縁部2/3、体部1/2、底部1/2残存で、口径約12.9㎝、器高3.6㎝、底径約7.0㎝、外傾度40.5°である。口縁部は、直線的で、口端は丸い。体部は、わずかに丸みをもち外傾する。回転ヘラ切りで、刺突痕が無数にみられる。**14図7**は、口径13.1㎝、器高4.0㎝、底径5.7㎝、外径度43.0°、回転ヘラ切りと思われるが調整されており明確でない。底部は下に若干張り出す。**14図8**は、口径13.6㎝、器高6.1㎝、底径6.3㎝、外傾度30.0°の椀形で、回転糸切りである。

坏B　（**14図9・10**）**9**は、口径13.8㎝、器高3.9㎝、底径7.0㎝、外傾度41.0°で、回転ヘラ切り後調整したと思われる。**10**は、推定口径約15㎝の破片である。他に回転ヘラ切り1点、回転ヘラ切り後調整のもの1点。他の4点は底部欠損で不明であるが体部はみなロクロなで成形無調整である。

他に輪口　（**14図11**）1点。**鉄滓**3点が出土した。

7　溝状土壙（ＡＥｈ15）第15図

（遺構の確認）　稲荷遺跡基準点より西へ131.91～134.94ｍ、北へ95.51～96.58ｍの地点、A



第15図　溝状土壙

Ｅｈ15地区に黒色の落込みを確認した。２号住居跡の西隣りにあり、南西コーナと、溝状土壙の東端の間は約50cmである。

（規模、方向）　上場長軸3.09ｍ、短軸0.72ｍ、下場長軸3.64ｍ、短軸0.30ｍ、深さ約60cmである。上場長軸の方向は、Ｅ－５°－Ｎで、ほぼ東西方向を向く。

（形態）　下場長軸は、上場よりも長く、両端共上場長軸の両端より張り出している。又、下場の両端は細くなり、やや北へ反る。東端は丸く、わずかに南へ反る。短軸の壁は、やや緩やかで、底面は丸みをもつが、絶え間無い出水のため明確ではない。

（堆積土）　３層に分れ、上層と下層の間に薄い粘土（地山）の層が入る。

１層、10ＹＲ2/1黒色腐植土層、粗で粘性はない。２層、10ＹＲ6/4黄褐色粘土層、粗で粘性が強い。３層、10ＹＲ2/1黒色腐植土層、粗で粘性はない。

（年代決定資料）　遺物の出土は皆無である。

Ⅳ　遺構と出土遺物の検討

今回の調査によって、溝状土壙１基、住居跡６棟が発見された。

溝状土壙は、２号住居跡の西側に近接して発見されたが、１基のみで、他と比較出来ないが、東側の稲荷遺跡の10基、湯沢川の南対岸にある一本松遺跡にある溝状土壙と同類のものと思われる。とすれば、縄文時代の遺構の可能性があるが、湯沢Ａの場合は、周囲から縄文土器片の出土はなく、北側の一段高い段丘面にある１号住居跡から若干縄文土器片が出土しているのみで、他の遺構の場合と同様に考えるには資料に乏しい。

住居跡６棟については、位置関係、規模、堆積土、主軸方向、かまどの位置、柱穴。周溝。床面。出土遺物等の、検討すべき項目があると思われるが、地形上の位置関係と、出土遺物から、若干検討してみたい。

位置関係は旧地形が水田耕作等によって失われているが、稲荷、湯沢Ａ両遺跡の南縁が、東西に延びる段丘崖で比高は１～５ｍあり、この段丘崖の南側が、湯沢川の氾濫原で、標高122～125ｍである。段丘崖の北縁に沿って、湯沢Ａ遺跡があると思われる。更に一段高い段丘面が、北約150ｍの所に東西に延びる。この段丘崖は北高１～２ｍで、この段丘の南縁にあるのが、１号住居跡で、段丘崖の南に２号、３号、４号住居跡が並ぶ。５号、６号住居跡は、湯沢川氾濫原に面した段丘の縁にあると思われる。

出土遺物について比較してみると、頸部有段の甕が出土したのは、１号・６号住居跡２棟で長胴の甕の点数は１号住居跡が圧倒的に多い。小型の甕で回転糸切りのものは各住居跡それぞれ何点か出土しているが、２号住居跡に多くみられる。内黒処理の坏は、各住居跡に何点かずつみられるが、２号住居跡の量が割に多く、次いで３号住居跡で、他は非常に少ない。須恵器の

第1表　遺構一覧表

項目 / 遺構	規模（東西×南北）壁高	形状	主軸方向	かまど 位置	かまど そで	かまど 煙道	かまど 煙出	床面	主柱穴	周溝	貯蔵穴状ピット	備考
1号住 AEc03住	4.90×5.30 0.20～0.30	方形	北	北壁中央	有	有	無	地山	4	有	4	周溝より溝が南へ段丘崖まで
2号住 AEg15住	6.25×6.70 0.10	方形	北西	北壁中央	無	有	有	地山一部堀方	4	西壁下に有	2?	南壁東寄にピット群
3号住 AEh06住	3.90×3.55 0.10～0.14	方形	北東南東	東壁中央南壁東	無	無	無	地山一部堀方	無	西壁下に有	?	東壁中央と南壁東寄に焼土あり
4号住 ADi06住	3.20×3.30 0.10～0.16	方形	東南東	東壁南寄	有	有	有	地山	無	無	3	2本の水路で切られる
5号住 CCe06住	3.20×3.25 0.05～0.10	方形	東南東	東壁北寄	無	無	無	地山一部堀方	無	無	4	壁外に柱穴状ピット9
6号住 ECa03住	4.40×4.70 0.20～0.25	方形	南南東	南壁東寄	袖石のみ有	有	不明	地山	4	有	1?	煙出溝で切られる

第2表　溝状土壙一覧表

項目 / 地区	上場 長軸	上場 短軸	下場 長軸	下場 短軸	深さ	方向	下形形態	断面	備考
AEh15	3.09	0.72	3.64	0.30	0.60	E－10°－S	東端ややふくれる 西端やや北に反る	U	No.2住の南西50cm

第3表　遺物一覧表

項目 / 遺構	土師器 長胴甕	土師器 小型甕	土師器 小型鉢	土師器 坏 内黒	土師器 坏 内外黒	土師器 高台坏	須恵器 壺	須恵器 長頸壺	須恵器 坏 A	須恵器 坏 B	須恵器 蓋	砥石	鞴口	鉄製品	鉄滓	備考
1号住	12＋破片多 有段1	7		2			1		14＋2片 糸切り1	3＋3片 糸切り1	1			1 鉄鏃		Aヘラ切り4 Bヘラ切り1
2号住	18	30		2＋21片		3	8		5	7		1			1	玉髄原石 1 坏みな糸切り
3号住	19	1＋13片		11	1	3	3		1	6＋50片						坏みな糸切り
4号住	2＋5片	2＋2片		1			1		1	7＋4片		1		1 直刀		坏みな糸切り
5号住	2＋5片	3		3			1		2	6						坏みな糸切り
6号住	3＋18片	2	1	1			10	3	14 ヘラ切り3 糸切り3	8 ヘラ切り1			1		3	坏AB 底調整各2

壺は、2号、6号住居跡に出土しているが、他は少なく、4号住居跡は皆無である。長頸の壺は、6号住居跡にしかみられない。坏類は1・6号住居跡に多くみられ、他は非常に少ない。1号・6号住居跡の坏Aは、回転ヘラ切り、回転ヘラ切り、回転糸切りと両者を伴出しているが、1号住居跡の坏の方が、体壁が直線的で、6号住居跡の方がやや丸みをもつ。どちらの住居跡の坏も、焼成はあまり良くない。B類は、1号住居跡出土のものにA類と同形で、回転ヘラ切りのものがある。点数は1号、6号住居跡はA類がB類より多く、他はA類よりB類の方が多い。又、6号住居跡にはA類2点、B類2点が、底部のみ調整され、切離し技法不明のものがある。1号住居跡には須恵器の蓋が出土しており、この地域では太田方八丁遺跡の他に出土例はあまり聞いていない。又、鉄鏃が1号住居跡から。鉄刀が4号住居跡から出土している。鉄滓が2号住居跡と6号住居跡より、鞴口が6号住居跡より出土し、砥石が2号住居跡、4号住居跡より出土している。又、粉状パミスが、1号住居跡の1層と2層の間にかなり堆積していた。2号住居跡、4号住居跡に若干、他は認められなかったが、堆積土の上層が大部削られている事から、何とも判断し難い。特に6号住居跡は、農道の直下にあったので、遺構が大部撹乱されたと考えられる。5号住居跡は明らかに床面近くまで削平されてしまっており、堆積土は部分的にしか残っていない。今後の課題として、1号住居跡の粉状パミスと、一本松、湯沢B等の粉状パミスを、分析検討する事が必要と思われる。尚、坏Aは胎土硬質、環元炎焼成で、坏Bは胎土軟質、酸化炎焼成である。

V　遺跡の構成

住居跡6棟は、1号、2号、3号住居跡が近接し、1号住居跡が、段丘崖の北側で一段高い所にあり、2号、3号住居跡は、段丘崖の南側に、段丘崖に沿って並ぶ。4号住居跡は2号住居跡の東方に離れて、やはり段丘崖の南側にある。5号住居跡は、大部これらと離れ、むしろ稲荷遺跡の1号住居跡と大部離れているが、東西に並び、北側に同じ段丘が延びている。6号住居跡は、湯沢川氾濫原に面した段丘の縁にある。

規模は、2号住居跡が1辺6m以上の方形、1号住居跡が5m前後の方形、6号住居跡が4.50m前後で、3号、4号、5号住居跡は3m台である。4m以上のものに柱穴があり、4m以下のものには柱穴がないのは、規模と柱との関係があるように思われるが、これだけでは断定はできない。もっと他の資料を検討するべきだと思われる。

主軸は、それぞれ異なる。3号、5号、6号住居跡が、ほぼ同じ方向である。しかし、3号住居跡は、はっきりせず、北東方向かもしれない。2号住居跡は北西向きで、稲荷遺跡3号住居跡とほぼ同じ方向である。4号住居跡は、やや東向きである。

かまどの位置は、1号住居跡が北壁中央、2号住居跡が北壁中央。3号住居跡は、南壁東寄

りか、東壁中央、4号住居跡は東壁中央、5号住居跡は東壁北寄り、6号住居跡は南壁東寄りである。2号住居跡の北壁は北西向きであるから、1号住居跡とは異なっている。

柱穴は4m以上の1号、2号、6号住居跡のみにみられる。

床面は地山面を床として利用しているものだけで、貼床は認められない。一部掘り方のあるのが2号、3号、5号住居跡である。

周溝は1号、6号住居跡にみられ、3号、3号住居跡には西壁だけに認められた。4号、5号住居跡には認められなかった。

出土遺物は、総て平安時代9世紀以降と思われるが、頸部有段の甕と、回転ヘラ切りの坏A・B類を出土したのが1号住居跡で、木葉底の小型浅鉢と、回転ヘラ切りの坏A・B類を出土したのが6号住居跡である。しかし、坏A・B共に回転糸切のものも共伴している。他の住居跡は、総て回転糸切の坏である。しかし、坏A・Bの数が、1号・6号住居跡はAが多く、他はBが多い。又、一般的に内黒坏、壺の出土量が少ない事が特徴の様である。

Ⅵ まとめ

湯沢A遺跡は、湯沢川の北岸段丘面に沿った、東西に広がる集落の一部と考えられる。東は稲荷遺跡に続いており、西は更に住居跡等の遺構が存在している。

遺構は、溝状土壙1基、住居跡6棟である。

溝状土壙は、遺物が出土せず、年代決定資料に欠けるが、稲荷遺跡や一本松遺跡の同じ遺構から考えると、縄文時代の遺構の可能性がある。

住居跡6棟は、それぞれの特徴が、かなりみられ、共通する点が限られるが、1号住居跡が、かまどの位置方向、出土遺物等からみて、比較的先のものの様である。6号住居跡にも出土遺物が1号住居跡と同じ形式のものがあり、それに次ぐものかもしれない。他の2号、3号、4号、5号住居跡からは、新しい形式の遺物が出土しており、それに次ぐものかもしれない。しかし、6棟の住居の年代は、共通した遺物も出土しており、それほど差は大きくはなく、同時期に共存、或はそれに近い時期のものとも思われる。

1号住居跡は、炭化材・焼土が、床面を広く覆っており、焼失家居と思われる。又、周溝が回っており、段丘崖へ通ずる溝が、周溝と直結している点、排水を多分に配慮した住居跡と思われる。又、出土遺物に、回転ヘラ切りの坏や、須恵器の蓋、鉄鏃等、太田方八丁遺跡内の住居跡出土の遺物と類似している。

2号住居跡は、堆積土が非常に浅く、輪郭が不明な所もあり、大部削平されたと思われる。かまどに袖と燃焼部が無く、廃絶された可能性がある。南東隅には性格不明のピット群があり、壁の輪郭も失われていた。出土遺物の中に、砥石破片と玉髄がみられる。

3号住居跡は、かまどが焼絶され、煙道、煙出も確認出来なかった。

4号住居跡は、住居跡の規模に比べ、煙道が長い。又、稲荷遺跡4号住居跡、2号住居跡と同じく、煙出の下場は、煙道との境がない。出土遺物の中に、直刀と砥石がみられる。

5号住居跡は、壁外に柱穴状ピットがみられる。又、焼土を埋め込んだピットがみられる。

6号住居跡は、周溝が回っており、柱穴が方形のプランをしている。出土遺物は、須恵器坏に回転ヘラ切りのものや、外底面を調整したもの、木葉底の浅鉢、鞴口や鉄滓がみられた。

湯沢（B）遺跡

遺　跡　名：湯沢B（略号YZ－B75）
遺跡所在地：紫波郡都南村15地割字新田60 他
調査期間：昭和50年4月21日～6月30日
調査対象面積：約4,000㎡
発掘調査面積：約4,000㎡

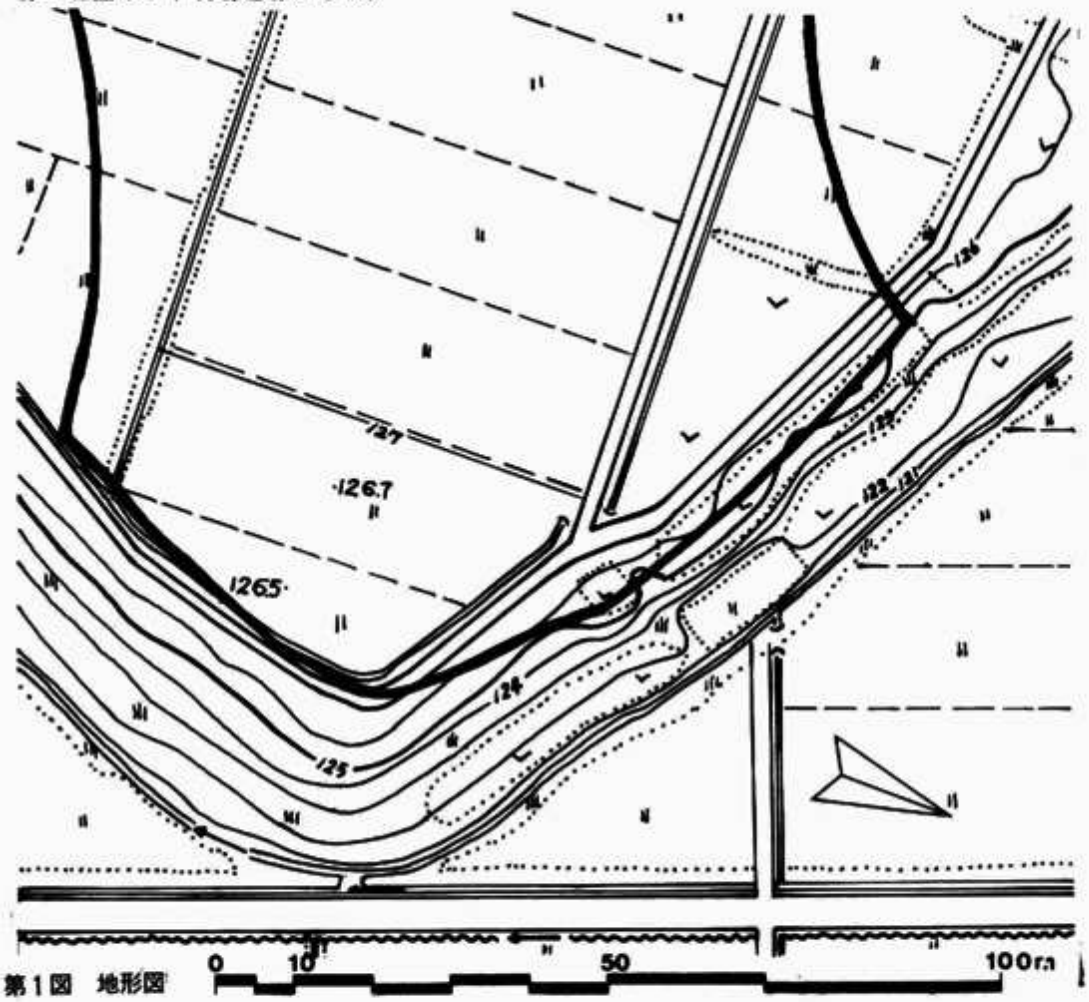
Ⅰ　遺跡の立地・環境

湯沢Ｂ遺路は、紫波郡都南村湯沢第15地割字新田60他にある。東北本線岩手飯岡駅の西約２㎞の地点である。現在盛岡南インターチェンジの東側で、県道三本柳一湯本線から、東北自動車道上下線へ入る中間に当たる。

湯沢川の北岸段丘面の東端部で、比高約６ｍの段丘崖が北西から南東へ続いている途中の、張り出した地点に当たる。西方約４㎞には洞ケ森（356.8ｍ）、6.6㎞には箱ケ森（865.5ｍ）があり、北西約3.3㎞には飯岡山（358.6ｍ）がある。又東約600ｍには鹿妻堰用水路。4.8㎞には北上川が流れている。

遺跡の現状は水田。北側が一部畑地である。標高は約126～127ｍで西方がやや高くなる平坦な、段丘面である。

遺跡の南南西約200ｍには稲荷遺跡、南西約300ｍに湯沢(A)遺跡、北西約350ｍの同じ段丘の縁に北面して下羽場遺跡がある。



第１図　地形図

Ⅱ　調査の方法と経過

湯沢Ｂ遺跡は、昭和49年10月頃に、稲荷遺跡・湯沢Ａ遺跡・下羽場遺跡と共に、重機による表土、耕作土除去がおこなわれ、遺構検出がなされている。その結果、周溝がある事が確認されていた。

調査開始の際、調査地区が、東北自動車道から東へ200 mの地点にあるため、インターチェンジ、KEY PLAN、B～B′の中心線から基準線を引いて座標をつくる事にした。B～B′の0＋40と1＋00と結ぶ直線をＮＳ＝０とし、０＋40の中心杭より西へ20ｍの地点を直交する直線をＥＷ＝０とした。遺構の範囲は、Ｎ35ｍからＳ10ｍまで。Ｗ53.5 ｍからＥ17ｍまでの、東西65ｍ、南北45ｍに及んでいる。区分した地区は、東西の中心線を境にし、北側30ｍまでをＣ区とし、Ｂ区以北をＡ区、Ｃ区以南をＤ区としたが、こゝには遺構は確認されなかった。又Ｂ区・Ｃ区は、更に３ｍ×３ｍの小地区に細分し、北からａ～ｊの名称を付し、南北の基準線を境に西へ03～30・東へ50～80の名称を付した。

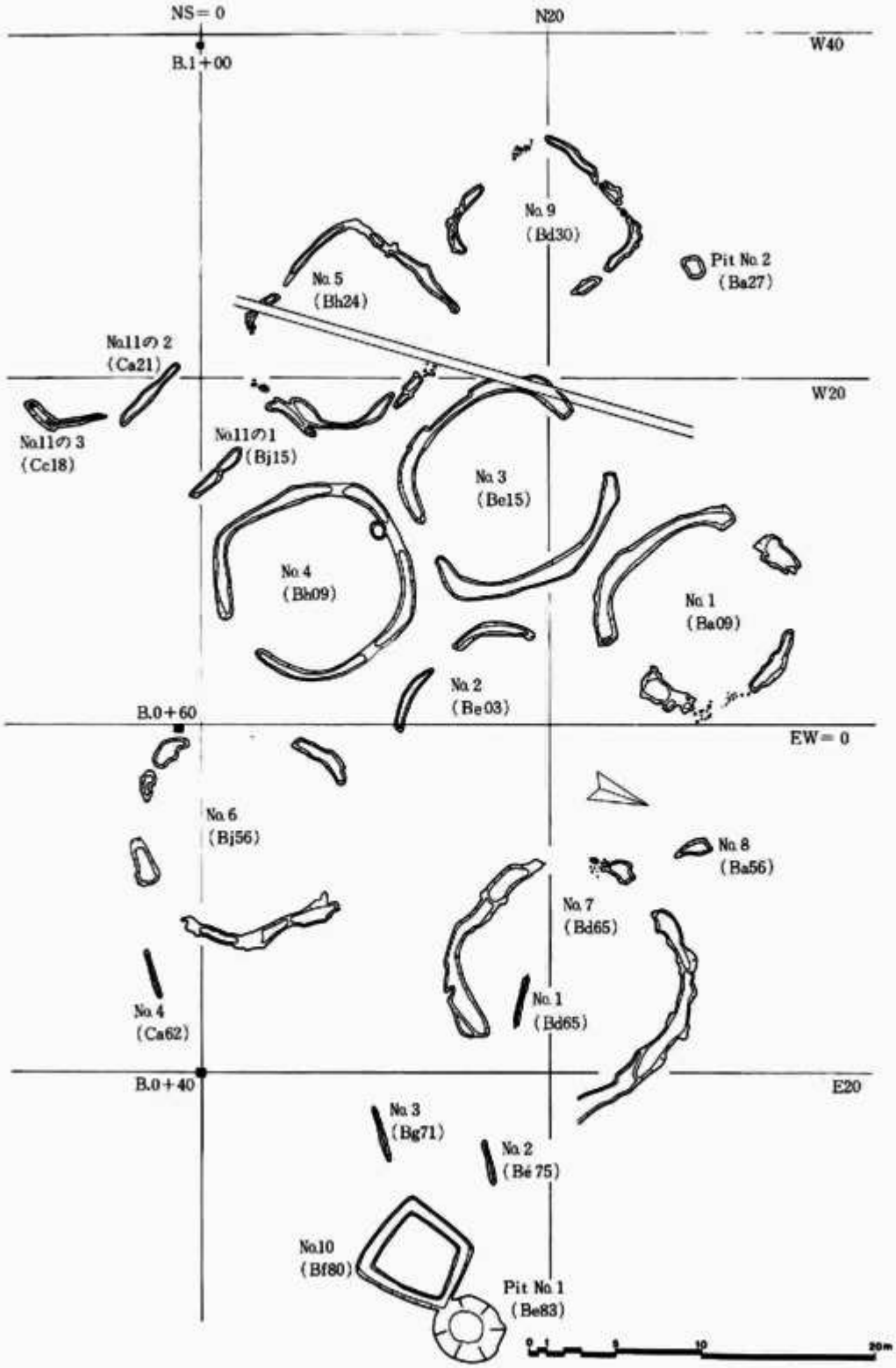
遺構の実測の際には、１ｍ間隔に釘を打ち込み、水糸を張って、１ｍ×１ｍの桝目をつくり、実測の基準とした。実測図は総て20分１の縮尺で作製し、レベルは、０＋40の中心杭標高26.510ｍを利用して実測した。

遺構の検出に当っては、既にブルドーザーによって、耕作土は全面除去されており、遺構の堆積土や、若干の遺物が露出していた。水田の用水路も破壊され、降雨の際や、田植え時期に当っての流水のため、度々遺構が水びたしとなってしまい、堆積土や、遺物が流出された。

遺構検出面を、クリーニングした結果、円形周溝が７基、円形周溝の残存と思われるものが５基、方形周溝が１基、ピットが２基、溝状土壙が４基確認された。

遺構の精査にあたり、円形周溝については、ほゞ東・西・南・北４個所に、溝と直行し、中心点の方向を向くベルトを残し、埋土の状態を調べ、堆積土の状態と、遺物の包蔵層を明確にした。円形周溝の残存と思われる溝については、ほゞ中心部に、直行するベルトを残し、同様の調査をした。方形周溝については、各辺の中心点に、辺と直行したベルトを残し、同様の調査をすると共に、摺鉢型ピットと切り合いであるため、新旧関係を明らかにするため、切り合う北隅にもベルトを残して調査をおこなった。ピットについては、摺鉢型ピットは四分法で調査をする事とし、十字にベルトを残した。十字のうち１は、方形周溝との切り合いの部分に直行するようにした。他のピットについては、方形で、一辺１ｍ×1.4 ｍのやや歪んだ形をしており、深さも35㎝と浅いため、南北にベルトを残すだけで調査をした。溝状土壙は、長軸の中心点を通る直行したベルトを残して調査をおこなった。

基本層序は、稲荷遺跡とほゞ同じで、Ⅰ層は水田耕作土・Ⅱ層は明黄褐色粘土層・Ⅲ層は褐色の砂層である。


NS＝0
N20
W40
B.1＋00
No.9
(Bd30)
Pit No.2
(Ba27)
No.5
(Bh24)
No.11の2
(Ca21)
W20
No.11の3
(Cc18)
No.11の1
(Bj15)
No.3
(Be15)
No.4
(Bh09)
No.1
(Ba09)
No.2
(Be03)
B.0＋60
EW＝0
No.6
(Bj56)
No.8
(Ba56)
No.7
(Bd65)
No.4
(Ca62)
No.1
(Bd65)
B.0＋40
E20
No.3
(Bg71)
No.2
(Be75)
No.10
(Bf80)
Pit No.1
(Be83)
0
5
10
20m

第2図　遺構配置

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1　円形周溝№1（Ｂａ09）

（遺構の確認）　南北基準線より西へ0.27 m～12.66 m。東西基準線より北へ22.64 m～34.57 mの地点。Ｂａ09区、及びその周囲に、黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（規模・平面形）　外周の直径11 m～12m。巾0.55 m～1.60 m、深さ約20cmの円形で、北西一南東がやや長く楕円形ぎみである。周溝の中心より北西側と西側・南東側が、切れている。北東側は切れるが、ここには掘方と思われる小ピットが点在し、底面が浅かったため、開田等の際に、削平されたものと思われる。北西部は、両端の浅い部分に掘方状のピットがある。南端の外側に方形状の張り出しが、南側の内側にも張り出しがみられる。北側の切れた所の長さは約3.2 m南側の切れた所の長さは約1.8 mである。南東部の切れた部分の長さは約2.8 mあり、周溝の末端は、かなり太くなる。

（堆積土）　4層に分かれ、2層と3層は混入する粘土の割合で2層に分かれるが、基本的には、2層の土質で、黒色腐植土と、明黄褐色粘土である。

1層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。

2層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、細かい粘土粒を若干含む。

3層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粒状の粘土を含む。

4層　10ＹＲ3/1黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性あり、粘土との混合層。

5層　10ＹＲ5/6黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、腐植土を若干含む。

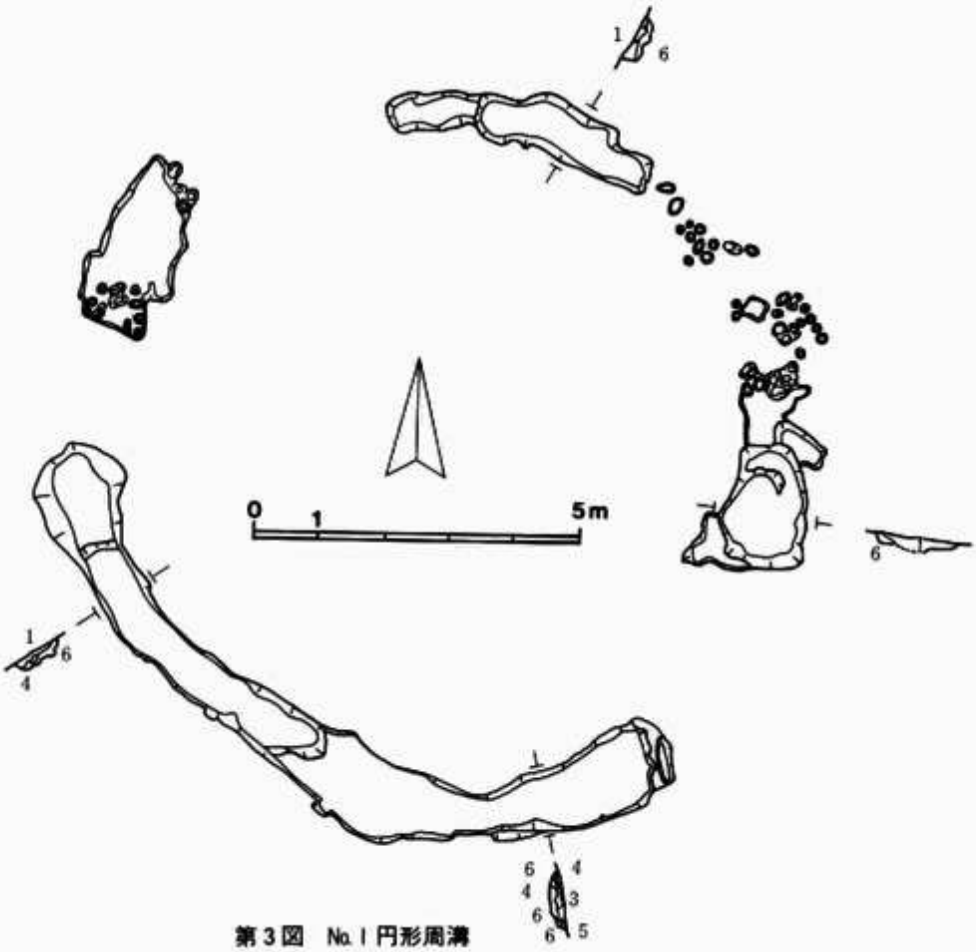
6層　10ＹＲ6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、崩れ落ちた地山か。

（底面の状態）　平坦な個所は少なく、凸凹の著るしい所が多い。掘る道具の先端部輪郭がはっきりしている所もみられ、土の掘り上げも粗末で、崩れ落ちただけでなく、掘った土を取り残した状態が大部分である。従って、底面をきれいに、平らに削るのではない。平坦な個所は南東部の巾広い所のみである。又方形状の張り出しは、周溝の南側外周にもみられる。

（傾斜）　底面のレベルを測定すると、4ケ所の溝で浅い所と深い所の差は約30cmで、南西側が、巾も狭く、浅い。北西側はやや巾が広く南西側より5cmほど深い。北東側は、北西側より巾はせまいが、深くなり、東側南端が一番巾も広く深くなっている。しかし傾斜は、3方が切れているし、どちらが浅く、どちらが深いとはいえない。

（内側台状部）　特になにも検出されなかった。

（近接した遺構）　南側に№3周溝があり、外周との間隔は1.15 mである。南東側にある№2周溝との間隔は3.45m。東側には№7周溝があり、外周との間隔は8.5 mである。



第3図　No.1円形周溝

（切り合いの遺構等による新旧関係）　なし

（年代決定資料）　須恵器の長頸壺1点、坏A類4点、坏B類1点。釘状鉄製品1点が、周溝の堆積土より出土した。坏A・Bは、いずれも回転糸切りで、ロクロなで成形、無調整である。

出土遺物

須恵器

長頸壺　長頸部下半¼残存の破片で、全容は不明である。推定頸部直径約5.5 cmである。頸部下端の肩との境には張り出しが若干認められる。胎土は硬質、砂粒を若干含む。色調は褐灰色、焼成はやや良好である。内外面とも横なで成形で、東側の埋土1層出土である。

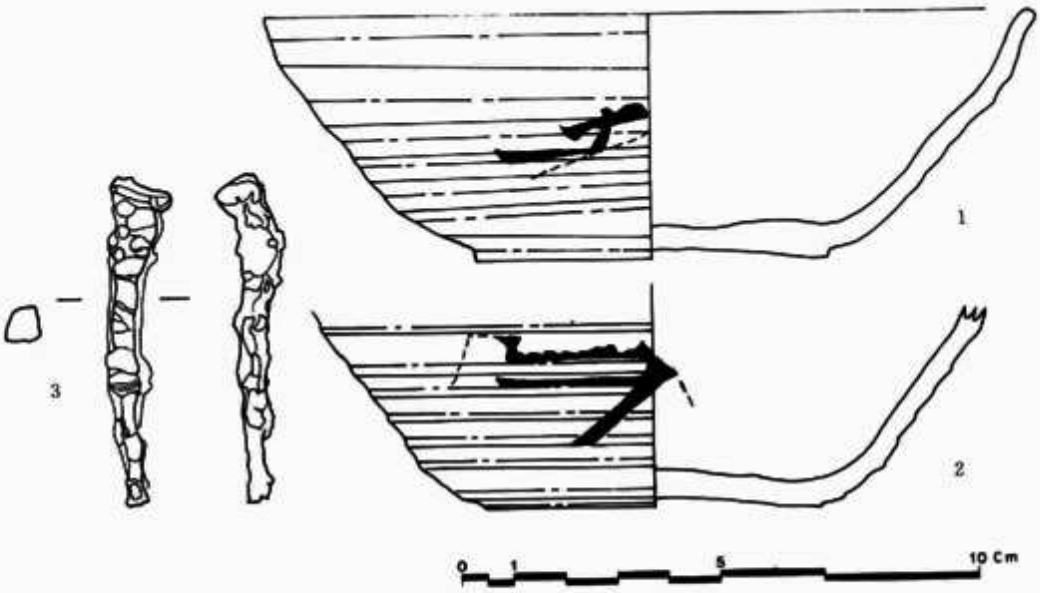
坏A　（第4図1・2）1は口縁部¾、体部¾、底部全部残存である。口径14.9 cm、器高4.75 cm、底径6.8 cmである。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ、外体面は上端と下端にかなりの丸みをもち、その間はわずかに外反する。外傾度は42.0°である。外底部はわずかに下と、かなり外側に張り出している。中心部はわずかに凹む。外体面に墨書が認められるが、

下半部が欠損している。上半部は「工」と思われる。胎土は硬質、砂粒若干含む、色調は灰白色、焼成は良好である。南東部ベルト付近、1層より出土した。**2**は、体下端と底部残存である。底径は6.5 cmで、口径、器高、外傾度は計測不能である。外体面は下端が、1と同じように、かなり丸みをもち、その上はわずかに外反し、かなり外傾するようである。中心部はわずかに凹んでいる。外体面に墨書が認められるが、左下半分のみで、他は欠損し、字体は不明である。胎土は硬質、砂粒若干を含む。色調は灰白色、焼成良好である。北側ベルト付近、1層より出土した。同じ地点の、1層より口縁部若干の破片が出土している。口縁部はわずかに外反し、口端部は外側に向って薄くなる。体部上端はかなり丸みをもっている点、4図1と非常に類似しており、4図2と同一個体かとも思われる。南西側の北寄り、1層埋土上面から、体下端若干、底部若干の小破片が出土している。外底面に回転糸切り痕が認められる。

以上4点は、いずれも、ロクロなで成形無調整、回転糸切りである。

坏B　13片の小破片で、口縁部、体部、底部が若干あるが、接合しない。口縁部はわずかに外反し、口端はやや薄くなる。体下端に丸みをもち外傾する。ロクロなで成形無調整、回転糸切りである。胎土軟質砂粒若干を含む、色調は橙色、焼成は不良。南側埋土上に露出していた。

鉄製品　（**4図3**）釘と思われるもので、欠損部はないと思われる。長さ6.1 cm、巾0.3 cm～0.9 cm、厚さ0.2 cm～0.5 cm。頭部は平たく、かなり急角度に屈曲している。横0.9 cm、縦0.8 cm、厚さ0.3 cmである。東側の1層上面に露出していた。



第4図　No.1円形周溝出土遺物

2　円形周溝№3（Ｂｅ15）

（遺構の確認）　南北基準線から、西へ7.20ｍ～20.14ｍ、東西基準線より北へ11.42ｍ～24.19ｍの地点、Ｂｅ15地区及びその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（規模・平面形）　外周の直径11.70～11.50ｍ。巾45.0㎝～1.24ｍ。深さ20㎝～34㎝の円形である。6ケ所に曲線の曲りが強い所があり、六角形の各角を丸くしたような形にもみえる。周溝の中心より北西側と、南東側が切れている。切れた部分の長さは、北西側が約4.0ｍ。南東側が2.19ｍである。西側を南北に用水路が走り、西端の溝を切っているため、一部輪郭の不明な点はあるが、大体の平面形は確保出来た。南西側と南側の外周部に方形の張り出しがみられる。南西側の張り出し部は、北端が溝で切られているため、長さは、明確でないが、長さ約1.6に渡って22㎝ほど外側に張り出し、底面も広くなっている。南側外周の張り出しは、長さ1.6ｍで、15㎝～20㎝外側に張り出す。南側の張り出しは、№1周溝と方向、長さ等、ほゞ同じである。この2ケ所の張り出しの間は、巾が細く45㎝～60㎝で、2ケ所の張り出し間は約3.2ｍである。

（堆積土）　2層に分かれ、円形周溝№1の堆積土を基準にしてみると、1層と4層である。1層の上面に、粉状パミスが確認された。これは一様に堆積しておらず、部分的にみられ、北東側周溝の南半部と西南側周溝の北半部であった。

1層　10ＹＲ　黒色腐植土層　指圧痕つかない、粘性なし、用水路の埋土。

2層　10ＹＲ　黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、用水路の埋土。

3層　10ＹＲ　黒色腐植土層　指圧ややつく、粘性なし、上面に粉状パミス所により有。

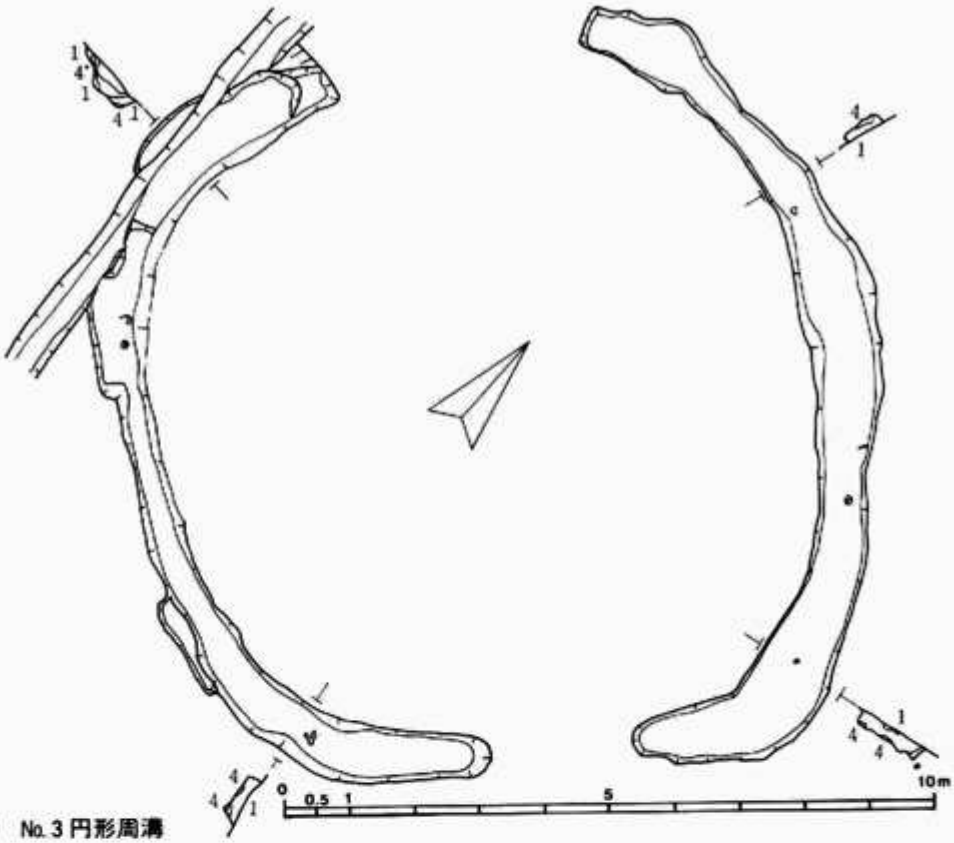
4層　5ＹＲ　黒褐色腐植土　粘土混合層、指圧痕ややつく、粘性あり。

（底面の状態）　南西側南端と、北東側南端がやや平坦であるが、他は掘り方と思われる凸凹が多くみられる。他の円形周溝に比べ、底面の深さは10～15㎝ほど掘り込まれている。

（傾斜）　南西側は、北端より、南端が17㎝低くなっており、北東側は、北端より南端が19㎝低くなっている。だから北西側から南東側へ傾斜していると、はっきり断定は出来ない。北東側は中央部が一番低く、北端より22㎝ほど低い。又南西側は、張出し部の底面一段低くなっているわけではなく、南端がそれより低い。低いといっても3㎝の差である。

（近接した遺構）　北端1.15ｍの所には、№1円形周溝の外周があり、南東側1.05には、№4円形周溝があり、南側1.70ｍには№5円形周溝があり、東側1.50ｍには、№2円形周溝がある。又西約4.0ｍには№9円形周溝がある。又西北西約10ｍの所には、ピット№2がある。

（切り合いの遺構等による新旧関係）　現在の水田耕作に伴った用水路が、周溝の西端部を切っている。明らかに溝の方が新しい事が堆積土の状態で判明した。この用水路は、№5円形周溝の中央を通っている。又この溝の東約18.5ｍにも、平行する用水路がある。これらの用水



第５図　No.３円形周溝

路は水田の畦畔沿いにつくられており、農道の下を直交する所では、コンクリート製のヒューム管が埋められ、その中を用水が流れている。No.３・No.５円形周溝を切ってつくられた用水路沿いの畦畔を、標高 127 ｍの等高線が通っている。(第１図参照)。内側台状部は何も無い。

（年代決定資料）　須恵器。長頸壺１点、坏Ｂ６点、釘様鉄製品１点が出土した。

出土遺物

須恵器

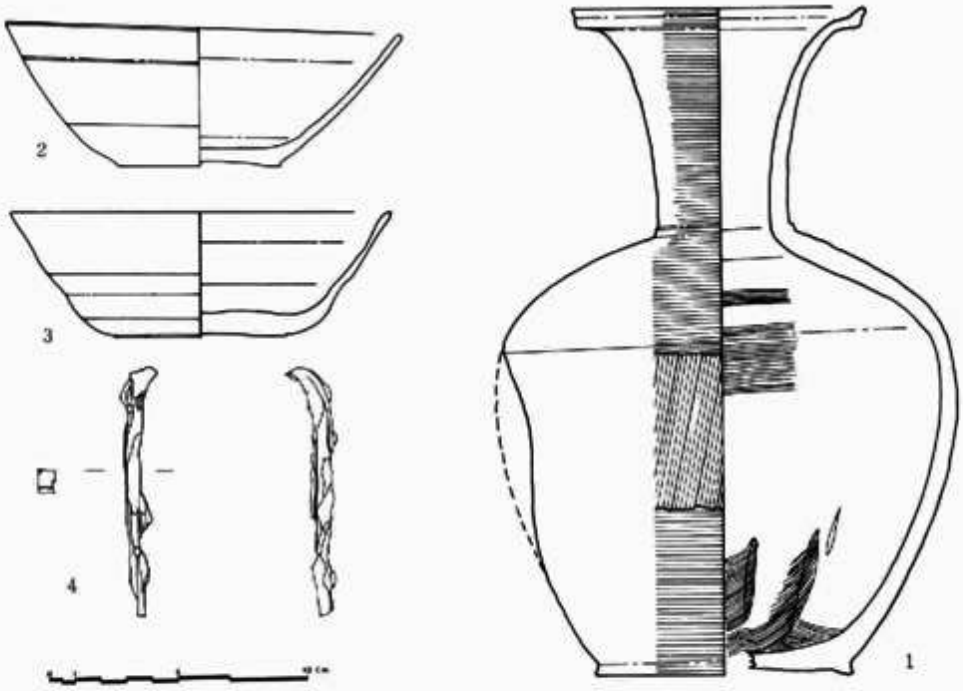
長頸壺　（６図１）口縁部約⅔、頸部大部分、肩部大部分、体部⅔、底部⅙残存で、口縁部から底部まで接合する。口縁部径 11.3㎝、頸部径下端が５㎝、上端が９㎝。体部最大径 17.7㎝。底部径 10.8㎝、器高 25.7㎝、体部高さ 17.1㎝、頸部高さ 7.8 ㎝。口縁部高さ 0.8 ㎝である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に強く挽き出されている。頸部はゆるやかに外反し、上にいくにつれ胎部の厚さは除々に薄くなる。頸部下端に隆帯があり、肩部との境となしている。肩部はやや丸みをもちかなり内湾している。体部の一部がかなり凹んでいるが、成形の際に、故意に凹ませたかどうかは不明である。口縁部、頸部、体下半部は、横なで成形であるが、体部上半に、かなり乱暴な上下ヘラ削り、ヘラなで痕がみられる。体部成形は、初め上下にヘラ削り、ヘラなで調整とし、その次に横にロクロなで成形をし、更に体上半を上下にヘラ削り、ヘラなでし、下端部を強く横なで調整した様である。内面は口縁部から底部まで、横なで成形

であるが、体上端部と底部は、かなり強くヘラなでをした様な圧痕が、やや横に走る。胎土硬質、砂粒若干含む。色調は灰色〜黒色。焼成良好である。主体部は、南西側　寄りから、体下端部と底部は、北東側埋土から出土し、大部分接合し、1個体となった。

坏B　（**6図2**）口縁部¾、体部¾、底部全部残存である。口縁部径15.3cm、器高5.1〜5.6cm。底部径6.2cmで、かなり歪みがみられる。口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ。体壁はわずかに丸みをもち外傾する。外傾度は、38°〜43°である。外底面の中央はやや凹んでいる。内体面共に磨滅著しいが、ロクロなで成形無調整である。外壁はかなり薄く、整った面をしている。底部は回転糸切りである。胎土は軟質、砂粒を多く含む。
色調は橙色、焼成は不良である。南西側の北側張り出し部底面から出土した。

その他坏B類は、5点出土している。1つは（**6図3**）で、口縁部若干、体部若干、底部½残存である。推定口径約14.8cm、器高4.8cm、底径約6.6cm、外傾度40.5°である。口縁部は直線的で、口縁部は薄くなる。体壁は下端以外直線的である。体下端はかなり丸みをもち、底部との境は、明確でない。胎土軟質、色調は橙色、焼成不良である。外底面に墨書があるが、1画のみで、字体は不明である。東側ベルト付近底面より出土した。他の4点は小破片である。

鉄製品　（**6図4**）釘と思われ、長さ9.6cm、巾0.65cm、厚さ0.8cmである。頭はやや屈曲する。東側に露出していた。



第6図　No.3円形周溝出土遺物

3　円形周溝No.4（Ｂｈ09）

（遺構の確認）　南北基準線から西へ2.54ｍ～ 13.98 ｍ。東西基準線より北へ0.63m～12.40ｍの地点、Ｂｈ09地区、及びその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（規模・平面形）　外周の直径は、10.85ｍ～11.40ｍ、巾48.0cm～約 1.0ｍ。深さは約20cmである。ほゞ円形であるが、北側、西側、南側、南東側、東側の５個所に、曲線の曲りが強い所があり、５角形の各角を丸くした様な形にもみえる。南東側のみが切れており、その部分の間隔は、2.6 ｍである。その他、西側と北西側、北東側に底面が一段浅くなった平坦部がある。No.1、No.2と異なり方形状の張出しは認められなかった。又巾の長さも、ほゞ同じである。西側の浅い底面は、２段になり、北側が高く、検出面より1.0 cm～3.0 cm低くなっているだけで、長さ約45cmである。南側は、検出面加り約8.0 cm低くなり、長さ約75～85cmである。北西側は、約3.0 cmほど検出面より低くなり、長さは70cm～ 105 cmである。北東側は、検出面より5.0 cmほど低くなり、長さは68cm～80cmである。南側の切れた部分の先端に１ケ所、掘方状の小ピットがみられる。

（堆積土）　２層に分かれ、円形周溝No.1の堆積土を基準にしてみると、２層と５層に類似している。２層の上面に、粉状パミスが確認された。円形周溝No.3と同様、検出面に露出しており、堆積している所と、してない所がみられる。堆積しているのは、南側ベルト付近と、北側ベルト付近の、割に巾が広く、やや深い所である。

１層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、上面に粉状パミス、土層中に炭化物、遺物を含む。粘土を若干含む。円形周溝No.1の２層に異似する。

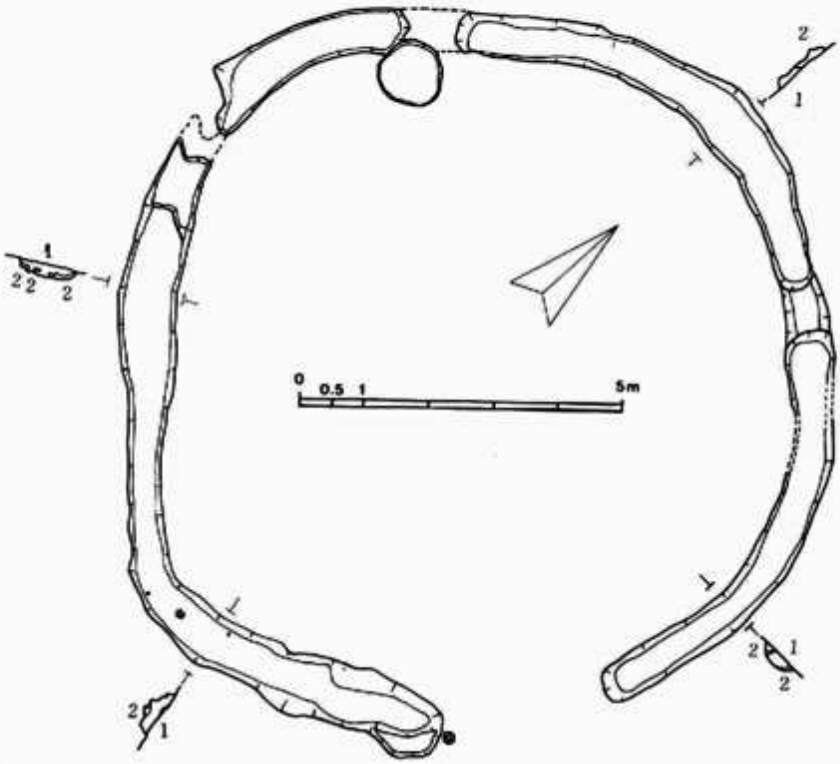
２層　10ＹＲ%黄褐色粘土層　　指圧痕つかない。粘性強い。腐植土を若干含む。地山の崩小落ちたものか、掘り上げないで残ったものと思われる。大部分ブロック状である。

（底面の状態）　３個所の浅い部分は、やや平坦であるが、地の底面は、掘り方と思われる凸凹が、かなり多くみられる。

（傾斜）　西側が浅く、東側と南東側が深くなっているが、その差は約30cmであり、北西から南東に、わずかな傾斜をもっている。

（近接した遺構）　北側約2.5 ｍには円形周溝No.2があり、北西側約1.05ｍには円形周溝No.3があり、東側約3.2 ｍには円形周溝No.6があり、西約3.0 ｍには、周溝No.5。南西約2.4 ｍには周溝No.11の１がある。

（切り合いの遺構等による新旧関係）　東側の周溝を南北に用水路が切っており、更に北へ延びて、円形周溝No.2の東端を切っている。この水路の北端が、西から東へ流れ、段丘の縁から南へ流れる用水路と合流しており、合流点の手前にコンクリート製のヒューム管が埋沈して



第７図　No.４円形周溝

いた。耕作土を除去する以前に現地形をみていなかったため、多少の不安はあったが、このヒューム管が残存していたために、用水路という事が判明した。又北西側の内周を切って、円形のピットが１基検出された。東西の直径1.0 m。南北の直径98cm、深さ15cm～18cmで、下場はほゞ平坦な、円形である。北西側の一段浅い部分の内側を切っている。

内側台状部には、遺構、遺物共、検出されなかった。

（年代決定資料）　土師器、内黒高台坏１点、内黒坏２点。須恵器、坏Ａ１点、坏Ｂ１点が、周溝の堆積土内より出土した。内黒坏１点は切離し技法は、ヘラ削り調整のため不明である。内黒坏１点と、内黒高台坏、須恵器坏Ｂは、底部が欠損して切り離し技法は不明である。須恵器Ａは、回転糸切りである。

出土遺物

土師器

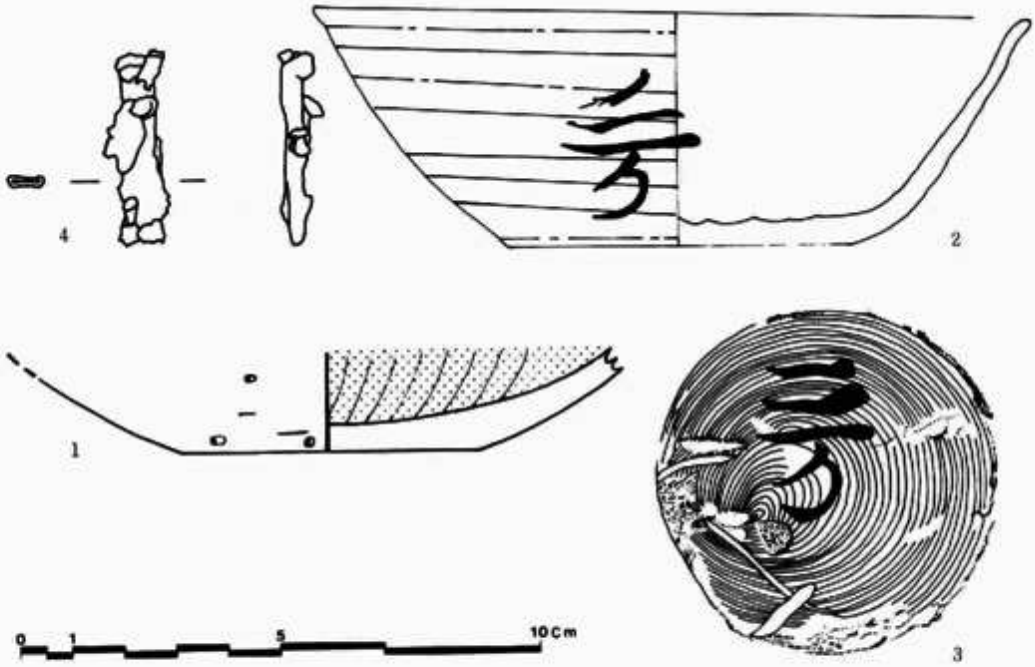
内黒坏　（８図１）２点出土のうち１点は、体部下端若干と底部約½残存で、底部径5.8 cmである。外体部下端は回転ヘラ削り調整がなされ、直線的にかなり外傾している。外底面もヘラ削り調整がなされ、切り離し技法は不明である。縁近くに黒斑がみられる。内底面は放射状に磨きが認められ、黒色処理が施されている。胎土は、やや軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良である。周溝の北側底面直上から出土した。他の１点は体部下端の小

破片で、壁面はやや丸みをもち、ロクロなでによる凸凹がみられる。内面下半は底部からの放射状磨き、上端は横みがき、内黒処理が施されている。胎土やや軟質、砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良で、1と非常に類似している。異なる点は、体壁が丸みをもち、外体面にヘラ削り調整がない点である。

内黒高台坏　体部下端⅛、高台部⅛の小破片で、内面は剥離している。高台部畳付の推定直径は約9.0 cm、高台部の高さ1.2 cm、底径は推定約7.8 cmである。体部下端は、かなり丸みをもっている。外体面の一部に煤かタール様の黒褐色付着物があり、高台部に達している。高台部はかなり内傾し（約27°）下端部が外側に張り出し、下端部はわずかに丸みをもっている。内底面は剥離しているため、磨きの方向は不明である。黒色処理は、黒色汁が浸透しているのが認められる。南側ベルト上に一部露出して検出された。

須恵器

坏A　（8図2・3）3は2の外底面である。口縁部¾、体部¾、底部全部残存である。口径13.8 cm、器高4.3 cm～4.7 cm、底径6.6 cm、外傾度38°～40°である。口縁部は、わずかに丸みをもち、口端部はやや薄く丸みがある。体壁は、下端がやや丸みをもち、上半部　直線的である。ロクロなで成形無調整、回転糸切りで、体部と外底に「二万」という墨書がある。南側ベルトより50cm西側の底面から出土した。坏Bは、口縁部小破片で、口縁部がやや外反する。胎土やや軟質で、砂粒若干を含む、色調は橙色、焼成はやや不良、北側埋土内から出土した。



第8図　No.4・No.5円形周溝出土遺物

4　円形周溝№5（Ｂｈ24）

（遺構の確認）　南北基準線より西へ 16.60 m～ 29.22 m。東西基準より、北2.58 m～14.95の地点。Ｂｈ24地区、及びその周囲に、黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（規模・平面形）　北西－南東が約 12.40 m、北東－南西が約 10.20 m、巾20cm～90cm、深さ約5.0 cm～34.0cm、北西側で平均10cm前後、南西側で平均10cm前後、北東側で10cm～30cm、南東側で15cm～35cmである。北東側で２ケ所、南西側で１ケ所、南東側で１ケ所、北北西部で１ケ所切れているが、北東側の２ケ所と、南東側は、削平によって、浅い部分が失なわれ、切れてしまったようにみえる。北東側の両端と、南東側南端には、掘方状の小ピットが多数みられる。

平面形は、北西側がわずかに丸みのある直線、北東側、南西側もわずかに丸みのある直線状で、南東側だけが弧を画いているＤ形にみえる。コーナー部２ケ所が切れているため明確ではないが、方形隅丸形とも、円形ともはっきりしない。同じ様な形に周溝№9もみえる。直線的な北西側はＮ－20°－Ｅで北北東を向いている。北西側と、北東側、南西側の交わる各コーナーの角度はほゞ90°である。南東側の北半分は円を画いているが、南半分が明確ではない。北西側と北東側の切れている部分の長さは約３ｍ。南東側の切れている部分の長さは78cm、南東部南半分の切れている部分の長さは約3.9 mである。

（堆積土）　４層に分かれており、２層以下は、１層と５層の混合の割合で、区別した。

１層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、南東側に若干の粉状パミスを上面に含む。遺物を含む。

２層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、細かい粘土粒を若干含む。

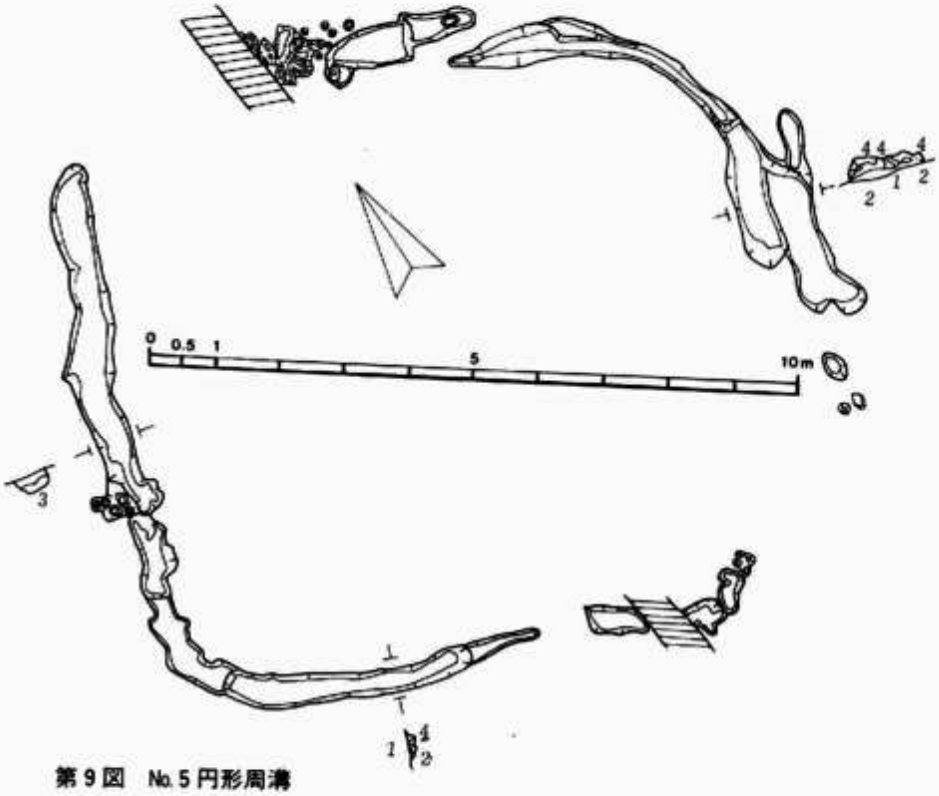
３層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性ややあり、粒状の粘土を含む。

４層　10ＹＲ5/6黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、腐植土を若干含む。

５層　10ＹＲ6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、崩れ落ちた地山塊か、掘り上げられなかった地山塊で、一部埋土中にみられ、大部分底面に付着している。

（底面の状態）　平坦な個所は少なく、凸凹の著るしい所が多い。掘る道具の先端部輪郭がはっきりみられる所は、南東部ベルト付近や、北東側である。北東側と、南東側には、両端から掘り進んできたが、直結せず、平行してしまったと思われる所がみられる。又北東端の両端と、南東側の南端は、掘り方状の小ピットのみ残存している。

（傾斜）　底面のレベルを測定すると、南西側が浅く、次いで北西側、次に北東側、１番深いのは南東側の内側の溝で、南西側と、南東側の内側の差は30cmである。しかし、北西側と南東側の間には数ケ所の浅い所と、３ケ所が切れているため、故意に傾斜をつけたとは断定はで



第９図　No.５円形周溝

きない。しかし差はそれほどではないが、最深部が南東側にあるのは、一般的な傾向のようにみうけられる。

（内側台状部）　この周溝に伴なうと思われる遺構、遺物は検出されなかった。

（近接した遺構）　北側に、周溝No.３があり、その間は1.70ｍである。東側には、周溝No.４があり、その間は約3.0 ｍである。北西側には、周溝No.９があり、その間1.75ｍである。南東側には、周溝No.11の１と２があり、その間は3.0 ｍと4.4 ｍである。No.11の３との間は、約9.4ｍである。

（切り合いの遺構等による新旧関係）　円形周溝No.３の西端を切っている用水路が、この周溝の中央部を南北に切っている。

（年代決定資料）　須恵器坏Ａ２点と、釘様の鉄製品が１点出土した。

出土遺物

須恵器

坏Ａ　２点出土したが、どちらも小破片で、計測は不能である。１つは、口縁部⅛以下、体部⅛残存である。口縁部は外面が剥離しているため明確ではないが、ほとんど直線的である。体部も、外面の大部分が剥離していて明確ではない。胎土は硬質で砂粒を若干含む、色調は灰色で、胎部がにぶい橙色である。焼成は良好で、南東側内側の溝１層から出土した。他の１点

は、口縁部のみの破片1/8以下残存で、全容、成形抜法、は不明である。計測も不能である。胎土はやや硬質、砂粒を若干含む。色調は褐灰色、焼成はやや良好である。

釘状鉄製品（8図4）円形周溝No.1とNo.3の鉄製品の断面は方形であるが、周溝No.5から出土した鉄製品の断面は板状である。上半部のみ残存し、下半部と先端部は欠損している。長さ3.8 cm、巾0.8 cm、厚さ0.2 cmで、切断面は中空のようである。頭部は屈曲し、縦0.6 cm、横0.8 cm、厚さ約0.5 cmである。南東側の外側の溝1層、粉状パミスの下から出土した。

他に炭化材片2点が鉄製品と共伴で出土した。

5　円形周溝No.6（Bj56）

（遺構の確認）　南北基準線より東へ0.78m～13.09 m。東西基準線より南へ4.06m～北へ8.33mの地点。Bj56地区、及びその周囲に黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、耕作土下の明黄褐色粘土層である。

（規模・平面形）　外周の直径13.50 m～14.0m。巾約0.50m～1.27m。深さ15cm～34cmのほゞ円形である。切れている個所は、北側6.60m。西側6.20m。南側2個所0.35mと2.25m。南東側2.65mの5個所である。残存部は、北西側が長さ約3.65m、巾36cm～80cm、深さ7.0 cm～24cmで、やや弧を画いている。南側の2ケ所は、西寄りが長さ約2.4 m。巾約50cm～126 cm。深さ17cm～30cmで、弧を画いている。東寄りは長さ1.80m。巾40cm～80cm。深さ4 cm～22cmで、中央が凹んでいるが、楕円形である。南東側は長さ2.75m、巾61cm～115 cm。深さ14cm～24cmのほゞ長方形である。東側は長さ9.75m。巾約48cm～132 cm。深さ10cm～30cmで、かなり長く、弧を画いているが、やや北寄りが凹んだように細くなり、北側がやや張り出している。北端は溝が2条に分かれた形になり、かなり巾が広くなるが、切れてしまっている。張出し状の所が東側外周にみられるが、角がみられない。

（堆積土）　3層に分かれ、2層は、円形周溝No.1の堆積土4層と類似し、3層は同じ周溝の堆積土6層に類似する。

1F　10YR2/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、上面に粉状パミスが堆積している個所が東側にみられる。

2F　5YR3/1黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性あり、粘土との混合層。

3F　10YR6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、地山の崩れ落ちたものか、掘上げず、底面に残存したもの。

（底面の状態）　平坦な個所はほとんどなく、大部分の底面に凸凹の著るしい所がみられる。掘り上げる道具の先端輪郭が、はっきり残っている状態の所が多い。底面をきれいに、平坦に削るのではなく、直角又は斜めに掘り込んだままの状態である。東側の周溝は、5個所を同時に掘り進み、連結した様な状態にみえる。

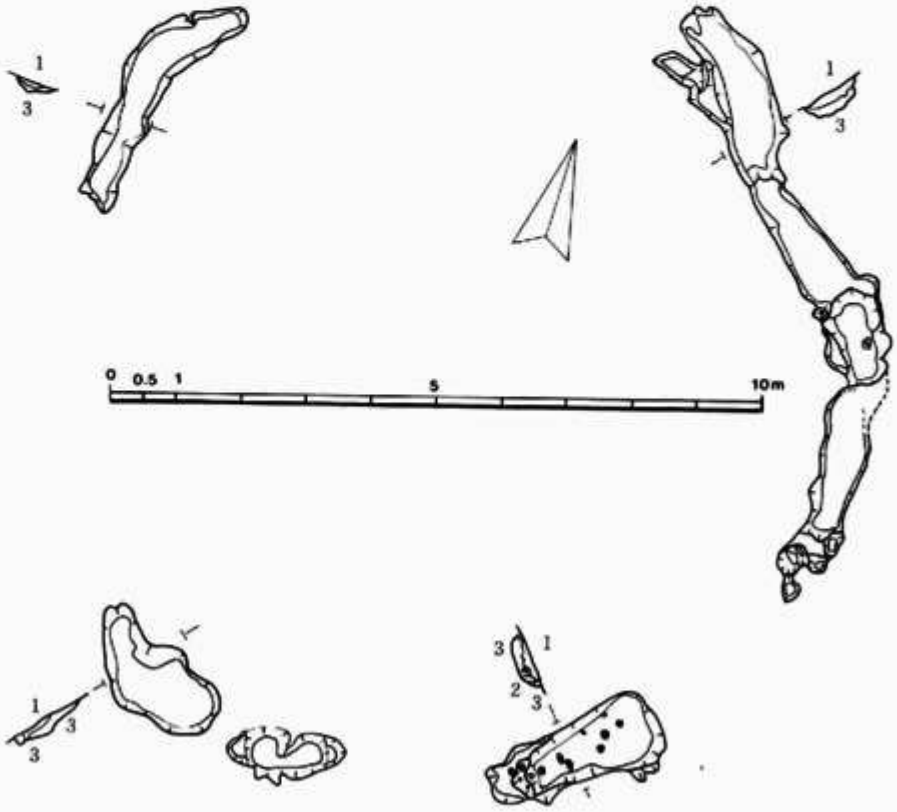
（傾斜）　5個所の残存した周溝のレベルは、いずれも同程度で、はっきりとした傾斜は認め難い。深さの差は約25cmである。尚検出面のレベルは北西側の円形周溝No.1やNo.3付近よりも、約20～30cmほど低くなっている。

（内側台状部）　遺構、遺物は検出されなかった。

（近接した遺構）　西側に円形周溝No.4があり、その間は3.4 mである。北側には円形周溝No.7があり、その間は6.65mである。北西側には、円形周溝の残存と思われるNo.2があり、その間は、3.6 mである。北東側には、方形周溝No.10があり、その間は約17m。北東側には溝状土壙No.3があり、その間は11.30 mである。東側には、溝状土壙No.4があり、その間は約2.5 mである。南西側約19mには、周溝No.11の2と3がある。

（切り合いの遺構等による新旧関係）　なし

（年代決定資料）　1点の遺物も出土しなかった。



第10図　No.6円形周溝

6　円形周溝№7（Ｂｄ65）

（遺構の確認）　南北基準線より東へ7.70ｍ～23.10 ｍ。東西基準線より北へ14.00 ｍ～28.72 ｍの地点。Ｂｄ65地区、及びその周囲に、黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は明黄褐色粘土層である。

（規模・平面形）　外周の直径約14.50 ｍ～15.50 ｍ。巾0.52ｍ～1.52ｍ。深さ約10～40cmの、ほぼ同形である。北北西側と、西南西側、それに南側の部分が、やや強く屈曲しているため、方形隅丸形にもみえる。周囲の周溝の中で一番規模が大きい。

周溝の中心からみて、西北西側と、西南西側、及び南東側が切れている。西北西側の切れた長さは2.15ｍ。西南西側の切れた長さは3.45ｍである。南東側は、高圧電線の柱があった所で、深く攪乱されて、東側と周溝南端が破壊されているため、切れた長さは不明である。

西側周溝は、南北が切れているため長さは短く1.65ｍで、南側に掘り方状の小ピットが十数個あり、大部削されて、短くなってしまったと思われる。又北側と、南側の内周に、張り出し部と思われる所が、各1個所みられる。又北側周溝の東端部と、南側周溝の東端部は、かなり巾が広くなっている。

（堆積土）　3層に分かれ、1層は円形周溝№1の第1層、2層は同第5層、3層は同第6層と異似している。

1層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく。粘性なし、所により粉状パミスを上面に含む、又所により遺物を含む。

2層　10ＹＲ5/6黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、ブロック状で、1層の腐植土を若干含む。

3層　10ＹＲ6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、崩れ落ちた地山塊か、堀り上げられないでしまった地山塊と思われ、溝の底面に多くみられる。

（底面の状態）平坦な個所は少なく、浅い部分にだけみられる。大部分は凸凹著るしく、整地された痕跡は認められない。又南側周溝の西端部底面には、赤色の石粉と思われる堆積物が、長さ約1.80ｍ、巾20cm～40cm。厚さ2～3cmにわたってみられた。

（傾斜）北西側がやや浅く、北側東端部と、南側東端部がやや深い。その差は約10cmで、南東側に斜傾しているとは、断定出来るほどではない。

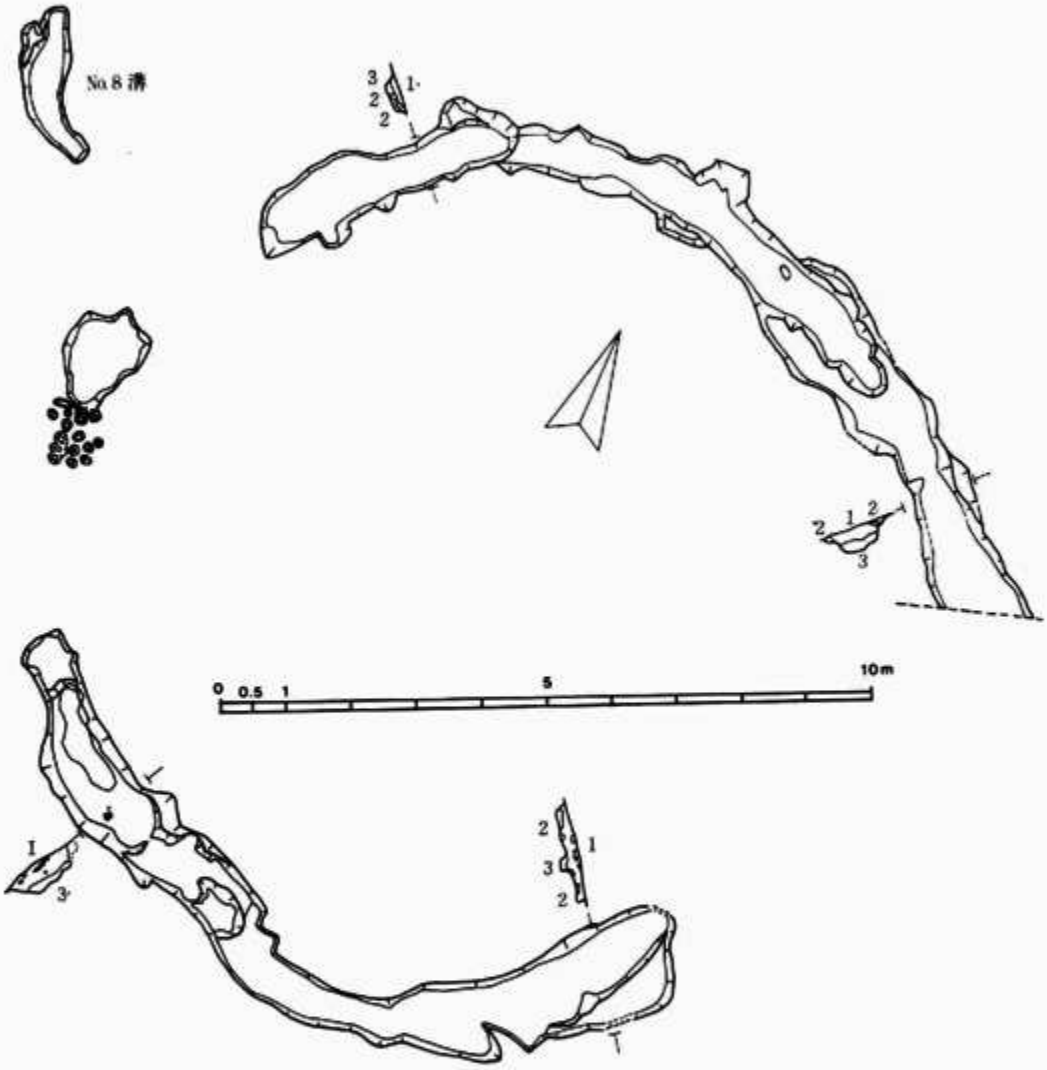
（内側台状部）中央南東寄りに、溝状土壙が一基検出されたが、溝状土壙は、他に3基周溝外に検出されており、円形周溝№8に伴う遺構とは考えられない。他には何も検出されない。

（近接した遺構）南側に円形周溝№6、西側に円形周溝№1・2。東側に溝状土壙№2・3があるが、それほど近接してはいない。

（切り合いの遺構による新旧関係）周溝の東側を南北に用水路と思われる溝が走っている。

円形周溝№2・3の東側を通る用水路から、東へ約15mの地点である。

（年代決定資料）土師器、内黒坏2点、須恵器坏。A類2点、B類6点である。須恵器坏A1点と、坏B3点は、回転糸切りである。他の坏類は底部が欠損しており、切り離し抜法は不明である。



第11図　№7円形周溝、左上は№8溝

出土遺物

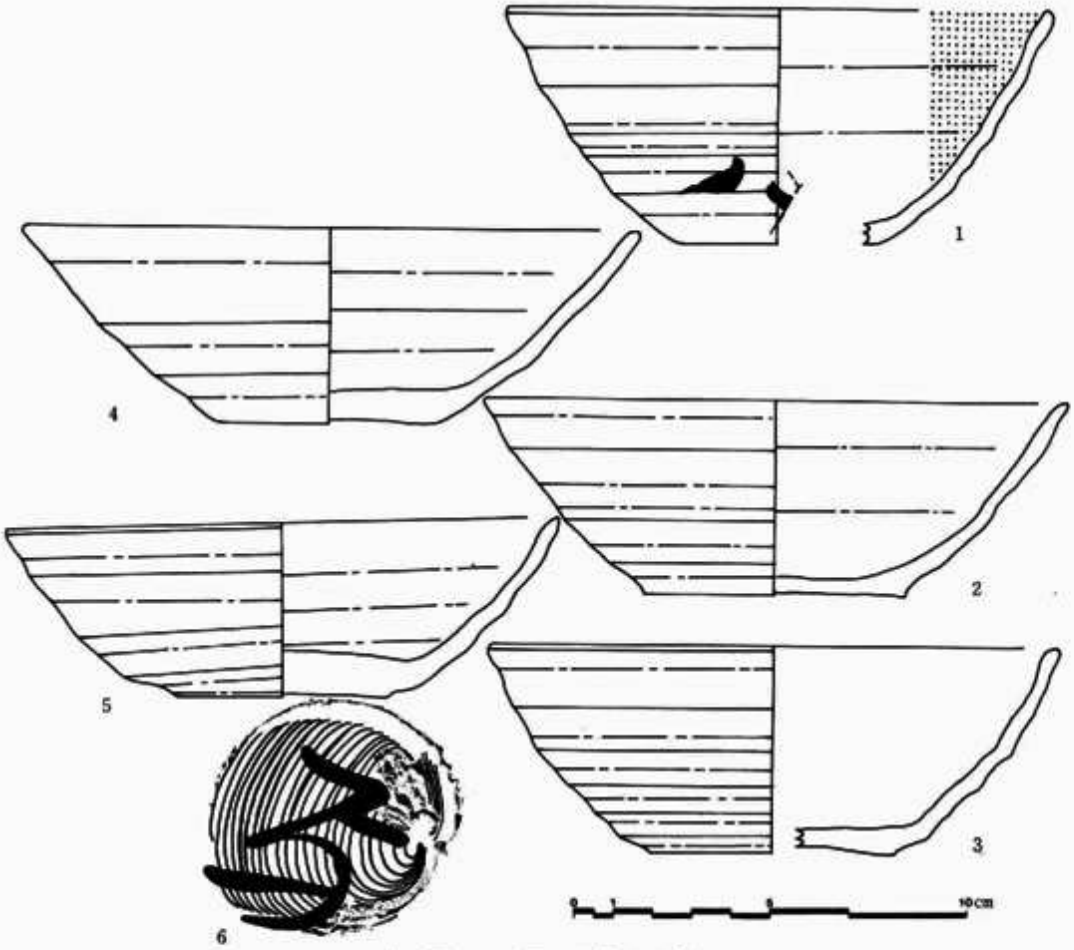
土師器

内黒坏（12図1）口縁部⅙、体部⅙残存である。推定口径14.0cm、器高約5.0cm、底径約5.0cmである、口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ。体壁はかなり丸みをもち外傾する椀形である。ロクロなで、成形による凸凹が若干みられる。回転ヘラ削り調整痕は認められない。口端部外面に、磨きと黒色処理が認められる。内面は横磨き、黒色処理である。底部は欠損し、体下半部も若干しか残存しないため明確ではないが、内底面は放射状の磨きと、黒色処理と思われ

る。外体面に墨書が認められ「八」と判読出来る。胎土はやや軟質、砂粒を若干含む。色調は浅黄橙色、焼成はやや不良で、周溝の北端やや西寄りの埋土1層より出土した。もう1点は、体下半部の小破片で、外面ロクロなで成形で、調整は認められない。内面は横磨き、黒色処理である。外体面上端に、墨書が認められるが、縦の線1画のみで、字体は不明である。胎土は軟質、色調は橙色、焼成はやや不良で、南側周溝東端部ベルト付近工層出土である。

須恵器

坏A（12図2）口縁部¼、体部¼、底部½残存で、口径約14.8cm、器高5.0 cm、底径5.0 cmである。口縁部はわずかに外反し、口端は丸みをもつ。体壁はやや丸みをもち、39.0°外傾する。ロクロなで成形無調整回転糸切りである。胎土硬質砂粒若干を含む。色調は灰色、焼成良好で、周溝の南西側ベルト付近1層出土である。他の1点は、口縁部体上半部⅛以下残存で、口縁部は、やや外反し、ロクロなでによる凸凹が体壁にみられる。胎土硬質、色調褐灰色、焼成良好で、南側周溝東端ベルト付近1層出土で、内黒坏小破片と同一個所である。



第12図　No.7円形周溝出土遺物

坏B（12図3～5） 3は、口縁部¼、体部¼、底部⅓残存である。推定口径約14.6㎝、器高約5.3㎝、底径62㎝、外傾度は38.0°である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ。体壁は、かなり丸みをもち、外傾する。ロクロなでによる凸凹が著るしい。ロクロなで成形、無調整で、外底面は粗い回転糸切り痕が認められる。胎土は軟質、砂粒を若干含む、色調は灰白色に近い浅黄橙色、焼成は不良で、周溝南西側ベルト、1層より出土した。12図4は、口縁部⅙、体部⅓、底部全部残存である。推定口径約46.0㎝、器高約5.0㎝、底径5.6㎝、外傾度46.0°である。口縁部は直線的で、口縁部は体壁よりやや薄くなり丸みをもつ。体壁は、やや丸みをもち、かなり外傾している。ロクロなで成形無調整で、わずかに凸凹がみられる。成形後、外体面下端に刷毛目状の痕跡が、一部みられる。外底面は、粗い回転糸切り痕がみられ、切り離し後に付いたと思われる刷毛目状の痕跡と、ヘラ状の器具による傷が付けられている。胎土はやや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良で、体部上半と、下半、底部外縁の一部、及び内面上半の1部に煤様の付着物が認められる。周溝南端やや東寄りのベルト付近1層より出土した。12図5は、口縁部⅔、体部⅔、底部全部残存で、口径14.2㎝、器高4.3～4.6㎝、底径5.4㎝である。口縁部は直線的で、やや内彎ぎみである。体壁はかなり丸みをもち、かなり外傾している。外傾度は43.0°～45.5°である。外体面にロクロなでによる凸凹がかなりみられる。外底面には、回転糸切り痕がみられる。底部は他に坏に比べ、胎部が厚く、中心部で1.1㎝、周縁部で1.1㎝である。ロクロなで成形、無調整であるが、内面は大部分磨滅している。外底面に墨書が認められる。「与」と書かれており、第12図6で、何と判読するか不明である。胎土は軟質、砂粒をかなり含む。色調は橙色、焼成は不良で、12図4と同じ地点、周溝南端やや東寄りのベルト付近1層より出土した。他に2点出土しているが、小破片である。

1点は、口縁部小破片2片、体部小破片4片で、6片とも同地点、同じレベルから出土しており、口縁部の形や、胎土、色調、焼成が類似しており、同一個体と思われる。口縁部は、口端から0.9㎝下の所で、わずかに外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はやや丸みをもって、かなり外傾している。ロクロなで成形無調整である。切り離し技法は、底部が欠損しているため不明である。胎土は軟質、砂粒をかなり含む。焼成は不良で、南西側ベルト付近1層内から出土した。もう1点は、口縁部小破片2片、体部小破片2片で、4片とも同一地点、同レベルから出土しており、口縁部の形や、胎土、色調、焼成等が類似しており、同一個体と思われる。口縁部は、口端部から0.7㎝の所で、かなり外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はやや丸みをもち、かなり外傾する。胎土はやや軟質、砂粒を若干含む。色調は橙色、焼成はやや不良で、周溝の南側やや東寄りのベルト付近1層から出土した。もう1点は、口縁部小破片1片、体部小破片4片で、5片とも同一地点、ほゞ同じレベルから出土しており、胎土、色調、焼成等が類似し、同一個体と思われるもので、口縁部はやや内彎ぎみ、体部はやや丸みをもち、胎土はやや軟質、色調

はにぶい橙色、焼成はやや不良で、周溝南側やや東寄りのベルト付近から出土した。

以上をまとめると、周溝の北側から、土師器内黒坏2点、南側東寄りのベルト付近からは、須恵器坏A類1点、B類3点。南西側ベルト付近からは、須恵器坏A類1点、B類3点が出土した事になる。

7　円形周溝No.9（Bd30）

（遺構の確認）南北基準線より西へ 24.86 m 34.06 m。東西基準線より北へ 14.16 m～24.54 mの地点、Bd30地区及びその周囲に、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、耕作土下の黄褐粘土層である。

（規模・平面形）外周の直径は9.00m～9.30m。巾35.0cm～75.0cm、深さ約2.0 cm～20.0cmで、平面形は、東側と南東側が、かなり長く切れているので不明であるが、北西側が周溝No.5と類似した形状をしている。北西側が、ほゞ直線的で、方向がN－25°－Eで、周溝No.5と大差は無い。北側は、E－23°－S。南側はE－26°－Sで、ほゞ平行し、その間は約8.5 mである。北西側が3個所。北側と南側がそれぞれ1個所切れている。東側は大きく切れ、その間は直線距離で約6.50mある。北西側の切れた部分は、北から17.0cm、15.0 cm、10.0cmと短く、削平されたために切れた可能性がある。北側は約50.0cmほど切れている。南側は西端のコーナー部が60.0cmほど切れ、その東側に掘り方状の小ピットが約1.60mほど並び、又2.40mほど切れる。東側はかなり北へ曲っており、東端から1.60mほどの所が、コーナ部と思われる。北西部は、北端コーナから南へ1.10mの所で切れ、その南西側残存部の長さは、約45cm、その南西側残存部の長さは1.66m、次の南西側残存部の長さは約4.0 mである。北側の溝は西側の長さが、約2.9 m、東側の長さが、約1.9 mである。南側の溝は東側コーナまで、約3.2 m。東側の溝は、南端約1.60mが、南側コーナに接続している。

（堆積土）6層に細分したが、基本的には2層で、黒褐色腐植土と明黄褐色粘土層である。他の層は、2つの層の混合の割合いで区分した。

1層　10YR 3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性ほとんどなし、細かい粘土粒を若干含む個所がある。遺物を含む。円形周溝No.1の堆積土2層と類似する。

2層　10YR 3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性ややあり、粘土がブロック、又は粒状に混入している。円形周溝No.1の堆積土3層と類似する。

3層　5YR 3/1黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性あり、粘土との混合層、円形周溝No.1の堆積土4層と類似する。

4層　10YR 5/6黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、腐植土を若干含む個所がみられた。円形周溝No.1の堆積土5層と類似する。

5層　10YR 6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、崩れ落ちた地山か、堀り上

げられなかった地山と思われる。円形周溝№1の堆積土6層と類似する。

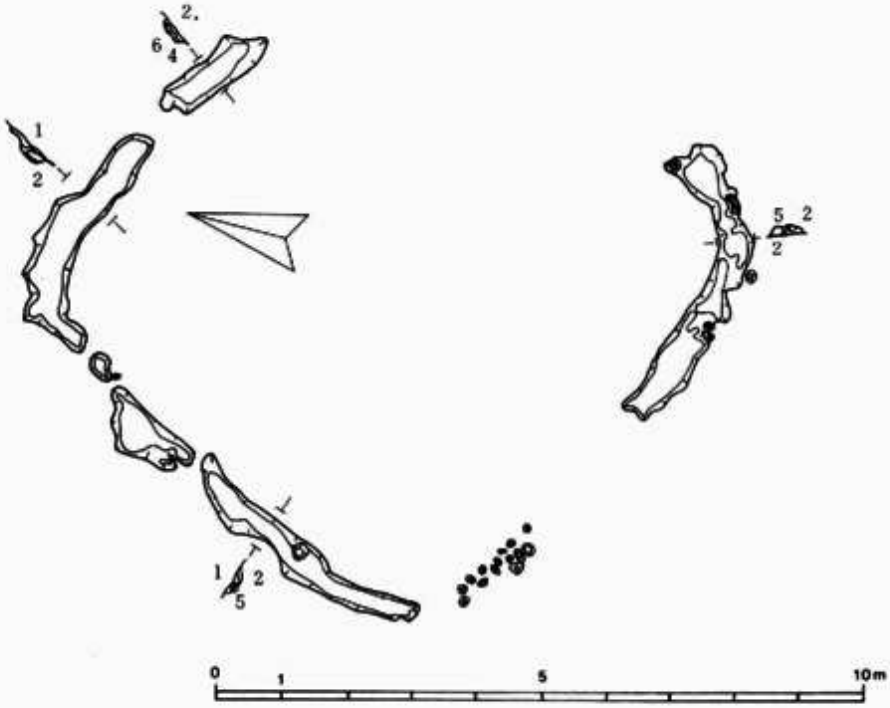
6層　10YR6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、5層と同じ地山と思われるが、白色の砂が混入している。

（底面の状態）平坦な個所は、ほとんど無く、凸凹の著るしい個所が大部分で、掘り方状の小ピットが多くみられる。南東部コーナー付近は、底面の輪郭が非常に複雑な出入がみられる。又、円形周溝№1、№3ほど顕著ではないが、北側西端部外側と、南側東端部外側に張り出し様の部分が、上場だけでなく下場にもみえる。

（傾斜）東部と南東部が切れているため、明確ではないが、どの部分の周溝の底面も、ほゞ同じレベルである。浅い部分は北西側ほゞ中央で、深い所は北側と南東部南端で、その差は約17cmである。

（内側台状部）特に何も検出されなかった。

（近接した遺構）南東側には、周溝№5があり、外周との間隔は1.75mである。東側には円形周溝№3があり、外周との間隔は約5.0mである。又北側には、ピット№2があり、外縁との間隔は2.5mである。



第13図　№9円形周溝

（切り合いの遺構等による新旧関係）なし

（年代決定資料）須恵器　壺の破片２点、小型の壺破片２点が出土した。壺の破片１点以外は小破片のため、全容は不明である。

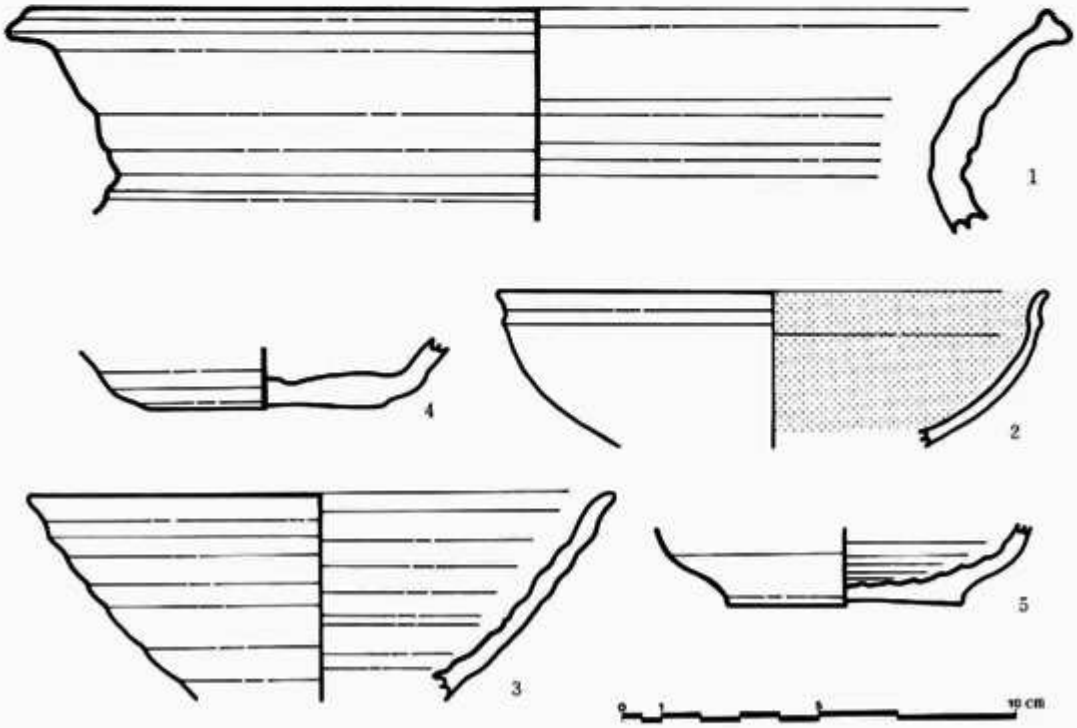
出土遺物

須恵器

壺（**14図１**）口縁部⅛残存である。推定口径約27.0㎝、口縁部の高さ 4.3 ㎝、頸部径は推定約 21.50 ㎝である。広口と思われる壺の口縁部で、かなり外反し、口端は上に挽き出され、外面も外側にかなり挽き出されている。頸部から肩部にかけて、灰釉をかなり厚く被っている。

口縁部内面も灰釉を被ったらしい痕跡がかなりみられる。胎土硬質、砂粒を若干含む。色調は灰色で、胎部は灰赤色、焼成は良好で、北側周溝の西側ベルト付近１層出土である。他の１点は体部の小破片で、内外両面に叩き目が認められる。外面は直線状、内面は放射状の叩き目痕である。外面に若干灰釉が付着する。胎土硬質、色調は灰色、焼成は良好で、１と同じ地点１層出土である。小型の壺は、体部の小破片で、器壁の厚さが0.5 ㎝～0.4 ㎝で、横の彎曲が、やや強い。長頸になるのか、広口になるかは不明で、いずれも内外面横なでである。

（**14図２～５**）は、表採遺物で、**２**は内黒坏、**３**は坏Ａ、**４**、**５**は坏Ｂである。



第14図　No.9 円形周溝出土遺物

8　方形周溝　№10　（Ｂｆ80）

（遺構の確認）南北基準線より東へ27.36ｍ～約34.10ｍ。東西基準線より北へ9.01ｍ～15.52ｍの地点、Ｂｆ80地区、及びその周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認した。遺構確認面は、黄褐色粘土層である。この地点は北西－南東に延びる段丘崖の上端で、東面する段丘の縁よりやや下の傾斜した部分を平担に整地してつくられたと思われる。

（規模、平面形）東西4.30ｍ～5.50ｍ、南北4.40ｍ～5.70ｍで、各辺が東西南北を向く、東側の南北方向を向く溝と、南側東西方向を向く溝が長く、北側東西方向を向く溝と、西側南北方向を向く溝が短いため、四辺形である。各長さは、北側溝は、上場外側が推定約4.30ｍ、上場内側が3.15ｍ、下場外側が4.00ｍ、下場内側が3.30ｍ、上場の巾約62～75㎝。下場の巾40～50㎝。深さは検出面から約17㎝。西側溝は、上場外側が4.40ｍ、上場内側が3.40ｍ。下場外側が4.20ｍ、下場内側が3.50ｍ、上場の巾60～70㎝、下場の巾30～52㎝、深さ約18㎝。南側溝は、上場外側が5.40ｍ、上場内側が3.80ｍ、下場外側が5.20ｍ、下場内側が4.10ｍ、上場の巾70～82㎝、下場の巾40～60㎝、深さ約20㎝。東側溝は、上場外側が推定約5.70ｍ、上場内側が4.20ｍ。下場外側が5.40ｍ、下場内側が4.40ｍ、上場の巾52～67㎝、下場の巾30～43㎝、深さ26～31㎝である。

（堆積土）２層に分れ、２層共北東側に、一部切り合っている摺鉢形ピットの埋土と続いており、同質の土層と思われる。

１層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。

２層　10ＹＲ7/4にぶい黄橙色粘土層　指圧痕ややつく、粘性あり、腐植土が若干浸透。

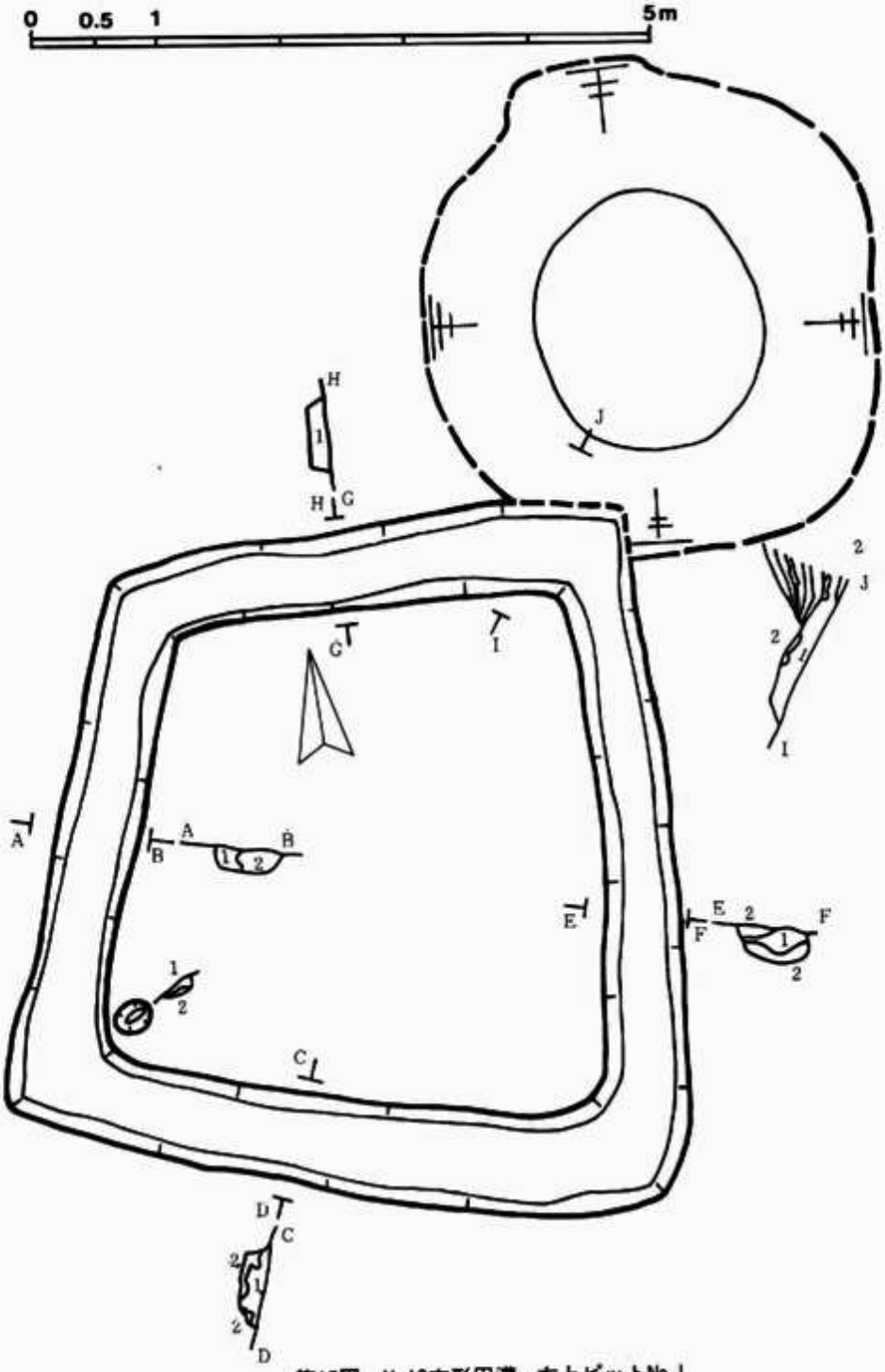
（底面の状態）ほぼ全面が平担である。

（傾斜）西側溝の底面が浅く、東側溝の南寄りが深くなり、その差は約20㎝である。南側溝と、北側溝の底面は、ほぼ同じ深さの所が大部分である。従って東側にやや傾斜していると、いえる。内側の台状部も、西側より東側が約10㎝ほど低くなっている。

（内側台状部）南西隅に、南北約24㎝、東西34㎝、深さ約６～12㎝の、随円形の浅いピットが検出された。堆積土の状態は、溝の堆積土と同じ、上下層に分れ、上層が１層、下層が２層と類似したもので、人為的な可能性もあるが、これ１つだけで、他に検出されないため、柱穴かどうか不明である。

（近接した遺構）北東側の摺鉢型ピットとは、両遺構の端が約30㎝ほど切り合っている。西側約3.4ｍ～5.0ｍには、溝状土壙№２。南西2.5ｍ～5.8ｍには、溝状土壙№３がある。

（切り合いの遺構等による新旧関係）北東側の摺鉢型ピットとの切り合いの状態は、セクション図をみると、方形周溝がつくられた時は、既にピットは存在しており、切り合いの部分は、溝の底面はあるが、上場外側が確認されず、溝の埋土とピット内埋土と続いている。



第15図　No.10方形円溝、右上ピットNo.1

（年代決定資料）出土遺物は皆無である。

9　円形周溝の残存部と思われる溝

(1)周溝　№2（Ｂｅ03）

（遺構の確認）南北基準線から東へ0.34ｍ～西へ5.88ｍ、東西基準線から北へ11.21ｍ～19.20ｍの地点、Ｂｅ03地区、及びその周囲に、黒色及び、黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、黄褐色粘土層である。

（規模、平面形）北西から南東へ弓形に延び、南西方向に張り出した形で、中央が切れている。北西端から南東端まで、直線で約9.50ｍぜある。北西側の溝は、長さ約4.75ｍ、巾46～70㎝、深さは検出面から約３㎝～18㎝。南東側は、長さ約4.10ｍ、巾20～60㎝、深さ５～18㎝で、切れている部分の長さは 1.9ｍである。中央が南西に張り出しているため、溝の中心部は北東方向にあると思われるが、他に残存する遺構は確認されなかった。

（堆積土）４層に分れ、円形周溝№1の堆積土１・２・４・５層と類似する。

１層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし、上面に粉状パミスを含む。

２層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、細かい粘土を若干含む。

３層　５ＹＲ3/1黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性あり、粘土との混合層

４層　10ＹＲ5/6黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、腐植土を若干含む。

（底面の状態）掘り方状の凹凸が著るしい。

（内側台状部）特に何も検出されなかった。・

（近接した遺構）西側約 1.5ｍには、円形周溝№3。南側約 2.5ｍには、円形周溝№4。北西側3.45ｍには、円形周溝№1。南東約 3.6ｍには、円形周溝№6。北東約10ｍには、円形周溝№7がある。これらの円形周溝に囲まれた形をしている。

（切り合いの遺構等による新旧関係）なし

（年代決定資料）堆積土からの出土遺物はなかった。

(2)周溝　№8（Ｂａ56）

（遺構の確認）南北基準線から東へ6.74ｍ～7.92ｍ、東西基準線より北へ27.16ｍ～29.48ｍの地点、Ｂａ56地区及びその周囲から黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は黄褐色粘土層である。

（規模、平面形）長さ 2.5ｍ、巾25～78㎝。深さ４～18㎝である。西南西にやや張り出した形とし、北端は２つに分れている。

（堆積土）２層に分れ、１層は、円形周溝№1の１層、２層は６層に類似する。

１層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし、上面に粉状パミスを含む。

２層　10ＹＲ6/8明黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性強い、地山塊で下に１層が浸透

（底面の状態）掘り方状の凸凹が、底面の大部分にみられる。

（傾斜）ほとんど認められない。

（内側台状部）東側約4ｍには、円形周溝№7の北西側があり、円形周溝№8の推定する輪郭に入ってしまう。又西側約7ｍには円形周溝№1があって、推定する輪郭内に入ってしまうため明確ではない。

（切り合いの遺構等による新旧関係）なし

（年代決定資料）堆積土内からは、遺物の出土は無かった。

(3)周溝　№11

○周溝№11の1（Ｂｊ15）

（遺構の確認）南北基準線より西へ33.08ｍ～35.97ｍ。東西基準線より南へ0.70ｍ～北へ2.30ｍの地点、Ｂｊ15地区及びその周囲に黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（規模、平面形）長さ3.96ｍ。巾41～60cm、深さ2.0～22.0cmである。ほぼ直線的に北西―南東方向に延びており、北西側と南東側に分れる。北西側は、やや深く、北へわずかに張り出し、南東側は、やや浅く、北へわずかに張り出している。

（堆積土）2層に大別され、円形周溝№1の堆積№1の堆積土1層と5層に類似する。

1層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし

2層　10ＹＲ5/6黄褐色粘土層、指圧痕つかない、粘性強い、腐植土を若干含む。

（底面の状態）掘り方状の凸凹が、底面全体にみられる。

（傾斜）北西部が、南東部より深いが、傾斜は認められない。北西部、南東側共に、両端が浅く、中央部が深い。

（近接した遺構）北側約2.3ｍに、円形周溝№4、西側約2.6ｍに周溝№5。南西約5.3ｍに周溝№11の2がある。№11の2との関係は不明である。

（切り合いの遺構等による新旧関係）なし

（出土遺物）堆積土内からは、遺物は出土しなかった。

○周溝№11の2（Ｃａ21）

（遺構の確認）南北基準線より西へ12.30ｍ～20.90ｍ。東西基準線より南へ1.21ｍ～4.78ｍの地点、Ｃａ21地区、及びその周囲から、黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、明黄褐色粘土層である。

（規模、平面形）長さ4.80ｍ。巾36～58cm。深さ10～25cmで、ほぼ直線の溝状である。ほぼ西北西―東南東を向く。西北西側がやや細く、東南東側がやや太くなる。

（堆積土）3層に分れ、円形周溝№1の堆積土1層、4層、5層に類似する。

1層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし。

2層　5ＹＲ3/1黒褐色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性あり、粘土との混合層。

3層　10ＹＲ5/6黄褐色粘土層、指圧痕つかない、粘性強い、腐植土を若干含む。

（底面の状態）掘り方状の凸凹が、底面全体にみられる。

（傾斜）西北西端が浅く、徐々に深くなり、中央東南東寄りが一番深く、差は17㎝である。東南東端は浅くなる。

（近接した遺構）北北東側5.3ｍに、周溝№11の1があり、ほぼ平行している。南側には、周溝№11の3の北端部があり、間隔は約87.0㎝である。№11の3との関係は不明である。

（切り合いの遺構等による新旧関係）なし

（年代決定資料）堆積土内から遺物は出土しなかった。

○周溝№11の3（Ｃｃ18）

（遺構の確認）南北基準線より西へ16.90m～18.70m、東西基準線より南へ5.65m～8.22ｍの地点、Ｃｃ18地区、及びその周囲に、黒色及び黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は明黄褐色粘土層である。

（規模、平面形）長さ約4.0ｍ。巾12～66㎝。深さ8～40㎝で、北半分は細長い溝状。南半分はやや長方形の溝状で、くの字形に屈曲している。屈曲部は東へ張り出す。南半部に柱穴状のピットが両端にみられる。

（堆積土）2層に分れるが、ブロック状に地山が混入している。

1層　10ＹＲ2/2黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし、上面に粉状パミスを含む。遺物を若干含む。

2層　5ＹＲ3/1黒褐色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性あり、粘土との混合層。

3層　10ＹＲ6/8明黄褐色粘土層、指圧痕つかない、粘性強い、ブロック状で2層に混入。

（底面の状態）掘り方状の凸凹がみられ、南側の両端に柱穴状ピットがある。

（傾斜）特に認められない。

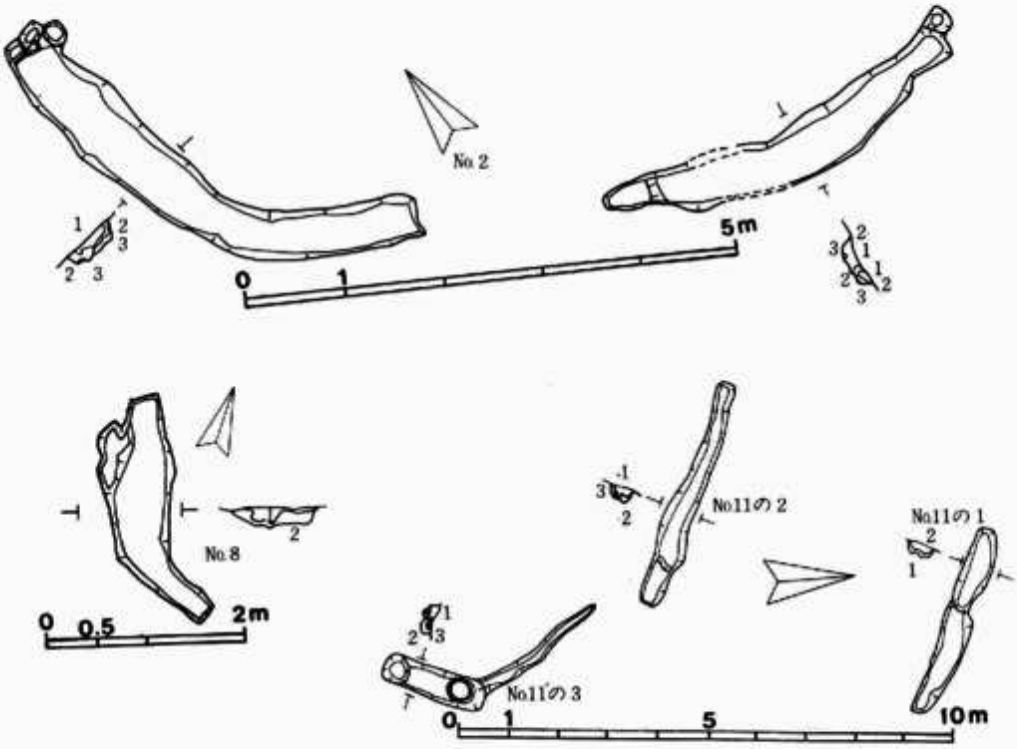
（近接した遺構）北側約87㎝に周溝№11の2がある。両者が同一周溝かどうかは不明である。

（切り合いの遺構等による新旧関係）なし

（年代決定資料）土師器、内黒坏Ａ4点。須恵器、壺1点、坏Ａ4点＋3片、坏Ｂ2点＋15片が出土した。須恵器坏ＡとＢに底部破片が1片ずつあり、両者共回転糸切りである。

出土遺物

何れも小破片で全容は不明である。みな1層から出土した。



第16図　円形周溝の残存と思われる溝

10　溝状土壙

(1)溝状土壙　No.1（Bd 65）

（遺構の確認）南北基準線より東へ14.53m～17.30m。東西基準線より北18.08m～18.82mの地点、Bd 65地区、及びその周囲に、黒色の落ち込みを確認した。方形周溝No.7の中心よりやや南東寄りである。遺構確認面はにぶい黄橙色粘土層である。

（規模、方向）上場長軸2.82m。上場短軸0.16m。下場長軸2.92m、下場短軸0.09m。深さ0.65mで、方向はE－7°－N。ほぼ東西方向を向く。

（下場の形態）両端共に、上場長軸より長く、抉った状態で、西端は丸みをもち、東端はやや膨らみ、北側に角がみられる。

（堆積土）2層に分れるが、地山も2層に別れ、上層は検出面より約40cmまでで、10YR6/4にぶい黄褐色粘土層、下層は7.5YR6/8橙色粘土層で、両者共指圧痕つかず、粘性強い。

1層　10YR1.7/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。

2層　10YR1.7/1黒色腐植土層と、7.5YR6/8橙色粘土層の混合。

（断面）細いU字形である。

（底面の状態）ほぼ平担で、東端がやや浅くなり、その差は約5cmである。

（近接した遺構）円形周溝No.7の内側台状部中央やや南東寄りにある。

(2)溝状土壙　No.2（Be75）

（遺構の確認）南北基準線より東へ24.06m～26.69m。東西基準線より北へ16.34m～16.98mの地点、Be75地区及びその周囲に黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は褐色粘土層である。

（規模、方向）上場長軸2.66m。上場長軸0.15m。下場短軸2.50m。下場短軸0.07m。深さ0.45mで、方向はE－30°－N。ほぼ東北東－西南西を向く。

（下場の形態）両端共、上場長軸より短い細長く、両端共丸みをもつ。

（堆積土）　1層　7.5YR 2/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。

2層　10YR 4/3にぶい黄褐色粘土層　指圧痕ややつく、粘性あり。

3層　7.5YR1.7/1黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。

4層　10YR 2/2黒褐色腐植土層　指圧痕つかない、粘性なし。

5層　10YR 5/8黄褐色粘土層　指圧痕つかない、粘性あり。

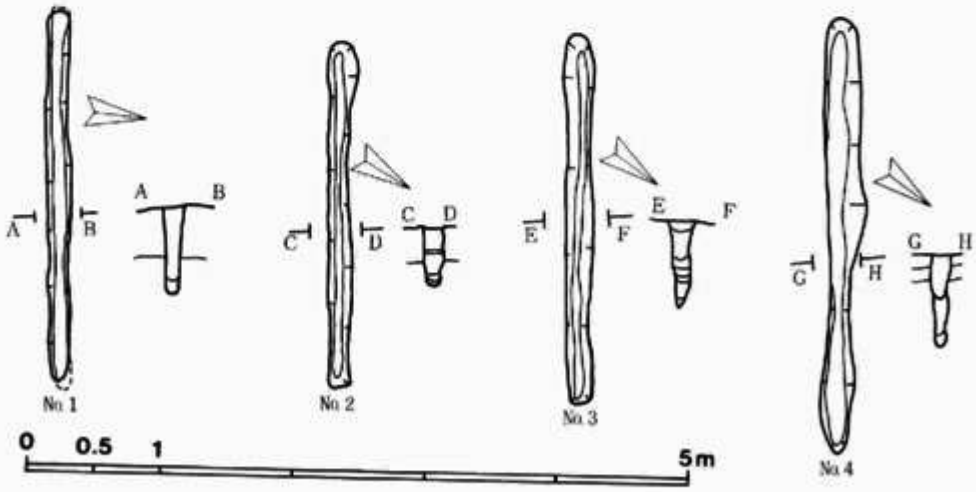
（断面）細いU字形である。

（底面の状態）ほぼ平坦で、両端がやや浅くなる。

（近接した遺構）東側2.5mに方形周溝がある。西側約3.0mには円形周溝No.7がある。南側約6.0mには、溝状土壙No.3がある。

(3)溝状土壙　No.3（Bg71）

（遺構の確認）南北基準線より東へ22.22m～25.41m、東西基準線より北へ10.89m～11.91mの地点、Bg71地区及びその周囲に黒色の落込みを確認した。遺構確認面は明黄褐色粘土層である。



第17図　溝状土壙

（規模、方向）上場上軸3.30ｍ、上場短軸0.14ｍ。下場長軸3.18ｍ。下場短軸0.03ｍ。深さ0.72ｍで、方向は、Ｅ－35°－Ｎで、ほぼ東南東一西南西を向く。

（下場の形態）両端共上場長軸より短い。細長く、両端共丸みをもつ。

（堆積土）　1層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層、指圧痕ややつく、粘性なし。

2層　10ＹＲ2/1黒色腐植土層、指圧痕つく、粘性ほとんどなし、粘土粒混入

3層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性あり、粘土塊を含む。

（断面）細いＵ字形である。

（底面の状態）ほど平担で、両端がやや浅くなる。

（近接した遺構）東側約 2.0ｍには、方形周溝南西コーナーがある。北側約 6.0 ｍには溝状土壙№2がある。

(4)溝状土壙　№4（Ｃａ62）

（遺構の確認）南北基準線より13.16ｍ～15.88ｍ、東西基準線より南へ2.36 ｍ～3.30ｍの地点、Ｃａ62地区及びその周囲に黒色の落込みを確認した。遺構確認面は明黄褐色粘土層である。

（規模、方向）上場長軸2.88ｍ、上場短軸 0.21ｍ、下場長軸2.67ｍ、下場短軸0.02ｍ、深さ0.65ｍで、方向はＥ－35°－Ｎで、ほぼ東北東一西南西を向く。

（下場の形態）両端共、上場長軸より短い。かなり細長く、両端はやや浅くなる。

（堆積土）1層 7.5ＹＲ2/1 黒色腐植土、指圧痕ややつく、粘性なし。2層 7.5ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性なし、3層 7.5ＹＲ4/6褐色粘土層、指圧痕つく、粘性あり。4層、7.5ＹＲ4/3褐色粘土層、指圧痕つく、粘性あり。5層、10ＹＲ6/6明黄褐色粘土層、指圧痕つかない、粘性あり。6層、10ＹＲ2/1 黒色腐植土層、指圧痕つく、粘性なし。7層、7.5ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層、指圧痕つく、粘性ややあり。

（断面）底面が平担でなく、凹んでいるため、Ｖ字形を呈す。

（底面の状態）巾が非常に狭く、凹んでいる。直線的でなく、やや曲がりがみられ、両端はやや浅くなる。

（近接した遺構）北約13.6ｍには、溝状土壙№3、西側 2.5ｍには、円形周溝№6がある。

11　摺鉢形ピット（Ｂｅ83）

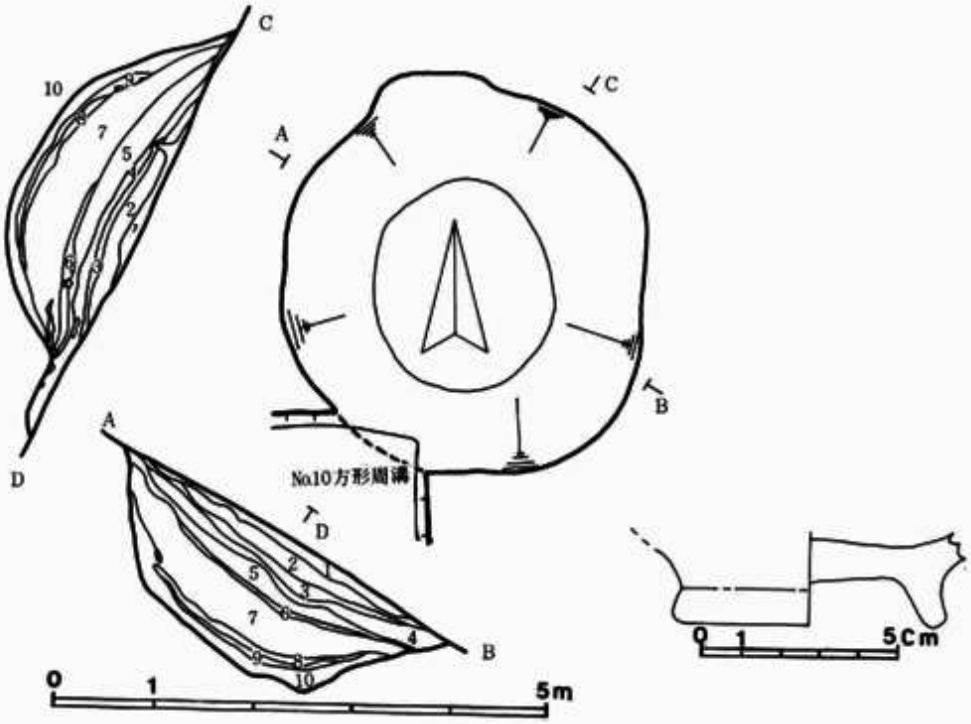
（遺構の確認）南北基準線より東へ33.19ｍ～37.02ｍ、東西基準線より北へ13.31ｍ～17.59ｍの地点、Ｂｅ83地区に、方形周溝と若干切り合いの状態が確認された。遺構確認面は、橙色粘土層である。

（規模、平面形）東西直径3.70ｍ、南北直径3.90 ｍ、底面は東西1.90ｍ、南北2.10ｍ。深さ1.35ｍの、円形摺鉢形である。

（堆積土）方形周溝との切り合った部分以外は、自然堆積と思われる。

1 層　10 Y R　黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。
2 層　10 Y R　黒色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし、砂を若干含む。
3 層　10 Y R　黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、砂を若干含む。
4 層　10 Y R　黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性なし。
5 層　10 Y R　黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性あり、炭化物若干含む。
6 層　10 Y R　黒褐色腐植土層　指圧痕つく、粘性ややあり、遺物を包含する。
7 層　10 Y R　黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、遺物を包含する。
8 層　10 Y R　にぶい黄橙色粉状パミス層、指圧痕つかない、粘性なし。
9 層　10 Y R　黒褐色腐植土層　指圧痕つく、粘性なしい。
10層　10 Y R　黒褐色腐植土層　指圧痕つく、粘性ややあり、粘土粒を若干含む。

（切り合いの遺構等による新旧関係）方形周溝№10と、南端部が切り合っている。方形周溝の堆積土と同じ土層（5層）が、ピットの中に続いており、同時期にも存在したと思われる。又粉状パミスの堆積層（8層）があり、これと、円形周溝の一部に堆積していた粉状パミスと同じ物であるなら、円形周溝の存在した時期にも、同時存在した事になる。粉状パミス層より下からは遺物が出土せず、土層（6・7層）に遺物を包含しているのは、円形周溝と同時期以降に、遺物が円形周溝付近から流れ込んだか、投げ込んだか、どちらかの可能性がある。つま



第18図　ピットNo.1及び出土遺物

り粉状パミス降下以前に、円形周溝とピットは存在し、方形周溝は存在しなかった。それ以降円形周溝に伴う遺物が、ピット内に堆積し、更にそれ以降、方形周溝がつくられた時期に、ピットは大部埋ったが、まだ存在しており、方形周溝と共存したと考えられる。

（年代決定資料）第6層から、土師器、甕の口縁部小破片1点と、小型甕の口縁部体上半部の破片1点、第7層から、土師器、内黒高台坏の高台部と底部の破片1点が出土した。

出土遺物

土師器　甕、口縁部⅓以下残存の小破片で、ほぼ直線的に、かなり外傾している。口端部は薄くなり、丸みをもつ。胎土はやや軟質で、砂粒を多く含む、色調はにぶい赤褐色から橙色、焼成はやや不良である。小型の甕は、口縁部体部若干残存で、推定口径7㎝前後のミニチュア的なものである。内黒高台坏（18図）は、高台部上端の外径約6.7㎝、高台部下端の外径約7.0㎝、高台部の高さ約1.3㎝。内底面は放射状磨き、内黒処理である。

○ピット状遺構 №2（Ｂａ27）

（遺構の確認）南北基準線から西へ25.75m～27.14m、東西基準線より北へ27.81m～29.18mの地点、Ｂａ27地区に黒色の落込みを確認した。遺構確認面は、黄褐色粘土層である。

（規模、平面形）東西1.40m、南北1.00m、深さ約30.0㎝の、方形隅丸形で、歪みがあり平行四辺形にみえる。

（堆積土）1層で、10ＹＲ2/1黒色腐植土、指圧痕ややつく、粘性なし。

（出土遺物）底面に、縄文土器の体下半と底部が出土したが、ピットの形状、堆積土等から、縄文時代のピットとは、断言出来ない。

Ⅳ　遺構と出土遺物の検討

調査の結果、円形周溝5基＋2。Ｄ形周溝2基、方形周溝1基、摺鉢形ピット1基、溝状土壙4基が検出された。何れも東面する段丘面の縁で、舌状に張り出した部分に集中している。円形周溝とＤ形周溝は、何れも北西→南東方向に向いた感じがあり、位置や、出土遺物、このくらい密集しても、切り合いが無い事等から、同時期に共存した可能性がある。方形周溝は、時期がかなり下がると思われ、摺鉢形ピットは、両者と共に共存した様に思われる。溝状土壙からは、何れも出土遺物が無く、時期不明であるが、南側にある稲荷遺跡等をみると、縄文時代の可能性が考えられる。

出土遺物は、円形・Ｄ形周溝からは、土師器内黒坏8点、内黒高台坏1点。須恵器壺3点、長頸壺2点、坏Ａ13点＋3片、坏Ｂ28点。釘様鉄製品3点が出土した。重機によって集積された耕作土からは、上記の器種を若干表採したが、それ以外の器種は発見されなかったのが、この遺跡の性格を知る手掛りと考えられる。又墨書のある遺物が割りに多かった点も注目したい。

V　遺跡の構成

この遺跡は、円形周溝6基を中心にして、南西側にD形周溝が2基並び、東側に、溝状土壙が、南北に3基並ぶ。1基は西側の円形周溝№7内にある。東端に摺鉢形ピットと方形周溝が南北に並ぶ形で、密集している。

縄文時代のものと思われる溝状土壙が、段丘崖に直行する方向で、南北に並ぶ。

遺構・遺物一覧表

項目 / 遺構名	外周の直径	上場の巾	深さ	平面形	出土遺物 土師器 内黒坏	内黒高台坏	須恵器 甕	長頸壺	坏A	坏B	鉄製品	備考
周溝№1 Ba09	11.0～12.0m	55～160cm	20cm	円形				1	4	1	1	
周溝№3 Bg15	11.7～11.5	45～124	30～30	円形				1	-	6	1	粉パミ
周溝№4 Bh09	11.85～11.4	48～100	20	円形	2	1			1	1		粉パミ
周溝№5 Bh24	12.4～10.2	約 60	5～34	D形					2		1	粉パミ
周溝№6 Bj56	13.5～14.0	50～152	15～34	円形								粉パミ
周溝№7 Bd65	14.5～15.5	52～152	10～40	円形	2				2	6		粉パミ、赤色石粉
周溝№9 Bd30	9.0～9.3	35～75	2～20	D形			2					
周溝№10 Be80	4.3～5.5	52～82	17～31	四辺形								
周溝残存部と思われるもの												
	長さ	巾	深さ	平面形								
周溝№2 Be03	約 9.00m	20～70cm	3～18cm	弧								
周溝№8 Ba56	2.50	26～78	4～18	直線状								粉パミ
周溝№11の3 Bj15	3.96	41～60	2～22	直線状								
周溝№11の3 Ca21	4.80	36～58	10～25	直線状								
周溝№11の3 Cc18	約 4.00	12～66	8～40	くの字形	4		1		7	14		粉パミ

溝状土壙

項目 / 遺構名	上場 長軸	上場 短軸	下場 長軸	下場 短軸	深さ	方向	断面	堆積土	備考
№1 Bd65	2.82m	0.16m	2.92m	0.09m	0.69m	E－7°－N	U	2層に分、2層に粘土	両端下場長
№2 Be75	2.65	0.15	2.50	0.07	0.45	E－30°－N	U	5層に分、2・5層に粘土	両端下場短
№3 Bg71	3.30	0.14	3.18	0.03	0.72	E－35°－N	U	3層に分、2・3層に粘土	両端下場短
№4 Ca62	2.88	0.21	2.67	0.02	0.65	E－35°－N	V	7層に分、3・4・5層に粘土	両端下場短

円形周溝、D形周溝は、出土遺物と堆積土からみると、隣接の稲荷遺跡や、湯沢A遺跡の住居跡と、あまり違わない時期、平安時代につくられたものと思われるが、粉状パミスの検討が、一本松遺跡、湯沢(A)遺跡等と共になされるべきものであろう。

段丘面の東縁部にある方形周溝は、円形周溝等より時期は下がるが、年代は不明である。

摺鉢型ピットは、円形周溝等と同時期には、つくられており、方形周溝の時期にも、土が堆積して浅くなったが、共存していたと考えられる。もし方形周溝が降雨等によって、水が溜まれば、摺鉢型ピットに流れ込んだと考えられる。尚、坏A類は胎土硬質で、環元炎焼成で、坏B類は胎土軟質で、酸化炎焼成の土器である。

Ⅵ まとめ

○遺跡は、東面した段丘面の張り出し部に限られている。開田の際に削平され、平担であるが西側がやや高く、東側が低くなっている。

○溝状土壙は4基発見され、1基は円形周溝内側台状部にあり、3基はその東側に、南北に並ぶ。№1だけは方向、形態に若干の違いがあるが、他の№2－4は、規模、平面形、方向等、類似している。

円形周溝、D形周溝は、底面の大部分に掘方状の凸凹が多くみられ、深い所と浅い所の境は急角度で、かなり深さに差がある。巾の広い所が深く、狭い所が浅いとは一概にいえないが、巾が広く、深い場所に、粉状パミスの推積がみられ、開田時の削平等で、浅い部分に堆積した粉状パミスが除去された可能性がある。又長方形状の張出しが一部みられるが、どの様な意図でつくったものかは、不明である。大部溝が切れている所がみられるが、最初から切れている所と、削平のため溝の浅い部分が失なわれて切れた部分があると思われる。台状部には、周溝に伴う遺構は無かった。古墳の周溝と推定されなくもないが、明確ではない。何れの周溝も密集していながら、切り合った個所が無かった事は、同時期共存の可能性がある。

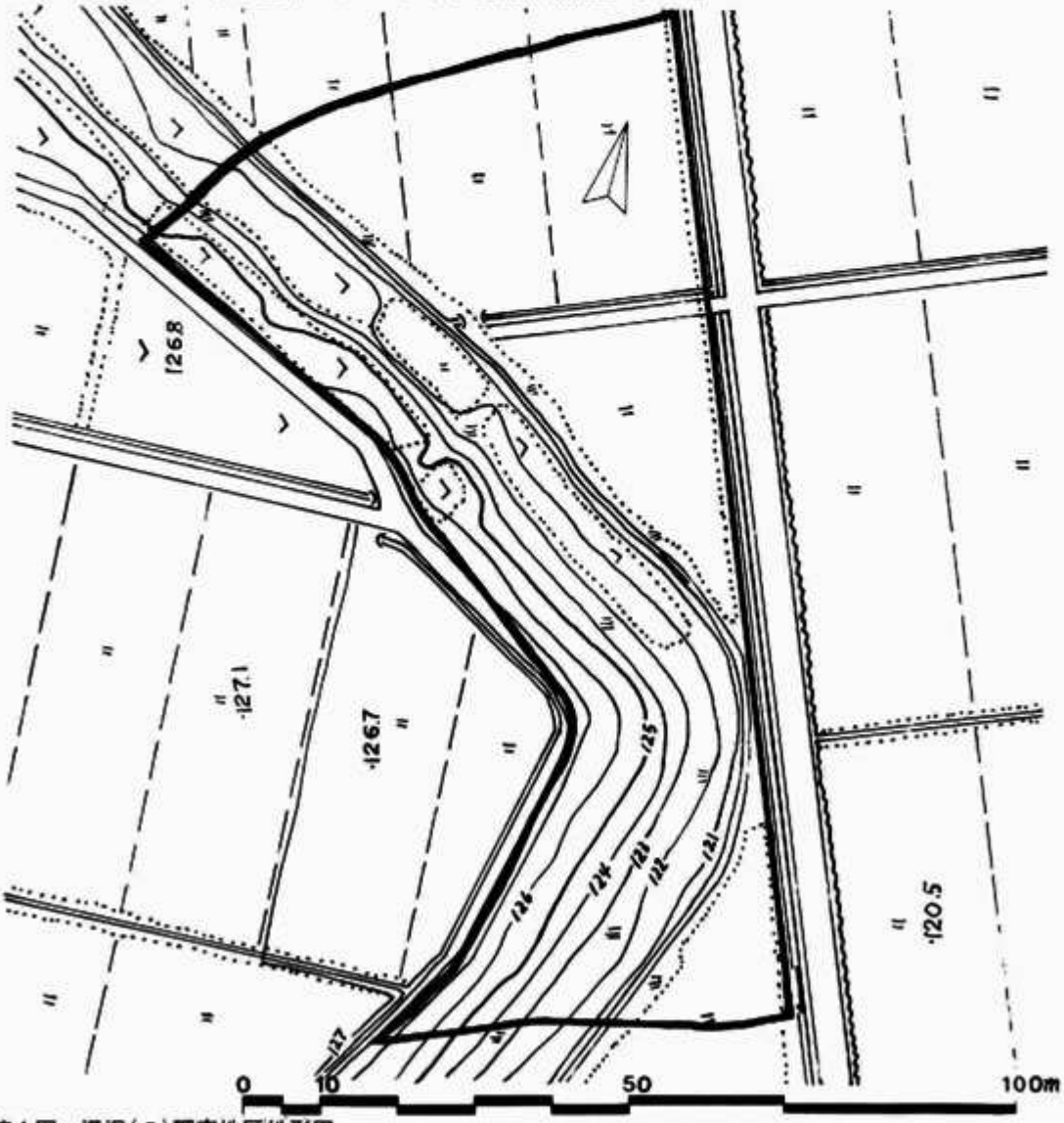
方形周溝と摺鉢形ピットは切り合いで、ピットのセクション図をみると、粉状パミス層が下から3層目に堆積され、方形周溝の埋土が、下から7層目に堆積している事から、この粉状パミスと円形周溝内の粉状パミスと同じものとすれば、円形周溝等より方形周溝が新しく、ピットは両者の時期に渡って存在していた事になる。

湯沢(C)遺跡

遺　跡　名：湯沢C(略号YZ-C74)
遺跡所在地：紫波郡都南村湯沢第15地割新田
調査期間：昭和49年10月
調査対象面積：約4,000㎡
発掘調査面積：約4,000㎡

1　遺跡の位置と環境

湯沢C遺跡は、紫波郡都南村湯沢第15地割字新田63番地に在る。東北本線の岩手飯岡駅の西約2㎞の地点で、矢巾町との境界を東流する湯沢川の北岸段丘東縁部に位置する。現在は盛岡南インターチェンジの料金所になっている所、及びその西側の段丘崖である。調査段階では、東面する段丘崖は草地。段丘崖の東側は畑地、及び水田であった。この段丘崖は、都南村の羽場と飯岡の境界線となっており、上羽場、中羽場の北端、下羽場の北東端に当る。又矢巾町に入って釜淵、上赤林に至り、段丘崖の東側は小部落を形成している。又この段丘崖に沿い、東側に鹿妻堰用水路がつくられている。西側の段丘面は、赤林山から東流する小可川と、鹿妻幹線水路を利用した水田地帯になっており、農家が点在している。



第1図　湯沢(C)調査地区地形図

2　調査の方法と経過

昭和49年10月に、湯沢A、B、稲荷、下羽場の各遺跡と共に、重機による表土除去をおこない、遺構の検出をした。当遺跡は、遺構・遺物は検出されなかった。従って分布調査による遺跡の登録は、当遺跡の西方段丘面が、湯沢B遺跡であるため、その遺物が、段丘崖及びその下に流れ落ちたものであると思われる。

稲荷遺跡

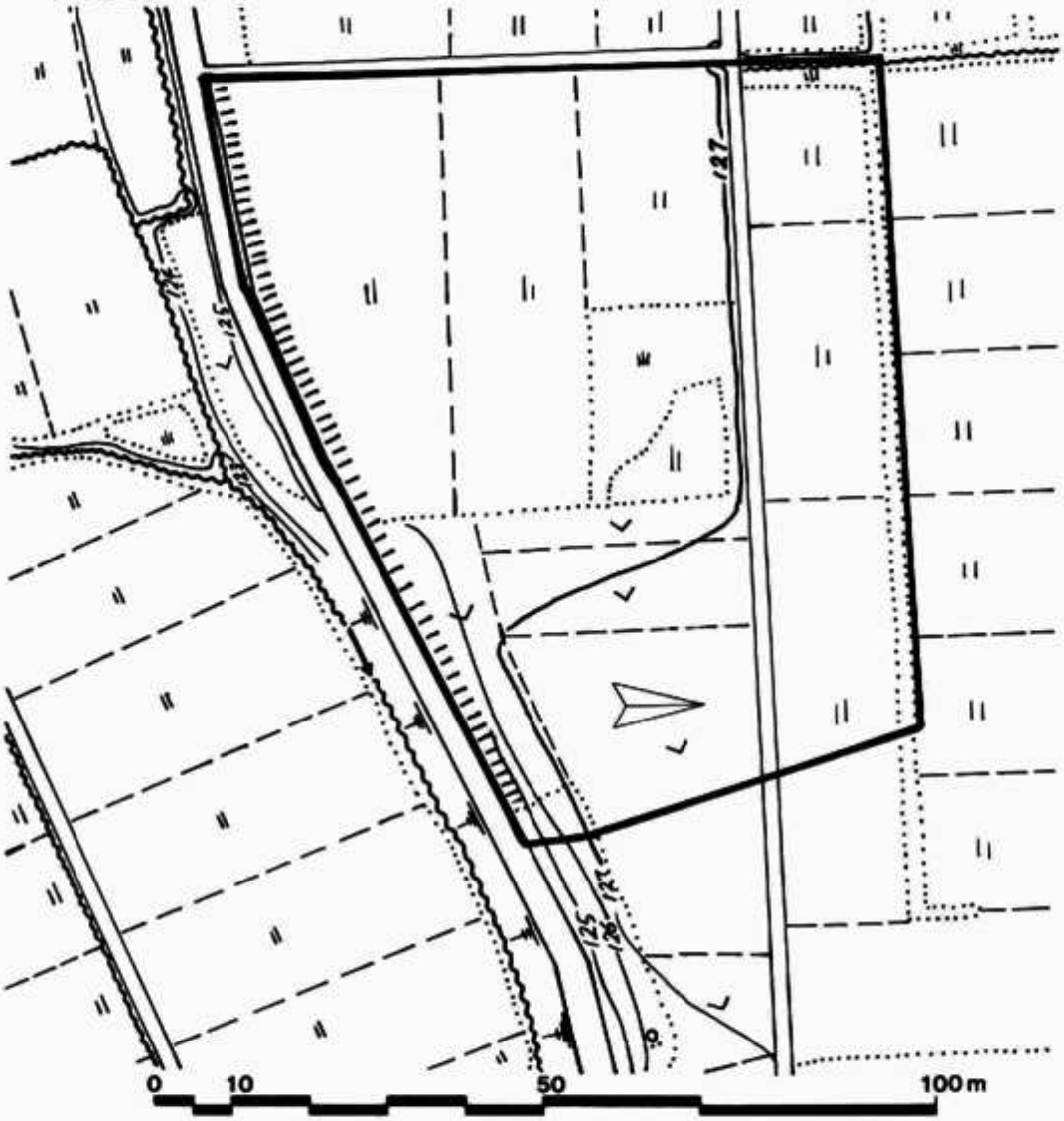
遺　跡　名：稲荷(略号ＩＲ74)
遺跡所在地：紫波郡都南村湯沢14地割字間渡60 他
調査期間：昭和49年11月12日～12月19日
調査対象面積：5,400㎡
発掘調査面積：5,400㎡

Ⅰ　遺跡の位置と環境

位置と地形：稲荷遺跡は紫波郡都南村湯沢第14地割字間渡60―6他。にあり、東北本線岩手飯岡駅の西方約2㎞の地点である。東流する湯沢川の北岸段丘面に立地する。この段丘は遺跡の東約300ｍの地点で、北西←→南東の段丘崖に接し、段丘崖の東側は、北上川の沖積低地になっている。西方6～7㎞には、箱ケ森・赤林山・毒ケ沢・南昌山等800ｍ前後の山地が南北に連なり、西方2～3㎞には飯岡山・湯沢森等の300ｍ前後の小丘陵が南北に点在する。

遺跡の標高は、西側が約126ｍ、東側が約127ｍで、西側は水田、東側は畑地及び水田である。

遺跡の西側は湯沢Ａ遺跡、北約200ｍに湯沢Ｂ・Ｃ遺跡、南約200ｍに一本松遺跡、北約500ｍに下羽場遺跡がある。



第１図　稲荷遺跡地形図

Ⅱ　調査の方法と経過

調査の方法：路線の中心杭ＳＴＡ 622＋00と、ＳＴＡ 622 ＋40を結ぶ線を基準とし、ＳＴＡ 622＋30以北をＡ区、ＳＴＡ 622＋30から 622＋00までをＢ区、 622＋00以南をＣ区とした。この地区は、盛岡南インターチェンジの南端で、東西に大きな広がりをもち、30ｍ毎のブロックが、東西に大部広がっていくため、標高 127ｍの南北に延びる等高線を境に西区と東区に大別し、更に１ブロックを３ｍ×３ｍのグリットに細分した。レベルは、中心杭の標高が測定されており、基準となるレベル杭を必要に応じて数本打ち測定した。

尚、基準線は、真北より西へ 17.0°振れている。

調査の経過：調査開始の時点で、既に表土は重機によって除去され、遺構の検出も大部分終了していた。しかし地主等によって、表土と地山が堀さくされ運び去られた個所が各所にみられ、表土の土層と遺構検出面の確認は困難であった。又調査開始が11月中旬であり、風雪の強い日が多く、調査は困難であった。従って実測の一部と写真撮影、住居跡１棟分の精査は次年度に延期した。

住居跡の精査については埋土の状況を確認すると共に、各層位に包含される遺物を区分するために、ベルトを十字に残して、４分法による精査を行なったが、大部地山面が削平されているためか、自然推積状況を確認するのは困難な個所もあった。４分法による住居跡内の区分は、北東部をＱ１、北西部をＱ２、南西部をＱ３、南東部をＱ４と仮称し、各層位による遺物の区分と共に、住居跡内の区分をおこなってみた。勿論年代決定の参考資料と思われた遺物については、住居跡の実測図内に位置とレベルを記入し、包含される層位を調べておき、取り上げた後に、遺物台帳に記入した。

溝状土壙と土壙の精査については、長軸にほぼ直行したベルトを中央に設定し、埋土の状況を調査し記録した。１基については長軸に平行したベルトを残してみたが、セクション面の下方が、溝状土壙の下場に当らず、妥当な埋土セクション図とはならなかった。

基準線の東15ｍのＢブロックに、深堀りを行ない基本層序作成の資料としたが、風雪と厳寒のため、写真撮影は不能で、柱状図のみ記録した。

基本層序　表土及び２層の一部が除去されているため１層、２層の厚さは不明である。

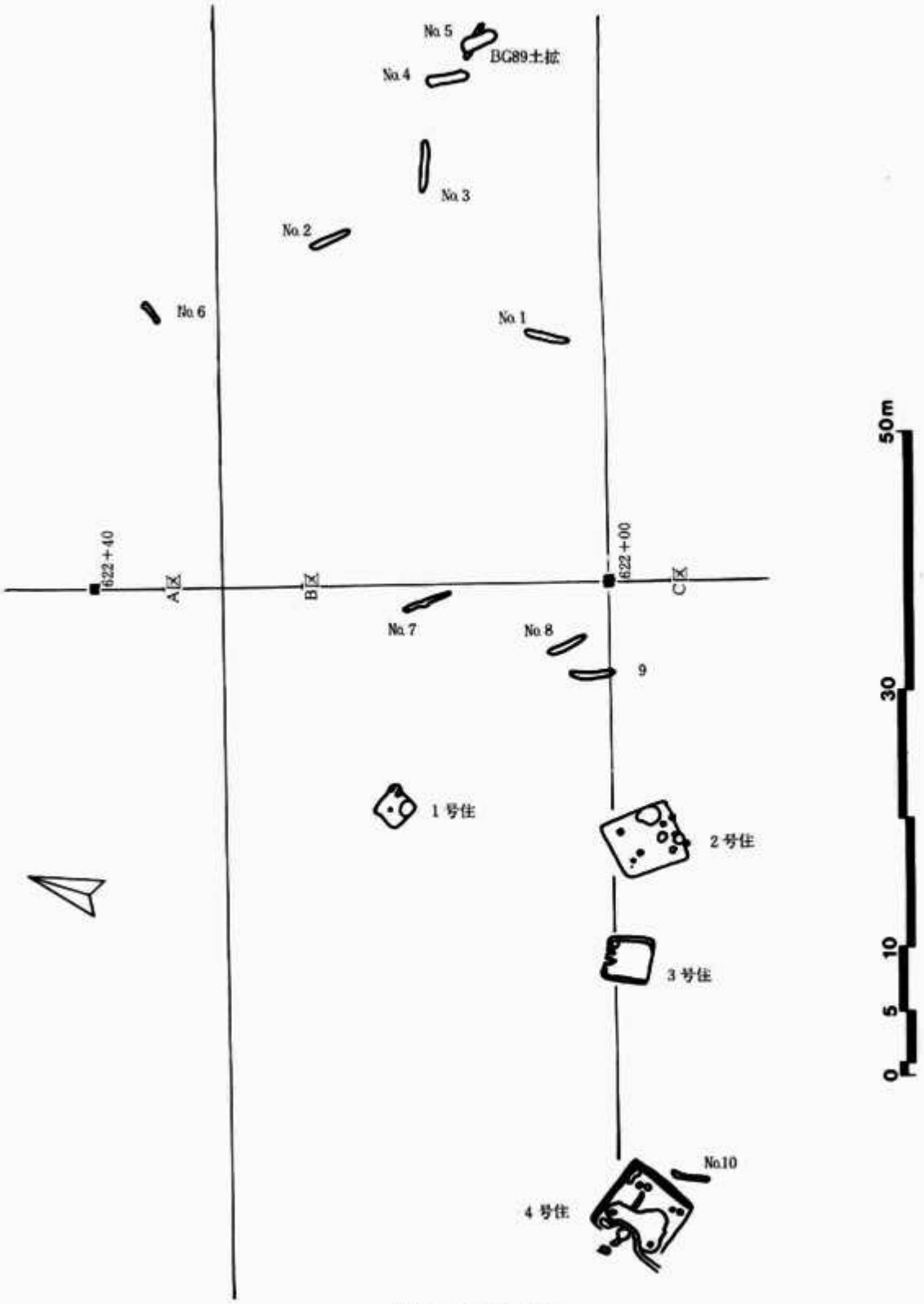
１層　黒褐色腐植土

２層　黄褐色粘土層　指圧痕ほとんどつかない、粘性著るしく強く、不帯水層。

３層　褐色砂層　　指圧痕ほとんどつかない、各所に褐鉄鉱の沈澱層がみられる。

４層　褐灰色砂礫層　基底部と思われる。

第２層は、湯沢Ａ・Ｂ遺跡にも広く分布しており、これを除去すると、西方山地からの伏流水と思われる水が多量に涌いてくる。


No.5
BG89土拡
No.4
No.3
No.2
No.6
No.1
622+40
A区
B区
622+00
C区
No.7
No.8
9
1号住
2号住
3号住
No.10
4号住
50m
30
10
5
0

第2図　遺構配置図

Ⅲ　発見された遺構と遺物

稲荷遺跡で発見された遺構は、住居跡4棟、溝状土壙10基、土壙1基である。住居跡からの遺物は、1号～3号は非常に少なく、4号から多量の出土があった。溝状土壙からの遺物は皆無である。土壙からは内黒の坏1点が出土した。

1　1号住居跡

（遺構の確認）　622＋00の基準点から北へ15.62 m～18.42 m。基準線より西へ16.30 m ～18.89 mのＢｅ18区とその周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色粘土層である。

（重復・増改築）　なし

（平面形・方向）　北西壁1.93 m、南西壁2.10 m、南東壁1.90 m、北東壁2.0 m のほゞ方形で、コーナーがそれぞれ、ほゞ東・西・南・北を向く。主軸方向は、E－28.0°－Sで、東南東向きである。

（推積土）　単層で、10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、柔かく、粘性はない。床面に地山とⅠ層の混合したブロックが散布している。

（床　面）　Ⅱ層である地山を直接床面として使用しており、平担で、あまり固くない。床面から壁へは緩傾斜で立上がり、壁高は2.0 cm ～ 5.0 cm である。

（柱　穴）　柱穴状ピットは、床面中央やや北寄りにあり、上場径13.0 cm×18.0 cm、下場径9.0 cm×11.0 cm、深さは床面下8.0 cmである。

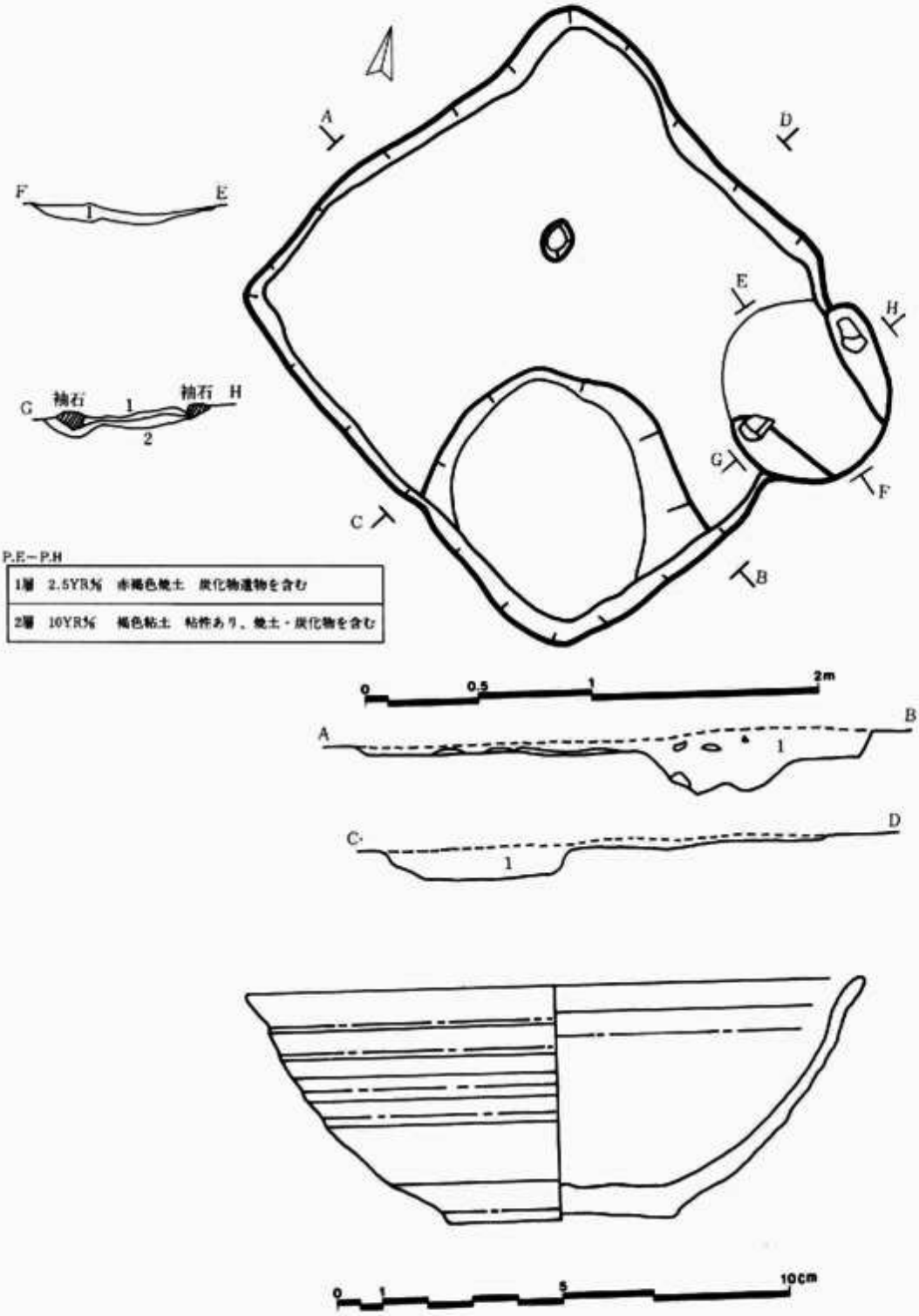
（かまど）　かまどは南東壁の東端に壁を堀り込んでつくられる。燃焼部の1/3は壁の外に張り出してつくられている。燃焼部は巾約44.0 cm、奥行84.0 cmで、円形のプランである。床面下7.3 cmとごく浅く堀り下げている。両袖は存在しそれぞれ1ケづつ袖石を埋め込んでいる。道、煙出は確認出来なかった。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは、床面の南側にあり、上場105.0 cm×115.0 cm、下場84.0 cm×98.0 cm、深さ18.0 cm～20 cmで、床面の1/4を占める。遺物、焼土、炭化物等は包蔵されていなかった。

（年代決定資料）　出土遺物は、坏Ｂ類1点のみで、かまど燃焼部底面より出土した。

＜出土遺物＞

坏Ｂ類　（第3図）口縁部1/3、体部1/2、底部全部残存である。推定口径13.7 cm、器高5.2 cm、底径5.1 cmである。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はかなり丸みをもち外傾する。外傾度は40.0°である。体壁はロクロなで成形無調整、外底面は回転糸切り無調整である。底部がやや下方に突き出し、中心部がわずかに凹んでいる。胎土はやや軟質、砂粒をかなり包んでいる。色調は橙色～淡橙色、焼成はやや不良である。2次焼成を受けて、大部脆くな



第3図 1号住居跡及び出土遺物

り、内面に剥離した所がかなりみられる。

2　2号住居跡

（遺構・確認）　基準点 622＋00から北へ 1.06 m～南へ 5.34 m、基準線より西へ 17.64 m～23.05 mのＣａ21区とその周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色粘土層である。

（重復・増改築）　東壁の大部分が、南北に走る溝によって切られている。南壁の一部が溝によって切られ、両者の溝が、住居跡南壁の南約 1.0ｍの地点で合流している。

（平面形・方向）　北壁約 4.4 m、西壁約 4.6 m、南壁約 4.5 m、東壁約 5.4 mの方形であるが、非常に歪みがあり、平行四辺形である。相対する辺の中点間の長さは東西 4.90 m、南北 5.30 mである。方向はN―73.0°―Eで、ほゞ東北東を向く。

（推積土）　推積土の厚さは 2.0 cm～14.0 cmで１層である。

○10ＹＲ 2/2　黒褐色腐植土層、指圧痕つき柔かい、粘性なし。

（床面）　地山をそのまま床面として利用している。４cm～８cmの凸凹がある。北西側がやや高く、南東側に緩傾斜している。床面から壁へは、やや急な角度で立上がる所もあるが、壁高が 3.0 cm～ 9.0 cmと低く、明確でない個所が多い。

（柱　穴）　12のピットの中で柱穴と思われるものが４、柱穴状のものが５である。

ピット１　上場径23cm×16cm、下場径19cm×13cm、深53cm、半円形をし、埋土は黒褐色腐植土である。

ピット３　上場径24cm×21cm、下場径18cm×９cm、深64cm、半円形をし、埋土は黒褐色腐植土である。

ピット６　上場径18cm×20cm、下場径16cm×15cm、深40cm、円形をし、埋土は黒褐色腐植土である。

ピット９　上場径28cm×35cm、下場径19cm×15cm、深40cm、方形で下場が南へずれる。埋土は同じ。

以上が主柱穴と思われ、次の５つが柱穴状ピットである。埋土はNo.５も他と同じである。

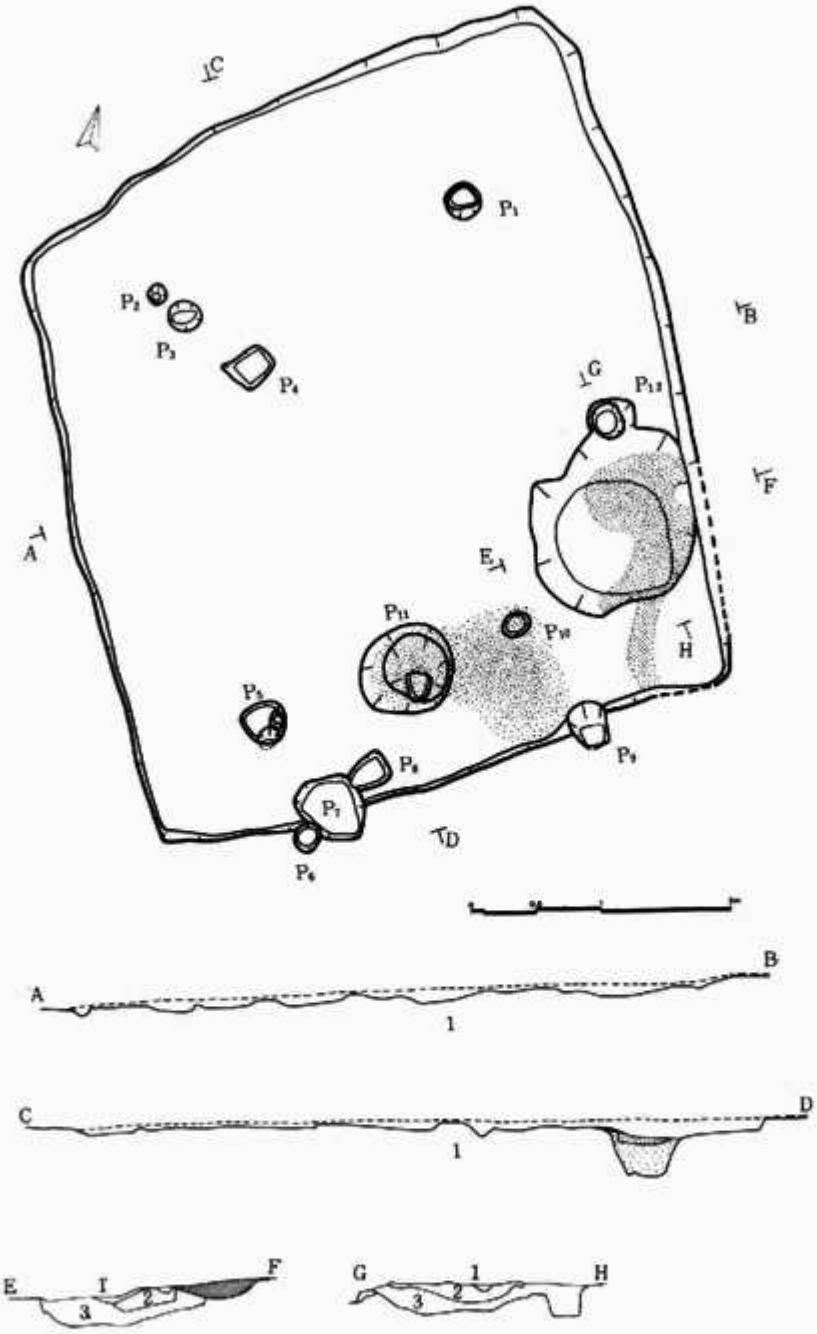
ピット２　上場径13cm×14cm、下場径５cm×５cm、深７cm、円形で埋土は黒褐色腐植土である。

ピット４　上場径24cm×31cm、下場径18cm×22cm、深５cm、方形で埋土は黒褐色腐植土である。

ピット５　上場径34cm×32cm、下場径31cm×27cm、深６cm、円形で下場に更に２つの小ピットがある。

ピット10　上場径16cm×23cm、下場径12cm×16cm、深10cm、楕円形で焼土の下から検出された。埋土は黒褐色腐植土である。

ピット12　上場径23cm×27cm、下場径16cm×17cm、深24cm、楕円形で埋土は焼土炭化物を若干



P.E～P.H

1層	10YR3/4	黒褐色腐植土	指圧痕ややつく粘性なし
2層	2.5YR5/6	赤褐色焼土	遺物を若干含む
3層	10YR3/4	黒褐色腐植土	焼土・炭化物を若干含む

第4図　2号住居跡

含んだ黒褐色腐色土である。

（かまど）　はっきりと輪郭をもったかまどは確認できなかったが、東壁南寄に巾 110 cm、長さ 135 cmの楕円形をした堀方があり焼土が推積していた。焼道、煙出も確認できなかった。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは３つあるが明確ではない。ピット７は径55cm×50cm、深さ20cmで半分壁外に張り出している。８は25cm×34cmの長方形、深さ６cmである。11は70cm×74cmの円形で深さは40cmで炭化物と焼土が推積し、鉄滓が出土した。

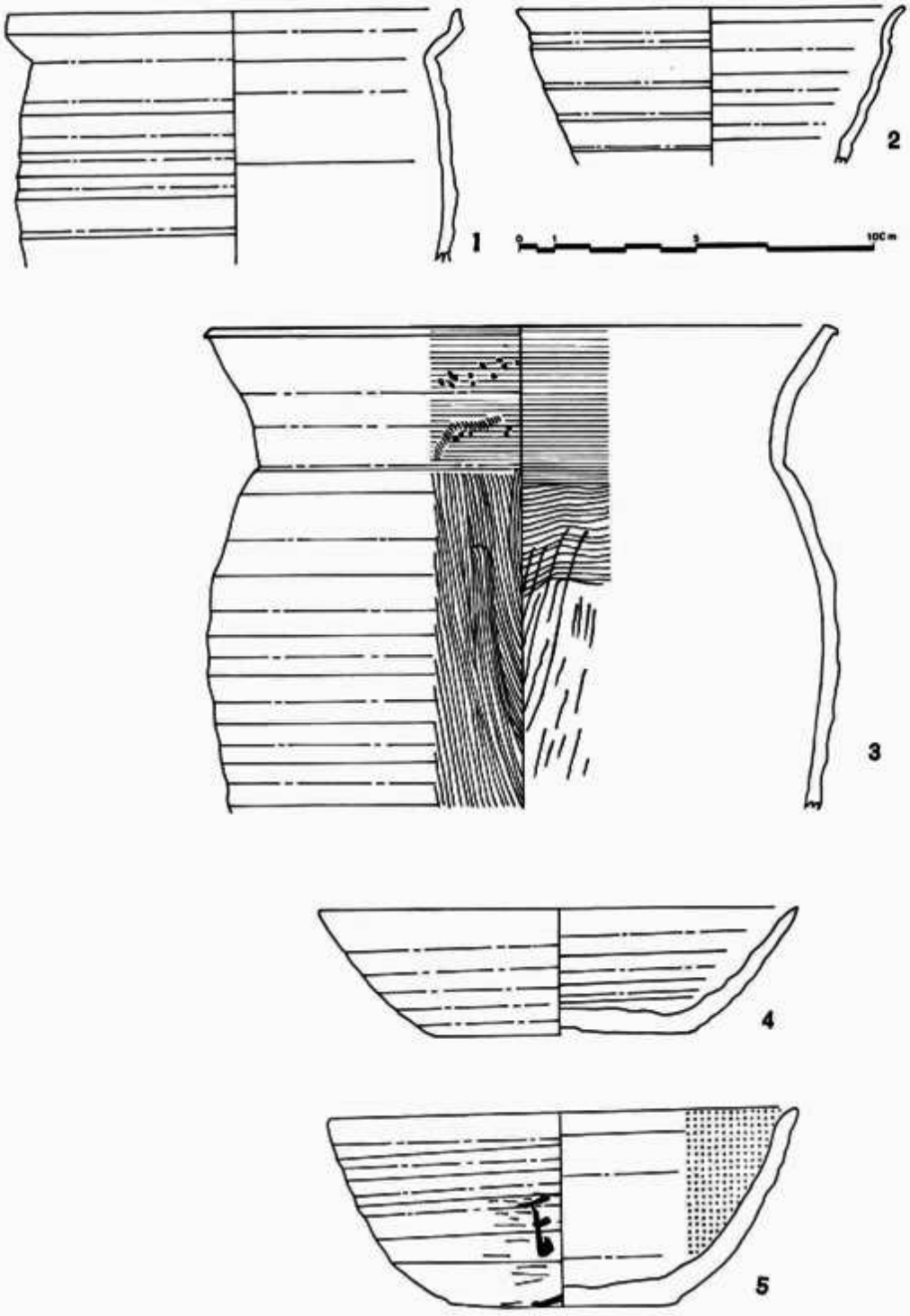
（年代決定資料）　小破片のみで、土師器甕１点、同小型甕７点。須恵器壺２点、坏Ａ３点。鉄滓５点が出土している。いずれも全容は不明である。

出土遺物

土器師

甕　体部の小破片１片のみである。厚さが８mmで、内外面共上下のへらなでが施されている。胎土は軟質、色調は淡橙色、焼成不良である。東壁焼土（２層）から出土した。

小型甕№１（５図１）　口縁部 1/6 、体上半部若干残存する。推定口径約13.0 cm、頸部径約11.4cm、残存体部最大径約12.5cm、口縁部は内湾ぎみにかなり外傾し、口端部は上に強く挽き出されている。口縁部体部上半共に内外面ロクロなで成形無調整で、体壁にかなり凸凹がみられる。胎土はやや軟質、色調淡橙色、焼成はやや良好である。東壁焼土２層とピット７及びＱ３から出土した。１点は、口縁部下端と体上端のみの小破片である。口縁部下端内外面は横なで、体上端部内外面は、横に細かい刷毛目が施されている。胎土やや軟質、色調は淡橙色、焼成はやや不良で、２次焼成を受けて変質し、ひび破れと剥離が著るしい。南壁付近出土である。他の１点は、体部小破片２、体部下端小破片２片で、外面は上下に刷毛目、内面は横に刷毛目が施されている。胎土軟質砂粒若干を含む、色調は橙色～赤褐色、焼成は不良である。ピット７・９と東壁焼土２層より出土した。他の１点は、口縁部 1/8 以下の小破片１で、口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ、ロクロなで成形で、外面は黒色化し焼土が付着している。胎土はやや軟質、砂粒を多く含む、色調はにぶい橙色、焼成はやや不良である。Ｑ３床面出土である。１点は、体部下半の小破片１片である。外面は上下ヘラ削り、内面に粗い刷毛目が施されている。胎土やや軟質砂粒を多く含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。外面に煤が付着している。Ｑ３床面から出土した。他の１点は、体部の小破片１片で、外面は上下ヘラなで、内面は横なでである。胎土やや軟質砂粒を若干含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。Ｑ３床面から山土した。１点は、体部のみの小破片１である。内外面共磨滅著るしく、成形、調整技法は不明である。胎土軟質砂粒を多く含む、色調浅黄橙色、焼成不良。ピット８出土である。



第５図　２・３号住居跡、ＢＧ89土壙出土遺物

須恵器

壷No.1　頸部下端、肩部共に1/4残存の破片1片である。頸部と肩部の境にある稜線が、推定7cm位の直径と思われ、あまり大きくないものと思われる。肩部に叩き目痕が横に1列認められる。内外面共ロクロなで成形である。胎土硬質、色調灰色、焼成良好、Q3出土である。No.2は頸部下端、肩部上端の小破片で、1より胎部は薄く小型である。内外面共ロクロなで成形で、胎土硬質。色調灰色、焼成良好である。

坏A No.1　体下端と底部1/5残存で、ロクロなで成形無調整、回転ヘラ切りである。体部と底部の境は丸く不明瞭である。胎土硬質、色調灰色、焼成良好である。No.2(5図2)は口縁部1/6体部若干残存で、推定口径11.0cmである。口縁部は外反し、口端は丸い。あまり外傾せず椀形と思われる。他に小破片1点と、鉄滓が5点出土した。

3　3号住居跡

(遺構の確認)　基準点STA 622+00より北1.08m～南2.73m。基準線より西へ27.82m～31.31mの地点、Ca30地区とその周囲に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は黄褐色粘土層である。

(重複・増改築)　東壁の北端を除く大部分、南壁の東端、西壁全部、北壁の西1/3が段状を呈し、床面が検出面より約8cm下と、約20cm下と2面が検出されたことから、増改築がおこなわれたと思われる。かまどは焼土が2層堆積し、改築前が下層、改築後が上層と思われる。

(平面形・方向)　東西3.24m、南北3.32mの方形であるが、歪みがあり平行四辺形である。方向はほゞ北を向いている。

(推積土)　3層に大別され、2層上面が新床面、3層底面が旧床面である。

1層　10YR　黒褐色腐植土層、柔かく粘性なし、遺物を含む。

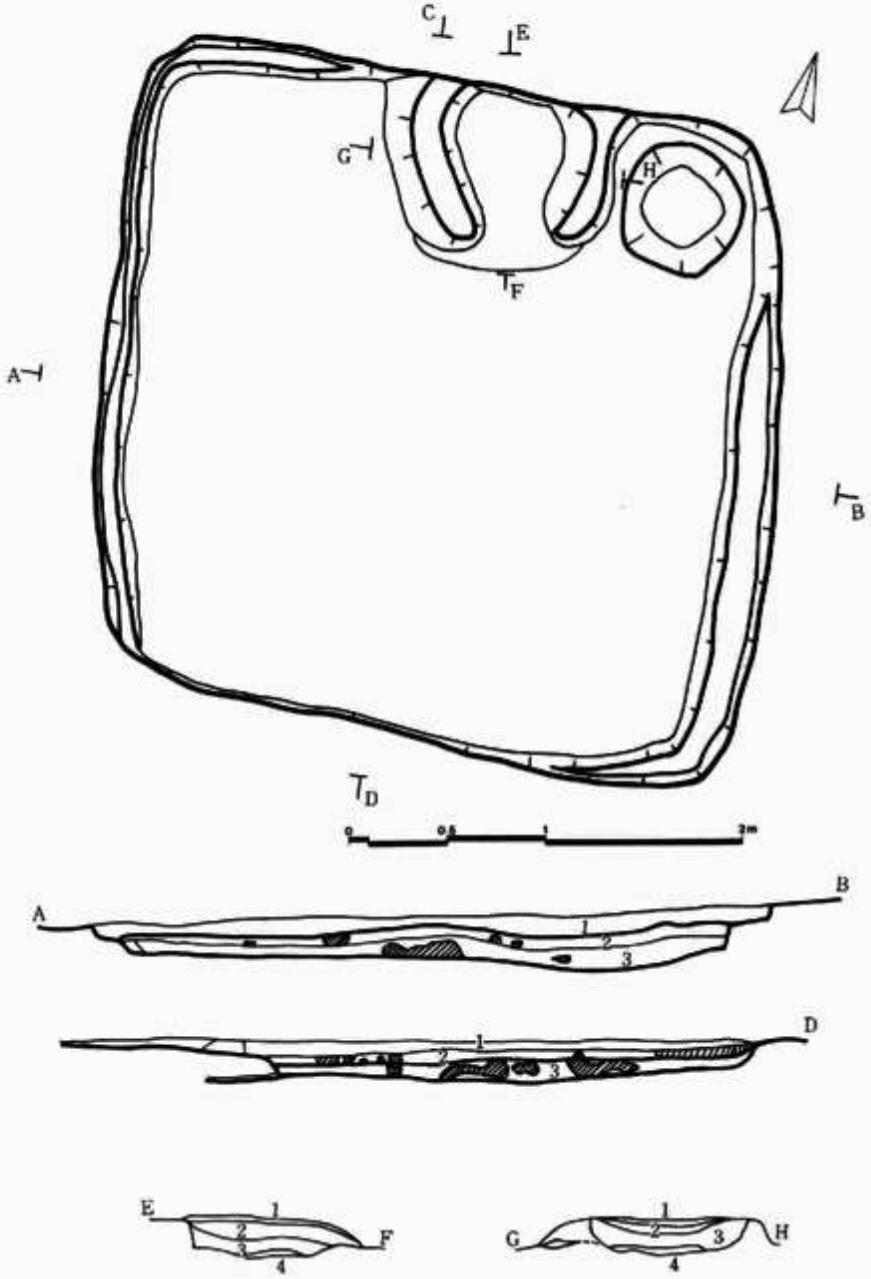
2層　10YR　褐色粘土層、固くしまっており粘性もある。腐植土が混合されている。

3層　10YR　黒褐色腐植土層、柔かく粘性なし、粘土がブロック状に混入する。底面に焼土炭化物が多く、地山面に付着している。

(床　面)　前述の如く、2層上面と3層底面が床面で、どちらもほゞ平担である。2層上面は、、東に約20cm、西に約14cm拡張している。又北壁では西側を北へ12cm、南壁では東側を南へ10cm拡張したため、歪んだ形になっている。2層の床面は急角度で、3層の床面は緩やかに立上がる。壁高は2層の床面で8cm～13cm、3層の床面で13cm～20cmである。壁沿いの施設は認められなかった。

(柱　穴)　2つの床面共、確認されなかった。

(かまど)　かまどは北壁中央にあり、袖が構築されているが、煙道、煙出は確認出来なかった。燃焼部は巾80cm、奥行88cmで、約6cmほど浅く堀り込まれている。左袖は上場で巾14cm、



P.E～P.H

1層	2.5YR5/6	明赤褐色焼土層	遺物を含む
2層	10YR3/2	黒褐色腐植土層	粗で粘性なし、遺物若干
3層	2.5YR5/6	明赤褐色焼土層	炭化物を含む
4層	10YR5/6	明赤褐色焼土層	地山の焼けたものか

第6図　3号住居跡

長さ84cm、下場は巾38cm、長さ92cm、高さは先端で約10cm、壁ぎわで17cm、袖の下に厚さ2cmの焼土が入っている。右袖は上場の巾7cm～12cm、長さ63cm、下場の巾26cm～34cm、長さ73cm、高さ約10cm～17cmである。燃焼部は焼土が、黒褐色腐植土層を間に狭んで2層推積している。焼土上層から腐植土層に、回転ヘラ切りの須恵器坏1個体と、頸部有段の土師器甕が出土し、下層の焼土からは遺物はほとんどなかった。

（貯蔵穴）　貯蔵穴状ピットは、かまど右袖の東隣りに在り、上場径63cm×68cm、深さ下層の床面下24cmの円形摺鉢形である。埋土からは遺物は出土せず、底面に若干の焼土炭化物が在る。

（年代決定資料）　出土遺物は、土師器甕2点、須恵器壺3点2個体分、坏A2点のみの出土である。土師器甕のうち1点は、頸部有段、体部内外面刷毛目調整で、かまど2層から出土している。もう1点は底部の破片で、磨滅著るしく全容不明で、Q31層から出土している。須恵器坏A類のうち1点は、回転ヘラ切りの完成品で、かまど2層から出土している。

出土遺物

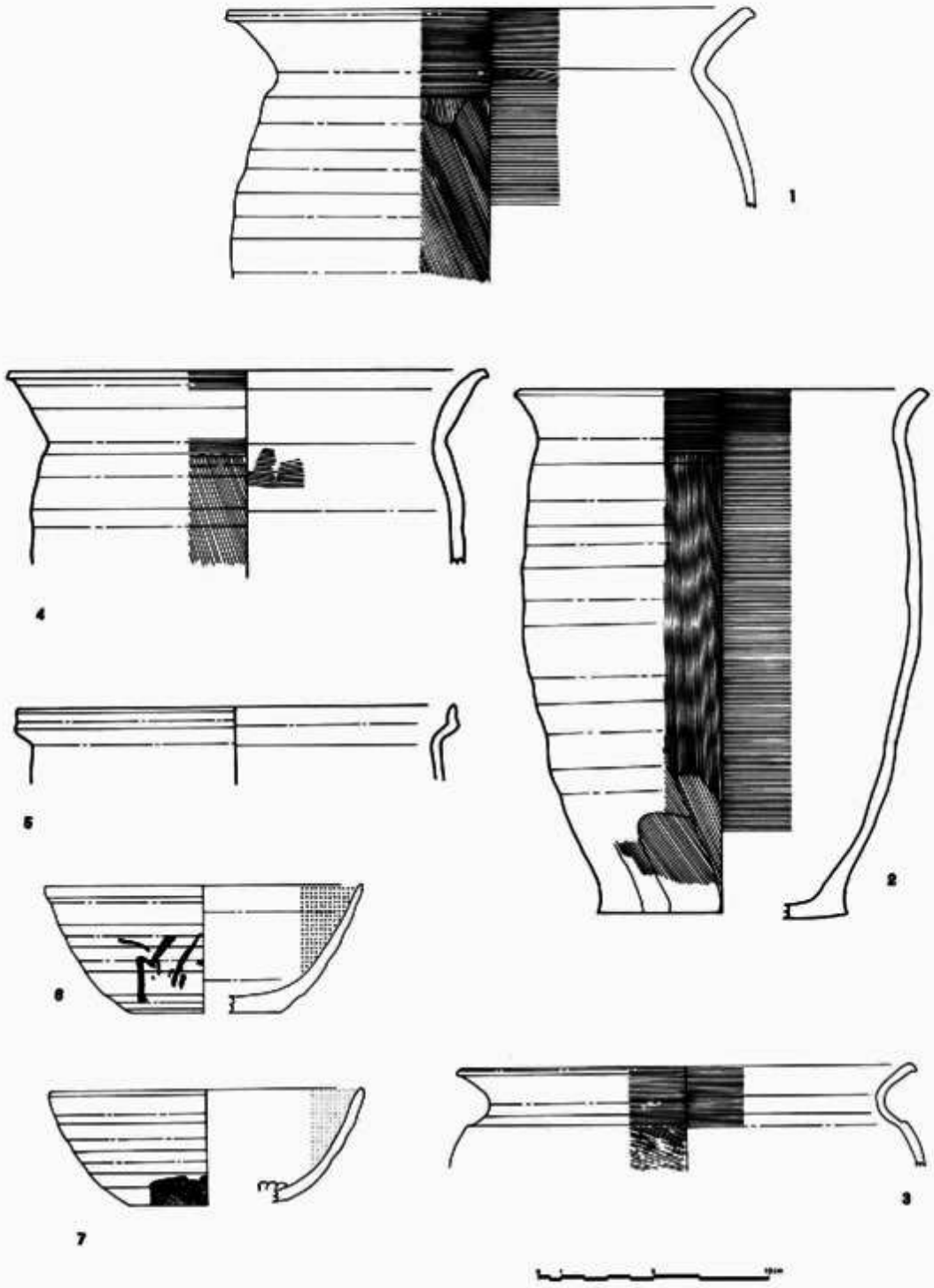
土師器

甕（5図3）口縁部1/2、体上半部1/2残存である。推定口径約18.0cm、頸部径約14.8cm、体部残存最大径約18.0cm、口縁部高さ 3.0cmである。口縁部はやや外反し、口縁部は平担である。口縁部内、外面共に横なでであるが、外面の凹部に刷毛目痕が認められるところから、外面を刷毛目調整を上下に施した後、横なでしたものであろう。又外面の一部にヘラ状器具か棒状器具の先端で刺突した痕がかなりある。口縁部下端に段が認められる。体壁は肩部にかなり丸みがある。外面は上下に刷毛目が施され口縁部外面と同様刺突痕がみられる。内面には横に刷毛目が施されており、ヘラ状器具か棒状器具の先端で上下に引っ掻いた線が大部みられる。胎土はやや硬質砂粒を若干含む。色調は橙色～にぶい橙色、焼成はやや良好であるが、2次焼成を受け剥離している所が大部あり、内外両面に焼土が付着している。かまど1層より出土した。その他底部1/3残存の小破片があるが、磨滅著るしく成形調整技法は不明で、胎土軟質、色調淡橙色、焼成不良である。Q31層出土である。

須恵器

壺No.1　体部小破片で1点は、外面に叩き目痕があり、これを半ばなでによって消している。内面には若干の叩き目痕が認められ、ほとんどヘラなでによって消している。胎土は硬質、色調は明褐灰色、焼成はあまり良くない。もう1点は、体部小破片2片で、前者よりかなり薄い。内外面に凸凹の著るしい叩き目痕が認められる。胎土硬質、色調は黒色～灰色、焼成は良好である。他の1片はQ1床面、他の1片はQ3床面出土である。

坏A（5図4）　ほゞ完成品で、口径13.6cm、器高 3.6cm、底径 7.1cm、外傾度41.5°である。



第７図　４号住居跡出土遺物

口縁部は直線的で、口端部は薄くなる。体壁はほゞ直線的で外傾し、壁面に若干の凸凹がみられる。外底面は回転ヘラ切りで、調整されている。内外壁面はロクロなで成形無調整である。胎土はやや軟質、色調は灰白色、焼成はやや不良である。2次焼成を受け内外面の一部に煤が付着している。かまど1・2層出土で、検出した段階で外底面を上に向け、露出していた。その他口縁部1/8以下残存の小破片がQ2床面から出土している。口縁部体部共直線的で、口端部は丸みをもつ。胎土はやや硬質砂粒は少ない。色調は灰白色、焼成はやや良好である。

4　4号住居跡

（遺構の確認）　基準点 622＋00から北2.23 m～南5.36 m、基準線から西へ45.22 m ～約53 mの地点、Ｃａ51区及びその周囲に、黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は黄褐色粘土層である。

（重複・増改築）　北西壁に沿って溝が、北東から南西に走り、更に湯沢Ａ遺跡6号住居跡を切っている。この溝の一部を切るピット群が住居跡の床面中心部から西側にある。

（平面形・方向）　北西一東南が約5.75 m、北東一南西が約5.65 mの方形で、N－66.0°－Wであり、北西壁は削平されたためかほとんど痕跡がなく不明である。煙道が西北西を向いている。

（推積土）　大部削平されたためか、単層である。ただ周溝の埋土は床面上の埋土の下に地山と1層の混合した層が若干推積している。

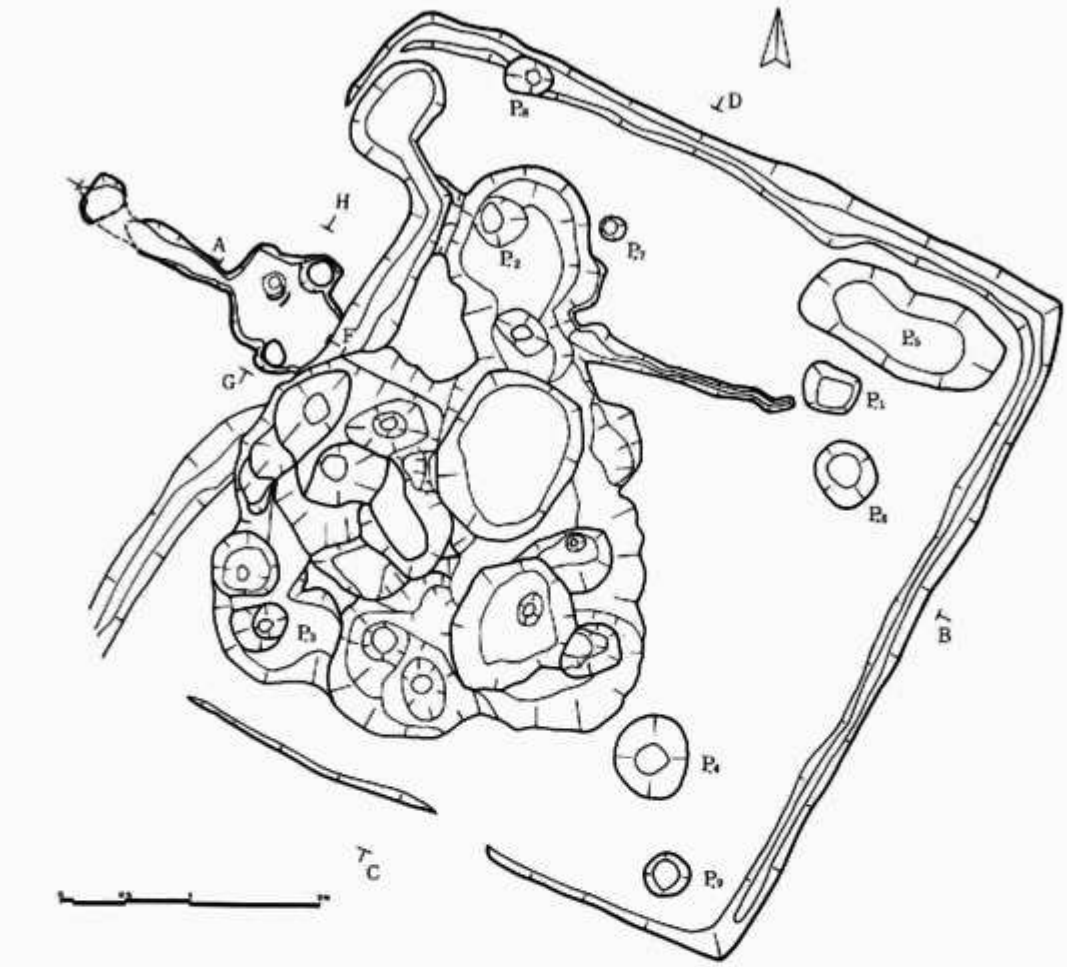
1層　10ＹＲ　　黒褐色腐植土層、柔かく粘性はほとんど無い、炭化物を含み、かまど付近には焼土がかなりの範囲でみられる。

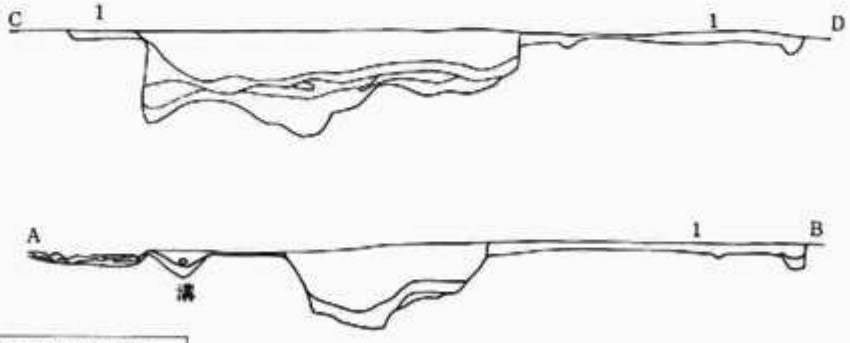
ピット群の埋土は、1層とほゞ同じで、北西寄の一部に焼土・炭化物を含み、全体が遺物片を多量に含んでいる。溝の埋土は、焼土、炭化物を多く含んでいる。

（床　面）　床面の西側は、ピット群と溝のため不明な点があるが、ほゞ平担である。北東壁下と南東壁下には周溝が確認された。床面から壁への立上がりは急角度であるが、壁高は6～8 cmで、西壁と、南西壁の西側は、壁自体が確認されなかったので輪郭も不明である。

（柱　穴）　東側の2つは確認されたが、西側はピット群で壊されて明確でないが、位置と規模から推定すると、4つの主柱穴があると思われる。

ピット1は北東にあり、上場は43cm×34cm、下場は26cm×22cmの方形、深さ床面下61cmである。ピット2は北西にあり、径約40cm、深さは床面下約80cm。ピット3は、南西にあり、径約40cm深さは床面下約60cm、ピット4は、南東にあり、上場径58cm～62cm、下場径24cm～25cmの円形で深さは約65cmである。P_1－P_2 の間は 2.9 m、P_2－P_3 の間は3.5 m、P_2－P_3 の間は3.15 m、P_4－P_5 の間は3.10 mである。柱穴状ピットは6・7・9の3である。ピット6は、ピット1の南60cmの所にあり径約45cm～50cm、深さ約10cm、ピット7は径約20cm、深さ約





P.E～P.H

1層 [illegible]	7層 [illegible]
2層 [illegible]	8層 [illegible]
3層 [illegible]	9層 [illegible]
4層 [illegible]	10層 [illegible]
5層 [illegible]	11層 [illegible]
6層 [illegible]	

第8図　4号住居跡

7㎝。ピット9は、ピット4の南85㎝の所にあり径約35㎝、深さ約10㎝である。ピット8は周溝内にあり、性格は不明である。径25～35㎝、深さ約10㎝である。

（かまど）　北西壁のほゞ中央にあり、燃焼部は巾約76㎝、奥行約90㎝で、中央に支脚に使用したと思われる甕の下半部が伏せた状態で置かれている。両袖は確認されなかったが、袖中に埋められたと思われる甕の下半部が1個体ずつ底面を下に置かれてあった。煙道は長さ95㎝、巾25㎝、深さ約10㎝で、前下がりになる。煙出は上場で40㎝×26㎝、下場28㎝×32㎝、深さ約30㎝で、煙道より北へややずれる。煙道と煙出の境が明確でない刳り貫きである。

（貯蔵穴）　東端コーナー付近に155㎝×65㎝の方形隅丸形のピットがあるが、貯蔵穴とはっきり断定できない。遺物と焼土が若干出土している。

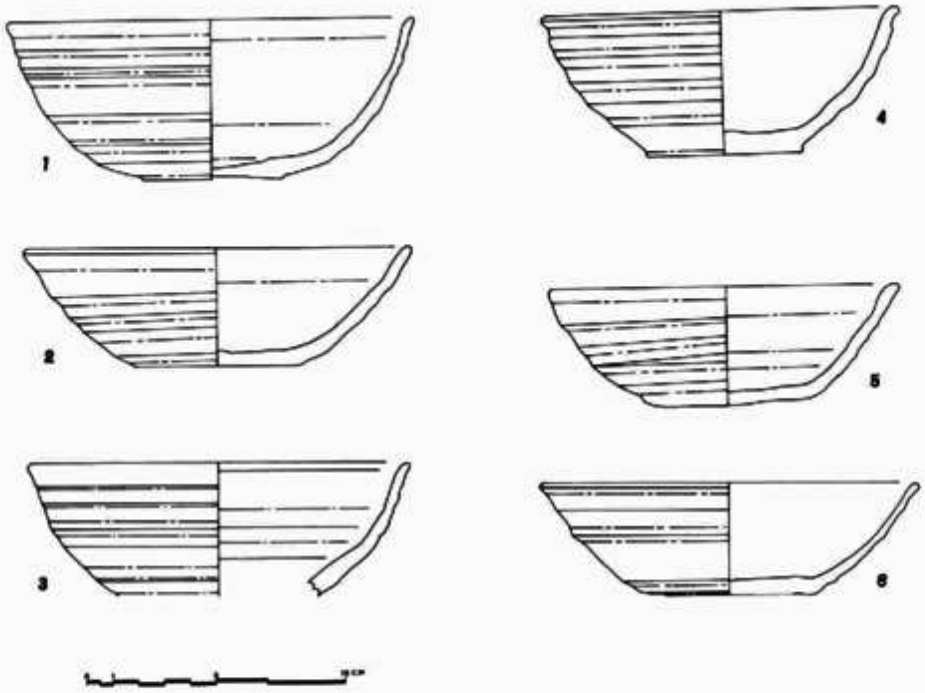
（年代決定資料）　出土量が他の3棟に比べ非常に多い、土師器甕14点に小破片約60片、内黒坏3点に小破片11片、須恵器壺18点、長頸壺2点、坏A類19個体と小破片31片、坏B類7点と小破片63片、C類8点である。甕には頸部有段のものもあり、坏は大部分回転糸切りである。

出土遺物

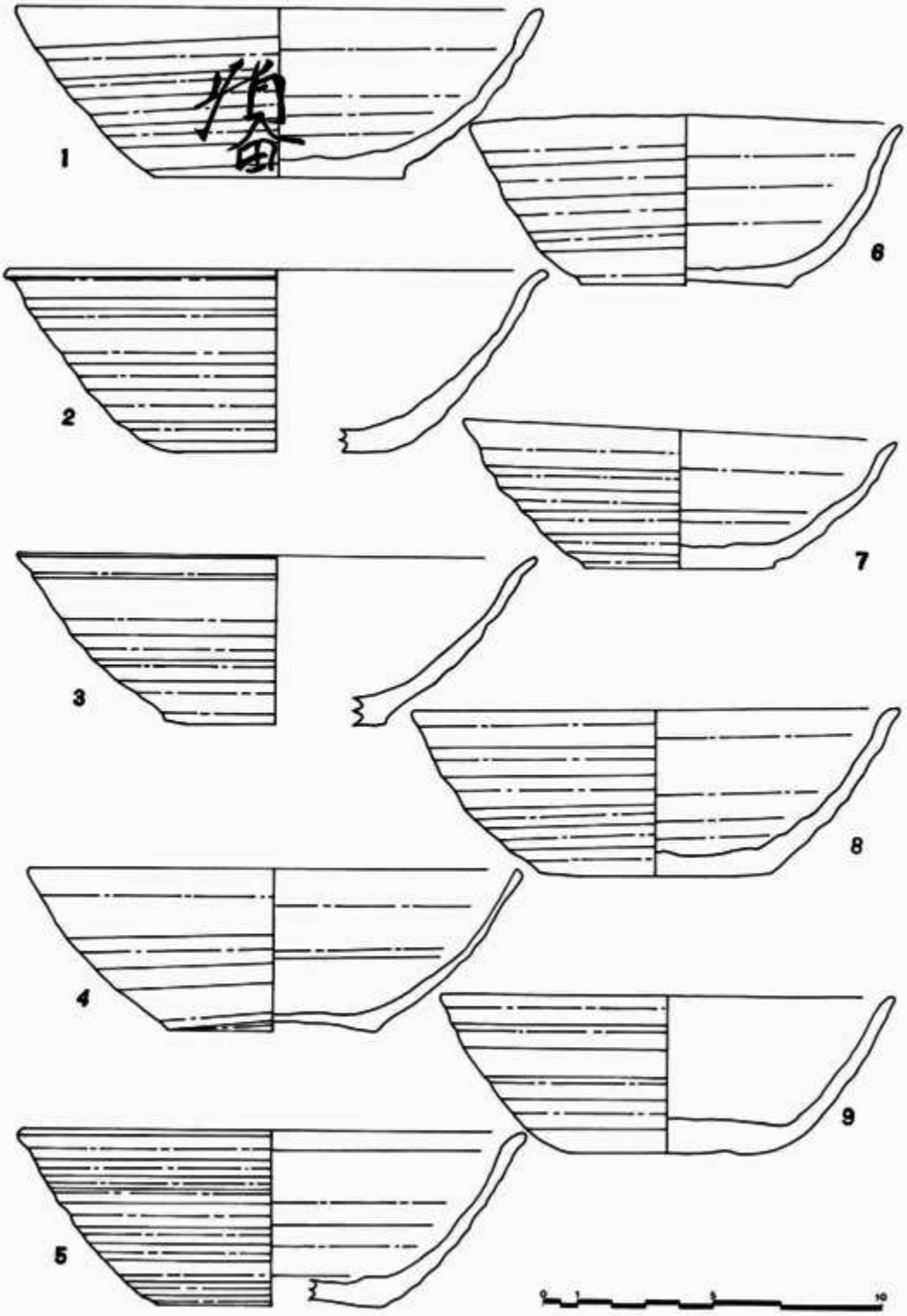
土師器

甕No.22（7図1）　口縁部、体部上端、体部下端、底部残存で、体部中央が欠損している。口径23.0～23.5㎝、頸部径18.7㎝、口縁部の高さ2.8㎝、底部径11.1㎝～11.5㎝である。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。口端中央に沈線状の横なで痕が走っている。内外面共横なで成形である。口縁部下端に不明瞭であるが段をもつ。体部外面は上下に刷毛目が施され、その後上下なでゞこれを消している。下半部はヘラ削り後、上下にヘラなでされ、底部が横に張り出している。体部内面は横に刷毛目が施され内底面まで続いている。外底面は木葉痕が認められる。胎土軟質砂粒を多く含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良で、外底面に焼土が付着している。かまど燃焼部右端より出土した。甕No.20（7図2）口縁部2/3、体部1/3底部若干残存する。推定口径約18.0㎝、頸部径約16.0㎝、底径約10.8㎝、高さ約23.0㎝、体部最大径17.2㎝、口縁部高さ2.5㎝である。口縁部はあまり外反しない。口端部は丸みをもつ。内外面共横なで痕はあるが、歪み・凸凹が著しい。頸部には段を有せずくびれている。体部はわずかに丸みをもつ長胴で外面ヘラ削り、ヘラなで痕がみられ、内面は横に刷毛目痕が認められる。体部下端はヘラ削り調整で、底部外周が外に張り出している。外底面にヘラなで調整らしき痕がみられる。胎土は軟質砂粒を多く含む、色調は褐灰色～橙色、焼成はやや不良である。2次焼成を受け内外面に焼土や煤が付着している。Q_3ピット3層出土である。甕No.26（7図3）口縁部1/8以下と体部上端若干の小破片である。推定口径約20.0㎝、頸部径約17.2㎝、口縁部高さ2.5㎝である。口縁部は著しく外反し、口端部は丸みをもつ。No.22の口端と同じく沈線状の横なで痕が認められる。内外面共横なで成形で、外面下端に段を有している。体部は磨滅著

るしく成形技法は不明である。胎土軟質砂粒を若干含む。色調は橙色、焼成は不良である。Q_3ピット3層出土である。甕No.23（7図4）口縁部1/6、体部上端若干の破片である。推定口径約21.0cm、頸部径約17.4cm、口縁部高さ3.1cmである。口縁部はかなり外反し、口端部は平担で外側に若干張り出す。内外両面共横なで成形で、外面下端に不明瞭だが段を有する。体部外面は上下刷毛目、内面は横に刷毛目痕がみられる。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は橙色～赤灰色、焼成不良で、Q_2出土である。甕No.24は口縁部1/4残存の破片である。歪み著るしく計測不能である。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ、頸部に段を有し、体部は内外面共刷毛目痕がみられる。推定口径約21.0cm、頸部径約18.0cm、胎土軟質砂粒多く多む。色調は橙色、焼成不良で、2次焼成を受ける。Q_1床面とQ_3ピット3層から出土し接合した。甕No.21は口縁部と体下端、底部の大部分が残存するが、小破片で接合せず。口径、器高は測定不能で、底径は約10.5cmである。口縁部はやや外反し、高さ約1.7cmと短い、口端部は丸みをもち、一部沈線状の横なで痕がある。体上半部は外面が上下、内面が横にヘラなでされ、下端部はヘラ削りである。全体が非常に歪み凸凹が著るしい、胎土はやや軟質、色調は橙色～褐灰色、焼成やや不良で2次焼成を受ける。かまど燃焼部左端出土である。甕No.25・No.28は同一個体と思われる。口縁部と体上部若干の小破片である。口縁部は上半が著るしく外反し、口端は丸みをもつ、下端に段をもつ。体部外面は上下、内面は横に刷毛目痕を施している。他に口端部が上に強く



第9図　4号住居跡出土遺物



第10図　4号住居跡出土遺物

挽き出され、体部内外面に叩き目痕のある鉢型に近い様な破片が数点かまどから出土している。

小型甕、ロクロなで成形、無調整、回転糸切り痕のあるものが5点出土している。そのうち口縁部若干残存のものは、推定口径約19.0cm、頸部径約17.8cm、口縁部高さ 1.6 cmで、口縁部はかなり外反し、口端部は強く上に挽き出されている。胎土軟質で、橙色を呈し、焼成不良で、Q_1 壁ぎわから出土した（7図5）

内黒坏№14（7図6） 口縁部若干、体部1/4、底部1/4残存で、推定口径約 6.3 cm、器高約 5.6 cm、底径約 6.3 cm、外傾度33.0°で椀形に近い、ロクロなで成形無調整回転糸切りの様である。墨書が外体部下半にあり、偏は磨滅して不明、旁りは「見」である。№4（7図7）口縁部1/5、体部1/3、底部1/3残存で、推定口径13.8cm、器高約 5.0 cm、底径約 6.8 cm、外傾度34.5°である。体下端と底部に削り調整がみられる。№15、口縁部1/6、体部1/6、底部若干残存で、器高約15cmである。内外面磨滅著しく、回転糸切り痕がわずかに認められる破片である。他に11片出土した。

その他 内外黒色処理と磨きのある小型壺と思われる小破片が出土した。

須恵器

壺 18点出土しているが、みな小破片で全容は不明である。比較的大型のもの15点、小型のもの3点である。長頸壺は、頸部のみの破片1点と、体下半と底部の破片1点である。

坏A （10図1～9）口径15cm前後のものと、13cm前後のものがあり、13cm前後のものは数が少ない。№1（10図1）は体壁と外底面に各2字の墨書があり、下の字は「田」である。大部分ロクロなで成形無調整回転糸切りである。**坏B**（9図1～4）は、胎土軟質、色調橙色、焼成不良で、器形は内黒坏に近い椀形で、口縁部はほとんど外反しない。**坏C**（9図5～6）は、坏A類の焼き損じか、2次焼成を受けたと思われるもので、色調が橙色という違いがみられ、器形、胎土等A類とほとんど変りは無い。1点だけ回転ヘラ切りと思われる破片がある。

5 溝状土壙

10基検出されたが、9基は調査地区の東半分に集中し、A区東側に1基、B区東側に5基、B区中央に3基、C区西側に1基である。方向、形態からみると次の通りになる。

東南東に走る127.0 m の等高線に平行しているのが、№2・7・8・9で、直行するのは№6である。№10は、南側の126.0 m の等高線に直行している。

方向は№2・7・8。№1・10。№4・9がそれぞれ同一方向で、№3・5・6は、いずれとも異なる。

上場長軸より下場長軸が長いもののうち、両端共長いものは№8・9で、一方のみ長いものは№1・4である。他は上場長軸が下場長軸より長い。

下場の形態でみると、先端が丸みをもつもの。ふくらむもの。尖るものがみられる。№1は

両端が丸い。No.2も両端は丸い、No.3は一方は尖り、一方が丸い、No.4は両端がふくらむ。No.5は一方が尖り、一方が丸い、No.6は一方が尖り、一方が丸い。No.7は両端が丸い。No.8は一方が丸く、一方がふくらむ。No.9は一方が尖り、一方が丸い。No.10は両端が丸い。

短軸の長さをみると大部分は非常に短く、全体のプランが細長い感じであるが、No.4と9は他に比べやや長く、全体がずんぐりした感じである。

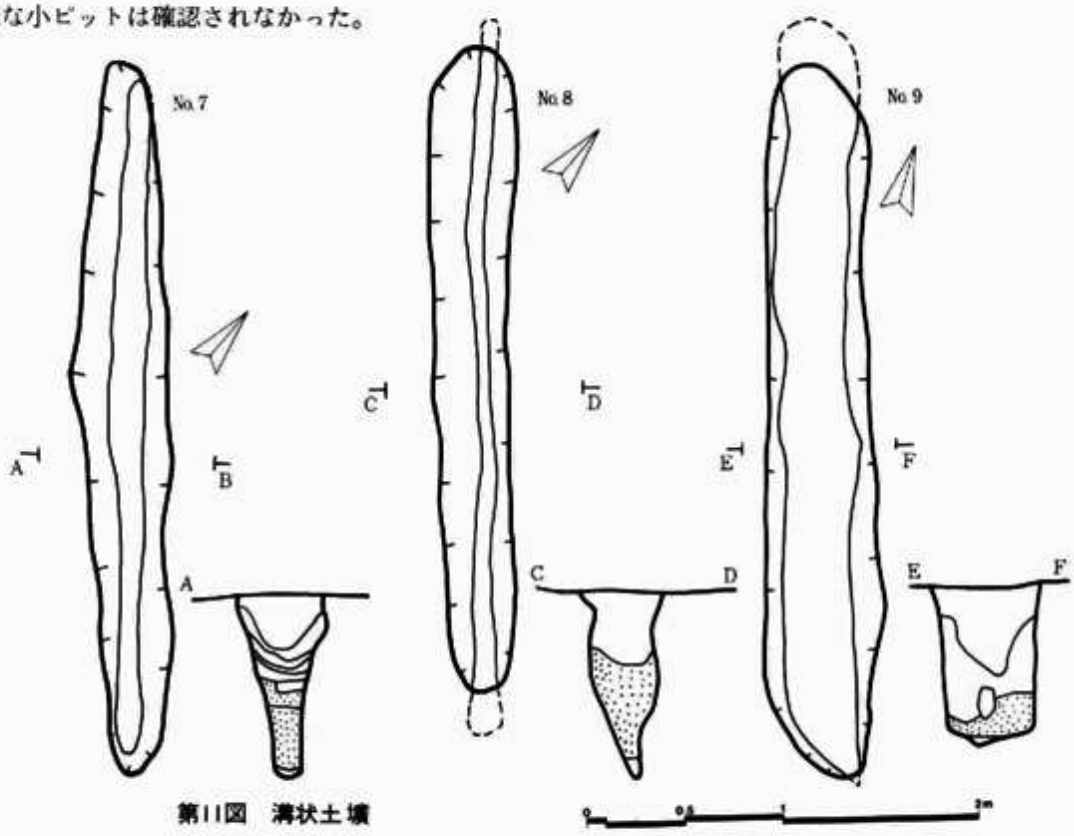
深さはNo.7・8・9が90cm台で、No.1・2・3・4・5は60～70cm台、No.6と10は50cm台で、1ケ所にやや集中している。No.7・8・9と、No.1・2・3・4・5がそれぞれ同じ位の深さで、少し離れて孤立したNo.6とNo.10が同じ位の深さである。

上場長軸の長さは、短いのがNo.6の2.04m、次いでNo.5の2.64m、次にNo.10の2.73m。3.30m台がNo.2・4・8で、3.60m前後がNo.1・7・9。No.3が4.04mで、東側に集中しているものが大型で、離れているものは、比較的小型ということになる。

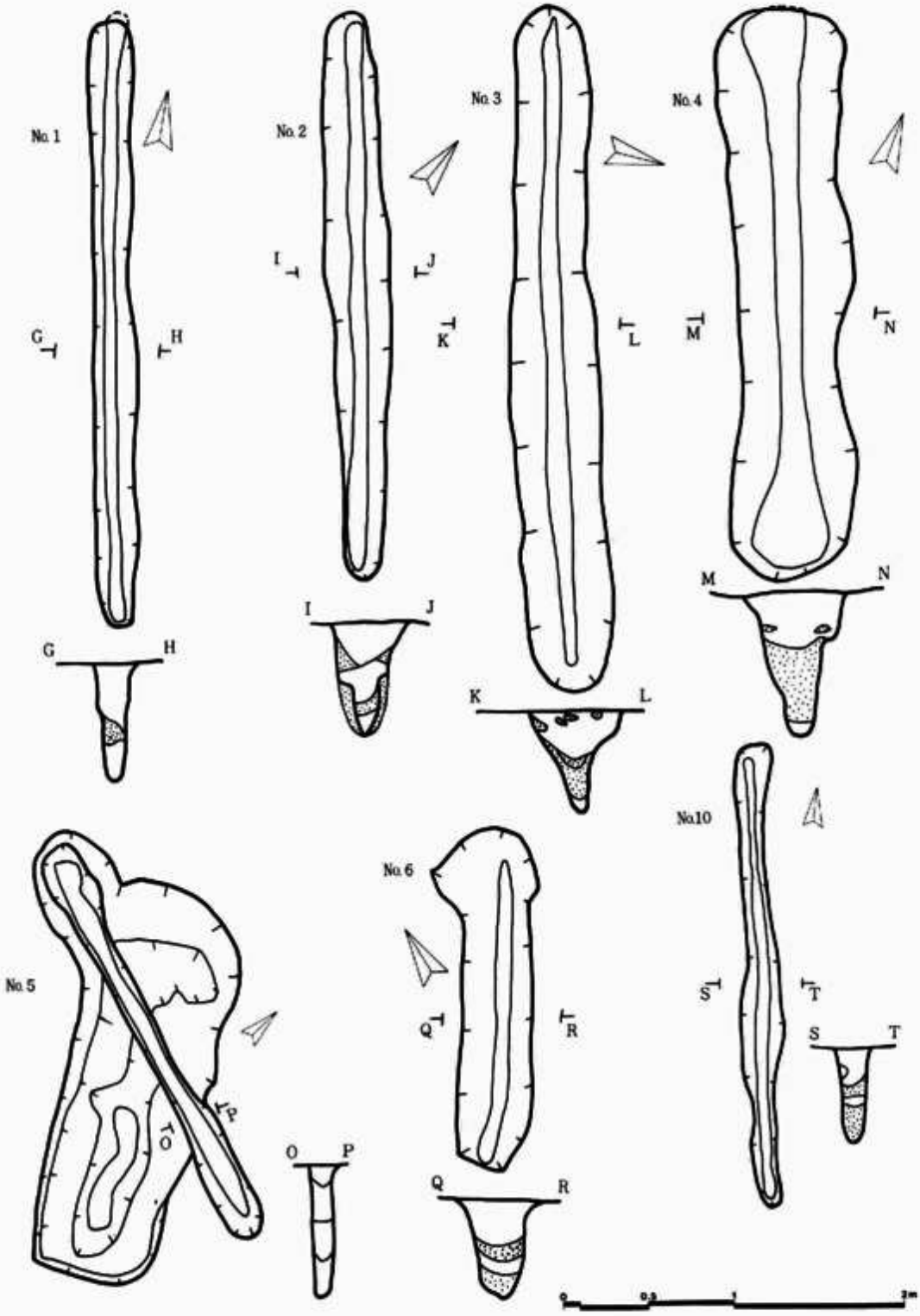
断面は、上場短軸に比べ、下場短軸が極端に短かくなる「V字型」がNo.2・3・6・8で、上場短軸と、下場短軸の長さがほゞ違わない「U字型」が、No.1・4・5・7・9・10である。

同一曲線上に並ぶように思われるものはNo.2・3・4・5・6と、No.7・8・9・10である。

下場の長軸断面は、いずれも平坦で凸凹はなく、両端が除々に高くなる。底面に杭を打った様な小ピットは確認されなかった。



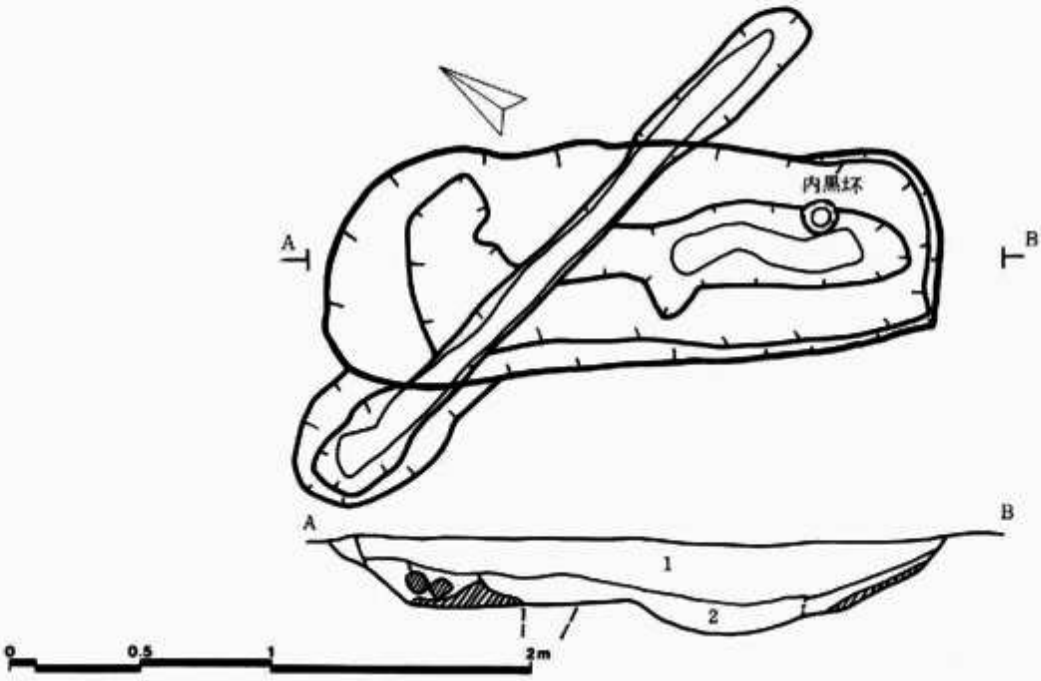
第11図　溝状土壙


No.1
G
H
G
H
No.2
I
J
I
J
No.3
K
L
K
L
No.4
M
N
M
N
No.5
O
P
O
P
No.6
Q
R
Q
R
No.10
S
T
S
T

第12図　溝状土壙

位置はNo.1がＢＧ68区。No.2がＢＣ74区。No.3がＢＦ80区。No.4がＢＦ86区。No.5がＢＧ89区。No.6がＡＨ71区。No.7がＢＦ03区。No.8がＢＩ06区。No.9がＢＩ09区。No.10がＣＢ48区である。

方向は、No.1はＮ－10.0°－Ｗでほぼ南北方向。No.2はＮ－40.0°－Ｗでほぼ北西－南東方向。No.3はＮ－73.0°－Ｅでほぼ東西方向。No.4はＮ－20.0°－Ｗで、北北西－南南東方向。No.5はＮ－75.0°－Ｗでほゞ東西方向。No.6はＮ－35.0°－Ｅでほぼ北東－南西方向。No.7はＮ－40.0°－Ｗでほゞ北西－南東方向。No.8はＮ－40.0°－Ｗでほぼ北西－南東方向。No.9はＮ－15.0°－Ｗでほゞ北北西－南南東方向。No.10はＮ－10.0°－Ｗでほゞ南北方向を向いている。



第13図　Ｂｇ89土壙

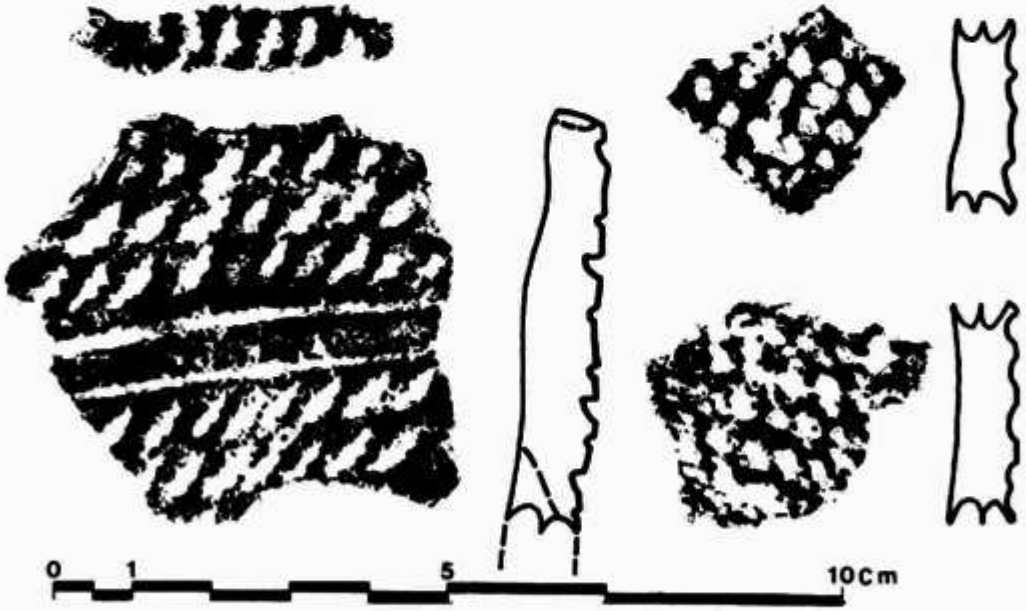
推積土は、黒褐色腐植土と黄褐色粘土層である。11・12図に黄褐色粘土層は打点で示した。遺物は、推積土中からは10基の溝状土壙共出土しなかった。

6 土 壙

（遺構の確認） 基準点 622＋00より北へ 8.19m～10.50 m。基準線から東へ 41.20 m ～42.5mの地点、Bg 89区に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は明黄褐色粘土層である。

（重複） 溝状土壙№5（Bg 89）と切り合いで、埋土の状況から、溝状土壙を切って土壙がつくられており、土壙の方が新しいと思われる。

（平面形・方向） 上場長軸約2.36 m、短軸0.85 m。下場長軸2.00 m、短軸0.30 mの長方形である。方向はN－35.0°－Wで、ほぼ北西－南東を向く。



第14図 表土から発見された遺物

（底　面）　整地されておらず、堀方状の凸凹が著るしい。壁との境はなく緩傾斜している。深さは約30cmである。南東側がやや深い。

（推積土）　ほゞ２層に分れるが、粘土（地山の混入量の違いだけで、ほゞ同じ土質である。

１層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、柔かく粘性は無い。

２層　10ＹＲ2/3黒褐色腐植土層、柔かく粘性は無い。粘土が粒状又はブロックで混入する。

（年代決定資料）　南東側の東寄の地点、埋土１層の下面から、土師器の内黒坏が１点出土した。（５図５）完成品で、口径13.3cm、器高 5.4～5.6cm、底径 6.4cmである。口縁部は直立し、口端部は丸みをもつ。体型はやや丸みをもちやや外傾する椀形である。外傾度は32.0°である。体部下半は回転ヘラ削調整痕がみられる。外底面は回転糸切。口端部外面にも磨き黒色処理が認められる。墨書が認められるが、磨滅して明瞭でない。内面は体底部共横磨きである。

Ⅳ　表土などから発見された遺物

稲荷遺跡は、湯沢Ａ・Ｂ、下羽場遺跡と共に、調査前に表土除去が重機によっておこなわれた。その際、遺構の検出されなかった地点に表土を集積していた。この盛土の中から若干の遺物を採集したので、整理してみると、土師器甕、坏、須恵器壺、長頸壺、片口、坏等の破片であった。これは、住居跡内にあった遺物が、撹乱と重機の表土除去によって散乱し、盛土の中に混入したと思われるのである。

こうした遺物の中に、縄文土器の破片が若干あった。全部で８片発見されたが、盛土は高さ２ｍにも達しており、未だ埋もれている可能性はある。１つは14図左のもので、口端部に一列、口縁部外面に３列、貝殻腹縁による斜刺突紋が並び、次に２本の沈線が横に走り、その下に、貝殻紋が３列横に並んでいる破片で、貝殻の腹縁は長さ 0.7cm～1.0cmで、３～４ケ所の凸部凹部をもっている。貝殻の表面を下に、内面を上に向け、右斜め下から、左上に向って刺突したようである。口端部も貝殻の表面を下に内面を上に向け、右斜め下から左上に向って刺突している。沈線は、巾 1.0mm～2.0 mmの細いもので、２本の間は 6.0 mm～7.0 mmである。口端部から沈線迄の間隔は 2.5cmと 3.7cmである。体壁の厚さは口端部で６mm、体部で７mmから９mmである。口端部から外面で５cm下、内面で 4.4cm下に、粘土巻上げの際上段と下段の貼付けた痕が一部剥離していてはっきり認められる。胎土は砂が多く含まれ、焼成はあまり良くない。

その他に繊維を含んだ土器片が７片ある。すべて体部の小破片で、粗い縄文が施され紋様は認められない。（14図右２片）

V　遺構と出土遺物のまとめ

今回の調査で発見された遺構は、溝状土壙10基、竪穴住居跡4棟、土壙1基である。溝状土壙からは遺物の出土はなかったが、表採遺物中の縄文早期土器片が、同時期の遺物の可能性がある。住居跡4棟出土の遺物は、今後も検討する必要があり、はっきり同時期だとは断定出来ない。土壙出土の遺物は、住居跡の年代とそれほど大きい違いはないと思われる。

第1表　遺構一覧表

項目／住居跡	規模（東西×南北）壁高	形状	主軸方向	かまど 位置	かまど そで	かまど 煙道	かまど 煙出	床面 貼	床面 掘方	主柱穴	周溝	貯蔵穴状ピット	備考
1号住（Be21）	2.10m×1.90m 0.02m～0.05m	方形	南東	南壁 東端	有 袖石各1	無	無	無	無	1?	無	1？	検出面 掘りすぎ？
2号住（Ca24）	4.90×5.30 0.03～0.09	四辺形	東	東壁 南寄り	無	無	無	無	無	4	無	3？	かまどは溝で破壊、掘方と焼上のみ
3号住（Bj33）	3.24×3.32 0.08～0.13 0.13～0.20	平行四辺形	北	北壁 中央	有	無	無	有	無	無	無	1	東西に拡張
4号住（Ca51）	5.65×5.75 0.06～0.08	方形	北西	西壁 中央	無 要各1	有	有	無	無	4	1部有	1	検出面 掘りすぎ？

項目／溝状土壙	上場 長袖	上場 短袖	下場 長袖	下場 短袖	深さ	方向	下場形態	断面	備考
No.1 Bg68	3.57m	0.25m	3.60m	0.06m	0.68m	N—10°—W	両端やや膨らむ	U	下場、北端のみ長い
No.2 Bc74	3.33	0.35	3.25	0.07	0.68	N—40°—W	両端尖る	V	下場、両端共短い
No.3 Bf80	4.04	0.51	3.82	0.10	0.59	N—73°—W	西端北へ反る	V	下場、両端共短い
No.4 Bf86	3.37	0.60	3.32	0.15	0.74	N—20°—W	両端膨らむ	U	下場、北端のみ長い
No.5 Bg89	2.64	0.16	2.36	0.10	0.78	N—75°—W	両端北へ反る	U	下場、両端共短い
No.6 Ah71	2.04	0.70	1.80	0.07	0.55	N—35°—W	東端尖り北へ反る 西端尖り南へ反る	V	下場、両端共短い
No.7 Bf03	3.62	0.45	3.42	0.18	0.98	N—40°—W	両端東へ反る	U	下場、両端共短い
No.8 Bi06	3.30	0.39	3.63	0.05	0.94	N—40°—W	南端のみ膨れる	V	下場、両端共長い
No.9 Bi09	3.61	0.55	3.90	0.40	0.90	N—15°—W	北端膨れる 南端尖り東へ反る	U	下場、両端共長い
No.10 Cb45	2.73	0.14	2.60	0.05	0.54	N—10°—W	両端やや膨れる	U	下場、両端共短い
Bg89 土壙	2.36	0.85	2.00	0.70	0.35	N—35°—W	長方形・掘り方		7号溝状土壙と切合

第2表　遺物一覧表

項目 / 遺構名	土師器				須恵器						鉄滓	備考
	甕	小型甕	内黒坏	内外黒壺	壺	小型壺	長頸壺	坏A	坏B	坏C		
1号住 Be21									1			かまど燃焼部 ・回転糸切り ・ロクロなで成形無調整
2号住 Ca24	1	7			2			3			5	・小型かめのうち1は須恵器か ・坏Aのうち1は鉢型 1は回転ヘラ切り
3号住 Bj33	1				3			1				・坏Aは回転ヘラ切り
4号住 Ca51	8＋60片	6	3＋11片	1	15	3	2＋1？	19＋31	7＋63	8＋2		・甕5点は頸部有段 甕10点は頸部無段 ・坏Cに1点回転ヘラ切り
Bg89 土壙			1									・内底面上向きで出土

Ⅵ　遺跡の構成

今回の調査によって発見された遺構は、溝状土壙10基、住居跡4棟、土壙1基である。溝状土壙は、縄文時代の遺構。住居跡と土壙は平安時代の遺構と思われる。

縄文時代の遺構と思われる溝状土壙は、推積土から遺物が出土しなかったため、年代決定資料に欠けるが、表採遺物の中にあった。縄文時代早期の土器片、貝殻腹縁紋のものと、繊維を含む土器片が、関連する可能性がある。湯沢川対岸の一本松遺跡、大渡野遺跡からも、繊維を含む土器片が出土している事から、それとの関連も考え得る。

平安時代と思われる住居跡4棟については、出土遺物をみると、1号住居跡は須恵器坏B類1点のみの出土で、他の3棟の住居跡との比較は困難であるが、体壁が丸みをもち、ロクロなで成形無調整、回転糸切りである点、周囲の住居跡と、大きな時代差は考えられない。2号、3号住居跡は、どちらも体壁が直線的で、器高の低い、回転ヘラ切りの坏A類が出土している点、あまり大差の無い時期と思われる。4号住居跡は、回転ヘラ切りの坏A類は出土せず、大部分回転糸切りで、体壁にやや丸みをもつが、長胴の甕は、底部が外に張り出し、古い成形技法の跡がみられると共に、本来須恵器の成形技法と思われる。口端部を上に挽き出す点と、放射状の叩き目痕がみられる甕も1点出土している。又、この地域でみられる共通点に、長頸壺を共伴す

る住居跡は、平安時代に多いのではなかろうかという事から、4号住居跡は、2号、3号住居跡の時期とそれほど違いはなく、同時期又はそれ以降ではないかと思われる。

土壙については、5号溝状土壙を切っている点、埋土1層から出土した内黒坏が住居跡と、それほど時期差が無い点からみると、平安時代の住居跡と、ほぼ同時代の可能性がある。尚、坏A類は、胎土硬質、環元炎焼成の土器で、坏B類は、胎土軟質、酸化炎焼成の土器である。

Ⅶ まとめ

○調査の結果、溝状土壙10基、住居跡4棟、土壙1基である。

○溝状土壙は、断定は出来ないが、表採された縄文早期土器と関連する可能性がある。

○住居跡4棟は多少の時代差はあるが、平安時代のものと思われる。

○土壙は、平安時代のものと思われる。

○溝状土壙について遺構の性格や分類等は、基準となるべきものが無いため、どのようなまとめをするかは、今後の課題といえるが、一応今回は、方向、規模、平面形、断面等を観点としてみた。

○住居跡については、主軸方向、規模、平面形、かまどの形態、柱穴、周溝、出土遺物等、考察、分類の観点はあるが、4棟については、それだけでは断定し難い。主軸方向、かまどの位置と形態は、4棟いずれも異なっている。遺物については、比較検討すべき資料は非常に少なく、特に古代から中世に移行する過渡期のものは少ない。特に必要とする時期差、地方差の資料が少ないため、充分な検討を加える事が出来なかった。特に土師器と須恵器の区分に疑問をもつ遺物が、甕、壺、坏に多くみられた。土師器と思われる甕に、口端部が上に強く挽き出され、外側が横に張り出しているものや、小型かめに内外面が橙色で、胎部が灰色で焼成が良好なものがみられ、坏にも胎部のみ灰色で焼成の良好なものがみられ、須恵器と断定せざるを得ない物がある。須恵器にも焼成悪く、軟質で、灰白色やにぶい橙色を呈するものもみられる。又1号・4号住居跡出土の坏類は、大部分椀形で、かなり直立し、底径が小さい。

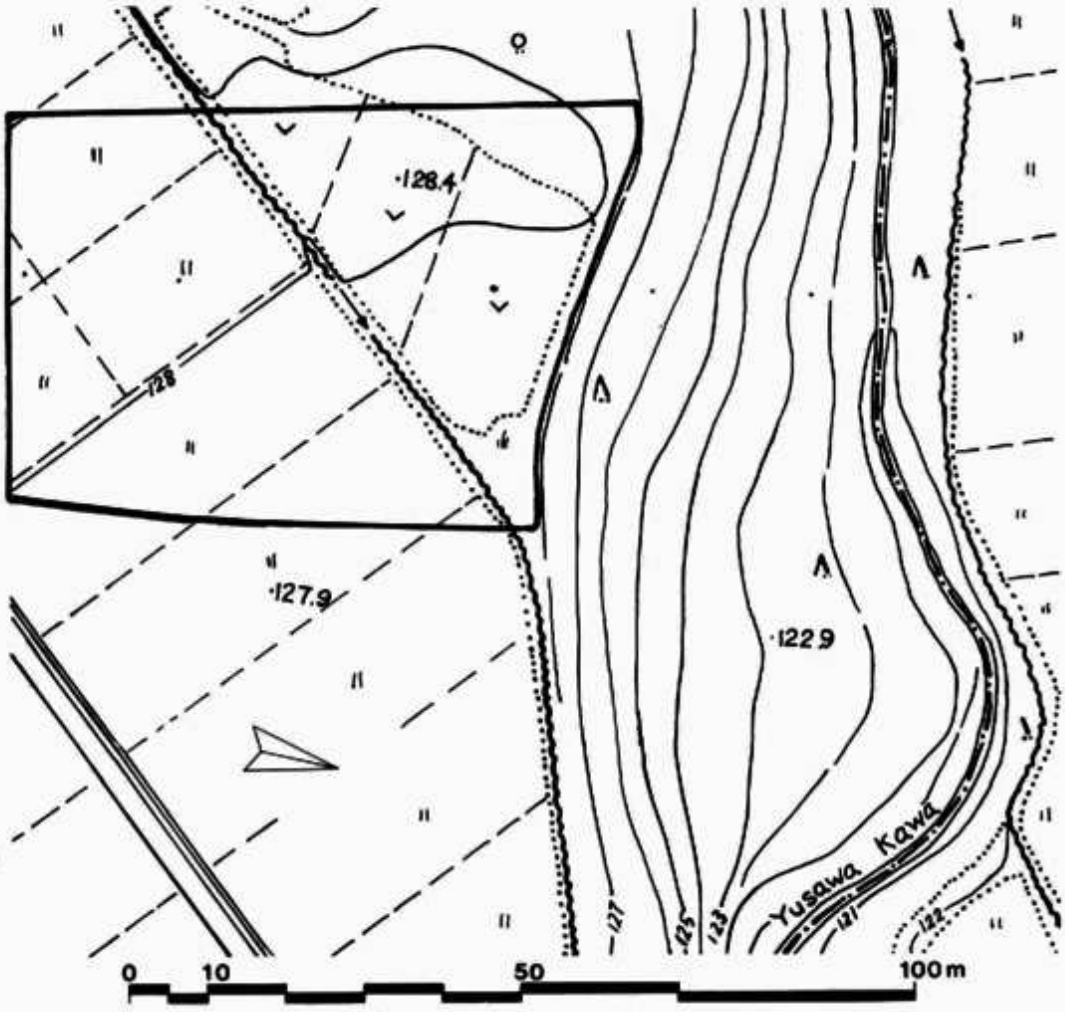
○4棟の住居跡は、湯沢川北岸段丘面に点在し、東西に並ぶが、当遺跡が1つの単位集落ではなく、西側に隣接する湯沢A遺跡に続いており、両者が一つの集落と思われる。又、湯沢A遺跡が遺跡の西端ではなく、更に西側の畑地等に、ほゞ同時期と思われる遺物の包蔵地がある事から、更に段丘の縁に沿って西へ続いていると思われる。

一本松遺跡

遺　跡　名：一本松(略号 I PM75)
遺跡所在地：紫波郡矢巾町赤林字一本松54 他
調 査 期 間：昭和50年9月10日～12月4日
調査対象面積：2,000㎡
発掘調査面積：2,000㎡

I　遺跡の位置と環境

位置と地形：一本松遺跡は、紫波郡矢巾町赤林字一本松にあり、矢巾町の最北端、東北本線岩手飯岡駅の西南西約2㎞の地点である。東流する湯沢川の南岸段丘面の北端に立地している。遺跡の北端は、段丘崖で杉林が東西に続く。北半は畑地、南半は水田であり、用水路が縦横に堀られている。又遺跡の西方約6㎞には、南北に箱ケ森、赤林山、毒ケ森、南昌山、田沢山、東根山、黒森山等800ｍ～900ｍの山が連らなり、ここを水源とする小河川が数条東流し、北上川及び、鹿妻堰に合流している。又遺跡の西方2.5㎞には、南北に飯岡山、湯沢森、城内山等300ｍ台の丘陵が点在する。この丘陵の周辺には縄文時代の遺跡が多く存在している事が知られている。尚一本松遺跡は、湯沢森の周辺に在る遺跡群と近接しており、段丘の縁沿いに東方に広がっている。従って調査対象となった地区は、遺跡の西端部に当たると思われる。尚標高は約127ｍ～128ｍである。



第1図　一本松遺跡地形図

Ⅱ　調査の方法と経過

一本松遺跡の調査方法は、概に昭和48年度に調査が行なわれ、大部分の表土が除去されて、遺構の検出がなされているため、グリッドの設定、区名の表記等は、48年度の調査に基づいて行なった。又48年度の調査報告に依れば、縄文土器の破片が北半から出土している。土師器、須恵器を伴う竪穴住居跡７棟＋α。焼土遺構数基。溝十数本が検出された。とある。

調査の方法

調査区の設定　道路公団設定の中心杭619＋60と、619＋40の２点を通る直線を基準線とし、619＋60の地点から北へ40ｍの地点以北をＡ区、それ以南をＢ区、619＋60の地点から北へ10ｍの地点以南をＣ区とした。Ａ区は段丘面の縁に当り、杉林と笹藪である。Ｂ区は主に畑地、Ｃ区は水田である。各区は北端から南へ３ｍ毎にａ～ｊの記号を付け、基準線より西へ３ｍ毎に03・06～30、東へは50・5356～80の記号を付け、各グリッドの名称とした。

尚基準線は、真北より西へ約13°傾いている。

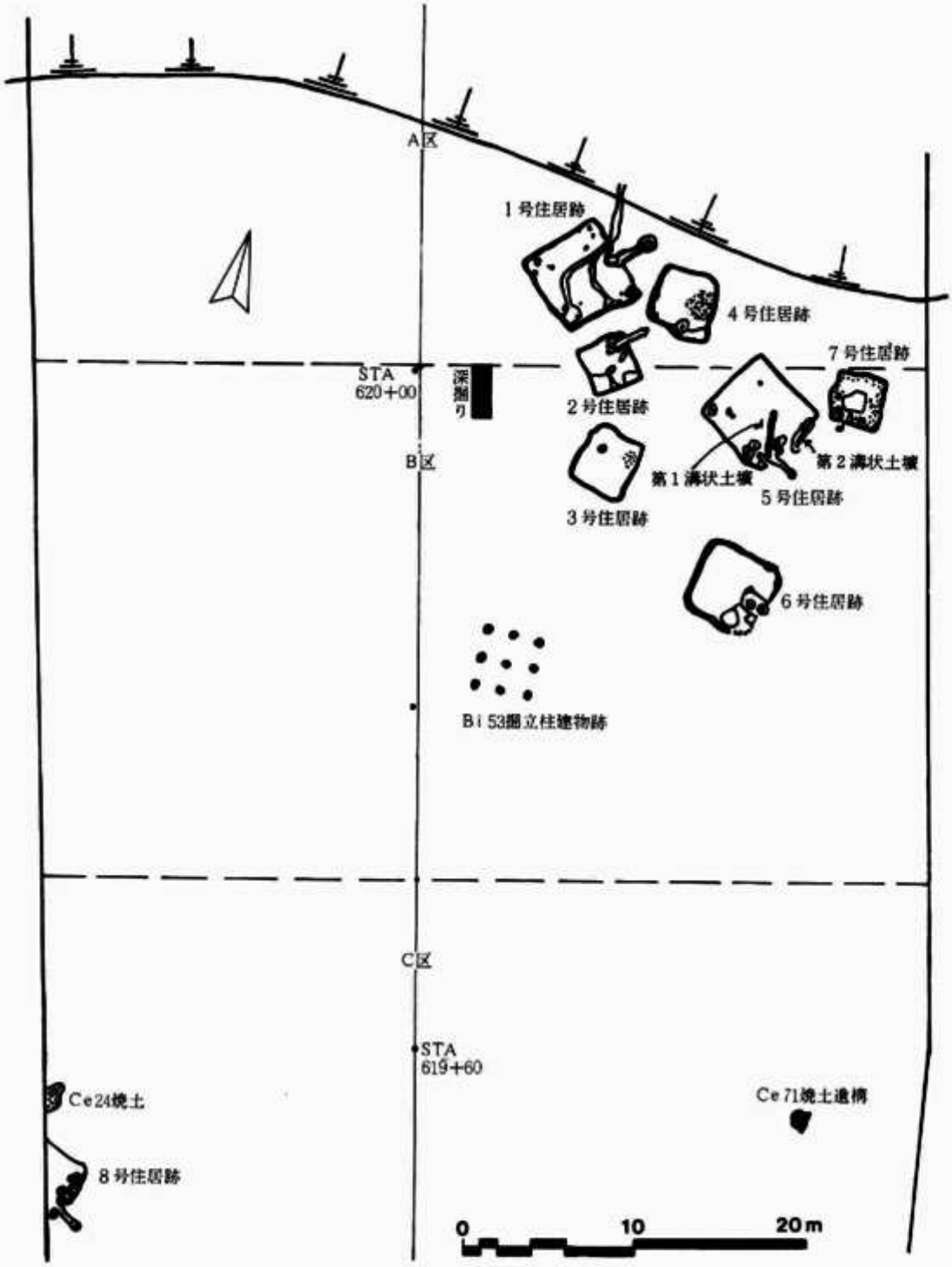
発掘調査の経過　昭和48年度の調査では、東西３ｍ南北６ｍ単位で、千鳥に表土除去を行ない、遺構が検出されると、その周辺の表土は全て除去する方法で行なわれていた。３×６ｍのグリッド間は畔を残し、耕作土及び表土の深さを測定出来得るようにしてあり、遺構確認面は明瞭であった。そこで今回の発掘調査では、遺構確認面まで全面発掘をすることとし、遺構の周囲は手掘りで、遺構の検出されなかった地域は重機で、全ての表土を除去した。尚調査地域の北東端は、未検出であるため、表土除去と遺構検出、検出された遺構については精査を実施した。遺構の精査に当っては、住居跡と、焼土遺構については、どのような過程を経ながら埋っていくのかを検討し、遺物の包含状態と位置を確認するために、畔を十字に残し、四分法による精査を実施した。四区分した位置は、北東部をQ_1、北西部をQ_2、南西部をQ_3、南東部をQ_4と呼ぶことにした。掘立柱建物跡については、東西に一線を引き、南側半分を先に掘り下げ、断面の観察により埋土の状態を記録した後、北半分を掘り下げた。

堆積土の層位区分の方法は、土色、土性、混入物等の性分について観察し、記録を作成した。

実測図の作成、発掘調査を実施した遺構は、総て1/20のセクション図、平面図を作成し、レベルを記入した。これは遺構の周囲にグリッドの座標にある基準点を落とし、１ｍ毎の升目を固定してつくり実測した。レベルは、標高杭を遺構の周囲に数本設置して計測した。

調査の結果　昭和48年度の調査で検出された遺構の配置図が出来ていたため、その分の精査は容易に進められた。又北東端の未検出分の表土除去も平行して進められた。その結果、住居跡８棟、掘立柱建物跡１棟分、焼土遺構２基、溝状土壙２基が検出された。住居跡は８棟共に平安時代と思われ、７棟が北東部に集中し、溝状土壙は住居跡１棟分の下から検出された。

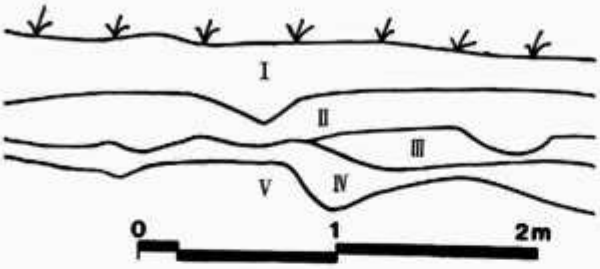
基本層序は、Ｂ区の北端、基準線の東３ｍの所に南北３ｍ東西1.5ｍの深掘りを行ない、観



第2図　一本松遺跡　遺構配置図

察した。その結果、表土下の遺構検出面は、湯沢川の北側ほどではないが、粘性のある不帯水層で、大部攪乱のためか起伏凸凹がみられた。Ⅲ層はシルト質で褐鉄鉱の沈澱が各所にみられた。Ⅳ層は粘性の強い、密な層である。Ⅴ層は砂とシルト質土で礫を多く包蔵している。

第3図　基本層序



Ⅰ＝10YR2/1　黒色腐植土層
Ⅱ＝10YR5/6　黄褐色火山灰層
Ⅲ＝10YR6/4　にぶい黄橙色シルト層
Ⅳ＝7.5YR5/8　明褐色粘土層
Ⅴ＝5Y7/2　灰色砂質シルト層

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1号住居跡（Ａｈ56住）

（遺構の確認）　段丘面の北端に当るＡｈ56区及びその周辺で、黒色～黒褐色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復・増改築）　東西に走る巾約40cmの新しい溝（用水路か）と、南北に走る巾約45cmの溝によって住居跡が十字に切られている。特に東西に走る溝は、かまどの右袖（南側）を切っているため、右袖は壁に接した部分しか残存していない。

（平面形・方向）　東西5.0ｍ、南北5.25ｍの方形であるが、北壁4.7ｍ、西壁4.85ｍ、南壁4.6ｍ、東壁5.2ｍと東壁が長く、南壁が短いため、歪んだ形になっている。主軸方向は、北―48°―東で、４カ所のコーナーが、ほゞ東西南北方向を向いている。煙道は北―43°―東で、ほゞ北東を向いている。

（堆積土）　自然堆積層は４層に大別される。かまど付近は新しい溝を掘った際の攪乱と思われかまど内の焼土や炭火物、かまどの袖の破片等で複雑な状況を呈している。

１層　10ＹＲ 2/1 黒色腐植土層、密で粘性なし、中央に粉状パミスを少量包含している。

２層　10ＹＲ 2/2 黒褐色腐植土層、微量のシルトを含む。

３層　10ＹＲ 2/1 黒色腐植土層、炭化物、遺物を含む、床面の大部分をおおう。

４層　10ＹＲ 2/2 黒褐色腐植土層、シルト遺物を含む。壁沿いに厚く堆積し、中央になるにつれて薄くなり、床面中央部とはみられない。

（床面）　床面は地山をそのまま利用し、床を貼った形跡は認められない。ほゞ平坦であるが南側がやや高く、北側が低くなっている。その比高は約12cmである。床面から壁へは急角度で立上がる部分が多い。壁高は18cm～26cmである。壁沿いの施設は確認出来なかった。

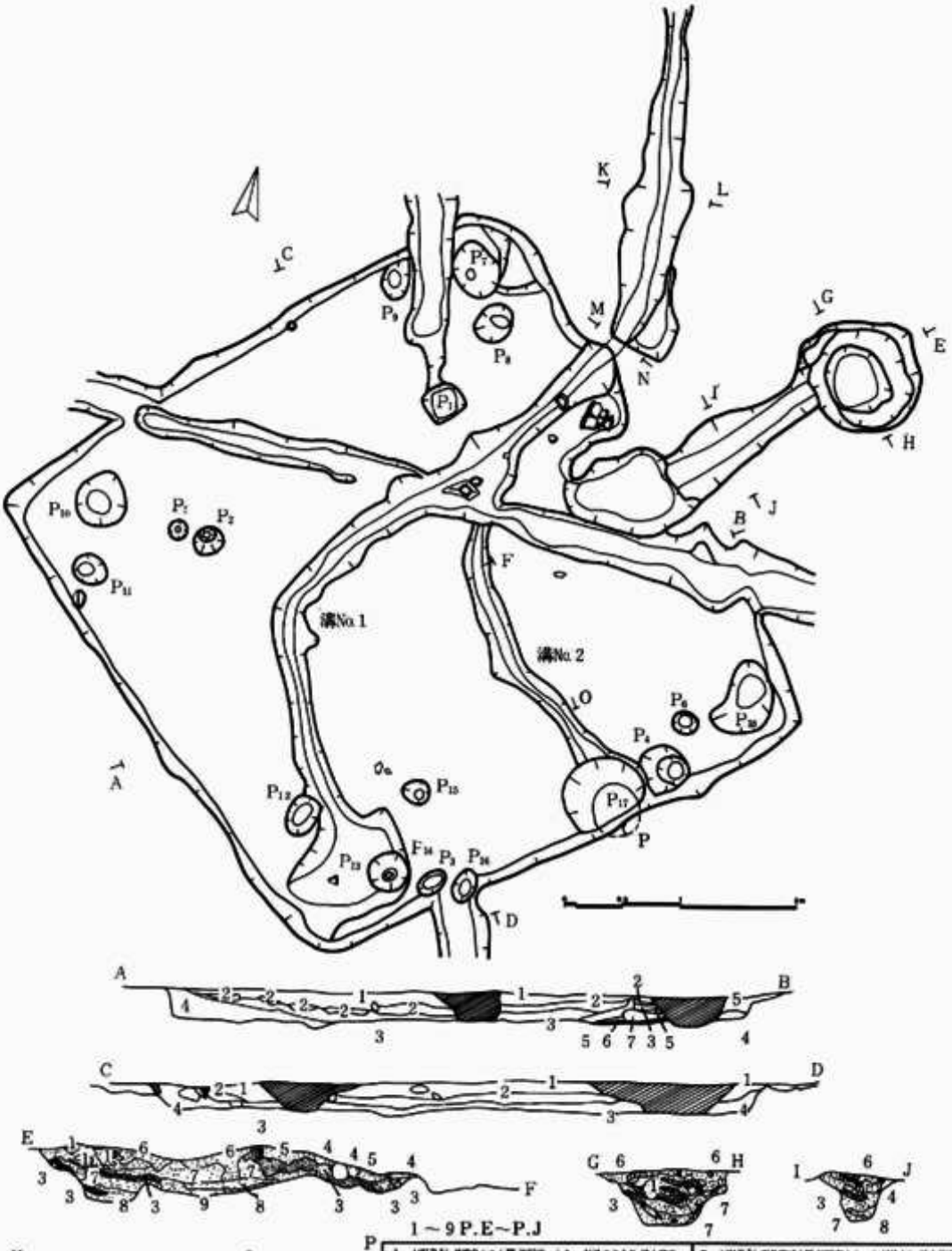
（柱穴）　床面には合計18のピットが検出されたが、主柱穴と思われるものは４である。北側の２は、北壁より中に1.3ｍ入っており、南側の２は南壁下場と接している。そのほかに住穴状ピットが２あり、１は北西側の柱穴から西へ25cmの所、もう１は南東側の柱穴から北へ40cmの所にあり、共に主柱穴より小さい。それぞれの埋土はすべて４層である。

第　1　表

	位　ち	上場径	下場径	深　さ	形　状		位　ち	上場径	下場径	深　さ	形　状
主柱穴	北東側	30×30cm	22×20cm	20cm	方　形	柱穴ピット状	北西側	14×17cm	4×4cm	13cm	楕円形
	北西側	26×25	13×15	34	円　形		南東側	22×18	11×12	10	楕円形
	南東側	25×25	12×15	53	円　形						
	南西側	25×17	17×10	25	楕円形						

（周溝）　なし。

（かまど）　東壁中央の壁を掘り込んでつくられている。燃焼部は、横50cm、縦75cmで、深



1	10YR5/6 黄褐色シルト層 指圧痕つかない 粘性ややあり 焼土若干	7	10YR5/6 黄褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土若干 4層に分
2	10YR5/6 黄褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土シルト若干	8	5YR5/6 にぶい赤褐色焼土層 攪乱層
3	5YR5/6 赤褐色焼土層 指圧痕つく 粘性なし 3層に分れる	9	10YR5/6 暗褐色シルト層 指圧痕つく 焼土・腐植土若干
4	10YR5/6 褐色焼土層 指圧痕ややつく 粘性あり 腐植土シルト4層分	1	10YR5/6 黄褐色腐植土層 指圧痕つく 粘性なし シルト若干
5	10YR5/6 暗褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土シルト	2	10YR5/6 黄褐色腐植土層 指圧痕つく 粘性ややあり シルト微量
6	10YR5/6 黄褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土シルト	3	10YR5/6 黄褐色腐植土層 指圧痕つく 粘性ややあり 以上P.K～P.N

第4図　1号住居跡

さは床面より11cm位で、浅くレンズ状に掘り込んでいる。右袖（南側）は、ほとんど攪乱のために壊され欠損している。巾は上場で12cm。下場は40cm。高さは約20cmで、長さは不明である。左袖は、長さが上場で73cm、下場78cm。巾は上場で17cm、下場34cm。高さは約15cmである。煙道は刳り貫きで、長さ 150 cm。巾25～50cm。深さ20～30cm。やや前下がりで、中程の所がやや深くなっている。煙出は上場径 100 cm。下場径40cm。深さ47cmで、上場の周縁は大部崩れ落ちた跡がみられる。燃焼部、煙道、煙出共に炭化物や焼土が多く堆積していた。

（貯蔵穴）　合計18のピットが検出されたが、貯蔵穴と断定出来るものは無かった。埋土内に遺物を包含するものはNo.13ピットのみである。又No.17は焼土炭化物を包含している。他の16は住居跡堆積土４層を含んだ浅いピットである。

（その他の施設）　排水を主とした目的でつくられたと思われる溝が２条検出された。南コーナに在るピットNo.13から北へ伸び、住居跡中央で東へ屈曲し、かまど北側を通り東壁北寄りで、壁を刳り貫いて、北へ屈曲し、北端の段丘崖に達しているもので、ピットNo.13の北側と東壁での比高は７cm。東壁と段丘崖での比高は約20cmである。又南壁中央の壁下にあるピットNo.17から北西に伸び、東へ屈曲してかまどの西側で、前述の溝に合流する溝は、ピットNo.17の北側と合流点の比高は11cmである。又溝の深さは二条共４～５cm上場の巾は20～30cm。下場の巾は５～10cmである。溝内の堆積土は、住居跡堆積土３層及び４層である。溝No.１とピットNo.13との関連は、つくった目的は別かもしれないが、同時につくられている。又溝No.２とピットNo.17は、別の目的でつくられ、しかもピットの方が新たにつくられている。

（年代決定資料）　遺物は、住居跡床面全体に散布しており、かまど及びその周辺に多くみられる。器種は、甕、壺、長頸壺、坏、高台坏である。坏はＡ類即ち、ロクロなで成形無調整、環元炎焼成。Ｂ類即ちロクロなで成形無調整、酸化炎焼成。Ｃ類即ちロクロなで成形ヘラ削り調整内面磨き黒色處理。以上の３種がある。又高台坏にもＢ類とＣ類がある。又表土と住居跡内堆積土から縄文土器と石器、及び弥生式土器が出土した。縄文土器は早期末から前期初頭と思われる胎土にせんいを含んだ土器片である。弥生式土器片は、いずれも小破片で器種、紋様、法量は明確ではない。

出土遺物

１号住居跡出土の遺物は、甕13個体、壺１個体、長頸壺１個体、坏24個体、高台坏３個体に小破片45片である。他は縄文土器片と、弥生式土器片、若干である。

甕Ａ　（５図１）平底長胴のやや小型の甕でほゞ完形である。口径 20.0 cm、底径 8.0 cm、器高 24.7 cm、体部最大径 18.0 cmで、口縁部は高さ 2.0 cmと短く、口端部が上に強く挽き出されている。口縁部と外体部上端は横なで成形で、外体部は上下にへら削り、内体部は横なで成形、外底部は上底ぎみである。胎土は軟質で粗砂粒を多く含む。色調は橙色、焼成はやや不良であ

る。2次焼成を受け体壁に煤が付着している。かまど及びその周辺より出土した。

甕B（5図2）　これは、長胴のかめであるが、口縁部が強く外反し、口端部は丸みをもつものである。口縁部⅓、体部⅓が残存しているもので、推定口径約23.0㎝で、口縁部及び体部上端が横なで成形、外体面はヘラ削りヘラなでによる成形、内体面は上下にヘラなで痕がある。胎土は軟質砂粒若干を含み、色調は浅黄橙色、焼成はやや不良である。他に口縁部若干、体部若干、底部⅓残存しているものがある。底径約7.8㎝で他は計測不能である。口縁部はかなり歪みがみられ横なで成形で、外体部に上下、内体部に横の刷毛目痕がある。外体部下半はヘラ削痕が著しい。底部は平底である。胎土はやや硬質で、粗砂粒を多く含む。色調は橙色から灰色で焼成はやや良好である。共にかまどから出土している。

甕C　これは口縁部と体部の境に段をもつもので、1個体出土している。口縁部若干体部若干の破片で計測不能である。口縁部はB類と同様かなり外反し、口端部は丸みをもつ。口縁部外面は上下に刷毛目痕が認められ、その後内外面を横なで成形している。体部は外面上端に上下の刷毛目痕が認められその下半はヘラ削りヘラなでが施され、内面は横に刷毛目痕が認められる。胎土は軟質砂粒を多く含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。

その他　口縁部が欠損している長胴の甕が5個体と、32片の細片がある。いずれも外体面上端は横なで成形、その下半部はヘラ削り、ヘラなで成形、内体面は横のヘラなで又は刷毛目痕が施されている。

甕D（5図3・4）　小型の甕で、ロクロなで成形無調整、回転糸切底である。3はほゞ完形で、口径20.6㎝、底径8.6㎝、器高16.2㎝～18.0㎝と、長胴甕と小型甕の中間の大きさで、他に出土例が無い。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はかなり張り出し、最大径18.8㎝で、体部上端の18.0㎝より大きい。胎土はやや硬質砂粒を多く含む。色調は赤褐色、焼成はやや良好で、かまどより出土している。4は口縁部と体部上半残存で、推定口径約13.1㎝である。口縁部は強く外反し、口端部が上に強く挽き出されている。底部は欠損しているため切り離し技法は不明である。かまどの北隣から出土した。

他にロクロなで成形無調整のものが1個体あるが、口縁部、底部を欠損しているため器形等は不明である。

甕E　小型の甕でロクロなで成形であるが、長胴甕と同様の成形、調整技法をもつもので体下半にへら削り、ヘラなでがみられるもので、器形はDと大差はない。小破片で実測不能であるが、1個体は、口縁部は短かく、わずかに外反し、口端部は丸みをもつ、推定口径約14.0㎝で、体壁は砂粒を多く含み、ざらざらした感じである。胎土やや硬質砂粒を多く含む。色調は黄褐色、焼成はやや不良である。尚底部は回転糸切り無調整のものと、へら削り調整をしたものとがみられる。

壺　体部下半の小破片が出土している。胎土は硬質で砂粒を多く含む。色調は黒褐色で胎部と内面は灰白色である。焼成は良好である。ピット№15の北西側床面直上から出土した。

長頸壺　長頸部下端と肩部のみの破片である。内外面共横なで成形で、長頸部下端内面は上下に強く押し付けた痕がみられる。胎土は硬質で粗砂粒を若干含む。色調は黒色、胎部はにぶい赤褐色である。焼成は良好である。

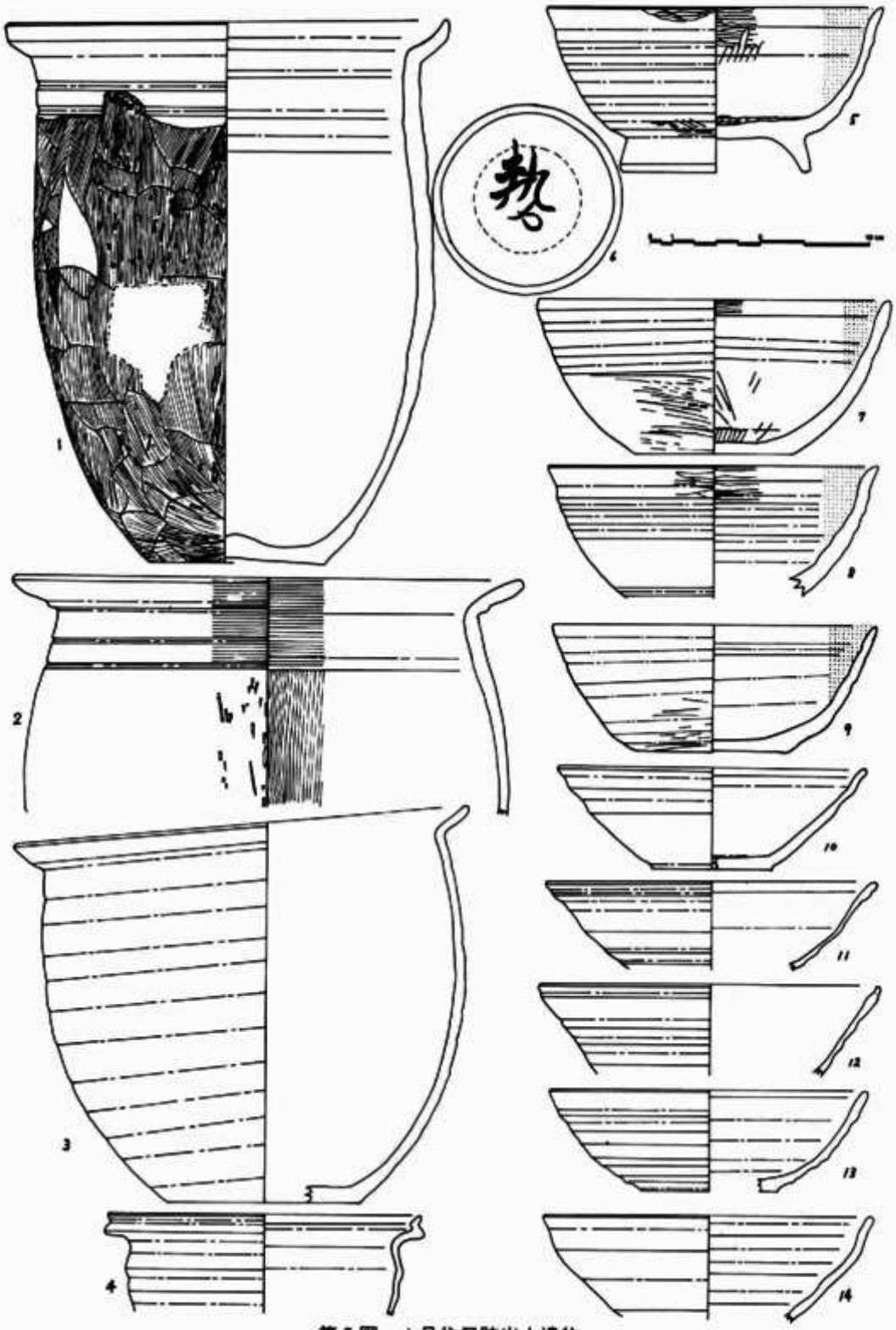
高台坏B　底部約⅓の小破片で、体部、台部は欠損している。坏B類と同様ロクロなで成形無調整、酸化炎焼成である。1片のみの出土で住居跡南東部床面上から出土した。

高台坏C　2個体あり、1は（5図5）口縁部、体部⅓、底部と台部は全部残存で、推定口径約15.3㎝、台部径8.6㎝、台部と体部の境は径8.0㎝、器高7.5㎝、台部高さ1.5㎝である。口縁部はわずかに外反し、体壁はかなり丸みをもっている。外体面下端に手持へら削り調整がみられる。口端部外面に磨き、黒色處理がみられる。内面は体部は横磨き、黒色處理、内底面は放射状に磨き黒色處理が施されている。外底面に「勢」の墨書が認められた。胎土は軟質砂粒は少ない。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良である。かまどの北面側溝内から出土した。他の1つは体部下端若干と底部の破片で、高台部が剥離欠損している。外底部内径は4.6㎝、外径6.1㎝である。内面磨き黒色處理がみられる。外体面下端は回転へラ削り調整がみられる。胎土軟質砂粒を含む。色調は浅黄橙色、焼成は不良である。南西部床面上から出土している。

坏A（5図10・11・12・13・14）　いずれもロクロなで成形無調整、回転糸切りで、環元炎焼成である。又口縁部は直線的で、外反するものは無い。**10**は口縁部体部共¼以下残存で、体部上半が、内湾ぎみである。南側コーナー付近床面出土。**11**は口縁部体部⅙以下残存で、体部上半が、内湾ぎみである。東側コーナー付近床面出土。**12**は口縁部体部⅓、底部若干残存で、体部は丸みがある。カマド内出土。**13**は口縁部¼、体部⅙以下残存で、体壁に凸凹がかなりみられ、かなり外傾している。かまどの西側床面上より出土。**14**は口縁部体部底部共に¼残存、体壁はほとんど直線的である。内外面に焼土が大部付着している。かまどの北側床面上出土。

坏B　実測不能の破片で、8個体の他に3片出土している。いずれも、ロクロなで成形無調整、回転糸切りである。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は浅黄橙色、にぶい橙色である。焼成は酸化炎焼成で不良である。体壁は直線的かわずかに丸みをもち、かなり外傾し、口縁部は外反著るしいものは無い。

坏C（5図7・8・9）　いずれも体部下端に回転又は手持のへら削り調整がなされ、内面磨き黒色處理、外底面回転糸切り後へラ削り調整がなされている。図示した3点の他に、実測不能のものが8個体＋2点出土している。**7**の口縁部は直立し内湾ぎみで、内底面の磨きは放射状である。**8**の口縁部は、わずかに外反し、外面の一部に磨き黒色處理が認められる。内底面の磨きは放射状ではない。**9**の内面は厚く粘着物があり、内底部の磨き方向は不明である。



第5図　1号住居跡出土遺物

2号住居跡

（遺構の確認）北面段丘崖から南へ8ｍのＡｊ59区及びその周囲で、黒褐色の落込みを確認している。1号住居跡の南壁と2号住居跡の北壁の間は1.2ｍ～1.4ｍである。遺構確認面は、表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復、増改築）1号住居跡を南北に切っている巾約45cmの溝が、この住居跡の西側も南北に切っている。

（平面形、方向）東西2.95ｍ、南北3.10ｍのほゞ正方形で、北東方向を向く。煙道はＮ－53°－Ｅである。

（堆積土）堆積土は5cm～10cmの単層であるが、一部に床面と埋土の間にシルト質土と埋土の混合した層が、ブロック状に存在する。

1層　10ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層、粗で、粘性ほとんど無し、遺物も包含する。

2層　10ＹＲ6/6 明黄褐色シルト層、やや密で、粘性あり、1層と混合している。

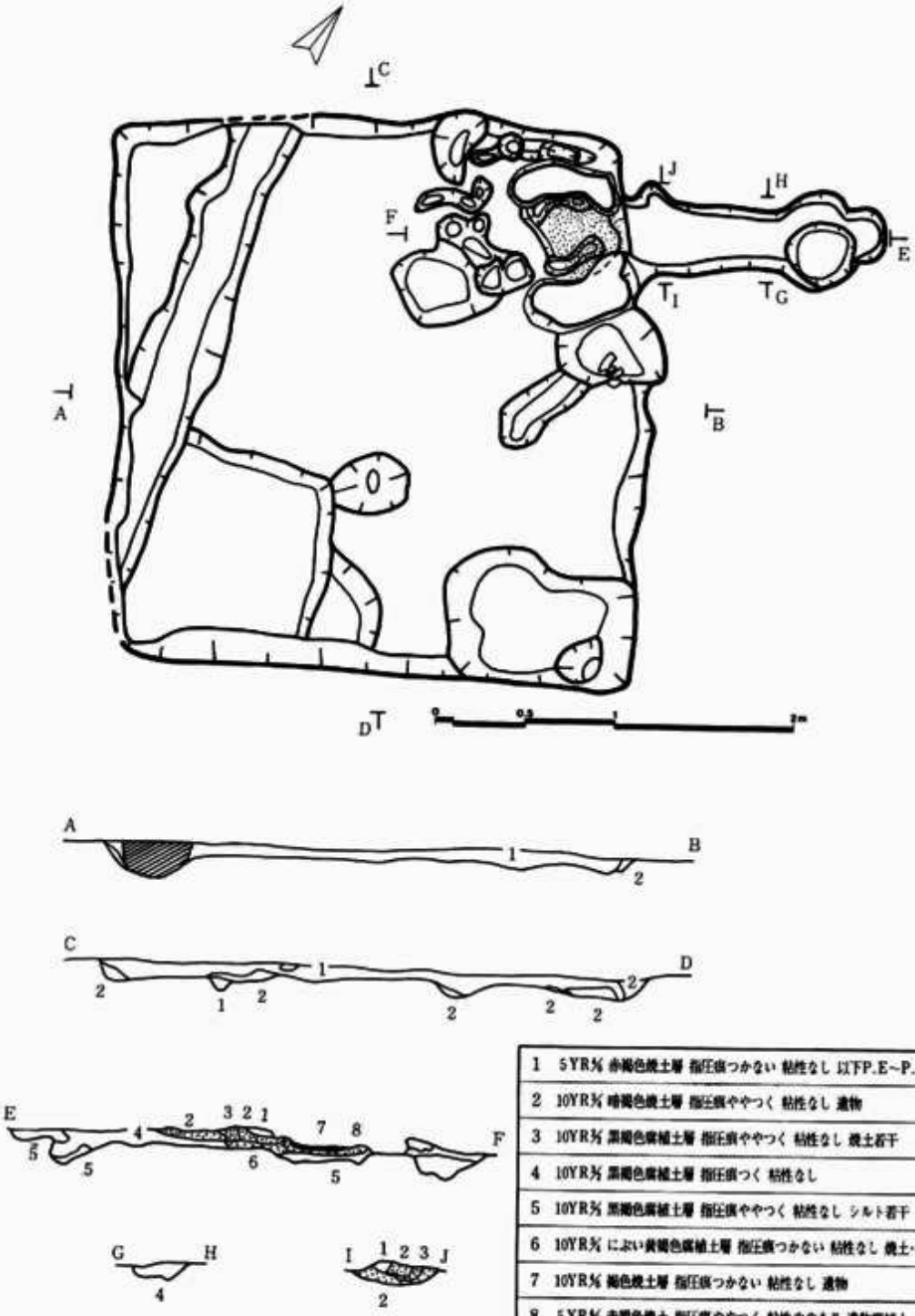
（床面）床面は軟質で、叩きしめられたような痕跡は認められない。傾斜は無いが大部凸凹がみられる。床面から壁への立上がりは、北壁が急傾斜な他は、緩やかである。壁高は約10cmで壁沿いの施設は無い。

（柱穴）無し。

（かまど）東壁北端にあり、燃焼部は巾50cm、奥行70cmで、床面より約10cm掘り下げている。底面の両側に袖に沿って細長い掘り方がみられる。燃焼部堆積土は1・2層が焼土を含み、3層は焼土を含まず、底面も焼けていない。袖は地山のシルト質土でつくられ、北側は長さ70cm、巾25cm、南側は長さ60cm。巾25cm、高さは両者共床面より約10cmであり、上場下場の間はほとんど垂直である。煙道は長さ70cm、巾30cm、深さ10cmで、傾斜はほとんどない。煙出は2段になり下部は南へ少しずれている。上場径約52cm、下場径27cm、深さ20cmである。焼土は煙道の中頃迄堆積しており、煙出には認められなかった。

（貯蔵穴）それらしきものは、かまどの両側にあり、北側のは、壁沿いに細長く、54cm×10cm、深さ7cmで、中央東寄りと、西端に掘り方状の小ピットが在り、かめの破片が若干出土している。埋土は住居跡内堆積土2層で、シルト質土がかなり混入している。南側のは、東西50cm、南北35cmの不整形で東壁にやや喰い込んでいる。深さは約10cmで、かめの体下部と底部破片が出土している。埋土は南側と同様である。又南東部のピットは、貯蔵穴かどうか断定出来ないが、東西110cm、南北75cm、底面の東西約70cm、南北約50cmの不整形で、深さ約18cm、埋土から鞴口の先端部とかめの上半部が出土している。埋土は、上記と同様Ⅱ層である。

（年代決定資料）出土遺物は16点で、甕7点、壺1点、坏7点、鞴口1点である。かめはＡ・Ｂ・Ｄ・Ｅ類のみ。壺は長頸かどうか不明である。坏はＡ・Ｂ・Ｃ類共出土している。


A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
0
0.5
1
2m
1 5YR4/4 赤褐色焼土層 指圧痕つかない 粘性なし 以下P.E~P.J
2 10YR3/4 暗褐色焼土層 指圧痕ややつく 粘性なし 遺物
3 10YR3/3 黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土若干
4 10YR3/3 黒褐色腐植土層 指圧痕つく 粘性なし
5 10YR3/3 黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし シルト若干
6 10YR3/4 にぶい黄褐色腐植土層 指圧痕つかない 粘性なし 焼土・シルト
7 10YR3/4 褐色焼土層 指圧痕つかない 粘性なし 遺物
8 5YR3/4 赤褐色焼土 指圧痕ややつく 粘性ややあり 遺物腐植土

第6図　2号住居跡

出土遺物

甕A（7図3）　口縁部⅓、体上半部⅓残存の、やや小型のもので、推定口径約15.6㎝、頸部径約13.3㎝、体部残存部最大径約16.6㎝である。口縁部はやや外反し、口端は上に挽き出される。肩部がかなり丸みをもっているのが特徴のようである。南東部ピットの西縁出土。もう1個体は口縁部⅛以下の小破片であるが、口端が上に挽き出されているものがある。これは胎土が軟質で砂粒を多く含み、色調は浅黄橙色、焼成不良で、南西部床面上から出土している。

甕B（7図1・2）　1は口縁部⅓、体上半部½残存している。推定口径約15.0㎝、頸部径約11.8㎝、体部残存部最大径15.0㎝、口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。体部はやや張り出しており、上端部は叩き目痕がわずかに認められその上を横なで成形している下半部は上下にヘラ削り、ヘラなでが施され、内面は横に刷毛目が施されている。かまど及びその周囲から出土した。2は口縁部⅙以下、体部若干残存している。推定口径約20㎝、頸部径約17㎝で、口縁部かなり外反、口端丸みをもつは、1と同様である。又体上端外面も、叩き目痕が認められ、その上の横なで成形している。体下半部外面は、ヘラ削り、ヘラなで成形で、内面は横に刷毛目が施されている。かまど内及びかまどの北側から出土した。尚図版のNo.3は、実測図の2と同一個体と思われるが、接合しない。

甕D　2個体出土している。1つは体下端¼、底部⅓残存しており、ロクロなで成形無調整で、回転糸切りである。壁面はかなり凸凹がみられる。他の1は、体部下端若干と底部¼残存しやはりロクロなで成形無調整、回転糸切りである。どちらも計測不能で、胎土はやや軟質砂粒を含み、色はにぶい橙色、焼成はやや不良である。かまど内より出土している。

甕E（7図4）　口縁部¼と体上端若干残存するもので、推定口径約13㎝、頸部径11.3㎝体部残存最大径12.2㎝である。口縁部はやや外反し、口端部はやや上に挽き出されている。体部外面は上下にヘラ削り、ヘラなでされ、内面は左上↔右下へ斜めにヘラなで成形されている。南東部ピットの縁より出土している。

壺　北東部床面から出土したもの1片で、体部下半の破片と思われる。外面にヘラ削り痕がみられ、ほとんど丸みが認められない点長頸壺かもしれない。胎土硬質砂粒を含む。色調灰色焼成良好である。

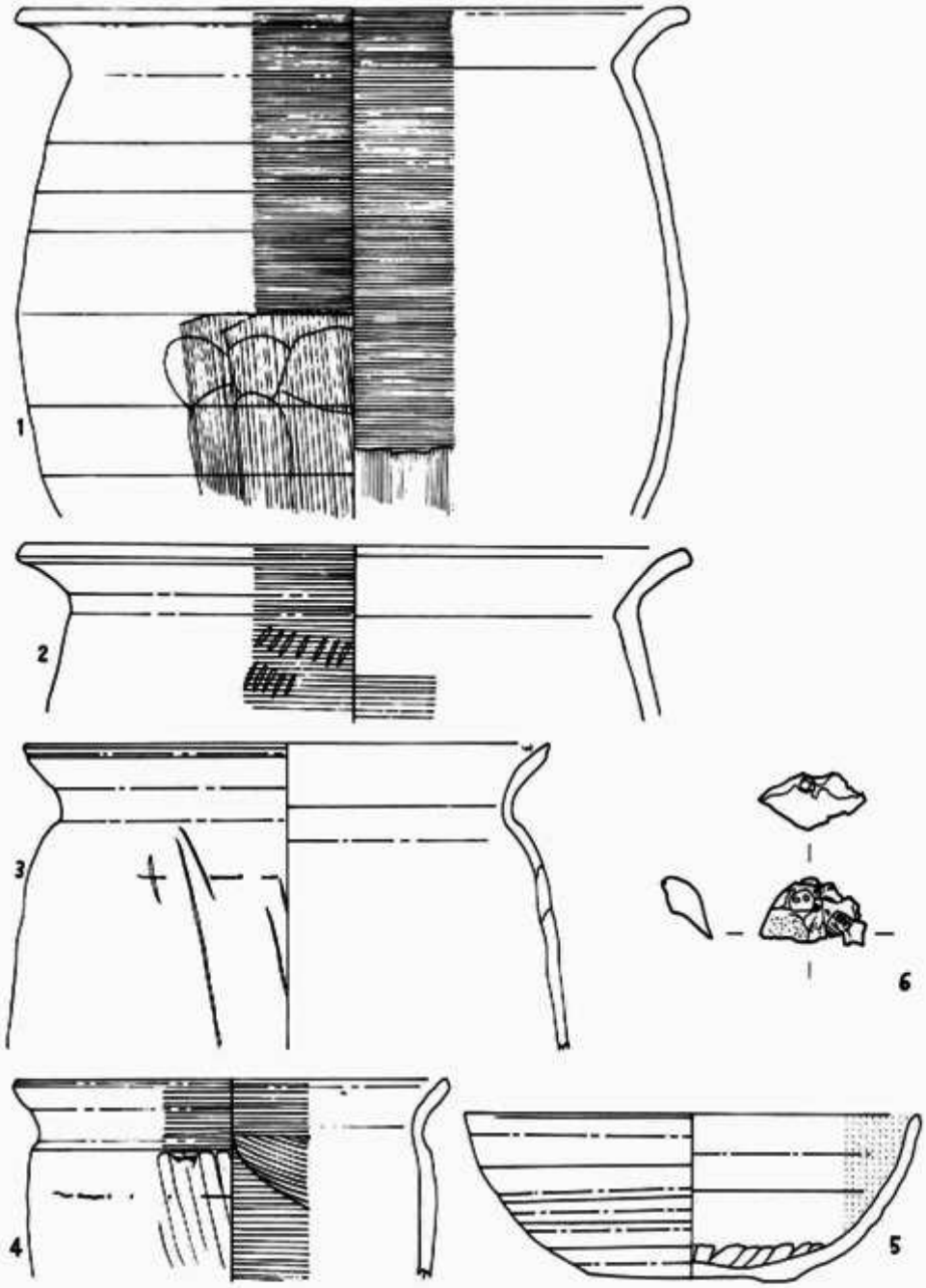
坏A　口縁部体部上半部⅛残存する。口縁部は外反ぎみで、口端部は平坦である。体部上半が、直立しているから、椀に近い器形と思われる。胎土硬質砂粒を多く含む。色調は暗赤灰色から明青灰色。胎部はにぶい赤橙色。焼成良好である。北西部より1点出土した。

坏B　小破片のみ5点出土している。内4点は口縁部で他の1は体下部である。

坏C　口縁⅔体部⅔底部全部残存、口径13.6㎝、器高4.9㎝、底径6.2㎝,内面磨き黒色處理、口縁部外面も磨き黒色處理。口縁部直立。体部丸み。底部回転糸切り、黒斑がある。外体面下半

のヘラ削り調整は認められず、ロクロなで痕のみである。かまど燃焼部出土で、C類はこの1点のみである。(7図5)

鞴口　先端部⅓の破片で、全容は不明である。長さは1.9㎝で先端部外面にガラス状の鉱滓が付着している。南東部ピット西縁から出土した。(7図6)



第7図　2号住居跡出土遺物

3号住居跡

（遺構の確認）2号住居跡の南側、Ｂｂ59区で黒色～黒褐色の落ち込みを確認した。2号住居跡の南西コーナーと3号住居跡の北コーナーの間は1.7ｍである。遺構検出面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復、増改築）1号・2号住居跡を南北に切っている巾45cmの溝が、この住居跡の西側を南北に切っている。増改築は認められなかった。

（平面形、方向）東西3.35ｍ南北3.6ｍの方形である。方向はＥ－14°－Ｓとほゞ東を向く。

（堆積土）10cm前後の単層で、黒褐色の腐植土である。大部分地山の黄褐色大山灰土が、粒状に混入している。東壁下は南北に焼土、炭化物を含む腐植土層の堆積がみられる。又南壁下にも東西に帯状に浅く掘り下げられ、焼土を含む腐植土層が入っている。

1層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、粗でやや粘性がある。火山灰土が粒状に混入。

2層　7.5ＹＲ2/1黒色腐植土層、やや粗で粘性なし。焼土地山が混入、炭化物を多量に含む。

3層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層、やや粗で粘性あり。焼土を少量含む、地山と1層の混合。

4層　7.5ＹＲ4/4褐色腐植土層、粗でやや粘性あり、地山と1層の混合。

（床面）埋土を除去するとすぐ掘方と思われる凸凹の地山面で、平坦で叩きしめられた床面は確認出来なかった。床面から壁へは、ゆるやかに立ち上がっている。壁高は10cm前後で、壁沿いの施設と思われるものは確認出来なかった。

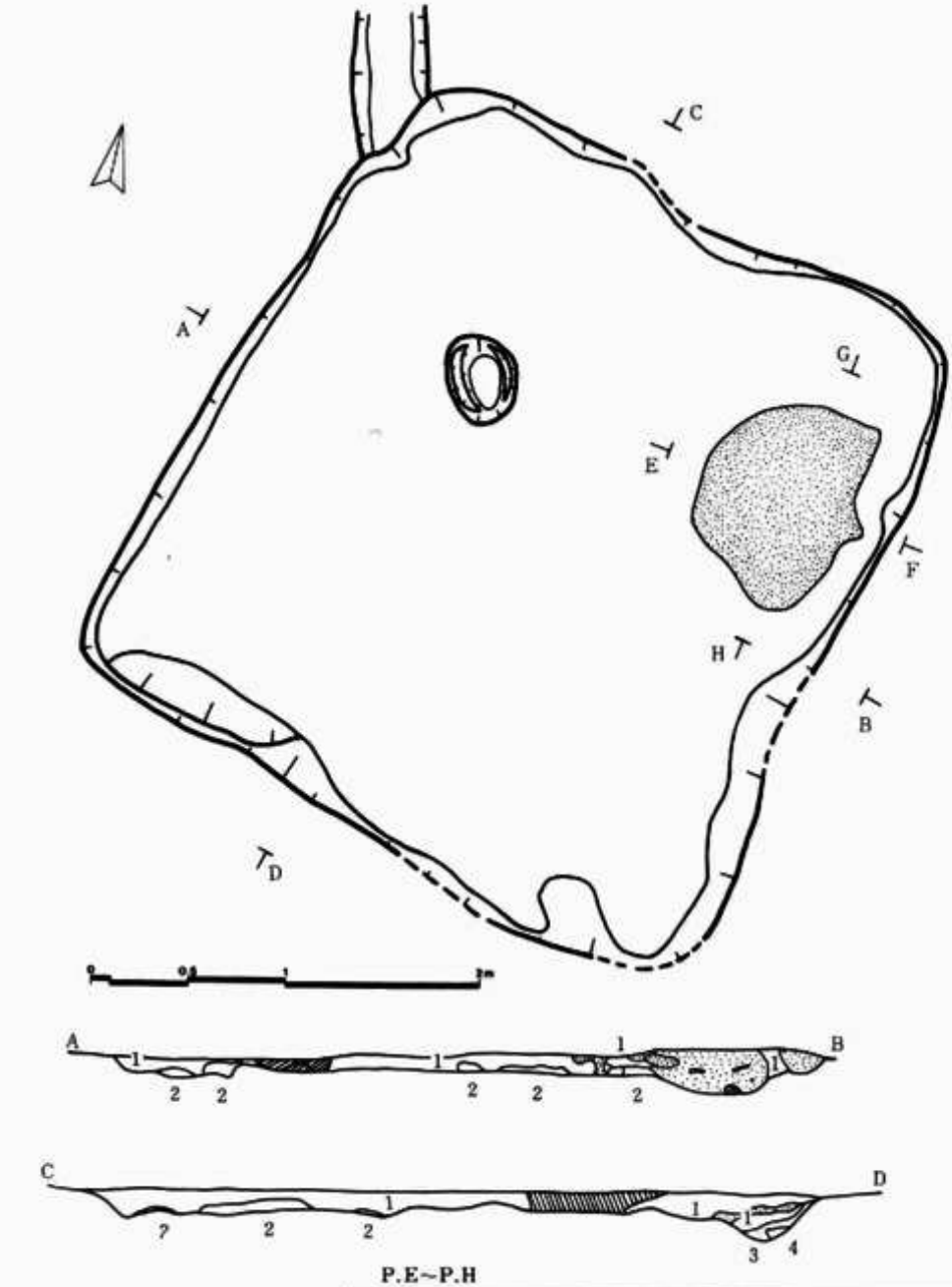
（柱穴）それらしいピットは検出されなかったが、住居跡内の中央やや北西寄りに、上場35cm×45cm深さ床面下約20cmの楕円形ピットが検出された。埋土は4層とよく似ている。これが柱穴かどうかは明確でない。

（かまど）燃焼部、煙道、煙出共に確認されなかった。東壁やや北寄りに、焼土が堆積されていたが、床面から10～20cmも浮いており、燃焼部の底面らしきものもない。むしろ東壁中央部は、焼土が床面まで混入し、遺物も多く包含されており、燃焼部の掘方状らしい凹みがみられる事から、ここにかまどがあったかもしれないが断定は出来ない。

（貯蔵穴）確認されなかった。

（その他の施設）なし。

（年代決定資料）東壁中央の焼土から土器が集中して出土し、他の場所からはほとんど出土しない。甕14点、長頸壺1点、坏8点、縄文土器片7点、砥石1点、その他甕の小破片、坏の小破片が若干ある。その内甕は、Ａ類2点、Ｂ類4点、Ｄ類3点、Ｅ類5点、坏はＡ類1点、Ｂ類5点、Ｃ類1点、Ｄ類1点である。甕の特徴は、大部分の口縁部が短く、外反する度合が小さい。又Ｂ類の内2点、Ｅ類の内1点は、口端部が著るしく細くなり、口径より体部の最大径の方が大きい。砥石は安山岩の溶岩で、縄文時代の物か、住居跡に伴うものか不明である。



1	7.5YR3/1	黒色腐植土層	指圧痕つく	粘性なし	焼土・炭化物多量
2	5YR5/6	赤褐色焼土層	指圧痕つく	粘性なし	腐植土若干
3	7.5YR3/1	黒色腐植土	指圧痕つく	粘性なし	住居跡埋土Ⅰ層か
4	10YR5/6	明黄褐色シルト層	指圧痕つかない	粘性なし	
5	7.5YR3/4	暗褐色シルト層	指圧痕ややつく	粘性なし	焼土若干

第8図　3号住居跡

出土遺物

甕A　2個体出土したが、内1は口縁部⅛以下の小破片で、口縁部と体部の境無く、ゆるやかに外反し、口端は上に挽き出されている。胎土は軟質砂粒は少ない。色調は橙色。焼成はやや不良である。横なで成形で、かまどから出土した。他の1は口縁部⅛以下の小破片で、口縁部はかなり外反し、口端部が上に挽き出されている。胎土は軟質砂粒を含む。色調は橙色であるが、前者より黄色味を帯びる。焼成は不良である。外面が磨滅著るしく、成形痕は消滅している。内面は横なで成形で、北西部から出土した。

甕B（9図1）　口縁部¼、体部約¼残存するもので、推定口径約19cm、頸部径約17.2cm、口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ。体部とは接合しないが、外体面は上下に刷毛目、内体面は上端部は横に、その下半は上下に刷毛目が施される。外体面の一部に焼土が付着している。胎土は軟質で砂粒は少ない。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良である。東壁下の焼土より出土した。他に3個体あり、1つは口縁部⅛以下、体部⅛以下の破片で、長胴形にみえる。口縁部はわずかに外反し、高さ1.5cmである。頸部にヘラ削り痕が認められる。1つは口縁部⅛以下の小破片で、かなり外反し口端は薄く丸みをもつ。1つは口縁部約¼体上端部残存の破片で、口縁部はやや外反し、短く、口端部は薄く丸みをもつ。

甕D　3点出土した。1つは底部と体部若干で、磨滅著るしく口縁部体部の全容は明らかでない。底部は径8.4cmで回転糸切り痕が認められる。体部はロクロなで成形のようである。1つは体部下端約⅓の破片でロクロなで成形である。胎土はやや軟質で砂粒少なく、色調は2次焼成を受けているため不明瞭でにぶい赤褐色の部分もある。焼成はやや良好と思われる。1つは体部のみの小破片でやはり2次焼成を受け変質している。ロクロなで成形でやや直線的な壁面をもち凸凹がみられる。

甕E（9図2・3）　**2**は口縁部⅙体部上端部⅙残存である。推定口径14.0cm、頸部径13.4cmでわずかに外反し、口縁部の高さも1.0cmと短い。口縁部は薄く丸みをもつ。外体面はヘラ削り、ヘラなで痕がやや斜めに施され、内体面は斜めに刷毛目痕が認められる。同様の破片は他に2個体出土している。いずれも東壁中央焼土より出土した。**3**は口縁部⅓体上端部⅙の破片で、推定口径12.0cm、頸部径約11.4cm、残存体部最大径約14.0cmである。口縁部はわずかに外傾し内湾ぎみで、口端部は丸みをもつ。肩部はかなり丸みをもっている。2次焼成によって大部変質し全体に細かいひびが入っている。胎土やや軟質砂粒を含む。色調は灰白色。焼成はやや不良である。東壁中央焼土中より出土した。他の1つは小破片のみで肩部1片、底部1片、体部23片で、接合不能であったため、全容は不明である。外体面はヘラ削り後刷毛目が施され、内面は上端が横に下半は縦に刷毛痕が施されている。胎土軟質砂粒を若干含む。色調は橙色。焼成はやや良好である。東壁中央焼土中より出土した。

長頸壺　1片埋土最上層から出土している。体下端と底部の一部で全容は不明であるが、底部が上げ底なので長頸壺と思われる。底部径は約7.5㎝である。体下端部外面は横なで、内面も横なで成形である。胎土は硬質砂粒若干を含む。色調は黒褐色、内面は褐灰色、胎部は灰赤色。焼成はやや良好である。

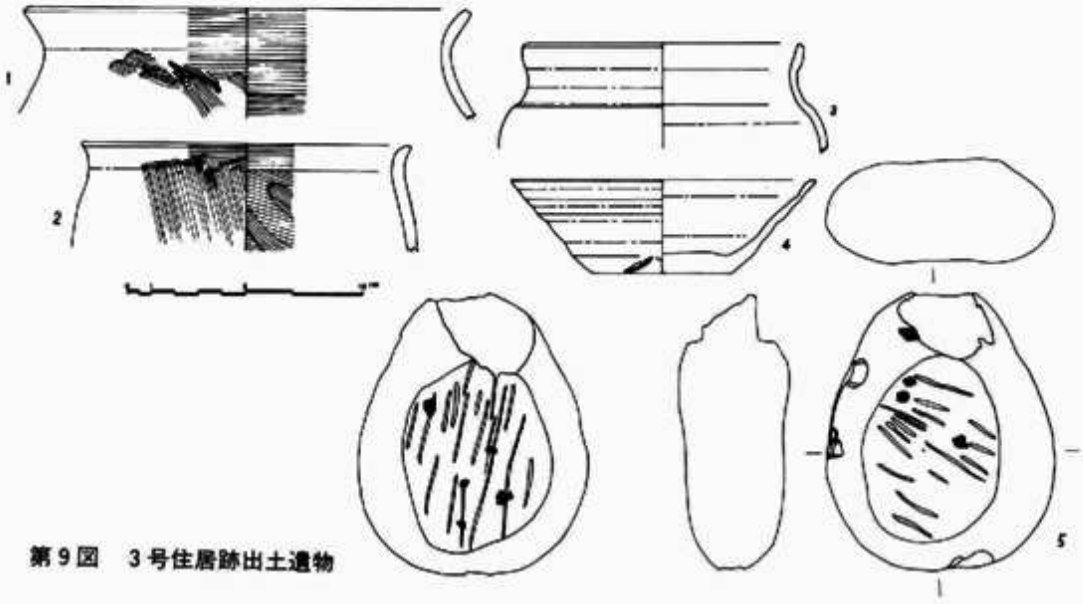
杯A　1点のみの出土で、体下端底部若干の小破片である。外底面回転糸切り。胎土は硬質砂粒少量を含む。色調は灰色、焼成は良好である。

杯B　5点出土したが、1つ（9図4）は口縁部若干体部⅙底部⅓残存のもので、推定口径約13.0㎝、器高4.0㎝、底径5.8㎝。口縁部体部共直線的に外傾し、体壁はロクロなでによる凸凹がみられる。ロクロなで成形無調整で回転糸切りである。胎土やや硬質砂粒若干含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや良好で、A類に近いと思われる。他の1つは、口縁部体部共約¼残存の物で、推定口径は約14.0㎝である。口縁部直線的、体部は丸みをもち外傾する。胎土軟質、色調赤褐色、焼成不良である。1つは体下端若干底部½残存で、底径約5.4㎝である。胎土軟質、色調橙色、焼成やや不良である。1つは体部下端底部若干の破片で、胎土軟質、色調にぶい橙色、焼成不良である。1つは口縁部体部¼以下の破片で、胎土軟質、色調橙色、焼成不良である。

杯C　体下端若干の破片1点である。外面は回転ヘラ削り調整痕みられ、内面内黒である。

杯D　体部の小破片1点である。内外面共磨きと黒色處理がみられる。

砥石（9図5）　卵形の偏平な形で、上面と下面が磨滅している。材質は橄欖石、複輝石、安山岩を含む溶岩と鑑定されている。多孔質で表面は粗しょうのため、粗砥と思われる。長径11.9㎝、短径9.8㎝、厚さ4.7㎝で、両端の一部が欠損している。



第9図　3号住居跡出土遺物

4号住居跡

（遺構の確認）1号住居跡の東側のＡｈ62区及びその周囲で黒褐色の落込みを確認した。1号住居跡南東コーナと4号住居跡西壁の間は約80cm、又2号住居跡煙道先端と南壁西端の間は50cmである。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復・増改築）1号住居跡の右袖を切っている溝が、この住居跡の中央北寄りを東西に切っている。又南東コーナーと南壁東寄りは攪乱のため破壊されている。増改築は確認されない。

（平面形・方向）東西3.75ｍ、南北3.7ｍの方形で、方向はほゞ東向きＥ－5°－Ｓである。

（堆積土）2層に別れるが、更に南壁にもう1層、部分的にみられる。

1層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層、指圧痕若干つき粘性ややある。

2層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層、指圧痕つき粘性ややある、炭化物が多く含まれる。

3層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層、指圧痕つき粘性ややある、南壁沿いのみ分布する。

（床面）あまり固くなく、地山面をそのまゝ床面に利用している。平坦で西側へ若干傾斜がみられる。床面から壁への立上がりはゆるやかで、壁高は約18cm。壁沿いの施設は確認出来なかった。

（柱穴）なし。

（かまど）かまど、煙道、煙出は確認出来なかった。中央東寄りから東壁にかけて、焼土が薄く堆積し、遺物、炭化物を包含している。

（貯蔵穴）なし。

（その他の施設）なし。

（年代決定資料）出土遺物は、東壁寄りの焼土に集中している。甕12点＋若干の破片、壺3点、坏8点＋若干の破片、砥石1点、せんいを含む縄文土器片1点である。甕は完形品はなく全部計測不能であった。Ａ類2点、Ｂ類4点、Ｄ類2点、Ｅ類4点である。坏はみな回転糸切り痕をもつもので、Ａ類1点、Ｂ類4点、Ｃ類3点である。砥石は3号住居跡出土の砥石と同質の、安山岩の溶岩である。その他縄文時代の磨石と思われる石器が1点出土した。

出土遺物

甕Ａ　2点出土している。1つは口縁部⅛以下、体上端部⅓の破片である。口縁部は外反し口端部は上に挽き出されている。体部外面は上下にヘラ削り、ヘラなで成形され、肩部にわずかな丸みがみられる。内面は横なで成形されている。2次焼成を受け、外体面に煤が付着し、変質のためひゞ割れが著るしい。胎土軟質砂粒を多く含む。色調はにぶい橙色～黒褐色。焼成はやや不良である。他の1つは口縁部⅛以下、体上端部若干の破片で、口縁部はやや外反し、短く、口端部は上に強く挽き出されている。体部上端は内外面共に横なで成形であるが、外面に叩き痕がかすかに認められ、その後横なでをしている。胎土は軟質砂粒を含む。色調はにぶ

い橙色。焼成は不良である。

甕B　4個体＋12片の出土である。いずれも小破片で実測、計測不能である。1は、口縁部のみ⅙残存の破片で、かなり外反し、口端は丸みをもつものである。胎土はやや軟質砂粒は少ない。色調は赤褐色、焼成はやや良好である。2は、口縁部のみ⅛以下の破片で、かなり外反し、口端部は丸みをもち、刷毛目痕がみられる。胎土軟質砂粒を含む。色調は浅黄橙色、焼成は不良である。3は、口端部が欠損しているためB類に入れるのは疑問であるが、口縁部がかなり外反している点は条件に合うようである。口縁部下半⅛以下と体部上半部⅛以下残存で、胎土やや軟質砂粒多くざらざらしている。色調は橙色、焼成はやや不良である。4は、口縁部⅛以下体上端部若干の破片で、口縁部はやや外反し短く、口端部は丸みをもつ。体部はかなり丸みをもつようで、外面は上下のヘラなで、内面は横に刷毛目が施されている。胎土やや硬質砂粒多く含む。色調は灰色～橙色。焼成はやや良好である。他の12片は3個体分のようで、1つは、体部のみの破片4で、外面上下ヘラなで、内面は磨滅して不明である。2は、体部のみの破片7片で、外面は上下の刷毛目、内面は横に刷毛目が施され、砂粒を非常に多く含んでいる。3は、体部破片1片で外面上下ヘラなで、内面も上下ヘラなでである。

甕D　2点出土している。両者共に口縁部底部を欠損しているため全容は不明である。ロクロなで成形、無調整の様にみえる。1つは胎土軟質で砂粒多く、色調はにぶい橙色、焼成不良のもので、他の1つは、胎土はやや硬質砂粒多い。色調はにぶい褐色、胎部は褐灰色。焼成はやや良好である。

甕E　4点出土している。1つは口縁部⅛以下体上端若干の破片で、口縁部はやや外反し短く、口端は丸みをもち薄くなる。内外面共刷毛目が施されている。他の3点は、体部のみの破片で、内外面共に刷毛目又はヘラなでが認められる。

壺　3点出土している。1つは体部肩部底部の小破片で接合しない。体部内外面共叩き目痕があり、一部外面に灰釉が付着している。胎土硬質砂粒微量、色調灰色、焼成良好である。1つは、内外面共に叩き目が施され、胎土硬質、色調灰白色、焼成良好である。1つは小型で肩部体下部底部いずれも小破片で、推定底径6.8㎝で、体部に火膨れがみられ、肩部に灰釉が認められる。胎土硬質砂粒若干含み、色調灰赤色、焼成良好である。

鉢（10図1）　口縁部⅛体上半部⅛残存で、推定口径約30㎝で、口縁部はわずかに外反し、口端部は1.0㎝と厚く丸みをもつ。体部は口縁部までほゞ直線的に外傾しているので鉢型と思われる。体部上端は横に粗いなでによる成形、その下半は上下にヘラ削り、ヘラなでによる成形形で内面は上端から下半まで横なでのようである。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は橙色。焼成はやや不良である。

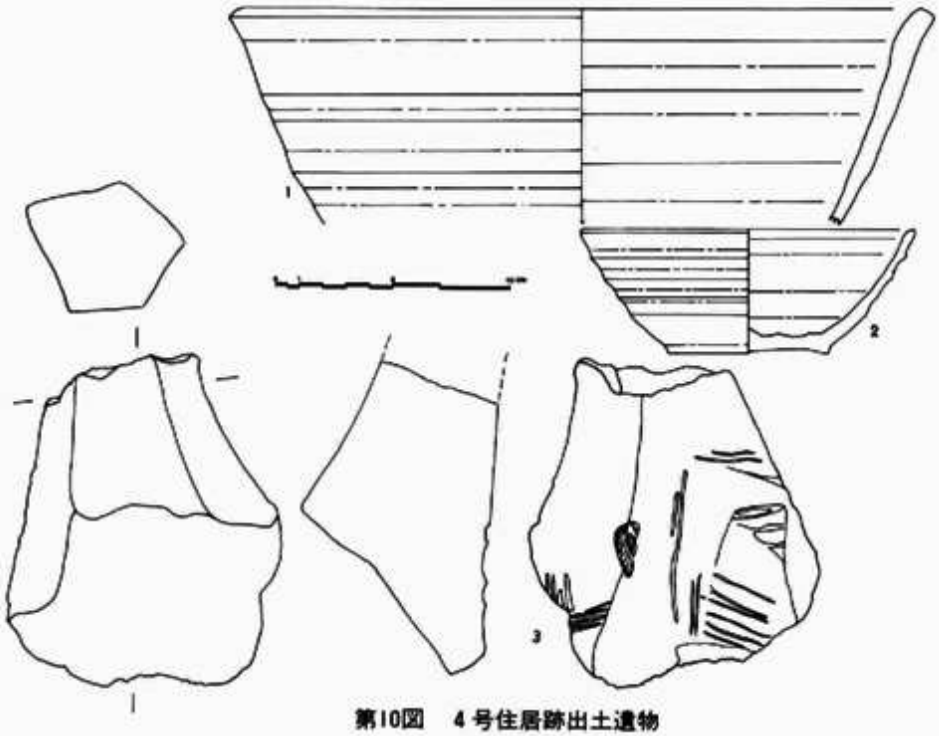
坏A（10図2）　1点のみの出土で、口縁部⅓体部⅓底部⅔残存である。口径14.2㎝、器高

5.3 cm、底径6.8 cmで、ロクロなで成形無調整である。口縁部は外反せず、体部もわずかに丸みをもち外傾している。胎土は硬質で砂粒を少量含む。色調は灰褐色、胎部内面側がにぶい赤褐色で、焼成はやや良好である。

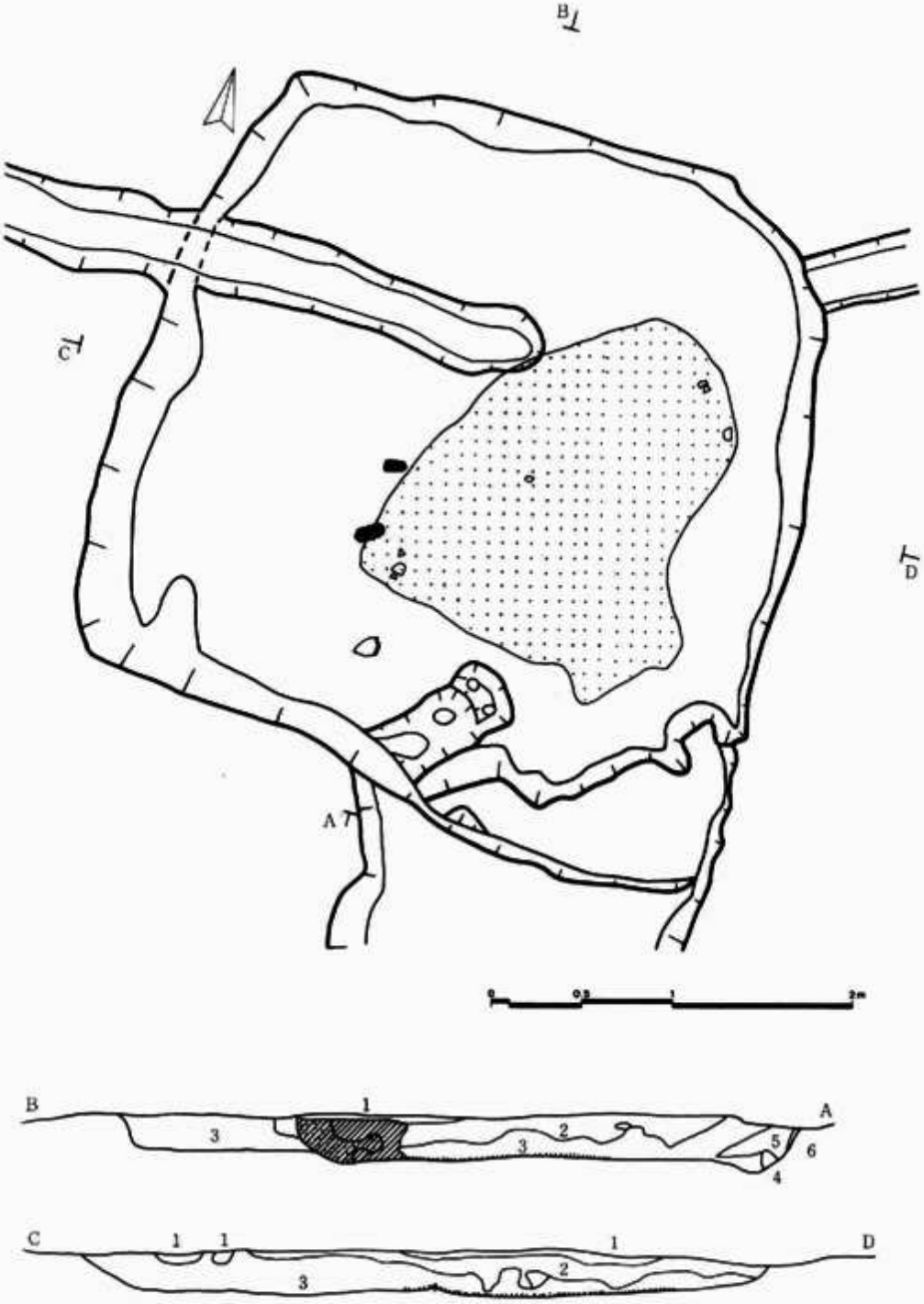
坏B　4点＋7片で、いずれも小破片のため実測、計測は不能である。1つは体部下端と底部若干の破片で、胎土はやや軟質砂粒若干を含む。色調は内外表面がにぶい橙色、胎部が灰白色。焼成やや不良である。2は、口縁部⅛体部若干の小破片で、口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもち非常に薄くなっている。体部はわずかに丸みをもち、ロクロなでによる凸凹がみられる。ロクロなで成形無調整でかなり外傾する様である。3は、口縁部のみ⅛以下の小破片で、口縁部は外反している。4は、口縁部のみ⅛以下の小破片で、口縁部はやや外反し、口縁部はわずかに内湾している。他に7片あり、2点は底部で回転糸切り。5点は体部破片である。いずれも調整痕は認められない。

坏C　口縁3片体下端3片体部1片の小破片で、口端部外面も磨き黒色處理がなされている。底部が若干付属した下端部破片は、外面調整、内面放射状磨きが認められる。

砥石（10図3）　5面の磨滅面をもち、半分以上欠損している。材質は橄欖石複輝石安山岩を含む溶岩で、4号住居跡出土の砥石と同質である。全面に焼土が付着している。4面に縦と横に条痕がみられる。他の1面は条痕はみられない。



第10図　4号住居跡出土遺物



第11図　4号住居跡

5号住居跡

（遺構の確認）4号住居跡の南東のＢａ65地区及びその周囲で黒褐色の落ち込みを確認している。4号住居跡の南東コーナと5号住居跡の北壁の間は2.1ｍ。2号住居跡の南東コーナーと5号住居跡の西コーナとの間は3.93mである。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復・増改築）新しい用水路と思われる溝が、南西壁から北東壁へ東西に走っている。又溝状土壙が、床面中央東寄りから、かまど燃焼部下に1基と南東壁沿いに1基ある。又煙道は初め前下がりに刳り貫かれていたが、後にやや前上り気味に改造している。

（平面形・方向）南西―北東が4.95ｍ、北西―南東が5.30ｍの方形で、4カ所のコーナはそれぞれほゞ、東西南北方向を向き、主軸はＥ－28.5°－Ｓで、東南東を向く。

（堆積土）2層に大別され、東側に攪乱された表土と地山の混合された所が広がっている。

1層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層　粗で粘性がややある、部分的にみられ、表土残存部である。

2層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層　指左痕ややつき、粘性ややある。粉パミ遺物を含む。

3層　10ＹＲ2/2黒褐色腐植土層　指圧痕ややつき、粘性ややある。粉パミ遺物を含む。

4層　10ＹＲ3/2黒褐色腐植土層　指圧痕若干つく、粘性ややあり、焼土炭化物地山を含む。

※2層と3層の間に粉パミが多く堆積しているため、同質であるが2層に分けた。

（床面）かまど周辺は、特に固く叩きしめられ、焼土炭化物を含んでいる。ほゞ平坦で、南東側にわずかな傾斜がみられる。床面から壁への立上がりは、他の住居跡より急傾斜で、壁高は8.0㎝～14.0㎝である。

（周溝）南西壁沿いにのみ認められる。床面より2.0～3.0㎝の深さで、南端は浅いピットがあり消滅している。

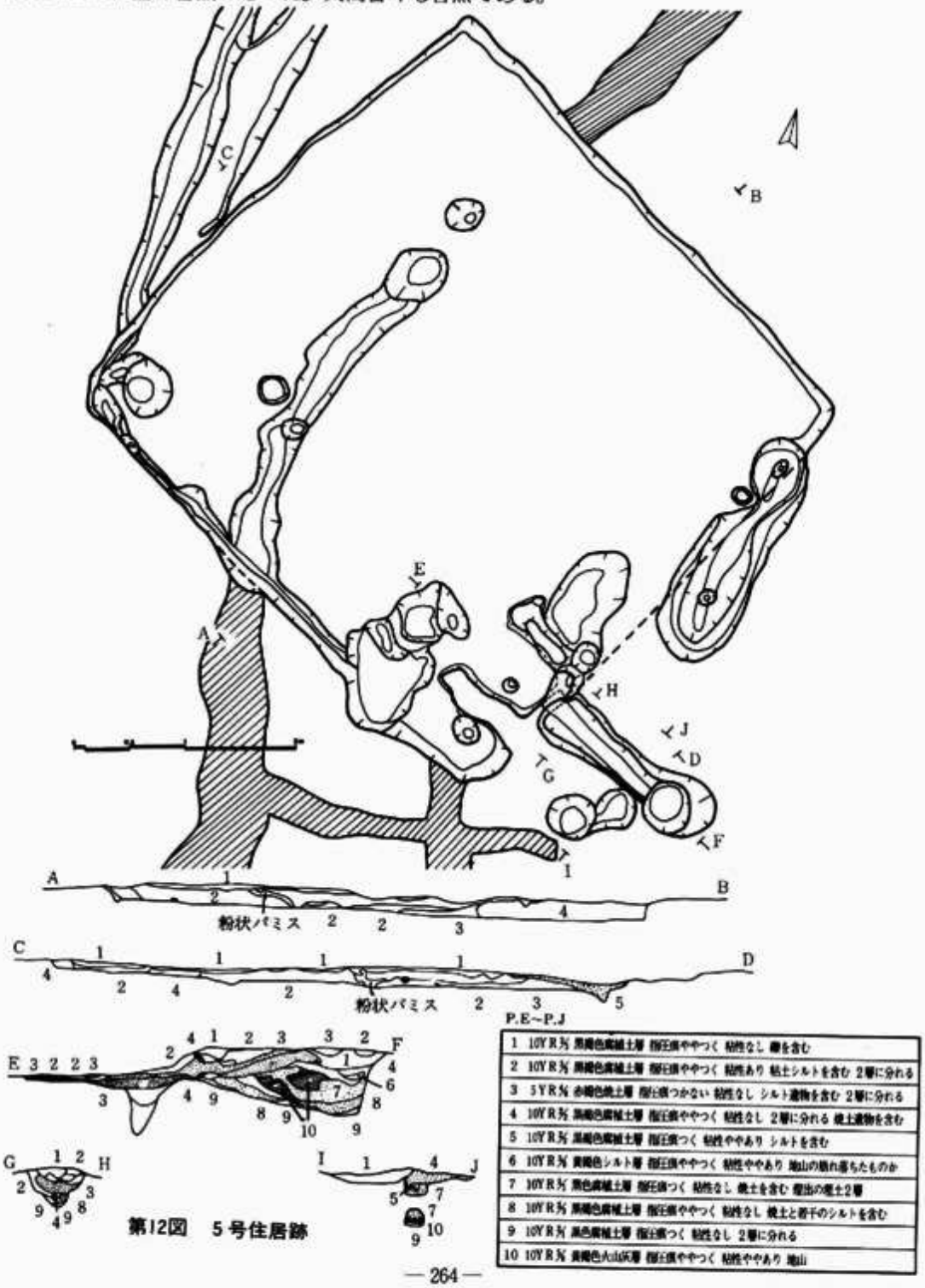
（柱穴）4つ確認された。東側の柱穴は溝状土壙の中にあって、地盤が軟弱のためか、地山を周りに詰め込んで、固めているのが確認された。

（かまど）南東壁西寄りにあり、燃焼部は巾55.0㎝、奥行85.0㎝のほゞ方形で、浅く掘り下げられている。12.0㎝の厚さに焼土が堆積し遺物を包含している。袖は両方共残存し、西側は高さ75.0㎝、巾30㎝、高さ約12.0㎝で、上場下場間はほゞ垂直である。東側は長さ75.0㎝、巾20㎝、高さ約10.0㎝で、やはり垂直である。東袖の壁下に柱穴が袖に食い込んで存在している。煙道は、前下がりのものと、前上り気味の2つが確認され、共に長さ1.26ｍ、巾約18㎝。深さは壁より1.05ｍの所で、検出面より24.0㎝である。煙出は上場の径約45.0㎝で、下場は約50.0㎝と38.0㎝、深さは検出面から18.0㎝と60.0㎝と推定される。

（貯蔵穴）かまどの東隣に95.0㎝×30㎝深さ約10.0㎝の不整形なピットがある。埋土は焼土と遺物を若干含み住居跡堆積土の4層である。かまどの西側のものは4つの切り合ったピット群である。壁下が最初で、壁から離れる方が新しいと思われる。140.0㎝×70.0㎝で深さ約10.0

cm。焼土と遺物を包含した黒褐色腐植土である。

（年代決定資料）出土品は甕23点。坏71点。鉄滓５点である。甕のＡ類とＥ類、坏のＢ類が大部分を占め、壺は皆無であった。又高台坏も皆無である。



第12図　５号住居跡

出土遺物

甕A（13図1・2）　1は、口縁部⅓、体上半部⅔残存で、推定口径約21.0㎝、頸部径18.8㎝、口縁部高さ1.4㎝。体部残存部最大径約20.2㎝である。口縁部は短くやや外反し、口端部は上に挽出されている。体部はほとんど直線的で、凸凹や歪みがみられる。外面は上端部に刷毛目が一部認められ、ヘラ削りヘラなで痕も認められる。内面は刷毛目が施されている。2次焼成を受け磨滅著るしく、煤が付着している。胎土軟質砂粒多い。色調は浅黄橙色、焼成は不良である。接合しないが、体下部と底部の同一個体と思われる破片の底径は9.5㎝である。煙出上層及びかまど周囲から出土した。2は口縁部⅓、体上半部½残存で、推定口径約20.0㎝、頸部径17.5㎝、口縁部高さ3.2㎝、体部残存部最大径約20.8㎝である。口縁部は1より大部高く内湾ぎみに外傾している。口端部は上に強く挽き出されている。体部はほとんど直線的で、1より形が整っており、上端部は横なで、その下半はヘラ削り、ヘラなでが施されている。内面は横なで成形である。胎土は軟質砂粒を多く含む。色調は赤褐色～橙色。焼成不良で磨滅している。かまど内出土である。接合はしないが、2と同一個体と思われる体下半と底部の破片が多数あり、内体部下端から内底面に刷毛目が施されている。

甕B（13図3）　口縁部⅛体部上半⅛残存で、推定口径約25.0㎝、頸部径約24.1㎝、口縁部高さ2.9㎝、体部残存部最大径27.6㎝である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつが、上に挽き出そうとした形跡もみられる。口縁部下半と体部上半部の外面は縦に刷毛目が施され、体部下半は、ヘラ削りヘラなでである。内面は口縁体部共横なで成形であるが、両者の一部に縦と横に刷毛目痕がみられる。胎土やや硬質砂粒若干を含む。色調はにぶい赤褐色、焼成はやや良好である。かまど内とその周囲から出土し、外面に焼土が付着している。その他口縁部のみ⅛残存の破片がある。これは口縁部はかなり外反し、口端は丸みをもつが、上に挽き出そうとした形跡のあるもので、胎土軟質砂粒多く含む。色調は浅黄橙色、焼成不良。かまど周囲出土である。その他に体部のみの破片が2個体と、小破片が多数出土している。

甕D（13図4・5）　4は口縁部⅓体部⅓底部若干が残存する。推定口径約12.8㎝、頸部径約11.2㎝、体部最大径約12.4㎝、器高約14.4㎝、底径約7.0㎝である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はロクロなでによる凸凹が著るしく調整痕は認められない。外底面は回転糸切りである。胎土硬質砂粒を若干含む。色調は内外表面はにぶい橙色～褐灰色で胎部は灰色。焼成は良好である。かまど内とその周囲から出土した。5は、口縁部½体部⅔底部¾残存で復元出来た。口径11.2㎝、頸部径9.6㎝、体部最大径10.8㎝、底部径6.6㎝、器高9.6～9.8㎝である。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。体部はやや丸みをもちロクロなで成形無調整、回転糸切りである。胎土は軟質砂粒を含む。色調は赤褐色。焼成はやや不良で、2次焼成を受けている。その他口端部が上に挽き出された物1個体。体下端と底部の破片が7

個体出土している。

甕E　口縁部のみの小破片2個体分が出土している。内1個体は口縁部はやや外反し、口端部は上に挽き出されたもので、体部内外面に刷毛目痕が認められ、外体部下半にヘラ削り、ヘラなで痕の認められるものである。他の1つは、口縁部⅙以下と体下端と底部若干の破片で、口縁部はわずかに外反し，口端部は丸みをもつ。体下端外面に刷毛目が施され、底部は外側に張り出し、外底面にヘラ削り調整が認められる。

その他に小型かめで、小破片のためD類かE類か不明の物が5個体出土している。1つは口端部を上に挽き出した物で、体部欠損している物2個体。口端部が丸みをもつもの2個体。木葉底のもの1個体である。

坏B（13図6・7・8・9）　全部で22個体と、いずれの個体のものか不明の小破片42片出土した。**6**は、口縁部¼、体部¼、底部⅔残存し、推定口径14.1cm、器高5.3cm、底径5.6cmで、口縁部はやや外反し、体部は丸みをもち外傾する。外傾度は39.0°である。胎土は軟質砂粒を多く含む。色調は明赤褐色～黄橙色。焼成は不良である。南側表採である。**7**は口縁部⅓、体部⅓、底部全部残存する。推定口径14.6cm、器高4.9cm、底径5.4cm、口縁部は直線的で口端部は薄くなる。壁面はわずかに丸みをもち外傾する外傾度は43.5°である。胎土はやや軟質で砂粒は少ない。色調はにぶい橙色。焼成はやや良好である。かまど及びその周囲から出土した。**8**は、口縁部⅓、体部⅓、底部全部残存する。推定口径約15.4cm、器高4.0cm、底径5.3cm、口縁部はやや外反し、口端部は薄くなる。体部はわずかに丸みをもち外傾する。外傾度は51.5°と皿に近い。胎土は軟質で砂粒を多く含む。色調は橙色。焼成は不良である。かまど周囲から出土した。**9**は、口縁部¾、体部¾、底部½残存する。口径14.4cm、器高5.1cm、底径5.4cm、口縁部はほゞ直線的で、口端部は薄くなる。体部は、わずかに丸みをもち外傾する。外傾度は41.5°である。胎土やや軟質砂粒は少ない。色調は橙色～にぶい橙色、焼成はやや不良である。かまど焚口より出土した。他に22個体分と42片あるが、いずれもロクロなで成形無調整、回転糸切りで、口縁部はわずかに外反するか直線的であり、胎土はやや硬質のものから軟質のものまでみられる。色調は浅黄橙色から橙色、にぶい橙色で、焼成はほとんど不良であるが、中にはやや良好のものもある。

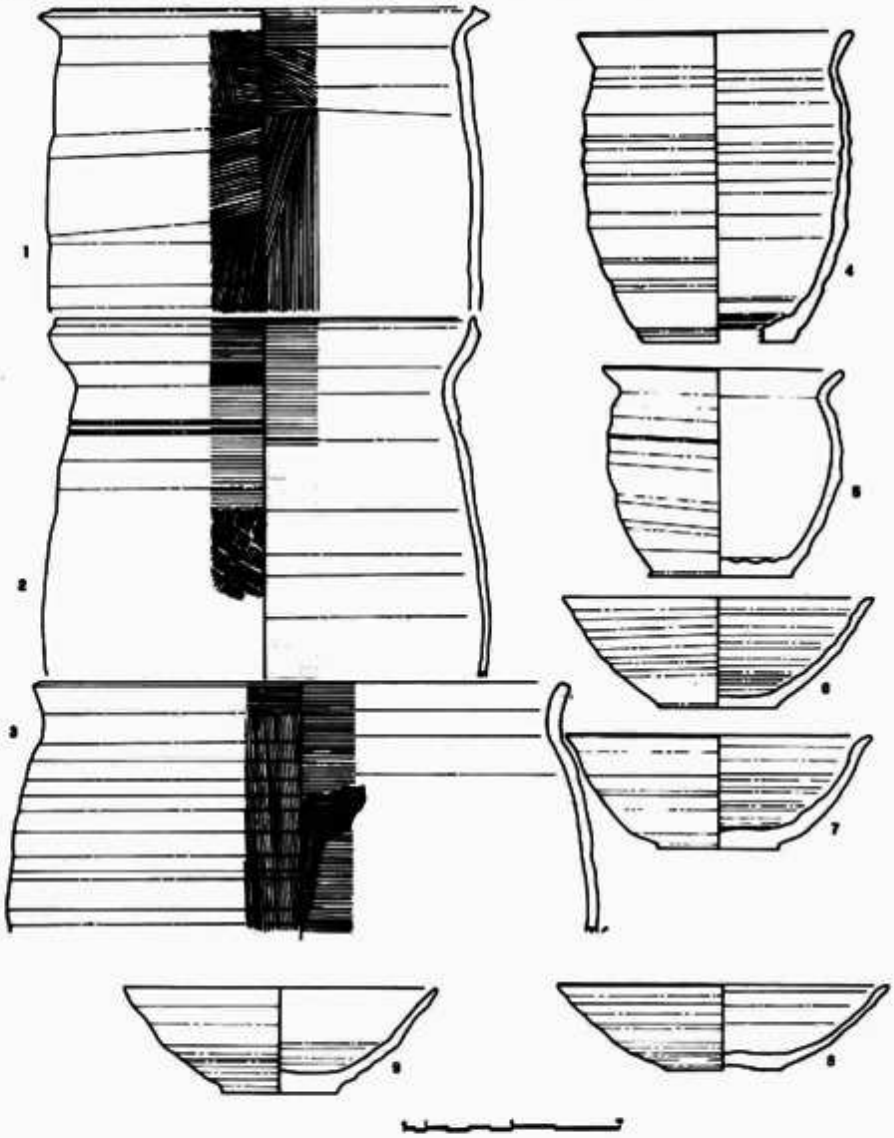
坏C　5点出土したが、いずれも小破片で全容は不明、実測も不能である。1つは体下部の破片2で、外面はロクロなで成形、下半はヘラ削り調整。内面は下端放射状、上半横に磨きと黒色處理が認められる。外面に墨書がある。2は体下端と底部の破片2で、外面は体部がヘラ削り調整、底部は回転糸切り痕が認められ、内面は体部横、底部放射状に磨き、黒色處理が認められる。3は体部下端の破片と思われ、外面は磨滅著るしく成形技法は不明である。内面は磨きと黒色處理が認められる。4は小破片2で、体部と思われる。内面に磨きはあるが、黒色處

理は確認できないものと、わずかに黒色の残存しているものである。5は口縁部が短く外反し外面上端と内面に磨き、黒色處理のあるものである。

坏D　2点出土し、1つは口縁部がやや外反し、内外面磨きと黒色處理が認められる。2は1より口縁部が外反し、内外面磨き黒色處理をしているものがある。共に口縁部⅙以下体上半部若干の小破片である。

鉄滓　3点かまど内と、かまどと西隅ピットから出土している。同じ2地点から鉄滓の付着したスサ入り粘土が1点ずつ出土している。

縄文土器は、せんいの入ったもの7片と、縦型石匙1点。弥生式土器片11片である。



第13図　5号住居跡出土遺物

6号住居跡

（遺構の確認）5号住居跡の南側、Bd 65地区とその周囲で黒色の落込みを確認した。5号住居跡の南コーナと6号住居跡の北西コーナとの間は4.15 mである。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復・増改築）なし。

（平面形・方向）東西4.15 m、南北4.70 mの方形隅丸で、主軸は東向き、E－14°－Sである。

（堆積土）3層に大別されるが、1層と2層の上下関係は不明で、1層は北寄、西寄、南寄に分布し、2層は、東寄と中央に分布している。

1層　7.5 YR 2/1黒色腐植土層　指圧痕やや付き粘性ややあり、地山がブロック状に混入。

2層　7.5 YR 2/1黒色腐植土層　指圧痕やや付き粘性なし、地山含まず、炭化物焼土を含む。

3層　7.5 YR 2/2黒褐色腐植土層　指圧痕やや付き粘性ややあり、地山が混入する。

※　2層に粉パミを包含する。東側の焼土層は、上層は地山も含む。下層は炭化物を多く含む。

（床面）堆積土を除去すると、掘り方状に凸凹のある地山面である。床面から壁へは、緩傾斜で立上がっている。壁高は6 cm～10cmである。

（柱穴）柱穴状のピットは、住居跡内に4つあるが、大部北に偏寄っている。北壁外に1、西壁外にも1ある。北西側のは上場径22.0 cm、下場径14.0 cm、深さ20.0 cm、北東側のは周溝の中にあり上場径25.0 cm、下場径15.0 cm、深さ30.0 cm。南西側のものは住居跡中央にあって上場径32.0 cm、下場径20.0 cm、深さ25.0 cm、南東側のものは、かまどの北側にあり上場径24.0 cm、下場径12.0 cm、深さ20.0 cmで埋土はいずれも、3層である。

（周溝）東壁北半分、北壁、西壁、南壁西側の壁沿いに周溝が回っている。上場の巾は40.0cm～25.0 cm、下場10.0 cm～4.0 cm、深さは壁の上場から5.0 cm～10.0 cmである。

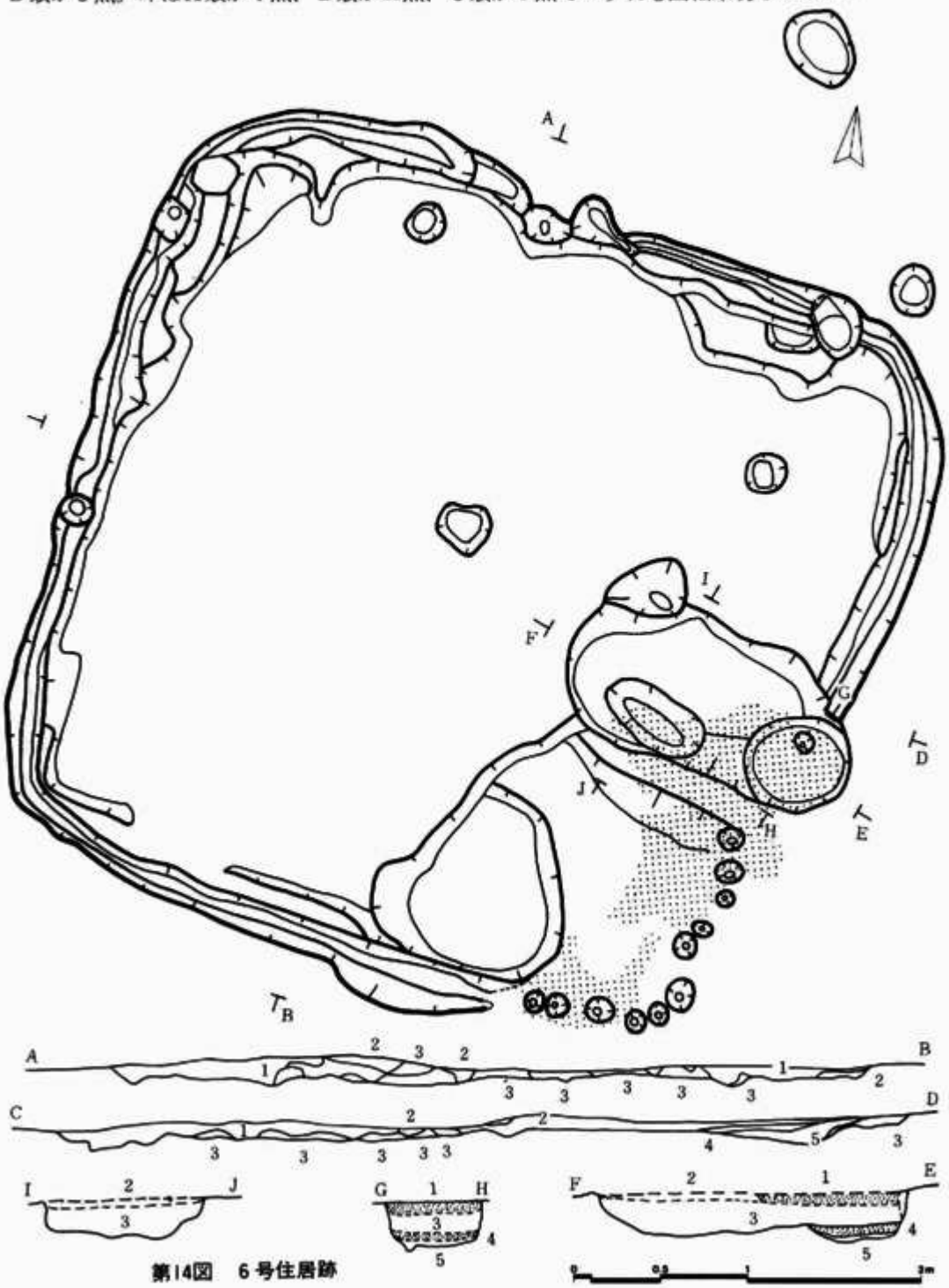
（かまど）8棟の住居跡中、この住居跡のかまどのみ、特異な形態をしている。上層は東壁南半分に渡って、焼土が壁沿いに不整形な形で堆積し、燃焼部や袖の痕跡は認められず、焼土と同じレベルで、西側に固くしまった2層が楕円形状に分布している。下層は176 cm×84 cmの楕円形に掘下げられ、東端に径54.0 cmの円形をした燃焼部がある。上層と下層の間に黒色の腐植土が厚さ10.0 cm～20.0 cmで入っている。下層の燃焼部は東半分が壁外に張り出しており、煙道煙出の役目も兼ねているようにみえる。上層の焼土は、壁の上場面と同じレベルにあり、厚さは約8.0 cmであり、下層の焼土は、壁上場から約18.0 cm下にあり、厚さは6.0 cmである。又上層の焼土には遺物、炭化物を多く含み、下層の焼土は、地山と若干の遺物を含んでいる。

（貯蔵穴）はっきり断定出来ないが、柱穴状ピット以外に南壁東寄り壁下に1.00 m×1.10 m、深さ約5.0 cmの浅いピットがある。埋土は遺物を多く包含した焼土と腐植土の混合層である。

（その他の施設）かまどの南側と、南東コーナー附近は、壁が確認されず、直径10.0 cm位の小

ピットが11並び、住居跡の輪郭を形成している。

（年代決定資料）甕12点、坏26点、高台坏１点が出土している。甕はＡ類が３点、Ｂ類が１点、Ｄ類が２点。坏はＡ類が４点、Ｂ類が21点、Ｃ類が１点でいずれも回転糸切りである。



第14図　６号住居跡

出土遺物

甕A（15図1、16図2）　1は口縁部¼、体部⅓残存で、口径約22.0㎝、頸部21.2㎝、体部最大径22.2㎝、の長胴で、口縁部はわずかに外反し、口端部は上に挽き出される。体部外面はヘラ削りヘラなでで、上下に無数の条線が走る。内面は横に刷毛目が施されている。胎土やや硬質砂粘若干を含む。色調は褐色。焼成はやや不良。外面の一部に煤が付着している。東壁沿い焼土出土。2は、口縁部⅛、体部若干残存で、推定口径約29.0㎝、頸部径約26.0㎝、体部残存部最大径約26.4㎝、である。口縁部は、1よりはかなり外反し、口端部ば上に強く挽き出される。体部外面上端部は横なでで、凸凹がかなりみられる。下半部は上下にヘラ削りヘラなでである。内面は横にヘラなでが施される。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色。焼成はやや不良である。南東隅焼土中から出土した。他に口縁部のみ⅙以下の破片があり、口縁部は内湾ぎみに外傾し、口端部は上に挽き出される。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良、北西部から出土した。他に2点あるが、口端部を欠損し、小破片のため、除外した。

甕B　口縁部のみ⅙以下の小破片である。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。胎土はやや硬質砂粒若干を含む。色調はにぶい赤褐色。焼成はやや不良。北西部から出土した。

他に長胴の甕は6個体分に31片出土しているが、全容は不明である。内1つは底部のみの破片で径9.9㎝～10.2㎝、外面に木葉痕のあるもの。内1つは底部⅛の破片で、胎部が灰色で硬質、内外面が赤褐色のもの。他に体部のみの小破片で、外面ヘラ削りヘラなで、内面横に刷毛目痕のあるもの。体部のみの小破片で、外面上下に刷毛目痕があり、内面に横にヘラなでのあるもの等がある。

甕D（16図3）2点出土しているが、3は口縁部¼、体上半部½残存する。推定口径約16.0㎝、頸部径約14.2㎝、体部残存部最大径14.8㎝である。口縁部はかなり外反し高さ1.1㎝で、口端部は丸みをもち、外側に挽き出されている。体部外面はやや丸みをもち、ロクロなでによる凸凹が著るしい。胎土やや硬質砂粒若干を含む。色調は橙色～浅黄橙色。焼成はやや不良で、2次焼成を受け爛れている。東壁沿いの焼土中より出土した。他に、口縁部⅛以下と体部上端若干の破片があり、口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は橙色～赤褐色。焼成はやや不良で、2次焼成を受け爛れている。

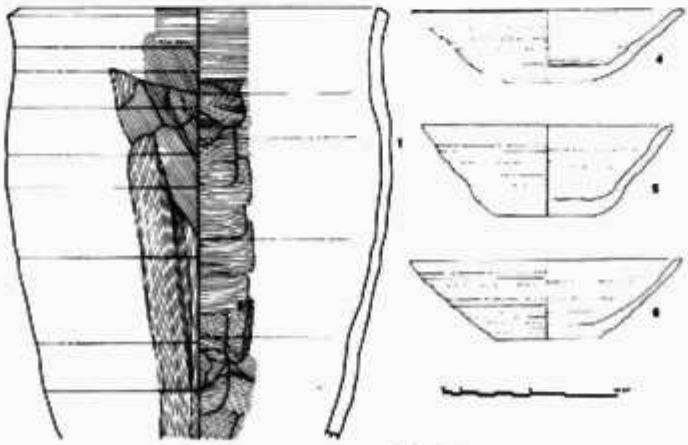
杯A　4点出土したが、小破片で計測不能である。1つは口縁部⅙残存で、推定口径約15.0㎝である。口縁部はやや外反し、口端部は薄くなる。胎土やや硬質砂粒を微量含む。色調は灰白色。焼成はやや良好である。2つは口縁部⅛残存で口縁部はわずかに外反し、口端部は薄くなる。胎土はやや硬質砂粒を微量含む。色調は内外面が灰赤色。胎部が橙色。焼成はやや良好である。3つは底部⅓と体下端部の破片で、体下端は無調整、外底面回転糸切りである。胎土やや硬質砂

粒を微量含む。色調は明褐灰色～橙色。焼成やや良好である。4つは底部体下端若干の小破片で、体下端は無調整、外底面回転糸切りである。胎土はやや硬質砂粒微量を含む。色調は灰黄色。焼成はやや良好である。1・2は東壁沿い焼土。3・4は北西部より出土した。

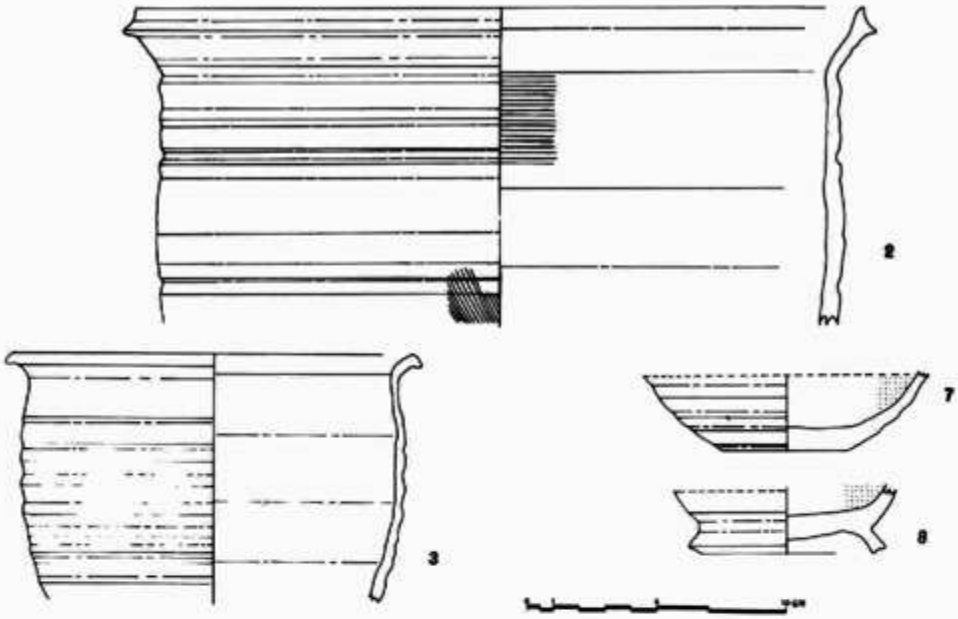
坏B（15図4・5・6）　**4**は口縁部⅕、体部¼、底部全部残存で、推定口径約15.6㎝、器高4.2㎝、底径5.0㎝、外傾度52.0°である。口縁部はほゞ直線的で、口端部は薄くなる。体壁は直線的で凸凹がみられる。ロクロを左廻しで成形している。胎土やや硬質で砂粒を大部含む。色調は橙色。焼成はやや不良で、南東隅焼土から出土した。**5**は、口縁部⅓。体部⅓。底部⅔残存で、推定口径約14.4㎝、器高5.2㎝、底径5.6㎝、外傾度41.0°である。口縁部はほゞ直線的で歪が著るしい。口端部は薄くなる。体部は直線的で歪みがある。ロクロを左廻しで成形している。胎土はやや硬質で砂粒を含む。色調は橙色。焼成はやや不良で、南東隅焼土から出土した。**6**は口縁部⅛以下、体部¼、底部ほゞ⅚残存で、推定口径約15.6㎝、器高4.5㎝、底径6.0㎝。外傾度47.0°である。口縁部は直線的で、口端部は薄くなる。体部はわずかに丸みをもち外傾する。ロクロを左廻しで成形している。胎土はやや硬質で砂粒を多く含む。色調は橙色。焼成はやや不良で、2次焼成を受けている。南東隅焼土より出土した。他に18点出土しており、皆B類であるが、胎土の軟質なもの4点、やや軟質なもの9点。やや硬質で胎土が一部灰色のもの5点である。

坏C（16図7）　1点のみの出土で、口縁部は⅛以下、体下端と底部½残存である。体下端は無調整、底部は回転糸切り痕と、黒斑が認められる。内底面は放射状の磨き黒色處理がみられる。底径5.0㎝で、北西部出土である。

内黒高台坏（16図8）　体下端と底部高台部全部が残存する。高台下端外径7.6㎝～7.4㎝。内径6.5㎝～6.2㎝。台部高さ0.9mである。外底面は放射状に圧痕があり、煤が付着している。内底部は、放射状磨き、黒色處理である。



第15図　6号住居跡出土遺物



第16図　6号住居跡出土遺物

7号住居跡

（遺構の確認）北面段丘の縁で、路線の東端に当るＢａ74地区で、黒褐色の落ち込みを確認した。5号住居跡の東コーナと、7号住居跡の南西コーナの間は80.0cmである。遺構確認面は、表土下の明黄褐色火山灰層である。

（重復・増改築）5号住居跡を東西に切っている溝が、西壁北端を切っている。又北壁西寄りも切った溝が、北へ伸びている。又西壁は、巾0.4m、長さ2.20m、深さ7cmの長楕円形をした溝状のものによって切られている。これは多量に粉状パミスを含んだもので、埋土は黒色腐植土である。同様のものがその東1.7mの地点にも、ほゞ並行して存在する。住居跡との関連は無いと思われるが性格は不明である。又東側には、現代の廃棄物を含んだピット状の掘り込みがあり、東壁をかなり削っている。

（平面形・方向）東西3.15m、南北3.20mの方形隅丸で、主軸はＳ－10°－Ｗ、ほゞ南を向く。

（堆積土）周囲に撹乱が多く、遺物が表土や5号住居跡内にも散乱している。

1層　10ＹＲ2/1 黒色腐植土層　指圧痕つき粘性はない、焼土、炭化物、遺物を含む。

2層　10ＹＲ2/1 黒色腐植土層　指圧痕あまりつかない、粘性はない、炭化物遺物を含む。

3層　10ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層　指圧痕やや付く、粘性なし、シルト焼土を若干含む。

4層　10ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層　指圧痕付く、粘性ややあり、シルトを含む。

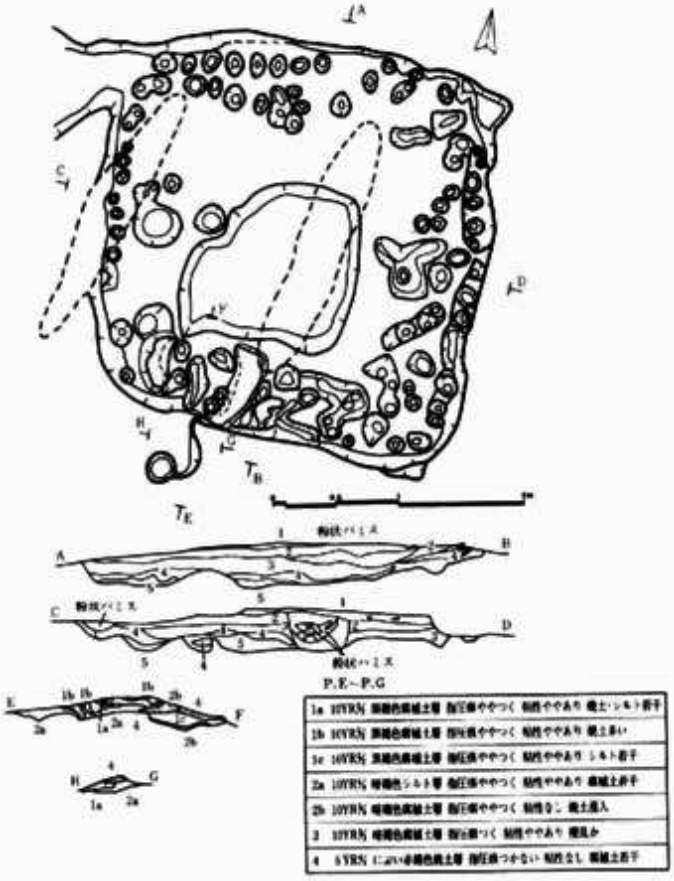
（床面）地山面をそのまま利用し、あまり固くはない。掘方状の凸凹は東壁沿いと、南壁東側沿いに認められる。床面から壁へは、やや緩やかで、壁高は約16.0㎝である。

（柱穴）柱穴は認められなかったが、壁沿いに、西壁下に1列。北壁と東壁下に2列の杭跡らしい小ピットが並んでいる。

（かまど）南壁西寄りに在り、西袖が構築されている。燃焼部は巾65.0㎝、奥行55.0㎝で、深さ5.0㎝で、掘方状の小ピットがある。西側の袖は長さ45.0㎝、巾25.0㎝、高さ約11.0㎝、東側の袖は長さ70.0㎝、巾20.0㎝、高さ10.0㎝である。煙道は明確な輪郭がない。煙出は壁から南へ37.0㎝の地点にあり、上場径22.0㎝、下場径15.0㎝、深さ18.0㎝の円形である。

（貯蔵穴）それらしいピットは、かまどの東側にあり、不整形で掘方をもつ。東西80.0㎝、南北50.0㎝、深さ5.0㎝で埋土に遺物、炭化物を若干含んでいる。

（年状決定資料）出土遺物は、甕が13点、壺8点、長頸壺2点、坏21点。鞴口1点。鉄滓3点である。甕はA類が4点、B類が3点、D類2点、E類1点。他の3点は不明。坏はA類5点、B類35点、C類5点、D類1点で、みな回転糸切りである。



第17図　7号住居跡

出土遺物

甕A（18図1・2）　1は口縁部⅙、体上半⅙残存する。推定口径約30.0cm、頸部径約28.0cm。体部残存部最大径約29.4cmである。口縁部はわずかに外反し、口端部は強く上に挽き出されている。体壁はほゞ直立し、凸凹が著るしい。胎土軟質砂粒若干を含む。色調は橙色～赤褐色。焼成は不良で、2次焼成を受け、体部は変質している。かまど及びその周囲から出土した。2は、口縁部⅓残存で、推定口径約19.0cm、頸部径約17.8cmである。口縁部は内湾ぎみに外傾する。口端部は強く上に挽き出されている。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は橙色。焼成はやや不良である。かまどの周囲から出土した。他の2点は小破片で全容は不明である。3は、2をやや大型にした形状で、口縁部は内湾ぎみに外傾し、口端は上に強く挽き出されている。4は、口縁部が、かなり外反し、口端部は上に強く挽き出されている。胎土は軟質砂粒を多く含む。色調はにぶい橙色。焼成は不良である。3・4共にかまど及びその周囲から出土した。

甕B　小破片のため実測不能である。1は、口縁部下半部は外反し、上半部は外反し、上半部は内湾ぎみに外傾する。口端部は丸みをもつが、沈線状の条痕が中央を横に走っている。胎土は硬質砂粒を若干含む。色調は明褐灰色。焼成は良好である。かまど周囲より出土した。2は、口縁部⅙以下残存の破片で、口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつが、わずかに上に挽出した形跡がある。胎土軟質砂粒若干含む。色調は橙色。焼成は不良である。かまどの東側から出土した。3は、口縁部⅙以下の破片で、口縁部は外反し、口端部は丸みをもつ。胎土軟質砂粒若干含む。色調はにぶい橙色。焼成は不良である。かまど東側より出土した。

甕D　2点共小破片で、全容は不明である。1は体下半と底部の破片で、底径は7.3cm。底部中心の厚さ1.9cmと厚いが、体部の厚さは0.4cmである。外底面に回転糸切り糸切痕が認められる。胎土軟質砂粒若干含む。色調は橙色。焼成はやや不良で南東部から出土した。2は、口縁部と体部若干の破片で、口縁部は、甕A類の2と類似して、内湾ぎみに外傾し、口端は上に挽き出されている。胎土軟質砂粒若干含む。色調は橙色。焼成はやや不良。かまどより出土した。その他に、体下半部と底部若干の破片5点があり、磨滅して明瞭でないがロクロなで無調整、回転糸切り痕をもつようにみえる。又口縁部のみの破片3点中、2点は口端部が上に挽き出され、1点は、丸みをもつものであるが、体部が欠損しているため、D類かE類が不明である。

甕E　口縁部若干と体部底部若干の破片がある。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもち頸部から体下端までへらなで痕があり、底部外面は木葉痕がある。胎土は軟質で砂粒若干を含む。色調は橙色～灰褐色。焼成は不良である。2次焼成を受けている。床面ほゞ全域に破片が散乱していた。他に1点外面は磨滅して調整痕の有無は不明であるが、体下端内面に刷毛目痕のある破片が1点ある。

壺（19図1・2・3）　1はほゞ完形で、口径22.0cm、頸部径16.8cm、体部最大径30.6cm。

器高 35.5 cm、口縁部高さ 4.4 cm。底径 12.4 cm、である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に挽き出される。口縁部から体部上半外面に叩き目が施され、その後横なで調整がなされている。体下半部外面は上下なでが施され、下端は横なで調整である。内面は、口縁部から体上半部は横なで、下端は上下なでが施されている。胎土は硬質砂粒若干を含む。色調は黒色～黄灰色、焼成は良好である。大部分の破片はこの住居跡から出土したが、5号住居跡埋土と、表土から若干破片が出土した。**2**は、小型の壺で、口縁部½、体部大部分、底部½残存で、歪みが若干みられる。口縁部径約 13.3 cm、頸部径 12.4 cm、体部最大径 19.0 cm、器高 15.3 cm。底径 10.4 cmである。口縁部は直線的にやや外傾し、口縁部は外反し丸みをもつ。外面は口縁部と肩部が横なで、口端より 5.3 cmから下が斜めになでが認められ、下端部にはへら削り痕が認められる。外底面が砂が密に付着しやや上底ぎみである。胎土硬質砂粒を含む。色調は灰色。焼成は良好である。表土から床面まで破片が散乱していた。**3**は口縁部下半と肩部⅛以下の破片で、全容は不明。計測不能である。口縁部下半は直線的に外傾し、肩部はほゞ直線的で、下端に急に屈曲するようである。肩部全面に灰オリーブ色の釉が掛かっている。内外面横なでである。胎土は硬質砂粒若干を含む。色調は灰色。焼成は良好。南東部より出土した。その他5個体分の破片が出土している。

長頸壺（19図4）　口縁部⅓、体部⅓、底部½残存で、大部歪みがみられる。口径約 11.1cm。頸部径 8.1 cm～7.1 cm。体部最大径 18.1 cm、器高 24.3 cm～25.2 cm、底径約 9.3 cmである。もう1個体分と思われる体部の破片が若干あるが、全容は不明である。

坏A（18図3）　口縁部大部分、体部¾、底部⅓残存で、口径 14.7 cm、器高 5.2 cm、底径 6.7 cm、外傾度 37.0°である。口縁部はほゞ直線的で、口端は丸みをもつ。体壁は丸みをもち外傾する。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は、体上部と内面は灰白色、体上半と外底面はにぶい橙色。焼成は不良である。北東部壁際から出土した。他に4点出土している。その1は口縁部⅛以下の小破片で、口縁部はわずかに外反するもので、胎土硬質砂粒若干を含む。色調は灰色、焼成は良好である。2は、口縁部のみ⅛の破片で、口縁部は直線的である。胎土やや硬質砂粒若干を含む。色調は灰白色、焼成はやや良好。かまど周囲から出土した。3は、体部⅛以下の小破片で、体壁はほゞ直線的である。胎土やや硬質砂粒を含む。色調は灰色、焼成はやや良好。体下端に煤が付着している。北西部出土である。4は底部¼残存の破片で、外底面に回転糸切り痕がみられる。胎土やや硬質砂粒は少ない。色調は灰白色、焼成はやや良好である。

坏B（18図4・5・6・7）　**4**は口縁部¼、体部⅙、底部¾残存で、口径約 15.1 cm、器高 5.4 cm、底径 4.9 cm、外傾度 44.0°である。口縁部はほゞ直線的で、口端部は薄くなる。体壁は丸みをもち外傾する。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は褐色、焼成はやや不良で、かまど内から出土した。**5**は、口縁部¼、体部½、底部全部残存で、口径 14.8 cm、器高 5.3 cm、底径 6.4 cm、

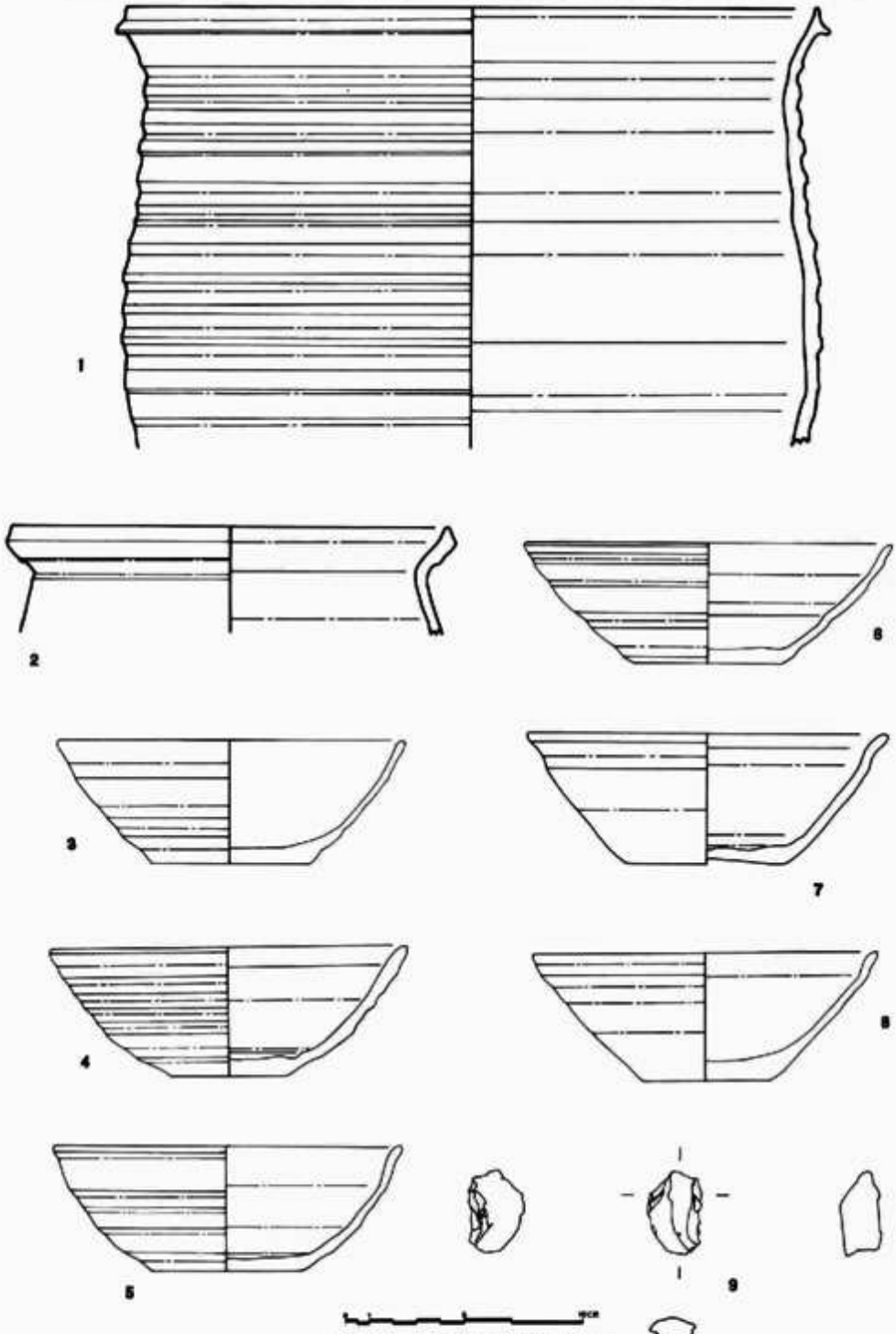
外傾度 38.5° である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ。体壁は丸みをもち外傾する。胎土は軟質砂粒を多く含む。色調は赤褐色、焼成はやや不良で、2次焼成を受け、磨滅著るしい。かまどより出土した。**6**は口縁部¼、体部⅓、底部全部残存で、口径 15.5 cm。器高 5.1 cm。底径 6.3 cm。外傾度 42.0° である。口縁部はほゞ直線的で、口端部は薄くなる。体壁はわずかに丸みがあり外傾する。壁面にロクロなでによる凸凹がみられる。又内底面にヘラ削り様の条痕がみられる。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は黄褐色、焼成はやや不良で、体下半と底部外面に2次焼成の跡がみられる。かまど内から出土した。**7**は口縁部⅛、体部⅛、底部全部残存で、推定口径約 15.2 cm。器高 5.5 cm。底径 6.8 cm、外傾度 36.5° である。口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はわずかに丸みをもち外傾する。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は灰色～にぶい橙色。焼成は不良である。かまどの周囲より出土した。その他22点の口縁部破片と9点の底部破片があるが、その中で10点の破片が、成形技法の明瞭なものである。1は、口縁部¼、体部若干残存で、推定口径約 15.0 cm で、口縁部は直線的で、口端部は薄くなる。体部はほゞ直線的でかなり外傾する。胎土やや硬質砂粒を多く含む。色調は褐灰色～橙色。焼成はやや不良である。南東部より出土した。2は、口縁部⅓、体部⅓残存。歪みが著るしく測定は不能である。口縁部は直線的で、口端部は薄くなる。体部も歪みが著るしく、壁面はほゞ直線的である。体下端と底部の境は不明瞭で丸みをもっている。胎土やや軟質砂粒若干含む。色調は橙色。焼成はやや不良で、かまど内から出土した。3は口縁部⅛に体部若干残存で、口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ。体部はやや丸みをもち外傾している。胎土軟質砂粒多く含む。色調は橙色。焼成は不良。かまど周囲から出土した。4は口縁部⅛に体部若干残存で、口縁部はわずかに外反する。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良。かまど周囲から出土した。5は口縁部体部共若干残存で、口縁部は直線的で、口端部は丸みをもつ。胎土はやや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。南東部から出土した。6以下は口縁部のみ記述すると、6は内湾。7は外反。8は外反。9はわずかに外反。10は口縁部欠損で、胎部がやや硬質で灰白色、外面が黄褐色、内面が橙色で、焼成はやや良好である。

坏C（18図8） 口縁部⅔、体部⅓、底部⅓残存で、推定口径約 14.5 cm、器高 5.4 cm、底径 5.3 cm、外傾度 40.5° である。口縁部は、ほゞ直線的で、口端部はやや薄くなる。体壁はわずかに丸みをもち外傾する。体下端残存部には調整の痕はみられない。内面は磨きのみ認められ、黒色處理はほとんど消滅している。底部は調整の痕はあるが不明瞭である。胎土やや軟質砂粒は少い。色調は褐灰色～橙色。焼成はやや良好である。かまど周囲から出土した。他に4片あるが小破片のため全容は不明である。

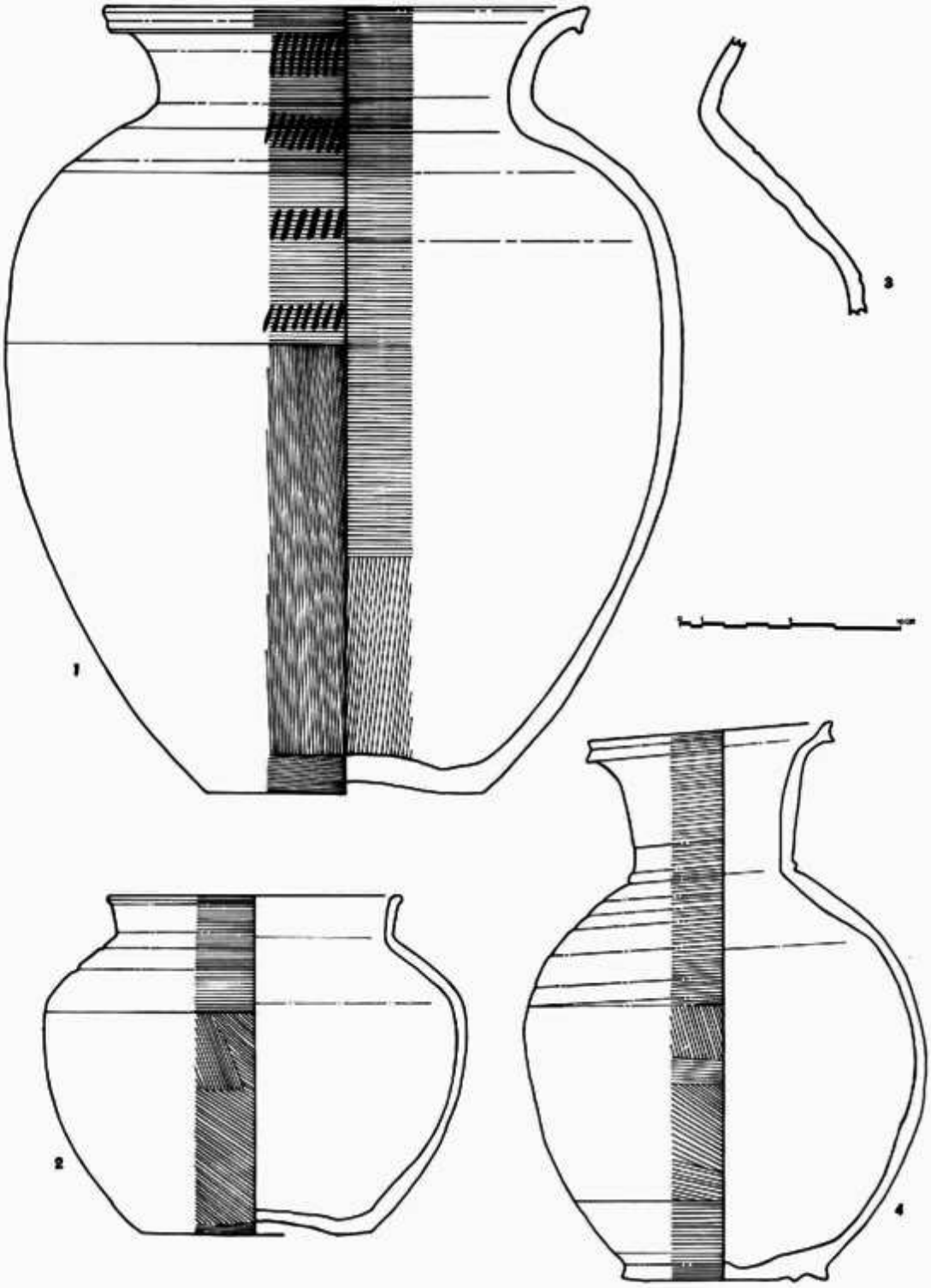
坏D 口縁部体部若干の小破片で、口縁部はかなり外反し、体部はかなり外傾したもので、

外体面にロクロなでによる条線が多くみられる。かまどより出土した。

その他、鞴口先端部（18図９）。鉄滓３点。縄文土器片24点、石篦状石器１点が出土した。



第18図　７号住居跡出土遺物



第19図　7号住居跡出土遺物

8号住居跡

（遺構の確認）Ｃｅ24地区に黒褐色の落込みを確認している。６号住居跡の南西約50ｍの地点である。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（重復・重改築）なし。

（平面形・方向）この住居跡は昭和48年度の調査で、遺構が確認されているにもかかわらず、その後工事用道路建設のため、西半分が破壊されてしまった。東西の長さは不明。南北約3.5ｍの方形と思われる。幸いかまど、東壁、南西コーナー、北壁の大部分が残存していたので、調査を行い得た。主軸方向は南東で、Ｅ－20°－Ｓ。煙道方向はＥ－26.5°－Ｓである。

（堆積土）Ｉ層であるが、混入するシルトの量で２層に細分される。

１層　10ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層　指圧痕やや付く、粘性なし、シルト焼土を若干含む。

２層　10ＹＲ2/2 黒褐色腐植土層　指圧痕やや付く、粘性なし、シルト焼土遺物を含む。

（床面）あまり固くない。地山を床面として利用した様である。貼床、掘方はない。床面から壁への立上がりは急角度で、壁高は約10cmである。

（柱穴）なし。

（周溝）なし。

（かまど）東壁南端にあり、両袖が残存している。燃焼部は、巾約50cm、奥行約70cm、深さ18cmである。南側袖は長さ43cm、巾21cm、高さ14cm。北側袖は長さ70cm、巾23cm、高さ10cmである。煙道は112cm、巾44cm、深さ18cmで、下に溝状の掘方があり、深さ25cmである。煙出は上場の径が56cm、下場径が20cm、深さ約20cmである。煙道煙出共に上場が大部崩れたと思われる。

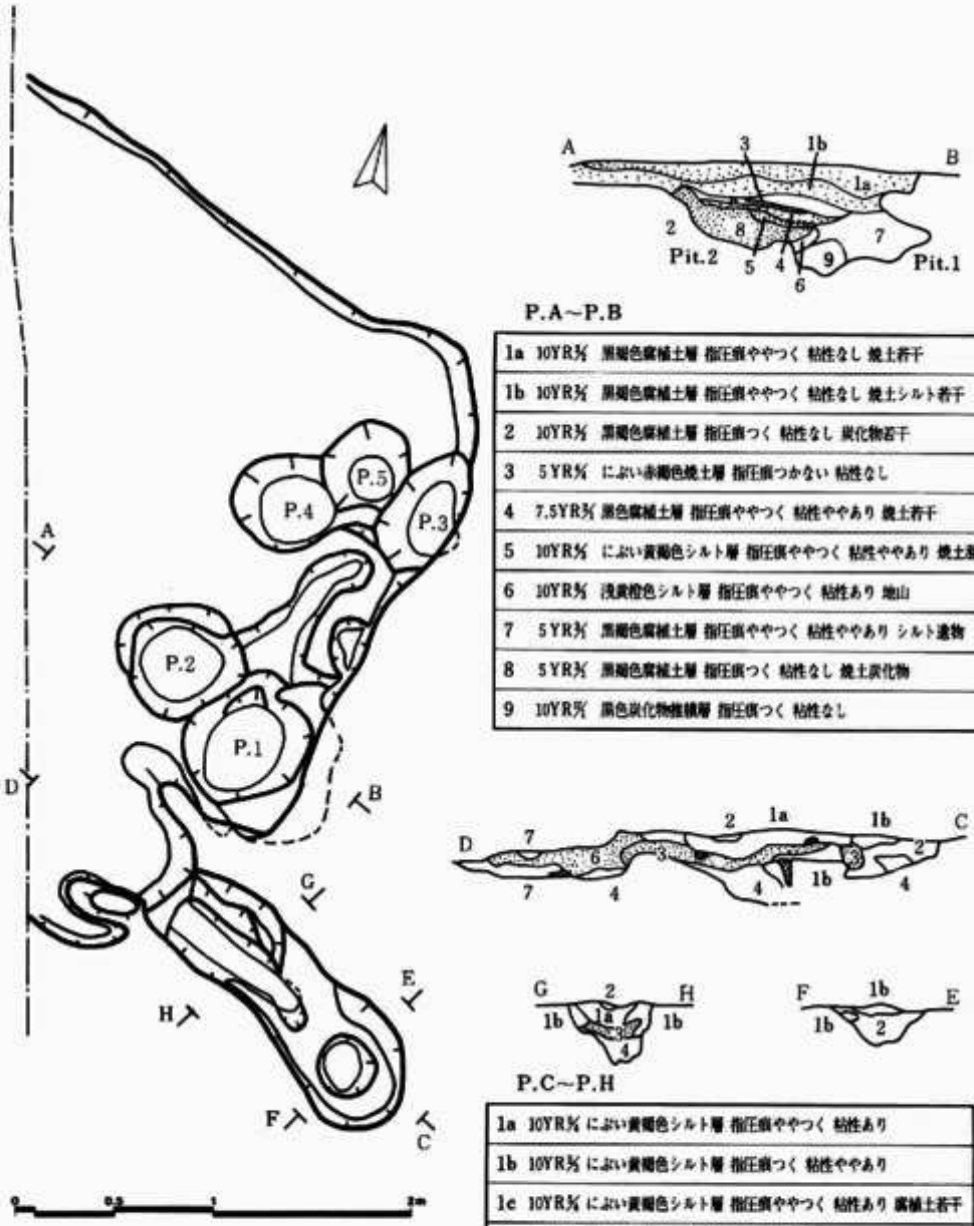
（貯蔵穴）東壁沿いにピットが５つみられる。

第　2　表

pit No.	上場径	下場径	深さ	土色	土性	備考
1	70 × 65cm	45 × 70cm	30cm	5ＹＲ3／1 黒褐色	腐植土	焼土、炭化物、遺物シルト多い。東壁下に20cm入る。ピット２と切り合い。
2	60 × 60	36 × 36	28	5ＹＲ3／1 黒褐色	腐植土	焼土、炭化物多い。ピット１より新しい。
3	65 × 40	40 × 25	20	5ＹＲ3／1 黒褐色	腐植土	遺物を多く含む。シルトが混入東壁に若干入る。ピット５と切り合い。
4	54 × 50	37 × 37	15	5ＹＲ3／1 黒褐色	腐植土	シルト若干混入。ピット５と切り合い。
5	45 × 50	22 × 23	20	5ＹＲ3／1 黒褐色	腐植土	ピット３・４と切り合い。シルト若干混入。ピット３・４より新しい。

（その他の施設）性格不明であるが、北東コーナにほゞ円形の張り出しがある。

（年代決定資料）甕10点、壺２点、坏約24点が出土した。甕はＡ類２点、Ｂ類１点、Ｄ類３点、Ｅ類３点、Ｄ類かＥ類か不明のもの１点である。坏はＡ類４点、Ｂ類18点、Ｃ類２点である。甕Ａ・Ｂ類は特異な口端部を持っている。又甕Ｄ類は回転糸切りが２点、甕Ｅ類は底部にへら削りへらなで痕がある。坏はＡ・Ｂ類の底面がいずれも回転糸切りで、Ｃ類は底部が欠損して不明である。



1a	10YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土若干
1b	10YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土シルト若干
2	10YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕つく 粘性なし 炭化物若干
3	5YR5/6	にぶい赤褐色焼土層 指圧痕つかない 粘性なし
4	7.5YR3/1	黒色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性ややあり 焼土若干
5	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト層 指圧痕ややつく 粘性ややあり 焼土混合
6	10YR5/3	浅黄橙色シルト層 指圧痕ややつく 粘性あり 地山
7	5YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性ややあり シルト遺物
8	5YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕つく 粘性なし 焼土炭化物
9	10YR2/1	黒色炭化物堆積層 指圧痕つく 粘性なし

1a	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト層 指圧痕ややつく 粘性あり
1b	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト層 指圧痕つく 粘性ややあり
1c	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト層 指圧痕ややつく 粘性あり 腐植土若干
2	10YR3/1	黒色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし
3	10YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性なし 焼土炭化物
4	10YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性ややあり シルト若干
5	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト層 指圧痕ややつく 粘性ややあり
6	5YR5/6	にぶい赤褐色焼土層 指圧痕ややつく 粘性ややあり 遺物
7	10YR3/1	黒褐色腐植土層 指圧痕ややつく 粘性ややあり

第20図　8号住居跡

出土遺物

甕A（21図1）　口縁部½、体上半⅓残存で、推定口径約21.0㎝、頸部径約19.0㎝、体部残存部最大径約21.0㎝である。口縁部はかなり外反し、口端部は上に挽き出され丸みをもつ。又口縁部上半が外側にも挽き出され丸みをもっているため、口端が2つあるようにみえる。口縁部の高さは約2.0㎝である。体上端部は約2.0㎝ほど横なでヾ、その下はヘラ削り、ヘラなでが上下に施されている。体部内面は上下に粗い刷毛目が施されている。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色。焼成はやや不良で、内面に煤が付着している。かまど及びそでから出土した。もう1点も1と同様の口端をもつが、小破片のため全容は不明である。かまど内から出土した。

甕B（21図2）　口縁部⅔、体上半部⅔残存で、推定口縁約18.0㎝、頸部径約16.0㎝、体部残存部最大径約22.0㎝、口縁部高さ1.0㎝、残存部の器高28.0㎝である。口縁部は強く外反し、口端部は丸みをもち短い。歪みが著るしくロクロなで成形かどうか疑問である。外体面は上端に刷毛目痕らしきものが上下に施され、肩部以下はヘラ削り、ヘラなでのようで、凸凹が著るしい。内体面は横に刷毛目痕が施される。体壁の厚さは2.5㎜から5.0㎜と薄い。胎土やや硬質砂粒を若干含む。色調は橙色からにぶい褐色。焼成はやや良好である。かまど袖とピットNo.1出土である。

甕D（21図3・4）　3は、口縁部⅓、体部⅓、底部全部残存で、推定口径約14.8㎝、頸部径13.5㎝、体部最大径13.7㎝、器高14.3㎝、底径7.7㎝、口縁部高さ1.2㎝である。口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。体壁はやや丸みをもち、凸凹が著るしい。回転糸切である。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は橙色、焼成は不良である。かまど出土で、2次焼成を受けている。4は、口縁部½、体上半部½、底部¼残存で、推定口径約13.4㎝、頸部径約12.6㎝、口縁部高さ1.1㎝である。口縁部は、やや外反し、口端部は薄くなる。体壁はわずかに丸みをもち凸凹がある。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良。かまどより出土した。他の1点は、口縁部¼、体上端若干残存で、推定口径約14.0㎝、口径部高さ2.5㎝、頸部径約12.0㎝である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は橙色～にぶい橙色。焼成はやや不良。2次焼成を受ける。煙道出土で煤が外面に付着している。

甕E　3点共実測不能である。1は体下端⅓、底部⅓残存で、体下端はヘラ削り、ヘラなで調整、内面は横に刷毛目痕がみられる。底部外面はヘラ削りヘラなで痕がみられ、わずかに外に張り出す。胎土やや軟質砂粒を多く含む。色調は赤褐色。2次焼成を受け変質している。ピットNo.1出土である。2は口縁部⅛体上端⅛残存で、口縁部は外反し、口端部は丸みをもつ。口縁部下端は丸く張り出している。体上半部はヘラ削りヘラなでが上下に施される。内面は磨

減し横なでがかすかにみられる。胎土軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。3は、口縁部⅛体上端若干残存で、口縁部はかなり外反し、口端部は丸みをもつ。体上端外面はヘラなで、内面も横にヘラなでが施される。胎土軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成は、やや不良である。ピットNo.1出土である。

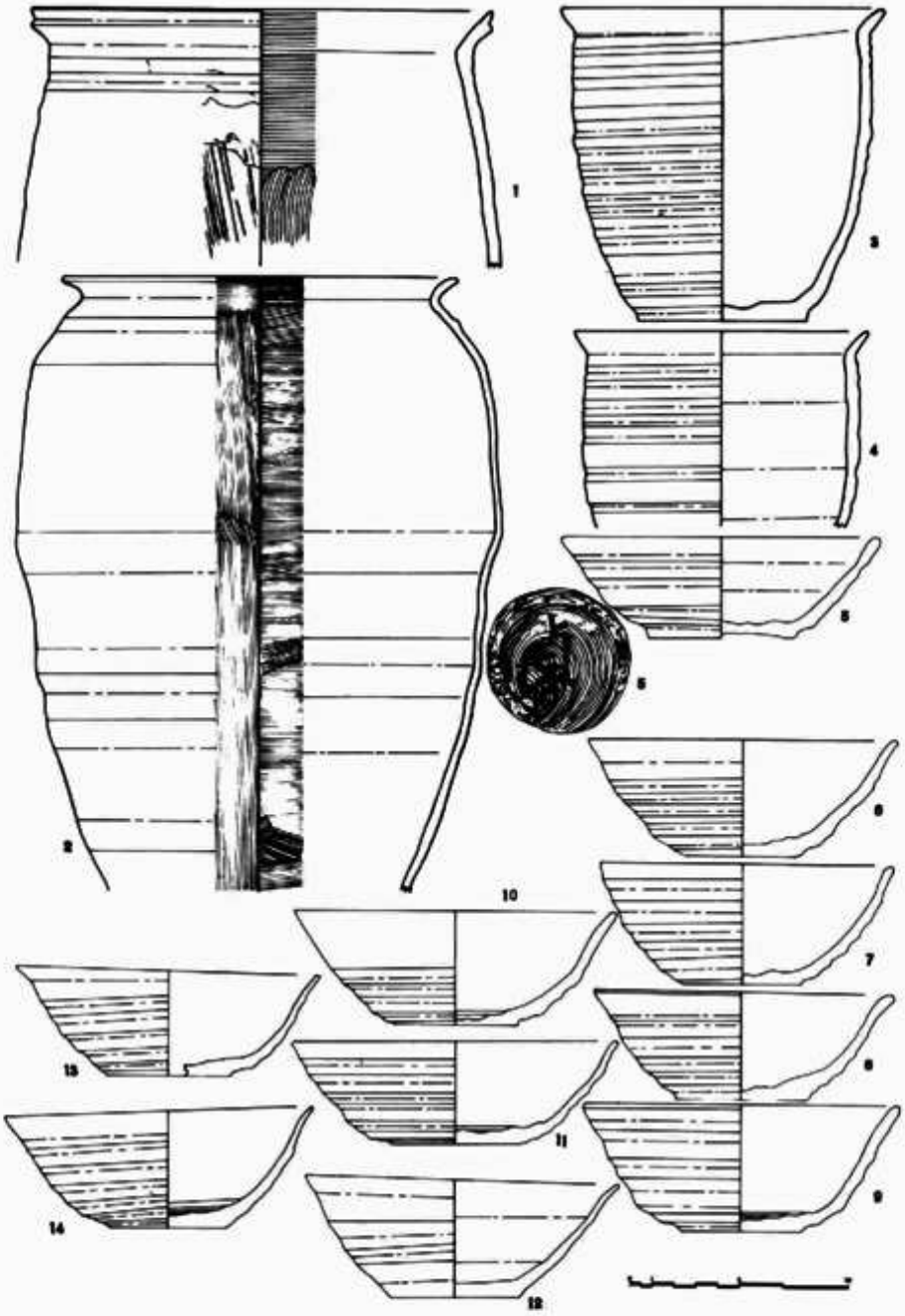
坏A（21図5） 口縁部¾、体部¾、底部全部残存で、口径14.6cm、器高4.6cm、底径6.6cm、外傾度41.0°である。口縁部はほゞ直線的で、口端部は丸みをもつ。胎部の厚さ5.0mmで、歪みがある。体壁はほゞ直線的である。底部はやや下に張り出し、外底に『貞』の墨書がある。胎土やや硬質砂粒若干を含む。色調は灰黄色、焼成は良好である。かまど周辺より出土した。他の1つは口縁部⅛以下2片、体下端と底部若干残存で、口縁部は括れるようになり外反し、口端部は丸みをもつ。胎土硬質砂粒若干含む。色調は灰色、焼成良好である。2つは口縁部若干の破片で、口縁部は直線的で、口端は薄くなる。胎土軟質砂粒若干を含む。色調灰白色、焼成不良である。3つは体下端若干の破片で、胎土やや硬質砂粒若干を含み、色調は灰赤色～にぶい赤褐色～灰色。焼成はやや良好である。3点共北東部Q_1床面より出土した。

坏B（21図6・7・8・9・10・11・12・13・14） **6**は、口縁部⅓、体部½、底部全部残存で、口径14.0cm、器高5.3cm、底径5.0cm、外傾度41.0cmである。口縁部はほゞ直線的で、口端部は丸みをもつ。体壁はやや丸みがある。胎土軟質砂粒多い。色調はにぶい橙色、焼成は不良。2次焼成を受ける。かまど内出土である。**7**は、口縁部⅔、体部⅔、底部全部残存で、口径13.4cm、器高5.5cm、底径5.4cm、外傾度37.5°で、椀型である。口縁部はほゞ直線的で、口端は急に薄くなる。体壁はかなり丸みがあり、凸凹が著しい。胎土やや軟質砂粒少ない。色調は橙色～黄褐色、焼成やや不良で、北壁直下西寄出土である。**8**は、ほゞ完形で、口径13.7cm、器高4.9cm、底径4.9cm、外傾度39.0°である。口縁部は大部外反し、口端は丸みをもつ。体部は丸みをもち外傾する。内外共に煤が付着している。胎土やや軟質砂粒若干含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良。ピットNo.3から出土した。**9**は、口縁部⅔、体部⅔、底部⅔残存で、口径14.5cm、器高5.8cm、底径5.6cm、外傾度37.5°である。口縁部はわずかに外反し口端部は丸い。体部はかなり丸みをもち外傾する。底部は下にやや張り出している。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良で、かまど内から出土した。**10**は、口縁部¼、体部¼、底部⅞残存で、口径約14.7cm、器高5.2cm、底径5.6cm、外傾度41.0°である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸い。体部はかなり丸みをもち外傾する。底部は下にやや張り出す。胎土はやや軟質砂粒少ない。色調は淡橙色、焼成はやや不良である。かまど内から出土した。**11**は、口縁部¼、体部¼、底部全部残存で、推定口径14.8cm、器高4.7cm、底径6.0cm、外傾度43.5°である。口縁部はわずかに外反し、大部歪みがある。口端部は薄くなる。体壁はかなり丸みをもち、かなり外傾する。胎土やや軟質砂粒若干含む。色調は橙色、焼成はやや不良で、ピットNo.1出

土である。**12**は、口縁部⅔、体部⅔、底部全部残存で、口径14.4cm、器高5.6～5.1cm、底径5.8cm、外傾度42.0°である。口縁部はわずかに外反し、口端部は丸みをもつ。体部はわずかに丸みをもち外傾するが、歪みがある。胎土軟質砂粒少ない。色調は橙色、焼成はやや不良、焼土が付着している。ピットNo.2出土である。**13**は、口縁部½、体部⅔、底部全部残存で、口径13.8cm、器高4.7～5.0cm、底径5.5cm、外傾度42.0°である。口縁部はかなり外反し、口端は丸みをもつ。体部はかなり丸みをもち外傾する。底部は下にやや張り出す。胎土やや軟質砂粒若干含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。かまど内から出土した。**14**は、口縁部⅓、体部⅔、底部全部残存で、口径約14.0cm、器高5.1～5.6cm、底径5.2cm、外傾度35.5°である。口縁部はかなり外反し、口端は薄くなる。体部は丸みをもち外傾する。胎土は軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成は不良で、磨滅著るしい。ピットNo.1出土である。他に実測不能の小破片9点がある。その1は、口縁部⅛以下の破片4片で、口端外面に成形の際付いたと思われる条痕が一本横に走る。歪みの大きい口縁で、直線的な所と、外反する所がみられる。胎土軟質砂粒若干、色調は橙色、焼成不良で、かまど内出土である。2は、口縁部⅛以下、体部⅛以下、底部⅛以下5片で、口縁部は直線的で口端部はやや薄くなる。胎土軟質砂粒多く含む。色調は灰褐色～橙色、焼成不良、ピットNo.3出土である。3は、口縁部⅛、体部上半若干の破片で、口縁部はわずかに外反し、口端は丸くなる。胎土軟質砂粒若干、色調は橙色、焼成は不良。かまど周囲出土である。4は口縁部⅛残存で、口縁部はかなり外反し、口端部は丸い、胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。かまど周囲出土である。5は、口縁部⅛残存で、口縁部はわずかに外反し、口端は丸い。胎土軟質砂粒多く含む。色調は赤褐色、焼成は不良。かまど周囲出土である。6は、口縁部⅛、体部若干残存で、口縁部は直線的で、口端は薄くなる。胎土軟質砂粒を多く含む。色調は赤褐色、焼成は不良である。かまど周囲出土である。7は、口縁部⅛残存で、口縁部は直線的、口端部は丸みをもつ。全体が黒色であるが、磨きは認められない。胎土軟質砂粒少ない。色調は黒色、焼成はやや不良。北西部出土である。8は、口縁部⅛、体上半部⅛残存である。口縁部は直線的で、口端部は薄くなる。体部はかなり丸みがある。胎土軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色、焼成は不良である。かまど周囲より出土した。9は、体下端⅛、底部若干残存で、大部歪みがみられる。胎土はやや硬質砂粒を若干含む。色調は内外面が赤褐色～橙色。胎部は灰白色。焼成はやや良好で、A類に近い。かまど及びピットNo.1から出土した。

坏C　底部⅛残存で、内面磨き、黒色處理が認められ、外面は磨滅しており明確ではないが調整がなされたようで、糸切痕が認められない。他の1点は、口縁部⅛以下、体下端若干と底部¾残存で、底径は約6.0cmである。口縁部と体部内面に磨きが認められるが、黒色處理は認められない。体部下端外面と外底面にも調整の痕跡は認められない。ピットNo.3から出土した。

壷　頸部下端若干、肩部⅓、体部上端若干残存で、かなり大型と思われる。頸部はかなり外反し、肩部はわずかに丸みをもっている。肩部と体上端の境は、かなり屈曲している。頸部と肩部の内外面は横なで、体上端はやや斜めにヘラ削りヘラなでが施されている。もう1点は、体部の小破片で、直線の叩き目痕が施されている。



第21図　8号住居跡出土遺物

焼土遺構（Ｃｅ71）

（遺構の確認）路線の東端、Ｃｅ71地区に遺物を包含した焼土が確認された。遺構確認面は表土層中で、地表面（水田耕作面）から22.0㎝下の所であり、表土下の黄褐色火山灰層までは達していない。48年度に確認され、遺構の周囲は火山灰層まで掘り下げられていた。

（平面形）東西87.0㎝、南北110㎝の不整形で、焼土の厚さは約12.0㎝である。

（堆積土）焼土は、混入する土質により３層に分けられる。22図参照。

1層　10YR2/1 黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし。表土（耕作土）

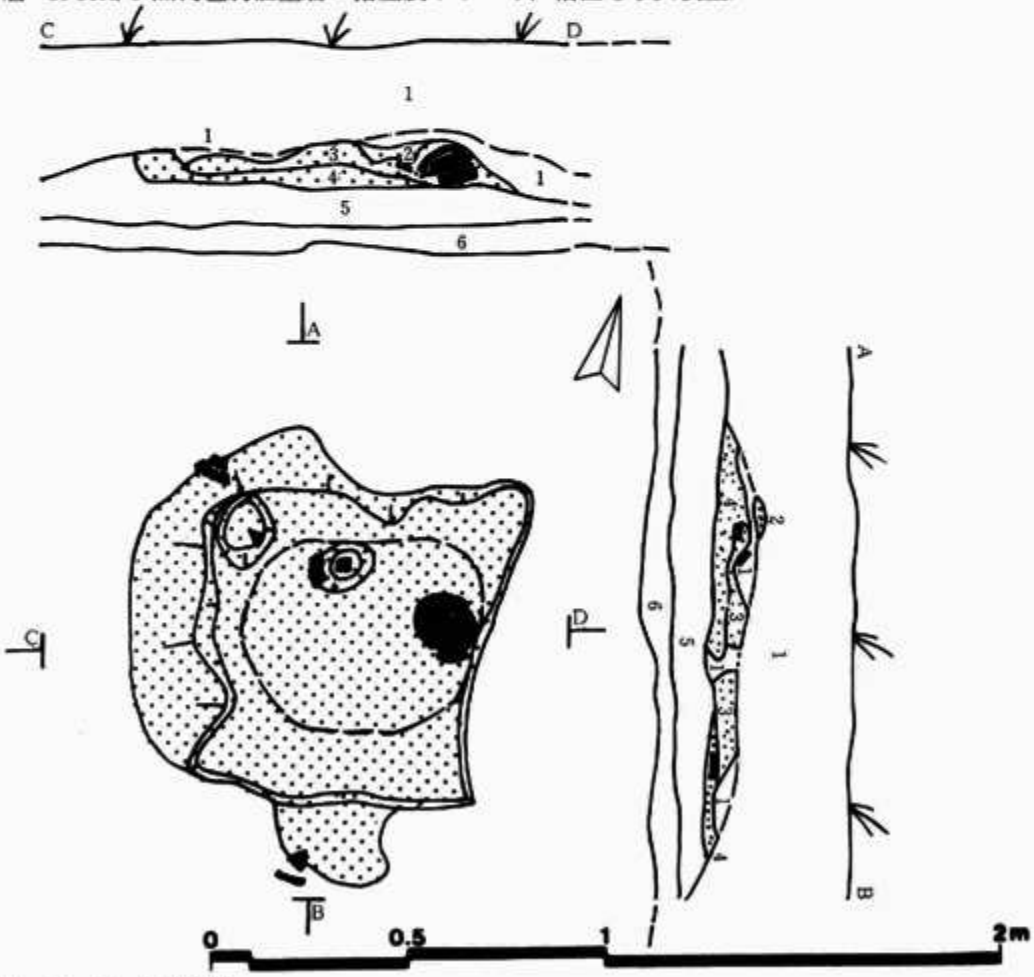
2層　10YR5/8 黄褐色シルト層　指圧痕つかない、粘性ややあり、砂を含む、一部焼ける。

3層　10YR5/8 黄褐色シルト層　指圧痕つかない、粘性ややあり、大部分焼けている。

4層　10YR2/1 黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、焼土炭化物遺物を含む。

5層　10YR2/1 黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、焼土遺構が上に乗る。（表土）

6層　10YR2/2 黒褐色腐植土層　指圧痕ややつく、粘性あり。（表土）



第22図　Ｃｅ71　焼土遺構

（年代決定資料）出土遺物は、甕7点、坏9点で、甕はA類3点。C類1点。D類2点。A・Bいずれか不明のもの1点である。

出土遺物

甕A（23図1）　3点出土している。**1**は、口縁部⅓、体部⅓残存で、推定口径約24㎝、頸部径約22.6㎝、体部残存部最大径約24.4㎝、口縁部高さ2.5㎝である。口縁部は内湾外傾し、口端部は強く上に挽き出されている。体部上端は横なで、その下半は上下にヘラ削り、ヘラなでが施されている。内面は下半部まで横なでである。胎土はやや硬質砂粒を多く含む。色調は内外面が橙色、胎部は灰白色、焼成はやや良好で、4層南半から出土した。他の1つは、口縁部と体上半部若干の破片で、口縁部は高さ約2.1㎝で、内湾ぎみに外傾し、口端部は上に強く挽き出される。口縁部と体部上端は横なで、体部外面は上下のヘラ削り、ヘラなで、体部内面は下半部まで横なでで、1と同じ成形、調整技法のようである。胎土やや硬質砂粒を多く含む。色調は褐色～橙色、焼成はやや良好で、3層から出土した。他の2は口縁部⅛残存で、口縁部は内湾ぎみに、かなり外傾する。口端部は強く上に挽き出されている。内外面共横なでである。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色、焼成はやや不良である。3層から出土した。

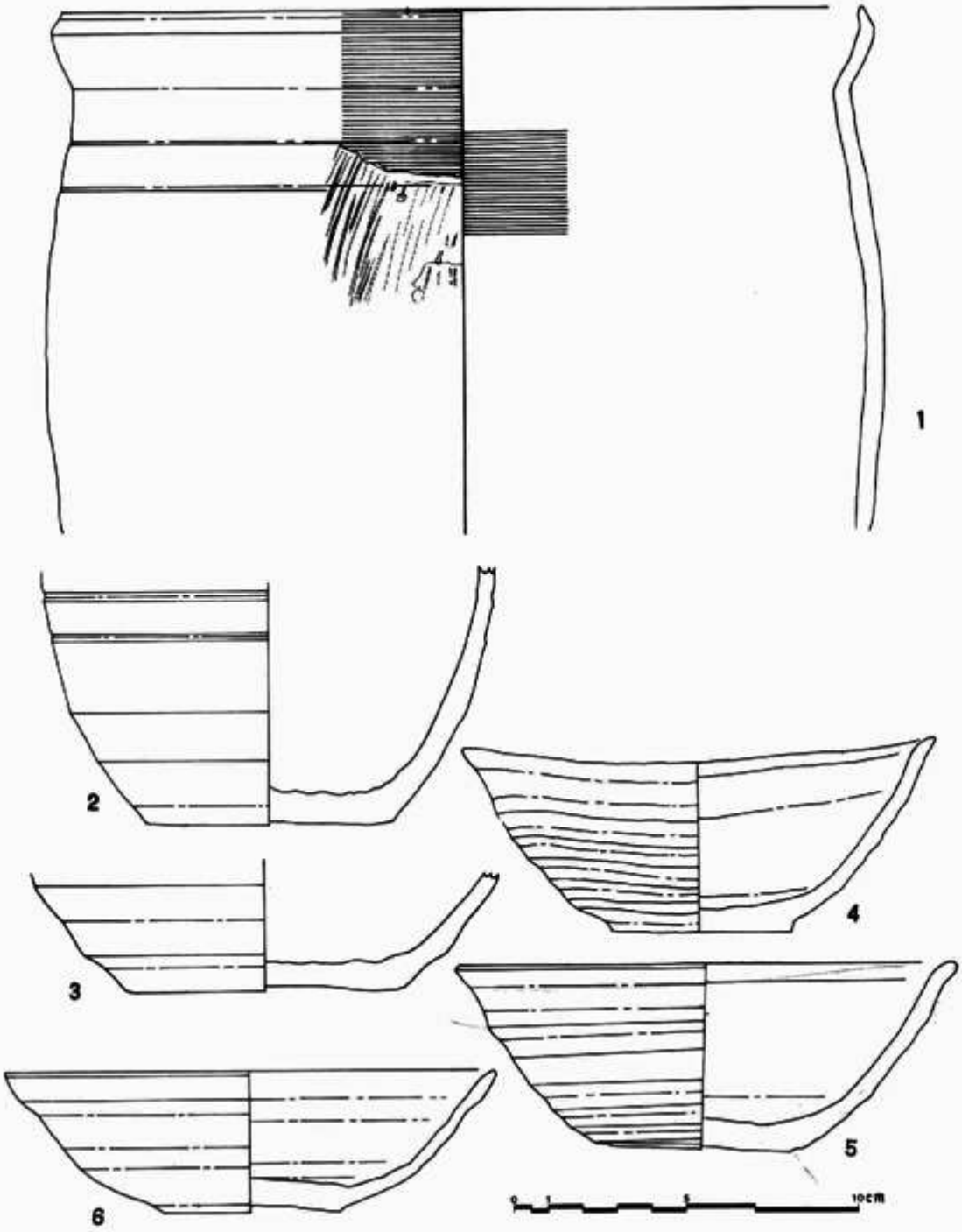
甕C　口縁部⅛以下、体部上半若干の残存で、口縁部はやや外反し、口端部は丸みをもつ。体部外面は上下に刷毛目、内面は横に刷毛目が施されている。胎土はやや硬質粗砂粒を大部含む。色調は橙色～灰赤色、焼成はやや良好である。4層南端から出土した。

A・B類いずれか不明のものは、口縁部下端、体上端若干の破片で、内外面共横なでである。胎土まやや軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良。4層出土である。

甕D（23図2・3）　**2**は口縁部½、体部½、底部全部残存で、推定口径約13.0㎝、底径7.2㎝、である。口縁部は外反し、口端部は上に強く挽き出されている。体部は下端に回転ヘラ削り調整がみられる以外はロクロなで成形である。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調はにぶい橙色、焼成はやや不良。2次焼成を受け口縁部体部が大部欠損している。**3**は、体下端、底部残存で、底径　で、底径8.2㎝である。胎土やや軟質砂粒少ない。色調にぶい橙色、焼成やや不良。3層出土。

坏B（23図4・5・6）　**4**はほゞ完成品で、口径14.8～13.7㎝、器高5.0～5.7㎝、底径5.2㎝である。口縁部はわずかに外反し、口端は丸みをもつ。体壁は丸みをもち外傾する。胎土やや軟質砂粒若干を含む。色調は橙色。焼成はやや良好。内外面に煤かタールが付着する。**5**は、ほゞ完形で、口径14.6㎝、器高5.6㎝、底径5.2㎝、外傾度40.0°で、口縁部やや外反、口端丸みをもつ。体型は丸みをもち外傾する。胎土・色調・焼成は4と同じである。甕D2の上に乗り、上には4が重なり、いずれも外底面を上にし、3層より出土した。**6**は、口縁部¼、体部¼、底部½残存で、推定口径14.4㎝、器高4.1㎝、底径5.2㎝、外傾度48.5°。口縁部は直線的で口端

部は丸い。体壁はかなり丸い。胎土・色調・焼成は4・5と同じで3層出土である。他の6点もほゞ同じ破片である。



第23図　CE71焼土遺構出土遺物

堀立柱建物跡（Ｂｉ53）

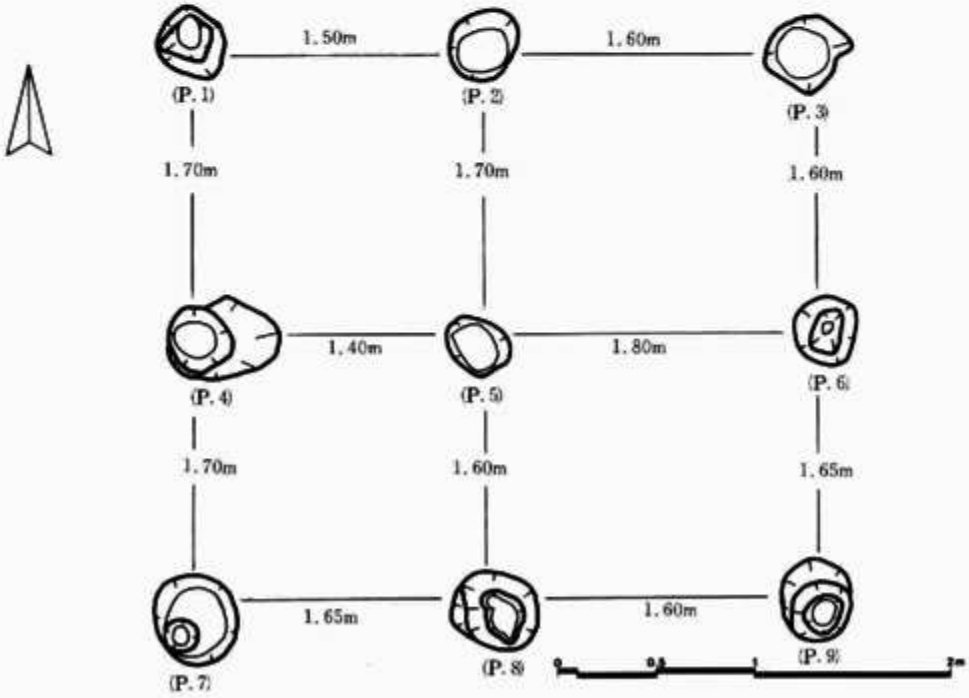
（遺構の確認）Ｂｉ53区（基準点より東へ3.0ｍ～7.4ｍ。南へ15.2ｍ～19.4ｍ）に黒褐色の落込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（平面形・方向）ほゞ等間隔で、２間×２間の方形である。ほゞ南北方向を向く。

（堆積土）埋土は単層で、黒褐色腐植土である。

（規模）北列西側は1.50ｍ、北列東側は1.60ｍ、中列西側は1.40ｍ、中列東側は1.80ｍ、南列西側は1.65ｍ、南列東側は1.60ｍ、西列北側は1.70ｍ、西列南側は1.70ｍ、中列北側は1.70ｍ、中列南側は1.60ｍ、東列北側は1.60ｍ、東列南側は1.65ｍで、北列3.10ｍ、中列3.20ｍ、南列3.25ｍ、西列3.45ｍ、中列3.30ｍ、東列3.25ｍである。又ピットNo.1は、上場径34.0cm、下場径12.0cm、深さ27.0cm。ピットNo.2は、上場径35.0cm、下場径25.0cm、深さ21.0cm。ピットNo.3は、上場径35.0cm、下場径27.0cm。ピットNo.4は、上場径32.0cm、下場径22.0cm、深さ27.0cm。ピットNo.5は、上場径30.0cm、下場径20.0cm、深さ12.0cm、ピットNo.6は、上場径33.0cm、下場径15.0cm、深さ34.0cm。ピットNo.7は、上場径40.0cm、下場径16.0cm、深さ26.0cm。ピットNo.8は、上場径36.0cm、下場径17.0cm、深さ26.0cm。ピットNo.9は、上場径36.0cm、下場径19.0cm、深さ28.0cmである。

（年代決定資料）出土遺物は皆無であるが、南東部に溝状の攪乱があり、ピットNo.5とピットNo.6は、その下場から検出された。



第24図　Bi53掘立柱建物跡

溝状土壙

No.1 溝状土壙（25図1）

（遺構の確認）5号住居跡の中央やや南東寄から、かまどの燃焼部に、黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は、住居跡の床面下である。

（形態・方向）長軸2.80 m、短軸0.30 m～0.20 m、深さ0.45 mで、両端がややふくらんでいる。方向はほゞ南北を向きN－5°－Wである。

（堆積土）4層に分れ、遺物が包含されていなかった。

1層　10YR3/4 暗褐色シルト層　指圧痕つかない、粘性あり、焼土炭化物を含む住居跡床面。

2層　10YR2/1 黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし。

3層　10YR3/2 黒褐色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、粒状にシルトを含む。

4層　10YR4/4 褐色シルト層　指圧痕つく、粘性なし、砂腐植土を含む。

5層　10YR2/1 黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、シルトを含む。

No.2 溝状土壙（25図2）

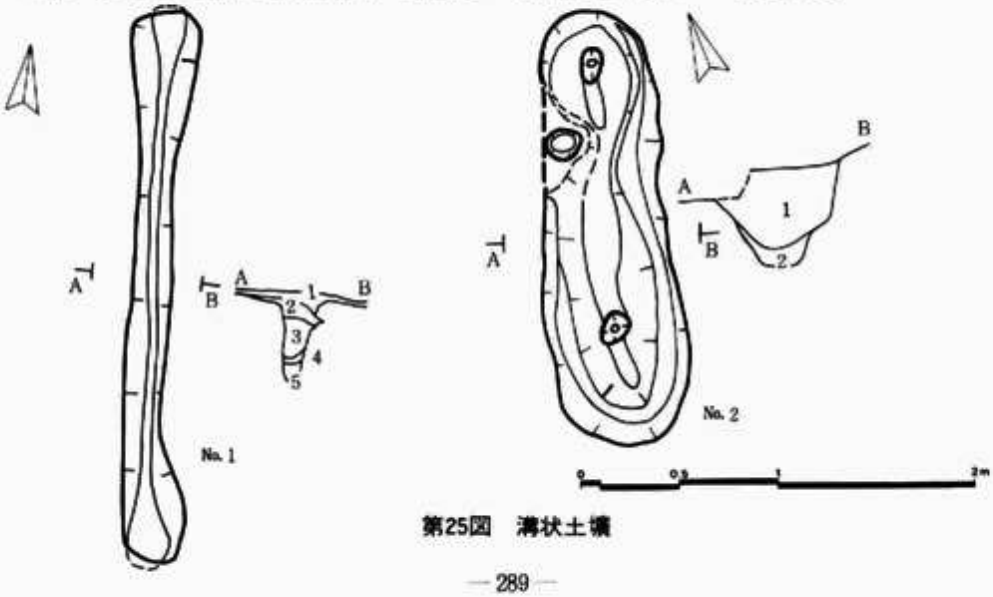
（遺構の確認）5号住居跡の南東壁北寄りに黒色の落ち込みを確認した。遺構確認面は表土下の黄褐色火山灰層である。

（形態・方向）長軸2.20 m、短軸0.70 m、深さ0.62 m、長楕円形で、下場両端に深さ5.0 cmの小ピットがある。方向はほゞ北東を向きN－15.0°－Eである。

（堆積土）

1層　10YR2/1 黒色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし。

2層　10YR3/2 黒褐色腐植土層　指圧痕つく、粘性なし、シルトを含む。



第25図　溝状土壙

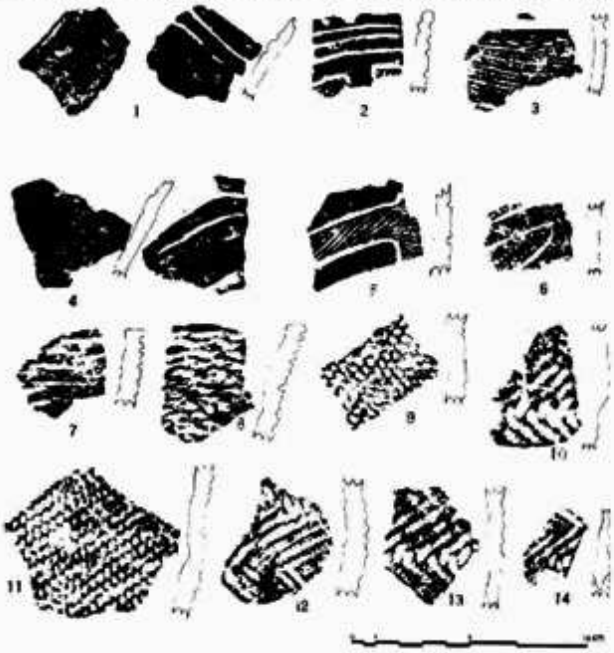
（年代決定資料）２基の溝状土壙からは、遺物の出土は無く、年代決定資料は得られなかったが、５号住居跡に依って切られている事から、住居跡以前の遺構と思われる。№１溝状土壙は、５号住居跡の床面である踏み固められた焼土、炭化物を含んだシルト質土層の下と、かまど東袖と燃焼部の下から検出されている。第２溝状土壙は、５号住居跡の南壁と重復しており、溝状土壙の長軸に沿って５号住居跡の南壁をつくったため、壁面の輪郭が不明瞭になっている。又５号住居跡の南東側柱穴も、溝状土壙と重復しており、埋土が軟質で、柱が不安定なためか、柱穴の周りに、地山のシルト質土を埋め込んで固めている。又、溝状土壙の周辺には、表土、住居跡内、撹乱層内から、住居跡以前の遺物として、縄文時代の土器片と石器、及び弥生時代の土器片が出土しており、溝状土壙との関連の可能性がある。

Ⅳ　表土などより発見された遺物

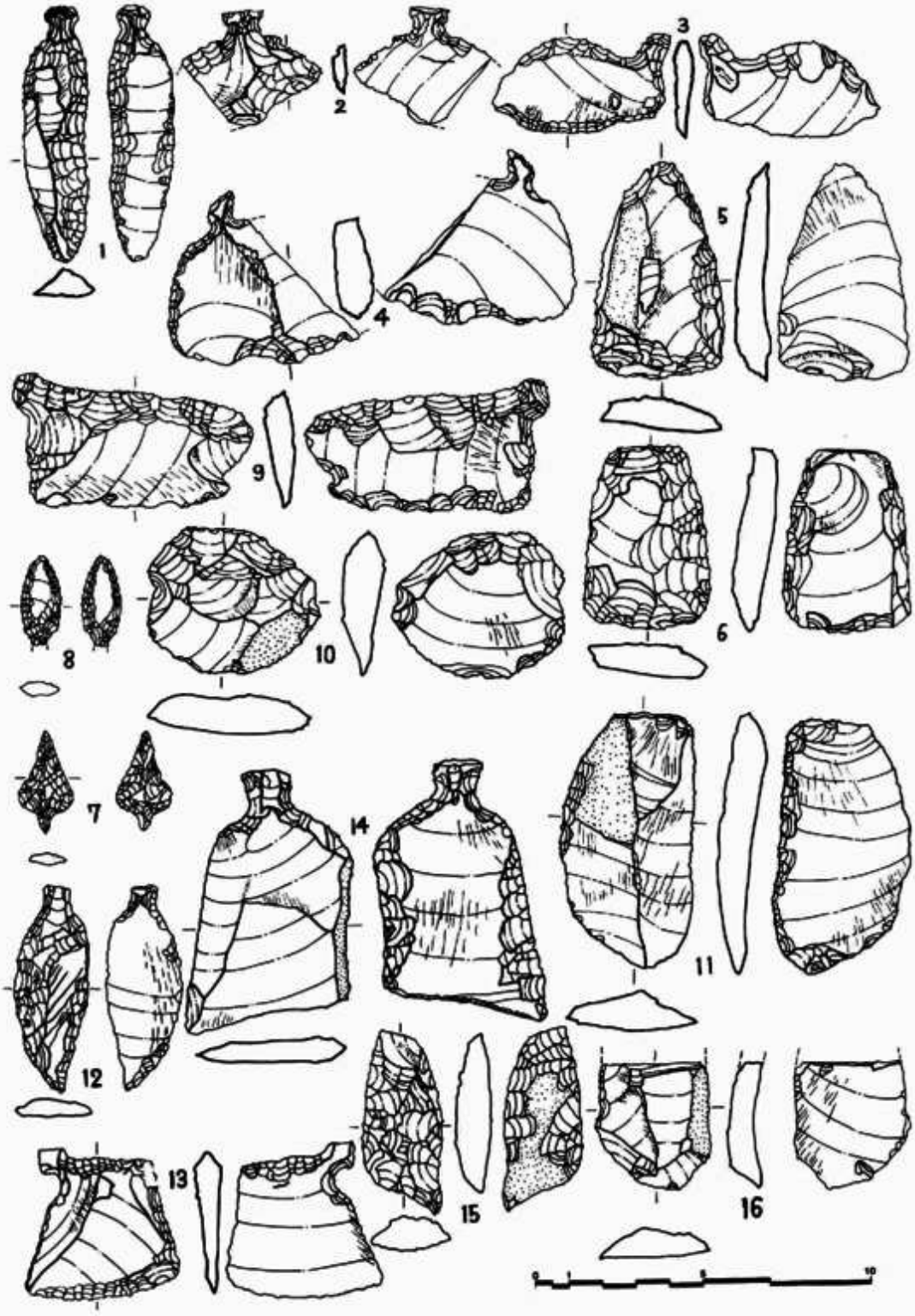
表土　平安時代住居跡、撹乱層等から、縄文土器片と石器、及び弥生式土器片が出土した。

縄文土器片（26図７～14）　は、胎土に繊維を含み、口縁部には横に不整撚糸がみられるもの２片（26図７・８）縄文の圧痕のもの１片、体部破片40数片で羽状縄文のあるもの数点がある。石器は有柄石鏃２、縦型石匙５、横型石匙５、石篦状石器４、掻器１、剥片多数である。

弥生式土器（26図１～６）　は、波状口縁で、口端部に沈線状の圧痕があり、口縁部内面に沈線が２本横に入るものや、外体面上半に径1.5㎜位の右から斜めに、刺突紋の並ぶもの、方形、楕円形に沈線を画き、縄文を擦り消したものがみられ、総計60片出土した。



第26図　表採遺物拓影



第27図　表採遺物

V　遺構と出土遺物の検討

今回迄の2度に渡る調査によって、縄文時代、弥生時代、平安時代の遺物が出土した。遺構は縄文時代と思われるものは、溝状土壙2基で、平安時代と思われるものは、住居跡8棟と焼土遺構1基である。堀立柱建物跡は、年代を決定し得る資料はない。

縄文時代　この時代の遺物はⅣに述べた通り、早期末か、前期初頭と思われる土器片と、石器である。関連遺構は溝状土壙2基と思われるが断定は出来ない。

弥生時代　中期と思われる土器であるが、遺構は確認出来なかった。

縄文　弥生両時代の遺物は、表土及び平安時代の住居跡、後世の撹乱層から出土しており、両者の層位的な違いは確認出来なかった。

縄文時代の遺構と思われる、溝状土壙は、湯沢川の北側対岸にある、稲荷遺跡に10基、湯沢B遺跡に4基確認され、又同じ段丘面南方の大渡野遺跡にも1基確認されている。

弥生時代の遺構は、大渡野遺跡に確認されており、これらの遺跡との関連も考えられる。

平安時代の住居8棟中、7棟が北端に密集した状態で検出されたが、1号・2号・4号住居跡間と、5号・7号住居跡間は、非常に近接しており、時期差が考えられる。そして1・5・6号住居跡に粉パミがみられる。かまどは、1・2と、5・8各住居跡が同一方向であり、3・4の住居跡は、規模、方向、かまど等で、共通する点が多い。以下第3表にまとめてみた。

第　3　表

項 / 住居跡 / 日	規模 壁高	形状	主軸方向	かまど 位置	かまど 掘方	かまど 煙道	かまど 煙出	かまど 袖	床面 貼	床面 掘方	主柱穴	周溝	貯蔵穴状ピット
1号 Ah 56住	5.0 × 5.25 m 0.18～0.26	方形	N－43°－E	東壁 中央	有	長さ 1.50 m 巾 0.25～0.50 深さ 0.20～0.30	上場径 5.0 m 下場径 0.4 深さ 0.47	有	無	無	4	無	不明
2号 Aj 59住	2.95 × 3.10 0.10	方形	N－53°－E	東壁 北端	有	長さ 0.70 巾 0.30 深さ 0.10	上場径 0.52 下場径 0.27 深さ 0.20	有	無	南壁下	無	無	2基？
3号 Bb 59住	3.35 × 3.60 0.10	方形	E－14°－S	焼土のみ東壁中央	無	無	無	無	無	有	無	無	無
4号 Ah 62住	3.75 × 3.70 0.18	方形	E－5°－S	焼土のみ東壁中央	無	無	無	無	無	無	無	無	無
5号 Ba 65住	4.95 × 5.30 0.08～0.14	方形	E－28.5°－S	南壁 西端	無	長さ 1.26 巾 0.18 深さ 0.24～0.51	上場径 0.45 下場径 0.38 深さ 0.18～0.6	有	有	無	4	南西壁下に有	2基
6号 Bd 65住	4.15 × 4.7 0.06～0.10	方形	E－14°－S	東壁 中央	無	無	無	無	無	有	4？	有	1基
7号 Ba 71住	3.15 × 3.2 0.16	方形	S－10°－W	南壁 西寄	有	不明	上場径 0.15 下場径 0.15 深さ 0.18	有	無	有	無	無	1基
8号 Ce 24住	？ × 3.50 0.10	方形	E－20°－S	南壁 南端	有	長さ 1.12 巾 0.44 深さ 0.18	上場径 0.56 下場径 0.20 深さ 0.20	有	無	無	無	無	5基

1号住居跡床面にみられる排水用と思われる溝。6号住居跡の旧かまど。7号住居跡の壁沿いに並ぶ小ピット群は、他に例の少くない特異な形と思われる。

Bf71焼土遺構は、性格は明かには出来ないが、出土遺物中の坏が、8号住居跡等の出土遺物と類似している事から、住居跡とほゞ同時期と思われる。

9つの柱穴をもつ堀立柱建物跡は、柱当りはなく、堆積土も1層である。攪乱層に切られた部分はあるにしても、住居跡の時期迄溯るかどうかは不明であり、建物の性格も不明である。

出土遺物について

8棟の出土遺物について検討してみると、4表にまとめた如く、甕A・B類の個体数は、ほとんど同じである。甕D・E類は1号・2号・6号住居跡が少なく、5号住居跡が多い。壺は7号住居跡が多く、他は非常に少ない。長頸壺は1号・2号・3号・7号住居跡から1個体位だけである。坏A類は、1・6・7号住居跡から数点出土で、他は非常に少ない。坏B類は5号・6号・7号・8号住居跡に多く、他の住居跡にも大部出土している。坏C類は1号住居跡にみられ、他の住居跡は非常に少ない。又2・7号住居跡から鞴口の先端部小破片が、かまど附近から出土しており、7号住居跡からは鉄滓も出土している。又砥石が3・4号住居跡から出土している。これは安山岩質で多孔の溶岩で、粗砥として使用したものであろう。

遺物分類について

遺物の分類については尚検討すべき点が多いと思われる。

甕A　長胴の甕で、土師器と分類されているが、この遺跡の出土品は、必ずしも土師器とは断定し難い点をもっている。特徴は、口縁部はあまり外反せず、短いものが多く、口端部は上に強く挽き出され、胎土はやや硬質のものと、軟質のものがある。色調は橙色〜赤褐色であるが、胎部が灰色のものもある。

甕B　長胴の甕で、土師器と分類されているもので、口端部は丸みをもつが、口縁部は、かなり外反するものと、あまり外反しないものとあり、あまり長くはない。

甕C　口縁部と体上端の境に段を有するもので、表面調整に刷毛目痕がみられるものである。

甕D　小型の甕で、ロクロなで成形無調整、回転糸切痕をもつものである。

甕E　小型の甕であるが、A類、B類と同じくヘラ削りヘラなで、刷毛目等による調整が施されたもので、外底面も、ヘラ削りヘラなで痕のみられるものである。

壺　大型の須恵器であるが、胎部の表面、或は内面がにぶい赤褐色で、焼成は良くない。

坏A　須恵器の坏で、灰色或は灰白色をしている。**坏B**。赤焼、土師質、須恵系、といわれる土器に類似し、器形は坏Aと差はない。ロクロなで成形無調整、回転糸切痕をもつものである。胎土、色調、焼成は、甕A・B類とほゞ同じである。**坏C**。土師器内黒坏といわれるものであるが、中に内面に磨きは認められるが、黒色處理の認められないものがある。器形特に外

傾度や、体壁の丸み、体下端と外底面の調整のある点は、坏A・B類と異なる。**坏D**、内外面黒色處理のなされているもので、表面に磨きが認められ、かなり体壁の外傾するものがみられる。高台坏には3種に分類されると思うが、出土数が少ないので一括した。1は、坏Bと同形、同質と思われるもの、即ち、ロクロなで成形無調整、回転糸切りの坏に高台を付けたと思われるもので、小破片のため、全容不明、計測不能である。2は坏Cと同形、同質と思われるもので、内面に磨きと黒色處理を施した坏に、高台を付けたと思われるものである。1と同じく小破片のため、全容不明、計測不能である。3は、坏Dと同形、同質と思われるもの、即ち内外面に磨きと黒色處理を施した坏に、高台を付けたと思われるもので、勿論高台にも黒色處理が全面に施されている。これは6号住居跡付近から表採されたもので、体下端、底部、高台部若干の小破片で1個体分2片である。

第　4　表

遺構名 / 遺物	1号住居跡	2号住居跡	3号住居跡	4号住居跡	5号住居跡	6号住居跡	7号住居跡	8号住居跡	CE71焼土遺構
甕　A	1	2	2	2	2	3	4	2	3
甕　B	2	2	4	4	4	1	3	1	0
甕　C	1	0	0	0	0	0	0	0	1
甕　D	3	2	3	2	10	2	2	3	2
甕　E	1	1	5	4	2	0	1	3	0
壺	1	1	0	3	0	0	8	2	0
長頸壺	1	0	1	0	0	0	2	0	0
坏　A	5	1	1	1	0	4	5	4	0
坏　B	8	5	5	4	22	18	13	18	9
坏　C	11	1	1	2	5	1	2	2	0
坏　D	0	0	1	0	2	0	1	0	0
高台坏	3	0	0	0	0	1	0	0	0
鞴　口	0	1	0	0	0	0	1	0	0
砥　石	0	0	1	1	0	0	0	0	0
鉄　滓	0	0	0	0	5	0	3	0	0

下の表は、図示したものの内、坏類の特徴的な点をまとめたものである。口縁部と壁面は、口端と外底縁を結ぶ直線と対比したもので、器形についてはA・Bは大差はみられない。

第　5　表

No	遺構名	類別	口径	器高	底径	外傾度	口径／底径	口縁部	壁面	切離	色調	図
1	1号住居跡	坏 A	14.0	4.6	5.4	42.5°	2.59	わずかに外反	ほゞ直線的	回転糸切り	灰色	5図10
2	〃	〃	14.5	4.6	6.15	42.5°	2.35	ほゞ直線的	かなり丸み	〃	〃	〃 11
3	〃	〃	15.0					わずかに外反	丸み	欠損	淡黄色	〃 12
4	〃	〃	15.5					ほゞ直線的	直線的	〃	灰色	〃 13
5	〃	〃	14.0					〃	丸み	〃	〃	〃 14
6	〃	坏 C	14.7	5.7	6.6	35.5°	2.23	〃	かなり丸み	回転糸切り	にぶい橙色	〃 8
7	〃	〃	16.0	7.0	7.2	31.5°	2.20	〃	〃	調整	〃	〃 7
8	〃	高台坏	15.3	7.5	(8.0)	30.0°	1.91	わずかに外反	〃	欠損	〃	〃 5・6
9	2号住居跡	坏 C	13.6	4.9	6.2	35.0°	2.19	〃	〃	回転糸切り	浅黄橙色	7図5
10	3号住居跡	坏 B	13.0	4.0	5.8	41.5°	2.24	ほゞ直線的	直線的	〃	にぶい橙色	9図4
11	4号住居跡	坏 A	14.2	5.3	6.8	34.5°	2.09	〃	わずかに丸み	〃	灰褐色	10図2
12	5号住居跡	坏 B	14.1	5.3	5.6	39.0°	2.51	やや外反	丸み	〃	明赤褐色	13図6
13	〃	〃	14.6	4.9	5.4	43.5°	2.70	ほゞ直線的	わずかに丸み	〃	にぶい橙色	〃 7
14	〃	〃	15.4	4.0	5.3	51.5°	2.90	やや外反	〃	〃	橙色	〃 8
15	〃	〃	14.4	5.1	5.4	41.5°	2.66	ほゞ直線的	〃	〃	〃	〃 9
16	6号住居跡	坏 B	15.6	4.2	5.0	52.0°	3.12	〃	直線的	左廻〃	〃	15図4
17	〃	〃	14.4	5.2	5.6	41.0°	2.57	〃	〃	左廻〃	〃	〃 5
18	〃	〃	15.6	4.5	6.0	47.0°	2.60	〃	わずかに丸み	左廻〃	〃	〃 6
19	〃	坏 C			5.0				かなり丸み	〃	〃	16図7
20	〃	高台坏			(6.2)				〃	〃	〃	〃 8
21	7号住居跡	坏 A	14.7	5.2	6.7	37.0°	2.18	ほゞ直線的	丸み	〃	灰白色	18図3
22	〃	坏 B	15.1	5.4	4.9	44.0°	3.08	〃	〃	〃	褐色	〃 4
23	〃	〃	14.8	5.3	6.4	38.5°	2.31	わずかに外反	〃	〃	赤褐色	〃 5
24	〃	〃	15.5	5.1	6.3	42.0°	2.46	ほゞ直線的	わずかに丸み	〃	黄褐色	〃 6
25	〃	〃	15.2	5.5	6.8	36.5°	2.23	やや外反	〃	〃	にぶい橙色	〃 7
26	〃	坏 C	14.5	5.4	5.3	40.5°	2.73	ほゞ直線的	〃	調整	褐灰色	〃 8
27	8号住居跡	坏 A	14.6	4.6	6.6	41.0°	2.21	〃	直線的	回転糸切り	灰色	21図5
28	〃	坏 B	14.0	5.3	5.0	41.0°	2.80	〃	丸み	〃	にぶい橙色	〃 6
29	〃	〃	13.4	5.5	5.4	37.5°	2.48	〃	かなり丸み	〃	黄褐色	〃 7
30	〃	〃	13.7	4.9	4.9	39.0°	2.79	外反	丸み	〃	にぶい橙色	〃 8
31	〃	〃	14.5	5.8	5.5	37.5°	2.64	わずかに外反	かなり丸み	〃	橙色	〃 9
32	〃	〃	14.7	5.2	5.6	41.0°	2.62	〃	〃	〃	淡橙色	〃 10
33	〃	〃	14.8	4.7	6.0	43.5°	2.47	〃	〃	〃	橙色	〃 11
34	〃	〃	14.4	5.4	5.8	42.0°	2.48	かなり外反	丸み	〃	〃	〃 12
35	〃	〃	13.8	4.8	5.5	41.5°	2.51	〃	かなり丸み	〃	〃	〃 13
36	〃	〃	14.0	5.3	5.2	35.5°	2.69	〃	丸み	〃	〃	〃 14
37	CE71焼土	坏 B	14.4	4.1	5.2	48.5°	2.77	ほゞ直線的	かなり丸み	〃	〃	23図4
38	〃	〃	14.6	5.6	5.2	40.0°	2.81	やや外反	丸み	〃	〃	〃 5
39	〃	〃	13.7	5.7	5.2	36.5°	2.63	わずかに外反	〃	〃	〃	〃 6

Ⅵ　まとめ

○縄文時代の遺構、遺物は、溝状土壙２基と、早期末か前期初頭と思われる繊維を含む土器片と、石器である。これらは、弥生時代の遺物と共に北端部に多くみられる。

○弥生時代の遺物は土器片で、遺構は検出されなかった。

○溝状土壙と遺物の関連については、不明である。縄文時代早期末か、前期初頭に伴うものではないかと思われるが、断定出来る資料は無い。

○縄文時代、弥生時代の遺構、遺物は、平安時代の住居跡と重復しているため、他に遺構があったとしても、平安時代の遺構によって破壊された可能性もあり得る。

○平安時代の住居跡については、内黒處理の坏が非常に少ない点。坏Ａ類よりＢ類の数が多い点。坏Ａ類とＢ類の器形に差がほとんど無い点。甕に須恵器の作製要素が大部みられる点等から、平安時代も中頃か、それ以降の時期かと思われる。

○平安時代の住居跡は、８棟中７棟が、段丘面の北縁に集中し、近接距離からみると、時期差があると思われるが、新旧関係について断定し得る資料はないが、粉状パミスを堆積土に含むものは１号・５号・６号住居跡で、７号住居跡内にみられる粉状パミスは、明らかに住居跡と切り合いの長楕円形の攪乱と思われるし、他の２号・３号・４号・８号住居跡には粉状パミスは堆積されていない。３号・４号住居跡は、かまどの痕跡が認められなかった。

○１号住居跡の、東壁を刳り貫いて段丘崖に達する、排水用と思われる溝や、６号住居跡のかまど、７号住居跡の壁に沿って並ぶ小ピットは、他に例の多くない特異なものと思われる。

○７号住居跡、８号住居跡出土の坏Ｃ類に、内面磨きのみで、最初から内黒處理をしなかったのではないかと思われるものもある。又高台坏には、坏Ｂ類、Ｃ類、Ｄ類に類似した３種類がある。

○ＣＥ71焼土遺構は性格不明であるが、出土遺物からみると、住居跡の出土遺物とそれほど時期的な違いは無いと思われる。

○９つの柱穴をもつ堀立柱建物跡は、２間×２間で、性格、年代共に不明である。

○他に10条餘の溝が確認されたが、いずれも用地買収迄存在した農業用水路である。

○平安時代の住居跡は、東方にも存在が確認されている。６号住居跡の東方15ｍの路線外には、昭和48年12月に重機が入って耕作土を除去した際、２棟切り合いの形で検出されている。又、調査地区の東約200ｍには、道路が新設され路肩等に遺物が散乱しているのを確認しており、いずれも保存策はなされておらない状態である。

大渡野遺跡

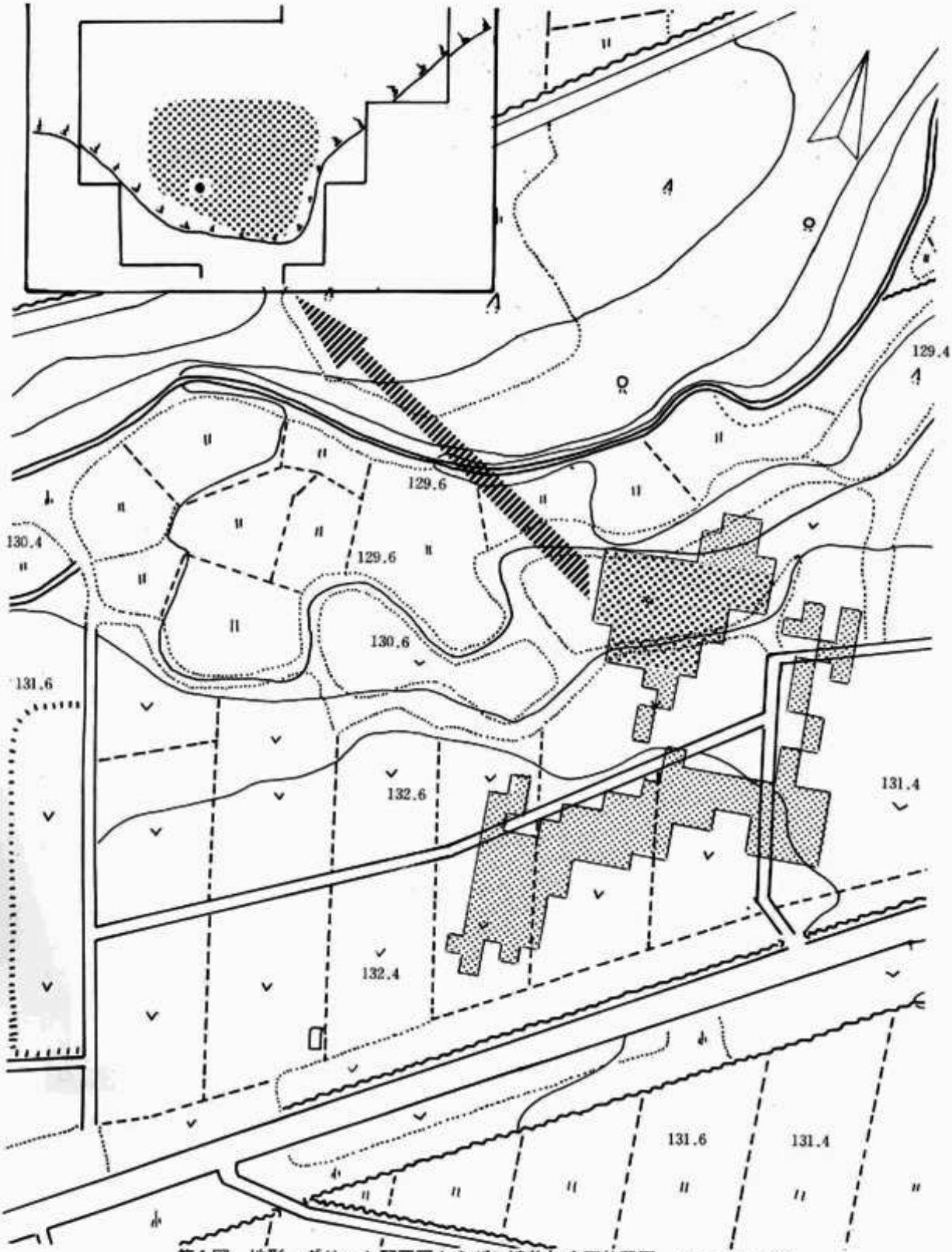
遺　跡　名：大渡野(略号OWN74)

遺跡所在地：紫波郡矢巾町赤林第5地割字大渡野244～282の2

調査調間：昭和49年9月9日～10月28日

調査対象面積：約6,500㎡

発掘調査面積：1,332㎡



第1図　地形・グリット配置図ならびに遺物包含層位置図　S＝1：1000

Ⅰ　遺跡の位置と立地（第１図、図版１）

調査地は花巻段丘の段丘崖近くに占地する。調査地北端は東流する沢状の小河川によって開析され小河谷をなす。したがって調査地は東方と北方へ緩く傾斜する。ただし南半は平坦に近く、北半は若干傾斜が急である。現状は宅地・畑地・水田・牧草地で、標高は 131 m前後である。開田その他の工事により周辺の旧地形はほとんど失なわれており正確は期しがたいが、本来の遺跡は、調査地のさらに西・南方にのびていたものと思われる。本調査地は本来の遺跡の東北半部にあたるものであろう。

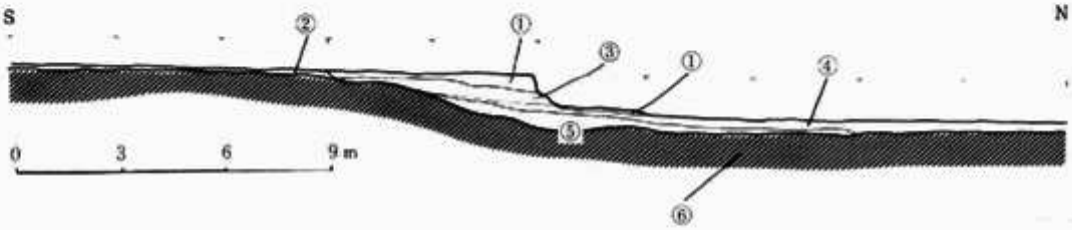
調査地ののる花巻段丘上には各期の各種「遺跡」が分布する。また西方の山地に沿って山麓扇状地面（矢巾扇状地）を形成する二枚橋段丘上に湯沢遺跡（縄文中期初頭と、中期末～後期初頭にかけての集落跡を中心とする）をはじめとする諸遺跡が存在する。

Ⅱ　層序と土質（第２・３図）

調査地は宅地・畑地・水田・牧草地その他として利用されてきたので人工の手が加えられていることについては既にのべた。とくに削平は１ｍ以上におよぶ箇所もある。旧地形は遺跡北半の傾斜面とその裾部の低地、さらには農道等の下部に残存するのみである。これらの部分の

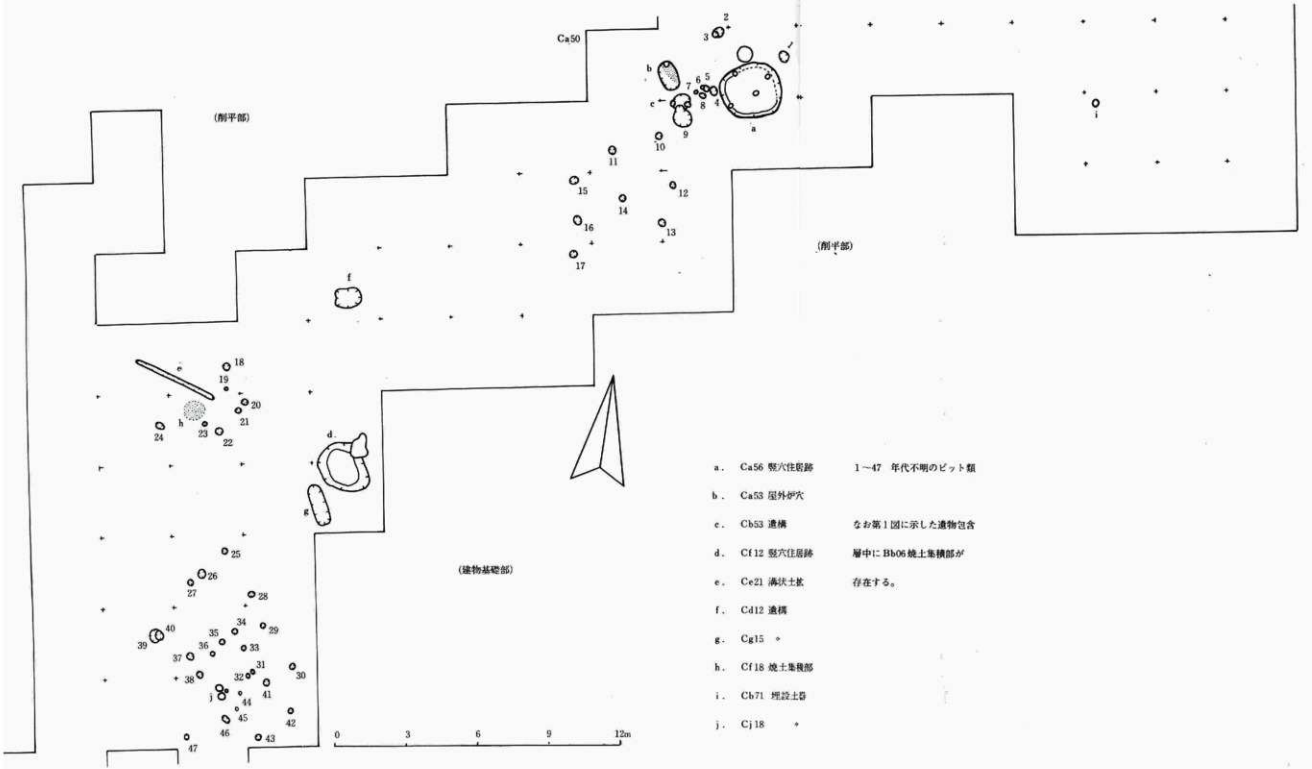
Ⅰ　層	漆黒クロボク様土。各時代の遺物を含む。	
Ⅱa 層	褐色シルト質土。やや砂質である。	縄文時代早期を主とする遺物を含む。
Ⅱb 層	茶褐色シルト質土。やや粘性がある。	
以上のⅡ層は傾斜部とその裾部にのみ存在し、二次堆積層と考えられる。		
Ⅲa 層	黄橙色シルト質土。上記の傾斜面と裾部においては粘性が強い。この上面に縄文時代早期の遺物が稀にのる。現状での遺構検出面であることが多い。	
Ⅲb 層	青灰色粘土質土。粘性強い。	
これ以下は、各種の粘土質土の互層をへて、基盤礫層に達するらしい。		

第２図　層序、土質模式図



第３図　調査地土層模式図

① 客土
② Ⅰ′ 漆黒火山灰質シルト、耕作土
③ Ⅰ　〃　旧表土
④ Ⅱa
⑤ Ⅱb
⑥ Ⅲ


Ca50
(削平部)
(削平部)
(建物基礎部)
a. Ca56 竪穴住居跡
b. Ca53 屋外炉穴
c. Cb53 遺構
d. Cf12 竪穴住居跡
e. Ce21 溝状土坑
f. Cd12 遺構
g. Cg15 〃
h. Cf18 焼土集積部
i. Cb71 埋設土器
j. Cj18 〃
1～47 年代不明のピット類
なお第1図に示した遺物包含層中にBb06焼土集積部が存在する。
0 3 6 9 12m

第4図 遺構配置図

観察結果やその他の資料によると、調査地の層序・土質は前掲のとおりである。

Ⅲ　検出した遺構と遺物（第1・4図）

調査の結果以下の遺構と遺物を検出した。①縄文時代早期の竪穴住居跡2・屋外炉穴1・ピット類3・焼土集積部1・縄文時代早期を中心とする遺物包含層、②縄文時代の溝状土壙1、③弥生時代中期の埋設土器二箇所、④時代不明のピット類47、⑤時代不明の焼土集積部1、⑥上記各時代の石器・土器類多数、⑦歴史時代の土器類若干量。

以下時代順に説明する。なお本文中の図版番号は、表裏両面を示したものについても表面の番号のみを記してある。

1　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は、遺物包含層を調査地北端の傾斜面に、その他のものは南方の平坦部に検出した。なお以下の説明における「壁高・深さ」は検出面から、「規模」の数値は最大値（m）である。

Ca56 竪穴住居跡（第5図、図版2－1）

〔平面形〕；円形ないし東西にやや長い楕円形であるが、いわゆる「隅丸」形に近い。

〔規　模〕；東西3.5m×南北2.3m×壁高0.09m

〔断面形〕；壁の立ち上がりは緩い傾斜をなし非常に浅く痕跡的である。西北隅の立ち上がりはとりわけ緩やかである。

〔覆　土〕；地山のⅢ層土の汚れたシルト質土が一様に見られた。

〔床　面〕；浅い凹凸が若干あるが、ほぼ平坦に近い。

〔炉その他〕；炉・周溝などは検出しえない。

〔柱　穴〕；柱穴様のものは4ケ検出され、1ケは床面中央に、残りは壁際に位置する。

〔その他の施設〕；出入口状のものは認められない。ただし、前記の西北隅の極端に緩やかな立ち上がりや、東南隅に柱穴様のものを欠くことに何らかの意味があるものとも考えられる。

〔年代決定の資料〕（第7図、図版8－1の1～5）。床面出土の無茎石鏃（Ⅲb類）、「縄文土器」、無文の土器片などがあげられる。

〔性　格〕；形態・構造・出土遺物からして縄文時代早期後半の竪穴住居跡と考えられる。

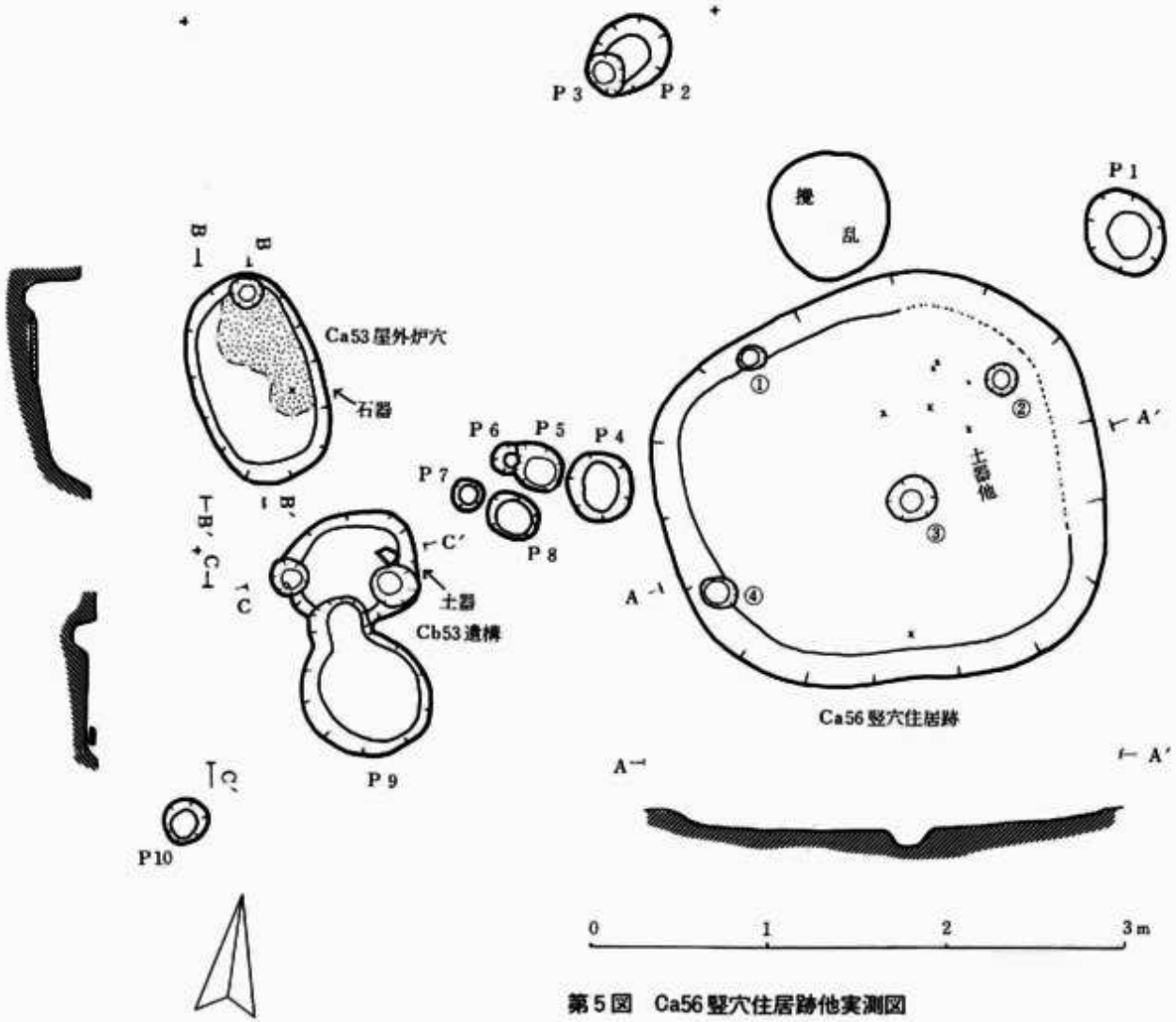
Ca53 屋外炉穴（第5図、図版2－2）

〔平面形・方向〕；南北に長い楕円形に近い。

〔規　模〕；東西0.73m×南北1.18m×壁高0.327m

〔断面形態〕；U字形で壁の立ち上がりは垂直に近い。

〔覆　土〕；Ⅲ層土が汚れた暗褐色シルト質土が一様に認められた。



第5図　Ca56竪穴住居跡他実測図

〔底　面〕；ほぼ平坦に近い。北に偏して焼土の集積が見られる。またそれよりは明らかに新期に設けられた円形ピットが存在する。これが本遺構に本来的に共伴するか否かは調査の不備のため不明である。

〔年代決定の資料〕；底面より縦長石匙1を得たが、調査期間中盗難にあい詳細不明である。

〔性　格〕；出土遺物・覆土の類似性・底面における焼土の存在・Ｃａ56竪穴住居跡との位置関係などから、縄文時代早期の屋外炉穴と考えられる。

Ｃｂ53遺構（第5図、図版2－3）

〔平面形・方向〕；東西に長い楕円形

〔規　模〕；東西0.75ｍ×南北0.64ｍ×壁高0.066ｍ

〔断面形態〕；浅く皿形に近い。

〔底　面〕；ほぼ平坦である。他に円形ピット2が存在する。本遺構とこれらの前後関係を示す現象を観察できないので、両者の本来的共伴関係は一応不明としておく。

〔年代決定の資料〕；底面より、口縁端部外面に刻みをもち、頸部に鋸歯状の沈線文を有する土器片1を得た（第7図、図版8－1の6）。

〔性　格〕；遺物は縄文時代早期に近いと思われるので、Ｃａ56竪穴住居跡・Ｃａ53屋外炉穴などと関連をもつものとみなしておく。

Ｃｆ12竪穴住居跡（第6図、図版3－1）

〔平面形・方向〕；幅広の部分を西北に位置させた偏桃形に近い。

〔規　模〕；ＮＷ～ＳＥ2.4ｍ×ＮＥ～ＳＷ1.95ｍ×壁高0.243ｍ

〔断面形態〕；深目の皿ないし浅鉢形に近い。壁は傾斜するが、西側のそれの立ち上がりは比較的急である。

〔覆　土〕；茶褐色シルト質土がおもに認められた。

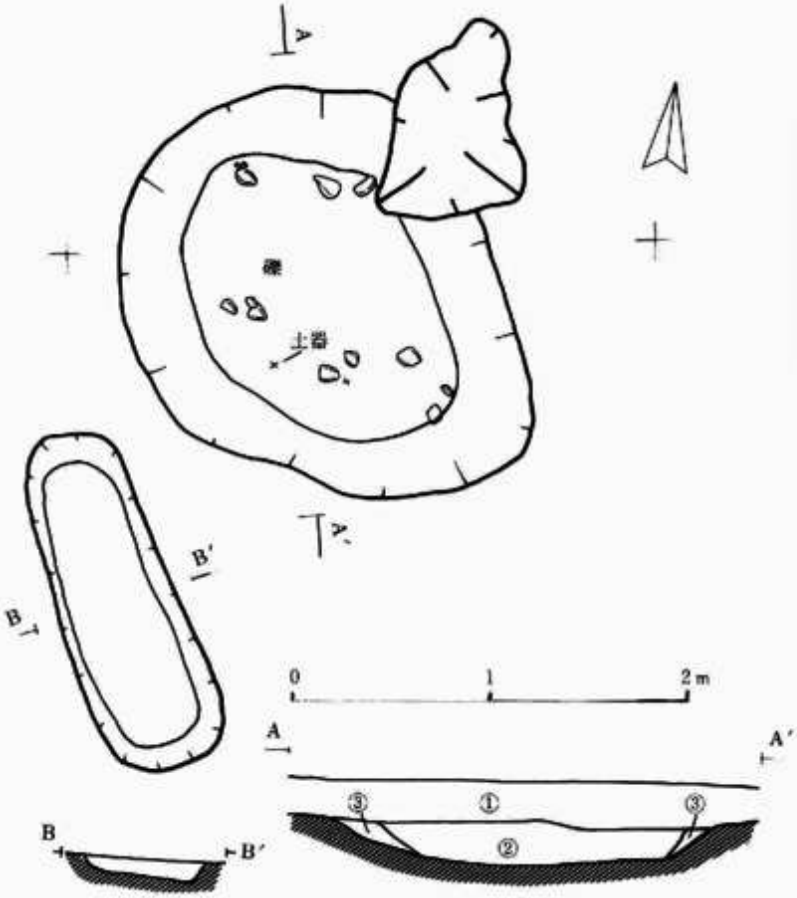
〔床　面〕；ほぼ平坦である。

〔各種施設〕；床面上には炉・周溝その他のものは認められない。出入口様のものも認められない。ただし、前記の壁の傾斜の異同が何らかの意味をもつかもしれない。柱穴様のものは壁の内外ともに検出できない。

〔その他〕；床面土に礫10ケを検出した。その配置は壁際に寄っているとも見える。これが本来の位置を保っているとすれば何らかの施設を想定すべきであるが、現状ではこれ以上は不明としておく。

〔周辺の遺構〕；関連すると思われる炉穴その他は検出できない。

〔年代決定の資料〕（第7図、図版8－1の7～10）。床面上より石鏃片1（ただし、調査期間中盗難にあい詳細は不明）、「縄文縄文土器」、縄文施文土器片等を得た。



①	表土	クロボク様土	Ⅰ
②	覆土	黒褐色シルト質土	
③	〃	暗黄褐色シルト質土 ④の崩土か	
④	地山	黄橙色シルト質土	Ⅲ
⑤		①と④のブロックの混土	

第6図　Cf12 竪穴住居跡他実測図

〔性　格〕；形態・覆土の状況・出土遺物の特徴などから、縄文時代早期後半の竪穴住居跡と考えられる。ただし、柱穴様のものがまったく認められないこと、床面および周辺にも炉ないし屋外炉穴的なものが一切見られないこと、などはCa 56 住居跡例と異なる。この両者の前後関係を明らかに示す証佐は看取できないが、遺物の類似性から、同時存在の可能性があると一応考えておく。

Bb 06 焼土集積部（第1図、図版3－2）

〔検出地点〕；調査地北端近くの傾斜地の遺物包含層中に検出した。

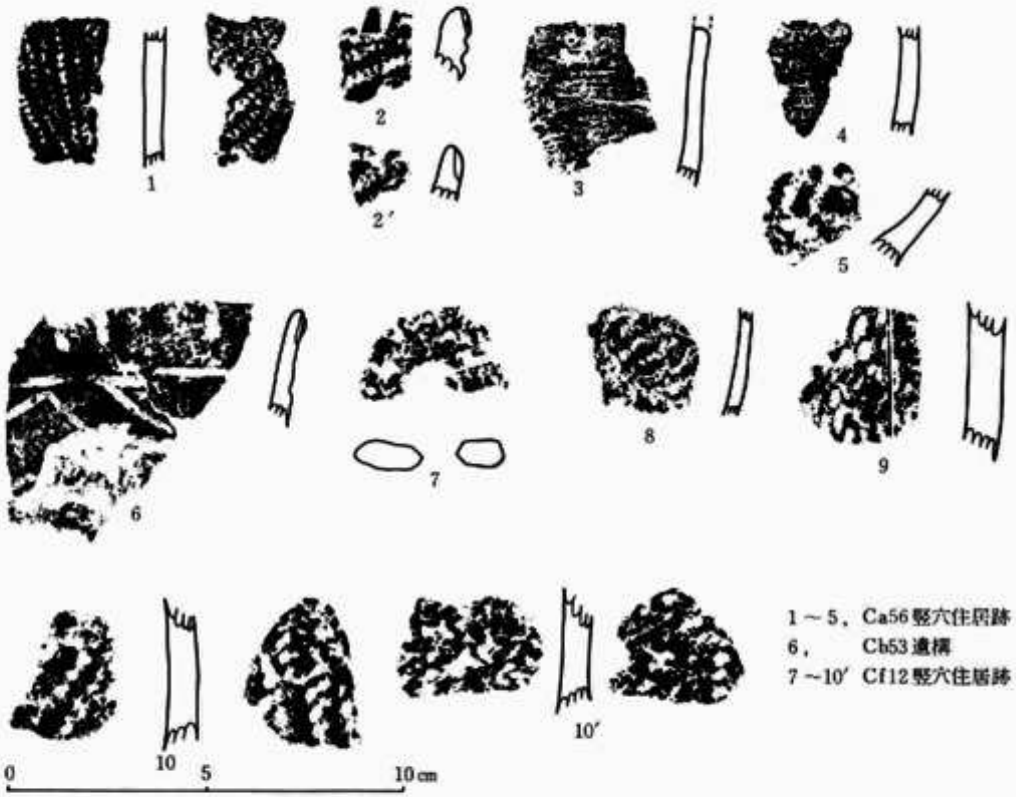
〔検出面〕；客土・Ⅰ層・Ⅱa層除去後のⅡb層上に検出した。

〔平面形・方向〕；東西にやや長い楕円形

〔規　模〕；東西 1.05 m×南北 0.85 m×厚さ 0.05～0.07 m

〔断面形態〕；掘り込みなどは伴なわず、直接Ⅱb層上にのる。

〔関連施設〕；ピット類その他は検出できず、焼土のみの単独存在と思われる。焼土中、その周辺に炭化物細粒が認められるが、この地点で火力が用いられるか否かは不明である。



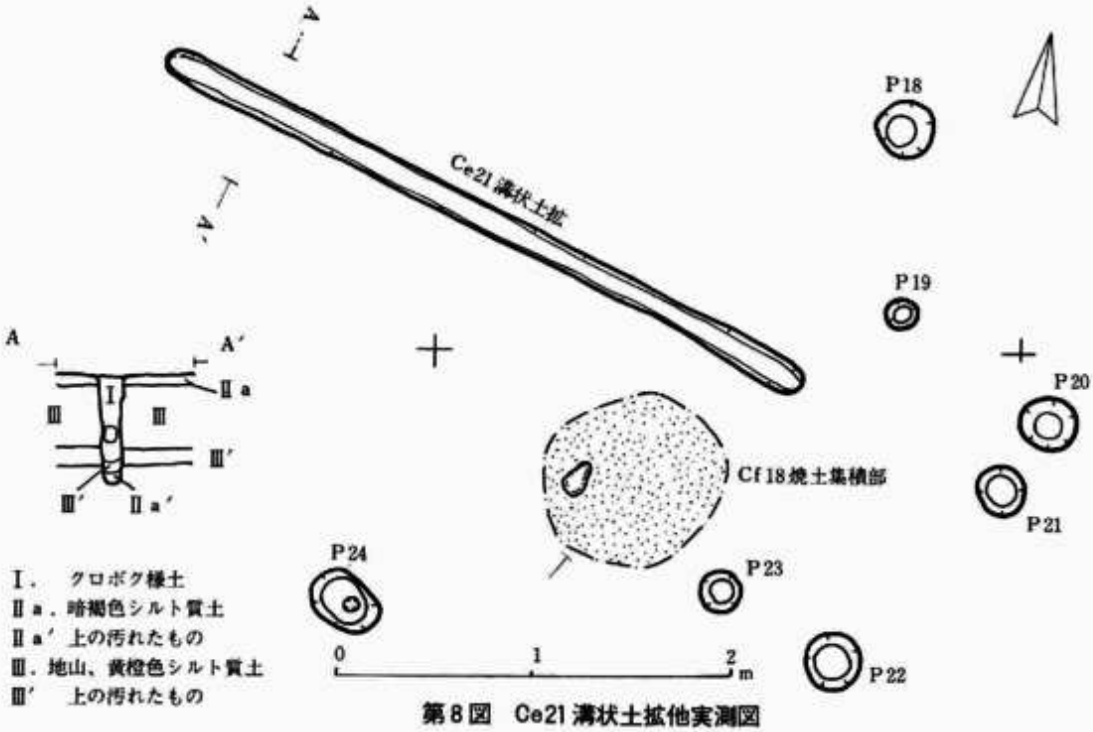
1～5，Ca56竪穴住居跡
6，　Cb53遺構
7～10′ Cf12竪穴住居跡

第7図　遺構出土遺物

実測図番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
1	Ca56 住居跡	床面	2-b	体部	灰茶褐色	RL<r/r?	淡茶褐色	RL<r/r?	良好	淡茶褐色	無	雲母片，石英細粒，精	薄手
2	*	*	3-C?	口縁	明茶褐色	LR<1/1	明茶褐色	無文，ナデかミガキ	*	暗茶褐色	*	石英粒，白色砂粒，普通	口縁外面割み目
3	*	*	1	口縁?	灰茶褐色	横走条痕	極暗褐色	不明，煤	*	灰茶褐色	*	石英粒，雲母片，精	③④同一個体
4	*	*	*	体部	*	*	*	* *	*	*	*	石英粒，雲母片	
5	*	*	3-a	底部	明茶褐色	縄文?	*	無文?煤	不良	極暗褐色	有?	石英粒，雲母片，粗	
6	Cb53 遺構	底面	3-C?	口縁	極暗褐色	ミガキ 煤 鋸歯状沈線	暗茶褐色	無文?横線露出	普通	暗茶褐色	有	石英粒，白色粒子，粗	波状剥落 口縁外面剥突
7	Cf12 住居跡	床面	3-a?	体部	*	縄文?多孔質	極暗褐色	不明，多孔質	不良	極暗褐色	*	白色粒子，粗	横線孔?
8	*	*	*	*	灰茶褐色	LR<1/1?	灰茶褐色	無文?	良好	暗褐色	無	石英粒，普通	薄手
9	*	*	3-a	*	茶褐色	RL<r/r?	茶褐色	ナデかミガキ 横線露出	*	茶褐色	有	石英細粒，粗	厚手
10	*	*	3-b	*	明赤褐色	*	淡褐色	RL<r/r	*	淡茶褐色	有?	雲母，石英粒，普通	⑨⑩同一個体
10′	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	* * *	

〔年代決定の資料〕；若干の石器破片・土器片を包含しており、それらはすべて縄文時代早期関連のものである。

〔性格等〕；焼土中および下位層にも縄文早期土器が存在するので、一応同期のものと考えておく。検出地点が遺物包含層中であり、しかも調査範囲内ではその周辺に何らの関連遺構も



第8図 Ce21溝状土拡他実測図

検出していないので、その性格は不明としておく。ただし該期の「屋外炉」的なものである可能性は皆無ではないであろう。

Ce21溝状土壙（第8図、図版3－3・4）

〔検出地点他〕；調査地の中央やや南寄りの西端近くで、Ⅱb層上面に検出した。

〔平面形・方向〕；東西に長い棒状ないし狭長な楕円形である。

〔規　模〕；東西3.63 m×南北0.14 m×深さ0.55 m

〔断面形態〕；現況は、平坦な底面からほぼ垂直に立ちあがる長方形をなす。ただし、この断面形態は遺存状態に由来する特殊形である可能性が強い。調査地が削平されているため、その上半部を欠失していると考えられるからである。

〔覆　土〕；Ⅰ層・Ⅲ層土の崩土が互層となって堆積している。

〔内部施設〕；底面・壁中段その他にもピット類などは一切検出できない。

〔周辺の関連施設〕；ピット⑱～㉔、Cf18焼土集積部などが近接するが、相互の本質的対応関係を明らかに指摘できるものは検出できない。

〔年代決定の資料〕；遺物の出土は見られず、それを欠くといわざるをえない。

〔性格等〕；本遺構は近年本県において「溝状土壙」あるいは「陥し穴状遺構」と呼ばれているものの一種であろう。ただしその断面形態が特殊なことについては既にふれた。いくつかのタイプが存在するらしいこの種遺構の所属年代・性格については現状では不明なことが多い。

既述の湯沢遺跡においては縄文時代後期に属する例が確認されている。また遺物の共伴関係が明らかなその他の例でも少なくとも縄文時代に属する例が多いらしい。したがって、本遺構も一応縄文時代に属するとしておく。その機能・用途については、最近「陥し穴」説が主張されている。その可能性は高いとは思われるが、今後さらに類例を蓄積する必要があろう。

遺物包含層（第1図、図版4～7）

〔検出地点〕；調査地北端近くの傾斜面と斜面下の裾部にかけての約108㎡に限定される。この部分は北への傾斜面が南へわずかに湾入し、北に開口する袋状の地形をなす。したがって、遺物が三方から流入・堆積（あるいは廃棄）しやすい点であったと思われる。遺物分布は湾入部に限定される。ちなみに既述のCa 56住居跡とCf 12住居跡との距離はそれぞれ北へ24m、39m前後を測る。少なくとも現状ではこれらとの中間には何らの遺構も検出していない。なお、この上部にBb 06焼土集積部がのることについては既にのべた。

〔層　序〕(第3図)；Ⅰ層下位の包含層は大別して二つの層（Ⅱa・Ⅱb）となる。遺物の大半はⅠ・Ⅱa・Ⅱbの層から出土するが、極めて稀にⅢ層上面にのるものもある。Ⅱ層は水力その他による二次堆積層であろう。したがって、その包含遺物は、大半を占める縄文早期関連のものに加えて、微量の弥生式土器・歴史時代の土器などで構成される。このような遺物包含層出土資料の取り扱いには注意を要するが、たとえ二次堆積層であっても、そこに極端な層位の逆転・混乱が見られない限り通常の時間の推移の反映もあり得るのであり、本稿はその立場にたって資料を扱っている。

〔出土遺物〕；上記の数時代のものが出土する。土器の出土状況には意図的とみなしうるものはなく、細片化し、散在している。個体としてのまとまりを想定せしめる例は、きわめて稀に存在するのみである。石器は両層から各種のものが出土した。完成品・未製品の両者が見られ、種類は石箆状石器と剥片類が多い。石核は少量存在する。

〔性格等〕；最近「遺物包含層」なる概念は、集落論的観点からその構成要素の一つとみなされることが多く、それは妥当なものであろう。遺物包含層からは、土器類を主体として種々の遺物が出土するのを常態とし、それらの廃棄に何らかのパターンを読み取る試みも行われている。ここでは廃棄のパターンについて詳細にふれる余裕がないので、本包含層は集落内部に形成された、とのみ規定しておく。その場合、本包含層は二次堆積層と思われるので原位置を論ずるには不むきであろう。また、その形成期間は後述の理由から、ムシリⅠ式前後をその最古とし、船入島下層式前後を最新の時期とする期間と思われる。検出した竪穴住居跡その他は早稲田五類相当期と思われるので、その前後の時期の集落が、調査地を含むより広範な地域に存在する可能性もある。

既述のような石器未製品・剥片類の大量出土といった現象は、本包含層に単なる遺物包含層

以外の性格、たとえば石器製作址といったものを想定させるものでもあり、その観点での調査も実施した。この点については再述する。

要　約　以上の遺構・遺物をまとめると以下のようになる。

(1)竪穴住居跡・屋外炉穴・その他のピット・遺物包含層は組みあわせとして理解でき、それぞれを縄文時代早期後半の集落の構成要素とみなしうる。すなわち、本調査地は縄文時代早期後半（早稲田五類相当期）の集落の少なくともその一部にあたるものと思われる。また、遺物包含層のあり方からすると、本調査地を含むより広範な地域が縄文時代早期後半の各時期に継続して、集落として占地されてきた可能性が高いことについては既にふれたとおりである。

洞穴ないし岩陰以外の縄文時代早期の住居跡（集落跡）の類は東北地方ではあまり多くなく、青森県赤御堂・白浜・館平、宮城県松田、未発表ではあるが岩手県宮手（みやて）・長瀬（ながせ）などの諸例が著名な程度である。通常、住居跡には「平地式」に近いものと「竪穴式」の二種があり、いずれも屋内には炉をもたないといわれる。前者には青森県白浜・館平が、後者には青森県　御堂の円形プラン、宮城県松田の長楕円形プラン、岩手県の前記二遺跡の楕円形・隅丸長方形と円形プラン、などの諸例がある。関東地方には茨城県花輪台の例その他がある。本調査例は赤御堂・宮手・長瀬などの円形プランのものに極似する。とくに床面中央に柱穴様のものをもつ点などは大きな共通点といえよう。なお、宮手と長瀬においては壁外周にも柱穴様の小ピット群をもつものもあり、これも早期の住居跡の特徴の一つと考えられよう。ただし、時期的には各期にまたがっており、赤御堂においては床面近くからムシリＩ式と物見台式が出土し、長瀬においては貝殻腹縁刺突文が出土し、宮手例のみが本調査例に近い遺物を伴出している。

規模と配置をみると、前記花輪台において２棟、東京都船橋において10ｍ間隔で２～３棟、岩手県長瀬においても数棟の同時存在が考えられており、本調査地における２棟もこれらに大略類似するものといえよう。本調査地においては、以上に加えて遺物包含量もセットになるという知見を得たことは既にのべた。小規模ながら「集落」とみなされるべきこれらの諸例の内部の様相のより詳細な把握が今後の課題である。これに関連して注目すべきは長瀬の様相である。長瀬における住居跡は、そのプランが円形に近いものと、長方形ないし楕円形に近いものの二種があり、調査範囲内に計５棟が検出されている。規模は前者には径３ｍ前後のものと５ｍ前後のものの二種、後者には7.3ｍ×9.5ｍの大規模なものがある。後者の床面には８ケ前後、壁外周に13ケ以上のピットが伴ない、おそらくは柱穴関連のものと思われる。このように大規模なものが縄文時代早期中葉から存在し、中・小規模のものとセットをなす可能性があるということになる。つまり既に貝殻腹縁文土器盛行期において、縄文時代集落の基本的あり方が形成・確立されていたとも解しうるのである。林謙作氏による大寺２式前後に「いわゆる〝縄文文化〟の骨格がととのった」との古い指摘の妥当性を裏づける例ともみなしうる。また本調査地

における遺物包含層の存在などもそのような観点から評価されるべきであろう。なお、長瀬例は廃棄後の降下火山灰のせいか遺構の残存状態が極めて良好であり、壁高が0.5mを越えるものが多い。これも早期の竪穴住居跡の構造に関して考慮されるべき事実の一つであろう。

立地についてみる。類例は本県に限定し、洞穴・岩陰は除外する。時期にとらわれず著名なものを北からあげると、二戸市長瀬、玉山村日戸、盛岡市下猿田・大館・大館堤・宿田、紫波町宮手、北上市成沢・斎羽場、金ケ崎町永沢、胆沢町尼坂・丑転、水沢市鶏ノ木住吉・駈上・片子沢などは、北上川・雫石川・馬渕川などによって形成された段丘の平坦面上、すなわち比較的開けた部分（開地）に立地する。本調査例もこれに該当する。一方、盛岡市オミ坂・山岸屠牛場・歳の神・日向・八木田・一本松熊の沢、和賀町切留、金ケ崎町櫂引沢東・鳥ノ海東・大清水上などの諸例は山腹のテラス状の緩斜面ないし山あいの狭少な開地部に立地する。

以上の二つの類型はそれぞれの地域の地形に制約された結果であろうが、別の要素をも内包する可能性もあり今後の検討課題であろう。もちろん大別された類型・地域内においての微地形とのかかわりあいを看過してはならない。たとえば、本調査地での東方の段丘崖・北方の小河谷の存在は重視されなくてはならないし、宮手の自然堤防上への占地も同様である。

集落については集団領域論的視点が求められ、また、内部における「場の使い分け」への配慮が求められるのが当然であるが、それらについて用いうる十分な資料をもたないし、また遺構の残存状況にも疑義があるので、ここではふれない。

(2)遺物包含層は縄文時代早期後半各期の石器製作址である可能性もある。遺物包含層からは各種の遺物が出土しうることについては既にふれたが、本包含層においては後述のように大量の剥片、少量ではあるが石核、末穿孔の環状石器；石篦状石器のA・a・b₁・二と分類されるもの、表皮（コーティング）を残す掻器のその残存部位に異同があること、表皮を残さない掻器の刃部形成の調整剥離の位置に異同があること、など石器製作址との解釈を可能しうる各種の未製品的な遺物が出土している。石器製作址たる想定を満足させる要件は、①台石などの施設・設備の存在、②工具、③遺物の集中現象、④相互に接着（復元）可能な剥片・石核の存在、⑤完成品とその他のものの混在（⑥周辺における原石産地の存在）などであるらしい。調査は以上の諸点に留意して実施したが、本包含層においては①・④は現状では検出されておらず、③は調査の不備からすべての遺物に対して正確なポイントを把握してはいないが、少なくともグリッド単位でのそれは指摘できる。②・④の一部・⑤は満足させている。したがって、断言はできないが本包含層が石器製作跡でもある可能性を一応指摘しても、あながち無理とはいえないであろう。今後は剥片類の詳細な検討を行う必要がある。

なお、既述の湯沢遺跡内における知見のような、石器製作の過程のある段階の作業を「屋外」でも行った可能性は本調査例では指摘できなかった。石器製作の具体相に関しての留意事項と

して記憶されるべきであろう。

(3)Ce 21 溝状土壙は縄文時代早期に属する可能性は皆無とはいえないが、本県において従来知られているような「時期を推定しうる類例」には、縄文時代後期のものがある（湯沢遺跡・滝沢村大緩（おおだるみ）「遺跡」）点を考慮し、早期に特定することは避け、縄文時代に属する可能性があるとのみ一応しておく。その推定される性格については既にふれたとおり「陥し穴」説がある。ただし、形態のみを問題とすれば他県その他で「陥し穴状」とされているものと、本県の例は似て非なるものが多いと思われる。したがって、本県の類例をさらに集積し、それ自体の特徴を正確に把握することもさらに必要であろう。

遺物包含層出土の遺物

調査域内に検出された遺構に伴なう遺物は既述のように極めて少量にすぎず、得た資料の大半は遺物包含層出土のものである。以下には、それらの概略を記す。土器をまず説明し、次に石器について行う。なお、土器群の分類にあたっては所属時代・器種などは、現在一般に行われている区分に従がった。次にそれぞれの時代の資料について、施文方法の相違により大別し、その大別の中で器形（口縁・底部）、施文（表裏両面）、胎土、色調などをチェックし細別した。分類にあたっては器形上の特徴を重視すべきであるが、大部分が小破片であることから、それを十分にはたしえなかったのは遺憾であった。主体をなす縄文式土器についてのべる。

(1)第1群土器

基本的特徴　①胎土に繊維を含まず、雲母片を含む。②胎土・器面ともに明赤褐色を呈す。③比較的薄手で焼成良好な硬いものが多い。④表裏両面ともに条痕文をもつものが多い。⑤平行沈線・綾杉状沈線などのモチーフを有する。⑥最下層に比較的多い。これらは施文その他の相違により細別される。

a類（第9図、図版8－2）　表裏面ともに条痕文を有する。他の文様の地文になるかどうかは小破片のため不明である。条痕文の中ではもっとも細かく整然としている。方向を異して引かれた斜位のものにより形成された綾杉状をなす。なお、表面に条痕文が認められないものも裏面のそれの共通性からここに含めた。

〔器形〕；不明であるが、破片からすると体部にはあまり変化のないものとなろう。底部は尖底ないしそれに近い丸底風のもののようである。

〔口縁部〕；一点のみ資料を得たが、口縁端部が内方にやや肥厚し、口唇部に刻みを入れている。

〔胎土〕；雲母片・石英粒子を含み、焼成は比較的良好である。なお理由は不明であるが、縦長長方形に割れた破片が多いように思われる。

〔色調〕；表面は白黄色や茶褐色、裏面は極暗褐色のものが大部分である。裏面のそれは使

用によるものであろうか。

b 類　表面の施文に刺突文・沈線文が加えられる。地文にやや浅目の条痕文をもつのが一般的である。施文の相違により細別しうる。

b_1類（第９図、図版８－２）　刺突文のみで施文される。

〔器形〕；不明であるが、体部変化に乏しい深鉢形となろう。底部形状も不明である。

〔口縁部〕；平縁のものと、少なくとも３個一対の小突起を有する波状口縁的なものがある。前者は口縁端部に進むにしたがってやや外反し、後者は直口気味に立ち上がる。

〔施文〕；口縁部文様と体部のそれを総合的に示す資料を得られなかったので、モチーフの全容は不明であるが、少なくとも両者のモチーフは異なるらしい。口縁部は１～３条の斜行する刺突文列（列点文）と縦方向への刺突文列とで構成される。体部は口縁部施文工具よりも太目の工具を用いて付したと思われる大形・太目の刺突文を数段にわたり施文する。いわゆる矢羽状に付すものもある。

〔胎土〕；多量の雲母片や、若干量の白色の小石・石英粗粒などを混じる。焼成良好で硬い。

〔色調〕；白味がかった黄土色のもの若干と、大半をしめる明赤褐色のものがある。

b_2類（第９図、図版８－２）　沈線文と多くはそれに沿って配された刺突文をもつ。

〔器形〕；詳細は不明であるが、体部上半あるいは口縁部が緩く外半し、体部にあまり変化のない深鉢形となろう。底部形状は不明である。

〔口縁部〕；㋐平縁で口縁部が軽く肥厚し、そのために外反の印象を与えるもの。断面形態は隅丸方形に近い。粘土紐による隆帯を貼りつけ、その上に斜位の刻み目を加えるものも一例ある。

㋑平縁で口唇部に刻みを加え、断面形態が方形に近いものである。

〔施文〕；全体的モチーフ・配置を示す資料をもたないので不明な点が多いが、口縁部文様帯をもち、それと体部文様とはモチーフを異にするらしい。なお、前記の隆帯が口縁部文様帯の上限を限る可能性もある。口縁部のタイプ別に説明する。

㋐口縁部に少なくとも二本一対になる斜行沈線を付し、それに沿って半截竹管様のものによってやや太目で丸味のある刺突文を配す。体部にも同種の施文が行われるらしい。

㋑口縁部に傾きを異にし交叉させた三本以上の斜行沈線をひき、それによって出来た三角形の範囲内に、沈線に沿って細く鋭い刺突文を配す。体部にはそれと同一の工具によると思われる矢羽ないし綾杉状の刺突文列を配す。

〔胎土〕；白色の小石・石英粒子等を含む。雲母の量は他類に比し少ない。焼成良好で硬い。

〔色調〕；黄色がかった肌色のものが多い。部分的に赤色化した箇所もあり、火力をうけたとも考えられる。

b_3類（第10図、図版８－３）　b_3・b_4類ともに平行沈線と刺突文とによってモチーフが描かれる。b_2類より平行沈線の数が多く、縦位のもの・綾杉状のものなどがある。刺突文は沈線に沿わず、それに重複させたり、一条だけ横位に配すもの、矢羽状に配すものなどがある。本類としたものは口縁部の沈線が縦位に平行するものである。

〔器形〕；詳細は不明であるが、体部上半が外反気味に開く深鉢形となろう。

〔口縁部〕；すべて緩やかに外反する。断面形態は隅丸方形的である。平縁が主であるが一例だけ口縁部に刻みをもつものがある。器厚はとくに変化しないが、一部に漸減するものもある。

〔施文〕；本類には地文の条痕文が顕著である。口縁部文様帯と体部のそれは明確に区別される。口縁部文様の施文に二種ある。㋐口唇部直下より縦位の平行沈線文が付され文様帯の上限を区切るものをもたない。縦位の平行沈線文の下位に刺突文が付され下限が区切られる。㋑縦位の平行沈線を付した後に口唇部直下に一条の横走沈線を加え上限を限る。すべて平縁となる。下限は㋐に同じである。

体部文様は㋐・㋑ともに綾杉状をなす斜位の平行沈線文と、横走する一条の刺突文列あるいは矢羽状の刺突文とで構成される。なお一例だけであるが、体部に断面三角形の隆帯状の高まり（稜）をつくり、その稜の両側（上下）に矢羽状の刺突文を配すものがある。

〔胎土〕；薄手のものが多い。小石を多く含み粗であるが、焼成良好である。雲母片を特徴的に多く含む。

〔色調〕；表裏とも全般的に明赤褐色系統のものが多い。

b_4類（第10図、図版８－３）　口縁部文様帯が、傾きを異にした条数の多い平行沈線文の組みあわせによって描かれる。全般的にb_3類との類似点が多い。

〔器形〕；口縁部形態とともにb_3類に似る。ただし、口縁端部が明白に外反するものが一個体はある。

〔施文〕；口縁部文様帯の上限を、横走する一条の沈線で区切るものと、それをもたないものとがある。b_3類の㋐・㋑の異同に対応するものの如くである。口縁部文様帯の下限を画するものは見あたらない。体部文様も口縁部のそれに類似する。平行沈線は一本ずつ個別に描かれたらしい。

〔胎土・色調〕；ともにb_3類に似る。

C 類　本類は沈線文のみで施文される。モチーフの別により二種に分かつ。

C_1類（第10図、図版10－１）　数条の直・曲線とその間に配された短い沈線とで施文される。

〔器形〕；破片から推定すると体部にあまり変化がなく、体部上半が緩やかに外反する深鉢形になろう。底部は不明である。

〔口縁部〕；口縁端部にむかい器厚が漸減し先細りになるものが二例ある。風化のためか判然としないが、おそらくは平縁であろう。

〔施文〕；全体のモチーフは不明であるが、口縁部文様帯と体部のそれの区別は無いと思われ、器全面に間隔のやや広目の平行沈線・三角形ないし菱形文・曲線文を数条描き、その間に短い沈線文を配し主要モチーフを表現するらしい。現状では沈線はおおむね浅い。b_3類のモチーフに近い。

〔胎土〕；全般的に薄手のものが多い。石英粗粒なども見られるが、全体的には精良である。雲母片は顕著とはいえない。焼成良好で硬いものが多いが、現状では細かなクラシックが入っている破片が多い。

〔色調〕；大半は白味がかった黄土色に近いが、稀に赤褐色を呈すものもある。裏面は極暗褐色のものが多く、また炭化物様のものが付着する例もある。

C_2類（第10図、図版10—1）　綾杉状の沈線文をもつ。

〔器形〕；詳細は不明であるが、他と同様に体部上半が軽く外反する深鉢形であろう。ただし、体部破片には、成形時の素地粘土の接ぎ手に由来すると思われる凹凸が顕著に見られるものが多く、他類よりは体部形態に変化のあるものであった可能性がある。底部形状は不明である。

〔口縁部〕；得られた三例からすると、口縁端部がわずかに外反し口唇部に刻み目をもつものと平縁になるものとがあるらしい。いずれも口縁端部内側が、そがれたように平坦面を形成する。

〔施文〕；器全体のモチーフを示す資料は得られなかったが、口縁部文様帯と体部のそれの区別は無いと思われ、全面に綾杉状の沈線文が付されるらしい。稀に横走に近い沈線が併用される例もあるが、それがたとえば部位の境界を示すものかどうかは不明である。地文の条痕が顕著であるが、破片によってはそれが見られないものもあり、部位による使用（施文）の異同の可能性もある。口唇部直下の綾杉状沈線の傾きには左下がり・右下がりの両者がある。沈線の平面形はやや長めの楔形に近いものが多いが、それは施文時の工具の移動方向を示す。沈線は浅い。

〔裏面〕；炭化物様のものが付着した例が多い。横走する条痕文が付されるのが普通であるが、一例のみ口縁端部の平坦部に斜位に付されたものがある。

〔胎土〕；石英粗粒・白色粗砂、とりわけ雲母片を多く含み粗なものが多い。器面の凹凸・横走する線状のヒビ割れを成形時の素地粘土の接ぎ手と判断してよければ、粘土紐の巾は大略2.5～3.0cm程度になろう。

(2)第2群土器

基本的特徴　①胎土に繊維を含まず雲母片を含む。②胎土・器面の色調が明赤褐色を呈するものが多い。③焼成良好で硬い。④施文された縄文は現状では浅く不鮮明である。⑤縄文に加え沈線文・刺突文を有するものもある。⑥口縁部文様帯を有するものも含む。以上は施文その他の相違により細分しうる。

a 類　表面は縄文、裏面は無文である。器形は不明であるが、体部上半が外反気味に開き、体部にあまり変化をもたない深鉢形であろう。底部は丸底風のもの、尖底などの破片が見られる。口唇部等の特徴から三類に分かつ。

a_1類（第11図、図版10－2）　口唇部を無文とし平縁とする。断面形態は角張り方形に近い。

〔口縁部〕；一部に直口に近いものもあるが、大半は外反気味である。

〔施文〕；全面に単節の縄文が付され、口縁部文様帯その他の区別は見られない。口唇部直下に無文部をもつものが多いが、これを文様帯と見る必要はなかろう。右撚り原体が多いらしい。原体の回転方向は体部上半で横方向、それ以下は斜方向が多い。現状での縄文は浅い。

〔胎土〕；雲母片を多く含むが、精良といえよう。焼成良好なものが多い。

〔色調〕；明赤褐色ないし茶褐色のものが多い。

a_2類（第11図、図版10－2）　口唇部を指頭ないし工具で押圧し、凹みをつくり小波状口縁風に仕上げる。

〔器形〕；縦断面形が三角形に近い尖底の深鉢と思われる。体部上半は外傾気味である。

〔口縁部〕；断面形が箱形に近い。口唇部は本来平坦であったらしい。

〔施文〕；二段撚り原体を横方向に回転して付した斜縄文を全面に付す。体下半から底部にかけては斜位の回転が多い。尖底の先端にまで施文される。原体の撚りはかたく、節は大粒・深目のものが多い。左撚りがやや多いと思われる。

〔胎土〕；石英粒子などを混じるが精良である。雲母片はa_1類に比しやや少ない。焼成良好で硬い。炭化物が付着するものもある。

〔色調〕；茶褐色・黄褐色系統のものが多い。

a_3類（第11図、図版10－2）　口唇部に縄文原体側面圧痕を付し、広義の小波状口縁とする。器形以下の諸特徴はa_1類に大略類似する。

b 類　表裏両面に縄文を付す。ただし、両面ともに部位による施文の有無の詳細については不明である。口縁部形態・施文の異同により、さらに三類に分かつ。

b_1類（第11図、図版10－2）　平縁に近いが口唇部無文のものと縄文原体側面圧痕あるいは縄文を付し、広義の小波状口縁風にしたものとがある。

〔器形〕；判然としないが体部上半が緩やかに外反する深鉢形であろう。一例のみ内湾気味

に立ち上がるものがあるが、これは体部下半の破片である可能性もあるので、一応前述のごとく記しておく。

〔口縁部〕；a類と同様にかなり角張ると思われる。

〔施文〕；単節の縄文が付される。右撚り・二段の原体が多いらしい。表裏両面とも同一原体で付すのが一般的であるらしいが、稀に異原体もある。回転方向は表面体部上半は斜方向で口縁に平行する横走縄文となっている。下半は横方向が中心である。裏面は横方向が多い。表面口唇部直下に無文帯が残るが、口縁部文様帯とはみなしえない。

〔胎土・色調〕；ともにa類に似る。

b_2類（第11図、図版10—2）　中程度の波状口縁となる。

〔器形〕；直上気味の体部下半と緩やかに外反する体部上半をもつ深鉢形であろう。底部は不明。

〔口縁部〕；二個体分の資料を得たがいずれも波状をなす。断面形態は先細りになるが、器厚を減ずる度合が裏面の方が高いので、裏面が急激に外反する印象を与える。表面口縁端部やや下位に鍔状に粘土帯を貼付し隆帯を形成する。隆帯そのもの、その上下ともに無文であるのでやや疑問はあるが一応口縁部文様帯と考えておく。

〔施文〕；単節斜縄文を表裏両面にもつ。撚りには左右がある。原体の回転方向は、表面は横位が多く、裏面は縦位が多い。なお、裏面で縄文に条痕文を併用する例が稀にある。縄文は節と節、条と条の間に空隙があり、疎な感じのものが多い。

〔胎土〕；石英粒子・雲母片などを含むが、概して精良である。焼成良好で比較的硬い。

〔色調〕；明暗のちがいはあるが、大略茶褐色系統のものが多い。

b_3類（第12図、図版10—3）　表面は地文に縄文、その上に刺突文・沈線文の両者を加える。裏面には同一原体と思われる縄文が付される。

〔器形〕；全形は不明であるが、体部破片にはあまり変化を看取できない。

〔施文〕；表裏ともに地文に縄文が付される。大部分二段の原体であり、右撚りがやや多いらしい。縄文はb_2類に類似した疎な感じのものである。原体回転方向は横位が主である。口縁部を欠くので部位による施文の異同などは不明であるが、少なくとも体部には縦位・斜位に配した平行沈線文と刺突文とによる施文が行われる。方向・傾きを異にして配した斜位の平行沈線文は、第1群 b_3・b_4 類のモチーフに共通するものであり、また刺突文も第1群bの各類に共通するものといえよう。沈線・刺突文ともに工具は角張っている。両者ともに施文は浅い。

〔胎土〕；全体的に薄手に仕上げる。多くの雲母が認められ特徴的であるが、石英粒子もまた見られる。しかし、精良で焼成も良く硬い。

〔色調〕；a類に似るものが多いが、前記の第1群b類に似るものは茶褐色に近い。

以上の諸特徴の中で留意すべきは、胎土（とりわけ雲母の多量混入）・焼成・色調などがa類さらには第1群土器に類似する点である。これについては後にふれるであろう。

e 類（第12図、図版10－3）　表面に単斜行縄文、裏面に条痕文をもつ。条痕には精粗の別、平行沈線文風のものなどの各種があるが一括した。

〔器形〕；詳細は不明であるが、少なくとも体部上半は外傾気味に開くものとなろう。底部形状は不明である。

〔口縁部〕；二種ある。㋐体部上半が外傾気味のまま変化を示さずに推移し口縁端部にいたる。器厚は漸減し先細りとなり、断面形態は全体的に丸味をもつ。

㋑内湾気味で推移してきた体部が一度くびれ、それより上位が外傾気味に立ち上がる。あたかも口縁部と体部が分化しつつあるが如き印象を与えるものである。両者とも平縁である。

〔施文〕；㋐・㋑ともに単節斜縄文をもつ。右撚りが多いと思われる。原体の回転方向は体部上半で横位、それ以下は斜位を中心とする。一見羽状縄文風に見える部分もある。㋐は口唇直下から施文されるが、㋑では口縁部様の部分は無文帯として残される。これはカーブの変化に対応するものであり、おそらくは意図的なものであろう。裏面には横位・斜位・斜位を交叉させるもの・縦位など各種の条痕文が付される。条痕自体にも細条痕文的なもの・巾広のもの・深目のもの・浅目のものなどの各種がある。稀に浅目の平行沈線文風のものを付す場合もある。これは条痕文の特殊例とみなして本類に加えた。施文は入念とはいえず相互に交錯あるいは重複するものが多い。施文原体は不明である。

d 類（第12図）　表裏面ともに無文である。いずれかの群・類の無文部とも考えられるが、胎土・焼成・色調などの特徴から一応本群の中に含めた。体・底部破片しか検出しておらず、全体の器形は不明である。底部は尖底であるが、角度に鋭・鈍の別があり、器厚もそれぞれ厚・薄がある。

色調は黄褐色系統のものが多く、焼成良好で硬い。胎土に若干の石英細粒・雲母細片を含むが概ね精良である。鋭角的な底部の表面には縦方向のヘラ削りないしヘラミガキ様の器面調整が施こされる。aないしc類の底部である可能性がある。

e 類（第12図）　表面不明、裏面無文のものを集めた。胎土その他からしておそらくはd類のひいてはaないしc類の仲間に加えられるべきなのであろう。器形は不明。胎土に石英粒子・雲母細片などを若干量含有する。焼成良好である。

(3)第3群土器

基本的特徴　①胎土に繊維を含む。②器厚増加の傾向がある。③焼成不良で脆弱なものが増加する。④口縁部文様帯を有するものもあるが、隆帯は見られない。⑤縄文は太目で粗雑なものもある。

a 類　表面は斜行縄文、裏面は無文である。口唇部のつくりに四種ある。体・底部と口唇部の対応関係を明らかにしえないので、底部については別にまとめて記す。

a_1類（第13図、図版12－1）　平縁で口唇部は無文にされる。断面形は箱形に近いものと端部がやや薄くなるものとがある。

〔器形〕；不明であるが、体部上半から口縁部にかけては外傾気味に開くらしい。

〔施文〕；体部上半外面には、口唇直下から二段の原体を横位に回転して得た縄文が付される。撚りには左右のいずれもある。一例のみ、口唇直下を横位になでて縄文を一部消しているかのようなものがある。

〔胎土〕；石英粗粒などを多く含み概ね粗である。焼成不良が多い。

〔色調〕；暗褐色系統のものが多い。器面に煤様のものが付着している例がある。

a_2類（第13図、図版12　1）　平坦な口唇部に指頭あるいはその他工具を用いて凹みをつくり小波状口縁風にする。

〔器形〕；丸底風尖底あるいは平底を有し、口縁端部へ外傾的に立ち上がる深鉢形であろう。体部はほとんど変化を示さない。器形には大小があり、器形を復元しえたものは小に属するものと思われる（第31図、図版13）。

〔口縁部〕；一部に外反的なものがあるが、大半は直線的に外傾し口縁端に達する。断面形は本来は方形であったらしいが、押圧によるものか、口唇部が内外に張り出しているもの、外方にのみ張り出しているもの、などの変化が見られる。口唇部は水平なものと外側に向かい傾斜するものとがある。

〔施文〕；全面に大粒の節を有する斜縄文をもつ。口唇直下より施文され、無文帯・文様帯はもたない。使用原体は二段がもっとも多く、稀に三段がある。回転は体部上半は正確に横位、それ以下は横・斜位が多い。撚りは左右が同率程度で存在するらしい。

〔胎土〕；小石・石英粗粒などを多く含み、極めて粗なものが多い。多くは器面に露出する。焼成は不良なものが多い。厚手・薄手の二種は器の大小の反映らしい。

〔色調〕；暗褐色・極暗褐色系統のものが多い。炭化物の付着する例も多い。

a_3類（第13図、図版12－1）　断面形態が方形ないし切り出し形をなす。平坦な口唇上に縄文原体側面圧痕と思われるものを付し、一種の小波状口縁化する。その他はa_2類に似る。

a_4類（第13図、図版12－1）　一例のみであるが一応分離した。口縁部断面形態はa_3類に似てかなり角張る。口唇部に製作者の爪によったと思われる、爪形文を付す。

〔器形〕；不明であるがa_2類的なものになろう。底部は不明であるが、これもa_2類に似るものと思われる。

〔施文〕；口唇直下より施文され口縁部文様帯はもたない。原体は右撚り・三段で、横位の

回転である。

〔胎土〕；小石・石英粗粒などを含み粗である。器面も粗で、粒子・繊維が露出している。焼成不良で脆い。

〔色調〕；暗褐色のものが多い。

a類の底部形状他（第13図）　上述の口縁部の各類型と底部破片との対応関係を明らかにしえないものが多いので、底部破片に見られる諸特徴をここに一括列記する。

㋐尖底部の器壁が厚くなり突出した印象を与える。施文は先端にまでおよぶ。原体は右撚り・二段である。胎土・焼成・色調は既述のものに大略似る。

㋑薄手の器壁が変化を示さず、鈍い感じの尖底になる。

㋒丸底風の尖底あるいは平底になると思われる。a_2類の一部に似る。器壁は厚くかなりの大形品となろう。施文は判然としないが底面にまで及ぶらしい。原体は二段で、撚りは左右のいずれもが見られる。

a類の体部破片のその他の特徴

口縁部との対応関係を明らかにしえない体部破片の中には無節・複節などの縄文を有するものもある。横走する割れ目と、その断面の傾斜を、成形時の素地粘土の接ぎ手とみなしてよいならば、粘土紐の巾は3～4cmのものがある。

b類　表裏両面に縄文をもつ。口縁部は不明である。施文の細部の異同により三類に分かつ。

b_1類（第13・14図、図版12－2）　表裏ともに縄文のみが施文される。器形は不明であるが、底部が多少揚げ底風の平底になるものが少なくとも存在する。体部破片にはあまりカーブの変化を看取できない。

〔施文〕；表裏ともに二段の原体を用いる。表裏が同一原体のものと異原体のものの二種がある。撚りは左・右の両者がある。前記平底風の底面にも施文される。回転方向は横・斜位が多く、一回の回転のストロークはあまり長くない。撚りは固いもの・緩いものの両者がある。

〔胎土〕；石英粗粒・小石・粗砂などを混じ、粗である。焼成不良のものが多い。

〔色調〕；茶褐色・暗褐色・極暗褐色などが多い。炭化物様の付着も見られる。

b_2類（第14図、図版12－2）　一個体であるが一応分離した。刺突文を加える。口縁部・底部の形状は不明である。

〔器形〕；不明である。体部破片には成形時の接ぎ手とみなしうる凹凸の他には特別な変化は見られない。深鉢形であろう。

〔施文〕；表裏ともに縄文を付し、表面に横長の刺突文列を横位に追加する。残存状態不良のため判然としないが、右撚り・一段の原体を用いた無節の縄文らしい。表裏同一原体であろう。回転方向は、表面は横位と斜位を併用するため一見羽状縄文風になっている部分もある。

裏面には表面よりも入念に施文し、斜位回転によって得られた比較的整然とした横走縄文が主体をなす。なお、部位によっては条痕文も併用された可能性もある。また表裏面での縄文の相違を当初から意図していたとするならば、表面のものは「羽状縄文」とみなした方が適切かもしれないが、本稿では異原体を用いての羽状化の場合に限定（いわゆる結束あるものに近いもの）してその名を用いることとした。刺突文列は二本一対で、体部を一定間隔で区切るかのように横方向に加えられる。平面形は長方形に近い。凹みの両側端部が一段深くなっているが、これは工具そのものの形状あるいは施文方法のいずれかの反映であろう。

〔胎土〕；石英粗粒・白色砂粒等を含み概ね粗である。焼成は普通からやや不良に近い。理由不明であるが、膜状に剥落している部分がある。あるいはＳｌｉｐの使用の痕であろうか。

〔色調〕；表裏ともに極暗褐色で、裏面に炭化物様の厚い被膜が形成されている。

b_3類（第14図、図版12－２）　表面に羽状縄文を付す。体部破片だけのため詳細は不明であるが一応分離した。施文は異原体によっている。すべて二段である。裏面には主に斜縄文が見られる。胎土には砂粒・石英粗粒・微量の雲母片などを含み粗である。焼成不良が多く、色調は極暗褐色系統のものが多い。これらにも炭化物様のものの付着が見られる。

c 類　表面に斜縄文、裏面に条痕文をもつ。口唇部の相違により二類に分かつ。

c_1類（第14図、図版12－３）　平縁で、ナデかミガキを施し口唇部を無文化する。

〔器形〕；底部資料を欠き不明であるが、外傾気味の体部上半をもつ深鉢形に近いであろう。体部破片のカーブに顕著な変化を認めない。

〔口縁部〕；外傾的である。断面形は切り出し形を呈すが、これは口唇部調整時の押圧の結果であろう。

〔施文〕；表面は口唇部直下から斜縄文が付される。口唇直下に無文部をつくり出した一例があるが、文様帯とはみなしえない。右撚り・二段の原体を横位に回転している。裏面には巾広の横走条痕が付される。繊維束３本による原体と思われるものも一例ある。

〔胎土〕；石英粒子・粗砂・雲母片などを含み粗なものが多い。焼成不良である。

〔色調〕；暗茶褐色系統のものが多く、裏面に炭化物の付着するものもある。

c_2類（第14・15図）　工具により口唇部に押圧を加え刻み目風に仕上げ、小波状口縁にしたものである。

〔器形〕；底部を欠くので全形は不明であるが、体部上半は直上からやや外反気味に推移するらしい。直線的な印象が強い。

〔口縁部〕；断面形態は全体的に先細りとなるが、とくに口縁端部外側に傾斜面を形成する。それは該部に対する仕上げの調整の結果と思われる。

〔施文〕；表面はc_1類に似る。裏面の条痕は横・斜位が多く、またc_1類よりも細く細条痕的

である。

〔胎土・焼成・色調〕；c_1類に似る。

d 類　施文手法に撚糸文・撚糸側面圧痕を有する。それぞれを地文的に、またモチーフ描出に用いたりする。施文手法の相違により五類に分かつ。

d_1類（第15図、図版12－3）　表面に縄文・撚糸文、裏面に縄文を有する。

〔器形〕；底部を欠き詳細不明である。

〔口縁部〕；得た一例は平縁で、断面形が先細りとなる。口唇部、外面の口唇直下は無文部として残される。口縁に平行する二本以上の撚糸側面圧痕文による口縁部文様帯をおそらくもつであろう。

〔施文〕；体部表面の施文は撚糸文のみのもの、地文に縄文をもち撚糸圧痕文を加えるもの、の二種がある。裏面の縄文は不鮮明である。明らかに羽状縄文とみなすべきものをもつ例もあるので、表面にもそれが存在する可能性がある。部位による施文の有無の別もあるかもしれない。縄文は右撚り・二段の原体で粗雑なものが多い。

〔胎土〕；石英粒子・白色の小石などを含み粗である。焼成不良で脆い。

〔色調〕；茶褐色・暗褐色のものが多い。

d_2類（第15図、図版12－3）　表裏面ともに撚糸文をもつ。

〔器形〕；底部を欠くので詳細は不明であるが、体部上半が直上ないし外反気味に立ち上がる深鉢形であろう。体部破片にカーブをもつものがやや多い。

〔口縁部〕；口縁端部外側が傾斜し、そこに何らかの施文具により縦位の刻み目が付され小波状口縁風にされる。断面形態は特徴的な先取りを呈しc_2類に類似する。この傾斜部にナデあるいはミガキが施される。

〔施文〕；表面には口唇部直下から口縁に平行する8条以上の撚糸文が施され、おそらく口縁部文様帯を形成すると思われる。横走撚糸文と縦走のそれを合わせもつ破片があるので、体部にも撚糸文が付された可能性がある。裏面には斜行する撚糸文が付される。ただし、その施文部位は口縁部に限定される可能性がある。

〔胎土〕；白色・茶色の粗粒、石英粒子等を含み粗なものが多い。焼成不良なものが多いが、稀に良好で硬いものがある。

〔色調〕；明褐色・茶褐色系統のものが多い。

d_3類（第15図、図版12－3）　体部表面に縄文、口縁部文様帯に撚糸圧痕文をもち、裏面は無文のものである。その他の特徴はd_2類に同一といってよい。なお、縄文地に撚糸圧痕文を加える例はd_1類の表面にも存在したところである。

d_4類（第15図、図版12－3）　表面に縦・横走する撚糸文をもち、裏面は無文のものである。

表面における両者の組みあわせはd_2類の表面にも見られたところである。したがって、本類とd_2類は親縁性が高いと思われる。横走撚糸文が口縁部文様帯を、他が体部文様帯を構成する可能性がある。

d_5類（第15図、図版12－3）　表面に斜位の撚糸文様のもの、裏面に浅い条痕文様のものをもつ。胎土に雲母が混入し焼成良好である。施文が判然としない点や、胎土・焼成の特徴が第1・2群に類似するので疑問があるが、一応分離しておく。

(4)第4群土器

基本的特徴　①胎土に繊維をもつ。②焼成不良で脆弱なものが多い。③口縁部文様帯をもつものを含む。ただし、口縁に隆帯は無い。④表面に羽状縄文を付す。なお、本稿における羽状縄文とは、主に異原体の組みあわせ（結束あるものなど）の所産として得られたもの、その配置が乱雑でなく、帯状とみなしうるほど整然としたもの、などを呼んでいる。

a 類　表面は羽状縄文、裏面は無文のものである。底部形状は不明であるが、平底以外のものとなろう。口縁部成形の相違により五種に分かつ。

a_1類（第16図、図版14－1）　平縁で口唇部をナデあるいはミガキで仕上げる。

〔器形〕；全形は不明であるが、体部に変化の少ない深鉢形であろう。

〔口縁部〕；かすかに内湾気味に直上するもの、外反するものなどがある。断面形はわずかに先細りになるもの、丸味をもつものが多い。

〔施文〕；口唇部直下から施文され、口縁部文様帯は無いと思われる。回転方向は横位・縦位の両者があるが、前者の比率が高そうである。

〔胎土〕；微量の雲母・石英粗粒・小石などを含み粗なもの、焼成不良なものが多い。

〔色調〕；明茶褐色・灰褐色・極暗褐色などがある。

a_2類（第16図、図版14－1）　第3群c_2類に類似し、断面形が先細りになり、口唇部に刻みを入れ、小波状に縁風にする。

〔器形〕；不明であるが、やはり深鉢形となろう。

〔口縁部〕；内湾気味の直口になるもの・外反気味になるものなどがある。

施文は横位の回転による。その他はa_1類に似るので省略する。

a_3類（第16図、図版14－1）　口唇部に刻みをつくり小波状口縁とする。第3群a_2類に似る。

〔器形〕；不明であるが、他例と同様であろう。

〔口縁部〕；断面形は方形に近く、外傾気味である。

〔施文〕；横位に短かいストロークで回転施文するらしい。その他はa_1・a_2類に似る。

a_4類（第16図、図版14－1）　本群a_2類、第3群c_2・d_2類に似た口縁部断面を有し、口縁端部外側の傾斜部に刻み目を付す。二種ある。

㋐体部上半が内湾気味から軽い外反気味に立ち上がり、口縁に対し直角に刻みが加えられる。縄文原体は横位の回転である。

㋑外反気味の体部上半をもち、刻みが斜位に加えられる。その他は㋐に同じである。

〔胎土〕；微量の雲母細片・石英粗粒などを含み粗である。焼成は普通からやや不良である。

〔色調〕；明茶褐色・暗褐色・極暗褐色などがある。

a_5類（第16図、図版14－1）　表面口唇直下に縦位の刺突文を付し口縁部文様帯とする。

〔口縁部〕；内湾気味に直上する。断面形はa_4類に似た先細りとなる。刺突具は数種あるらしいが判然としない。縄文原体末端圧痕などもあるらしい。刺突が施される部分のカーブを変えたり器厚を変えたりして、口縁部そのものあるいは口縁部文様帯を印象づけているとも考えられる。

b 類（第16図）　裏面に細条痕様のものをもつ。細密にすぎるのでナデとみなした方がよいかもしれないが、一応あげておく。

(5)その他の土器群（第16図、図版14－1）

不明なもの・疑問のあるもの二例をまとめた。

①表面に撚糸文ないし爪形文様のものを付し、裏面は無文である。胎土に石英細粒を含むが精良で、焼成も良く硬い。繊維は含まない。茶～灰褐色に近い。

②表面に縄文、裏面に縄文原体末端圧痕様の凹部をもつ。裏面の凹凸は砂・小石の移動痕その他である可能性もある。胎土に繊維・石英粒子を含み粗で、焼成不良、暗茶褐色を呈す。

要約①　各土器群の出土状況について

各群土器とその出土層位の関係をまとめると第1・2表のようになる。二次堆積層であることから出土層位と各群土器の本来的対応関係を正確に把握することはできないが、少なくとも第1・2群土器は最下層から出土しはじめているのに対し、第3・4群土器は最下層には非常に少ない、という事実は指摘できよう。Bブロックにおける事実により、第1・2群は本来的にⅡb層と対応関係をもつ、またその組みあわせが土器群のセットをなすとみなしておく。

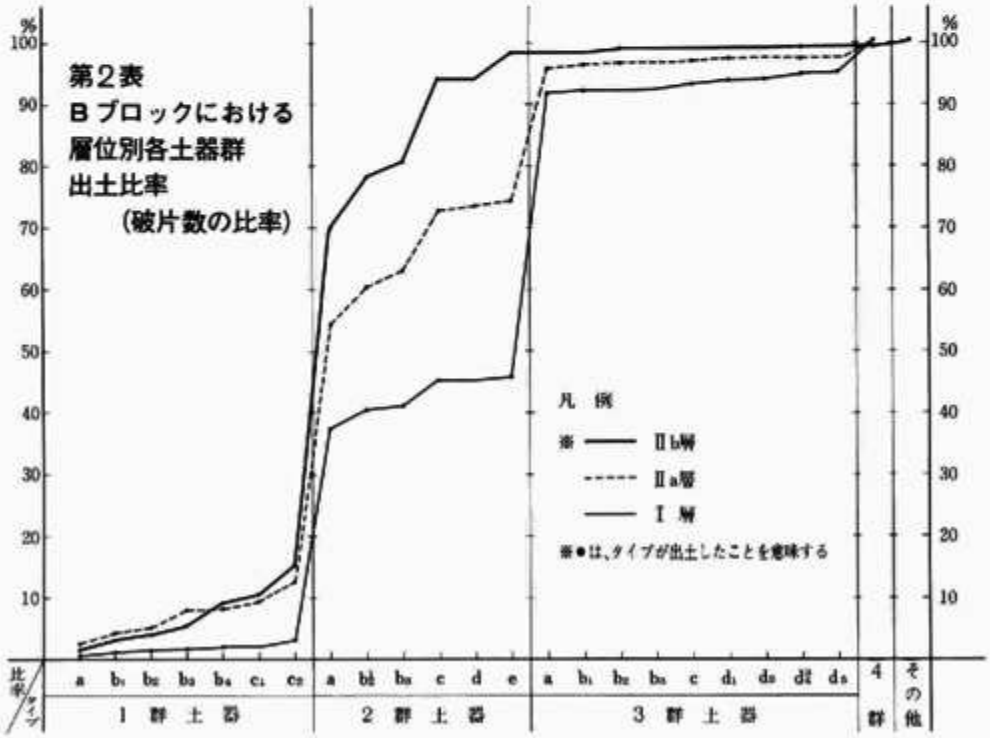
要約②　各土器群の編年上の位置について

分類した各土器群の編年上の位置について若干のべる。

第1群土器；本群類似の資料を出土している遺跡は青森県ムシリ・早稲田・長七谷地・野口その他、岩手県蛇王洞洞穴・同オミ坂、秋田県岩井洞岩陰などがあげられる。ムシリにおいては本群$b_{2\cdot3}$・c類とほとんど同一のものが出土しているが、貝殻腹縁刺突文・口縁に絡縄体圧痕を付した隆帯をもつもの、特徴的な平底などは逆に本群には見られない。早稲田貝塚第三類土器は細隆起線文以下7種類のものを含むが、そのうちの細隆起線文・絡縄体圧痕文・凹線文にあたるものは本群中には見られない。その他は大略同一といってよい。蛇王洞洞穴第Ⅱ層出土

第1表　地区・層位別　各群土器片出土数および比率

		1								2							3										4	他	計
		a (1a)	b_1 (1b)	b_2 (1b)	b_3 (1c)	b_4 (1c)	c_1 (1a)	c_2 (1b)		a (2)	$b_{1,2}$ (2b)	b_3 (2)	c (2a,b)	d (2)	e (2)		a (3)	b_1 (3a)	b_2 (3b)	b_3 (3b)	c (3a)	d_1 (3b)	d_2 (3c)	$d_{3,4}$ (3a)	d_5 (3d)		(6)	(12~14)	
A ブロック	I	3 0.7	4 1.4	1 0.3	3 0.7	1 0.3		7 2.4	17 5.9	104 36.2	2 0.7		21 7.3		2 0.7	129 44.9	130 47			1 0.3				4 1.4		140 48.8	1 0.3	287
	IIa		2 0.5	5 1.3	9 2.4	14 3.6		31 8.0	43 11.1	100 29.4	9 2.6		29 7.9		3 0.8	150 43.4	154 44.7	6 1.6		1 0.3			7 1.9	2 0.5		162 46.5		351
	IIb		3 0.5		1 1.6	1 1.6			5 8.1	13 21.6			2 3.6			15 27.3	35 63.6									35 63.6		55
	計	2	9	6	13	16		38	53	236	11		52		5	294	324	6		2			7	6		366	1	713
B ブロック	I	3 0.2	15 1.2	5 0.4	4 0.3	2 0.2		10 0.8	39 3.0	447 34.5	36 2.8	7 0.5	52 4.0		1 0.1	543 42	613 47.3	2 0.2			10 0.8	1 0.1	2 0.2	15 1.2	1 0.1	643 49.7	68 5.3	1290
	IIa	45 1.6	63 2.2	27 1.0	79 2.8	36 1.3	8 0.3	94 3.6	303 10.5	1205 41.6	349 12.0	62 2.2	242 16.0	4 0.2	14 0.5	1681 60.4	1331 47	7 0.3	4 0.2		4 0.2	2 0.1		43 1.7		706 24.3	68 2.4	2416
	IIb	13 1.1	12 1.0	26 2.3	17 1.4	34 3.0	13 1.0	46 4.0	156 13.6	573 50.0	98 8.4	21 1.8	143 12.7		42 3.7	802 70.3			13 1.1					4 0.4		15 1.4	2 0.2	3 0.3	1043
	計	59	90	58	97	72	69	105	498	2225	259	90	436	4	57	2891	1942	9	15		14	3	2	60	1	1040	136	5	4754
C ブロック	I	5 0.9	2 0.3	8 1.4	14 2.4	6 1.0	1 0.2	12 2.1	48 8.3	114 19.7	8 1.4	2 0.3	96 16.6	14 2.4	2 0.3	236 40.8	336 45.9	1 0.2			3 0.5		1 0.2	13 2.2		294 49.1	10 1.7	1 0.2	579
	IIa	1 0.4	2 0.7	5 1.8		1 0.4		1 0.4	10 3.5	61 21.5	20 7.1		22 7.8	1 0.4		104 36.9	261 37.1	1 0.4			1 0.4					103 37.9	5 1.8	282
	IIb																												
	計	6	4	13	14	7	1	13	58	175	28	2	118	15	2	340	627	2			4		1	13		407	15	1	861
D ブロック	I																6 100									6 100			6
	IIa									1 16.7						1 16	5 83.3									5 83.3			6
	IIb																												
	計									1						1	11									11			12
計		67	103	77	117	85	19	151	599	2427	306	92	606	19	64	3506	2964	17	15	2	18	3	10	79	1	3089	151	5	6240



土器は表裏ともに条痕文の施された薄手の土器によって特徴づけられるとされ、その中には口縁部文様帯に細い粘土紐を貼りつけた幾何学的意匠を表現するもの（細隆起線文）、体部に貝殻腹縁文をもつもの、胎土に微量の繊維をもつものと、もたないものなどが含まれる。本群に細隆起線文と貝殻縁文を欠くことは既にふれたとおりである。オミ坂遺跡からも各種の土器群が得られているが、微量の貝殻腹縁刺突文、本群の1－a・b・c、2－b_3、3　a、4に極似したものが出土している。とりわけ1群類似のものの胎土に多量の雲母を含み繊維を含まない点、明赤褐色の胎土・器面をもち薄手である点などは、まったく同一とみなしてもよいとのことである。ちなみに、本調査地とオミ坂遺跡は直線距離にして約5kmである。

岩井洞第4洞穴Aトレンチ第9層より出土しc類文様とされたものは、「太いが浅く乱れがちな貝殻の横走条痕文上に比較的間隔ある平行沈線が異方向に走って、胴部一面に幾何学的文様を広げる……」ものであり、焼成良好・色調赤褐色のものであった。これは本群の1　bないし1－c類に相当するものと考えられる。その他に貝殻腹縁刺突文などの各種の土器群が伴出している。

いずれにせよ本群土器は、そのすべてがいわゆる「ムシリ1式」に近いものと思われる。ムシリ1式の内容の地域差などは、今後の検討課題としておく。

第2群土器； 本群は、東北地方早期後半の「縄文条痕土器」群に含められるものであろう。その類例は数多いが、東北北半では青森県早稲田貝塚第四・五類、同唐貝地貝塚貝層出土、同赤御堂式、岩手県蛇王洞洞穴第1層、同崎山弁天遺跡C地点Ⅲ層以下、同一本松熊の沢、同関谷洞窟遺跡などが、南半では編年順に素山Ⅱb式、上川名1式、梨木畑式、船人島下層式などの諸例があげられる。このうち早稲田第四類と赤御堂式・唐貝地貝塚貝層出土土器は類似するが、早稲田四類は口縁部文様帯をもたないこと、赤御堂式と唐貝地例は口縁部文様帯をもつが、前者には口縁部に隆帯が見られないことなどからそれぞれ区別されている。また、早稲田四類と上川名1式・槻木Ⅱ式が、早稲田五類と梨木畑式がそれぞれ併行関係にあるとみなされている。なお、崎山弁天遺跡C地点における層位的出土状況から、早稲田四類（崎山弁天Ⅶ・Ⅵ層）→赤御堂（同Ⅴ？）・唐貝地（同Ⅳ・Ⅲ？）→早稲田五類という推移が想定されている。以上を考慮すると、本群土器は早稲田四類・赤御堂式・唐貝地貝層出土土器などに類縁性をもつと思われる。口縁部文様帯を欠く例が多い点は早稲田四類的ともいえるが、それをもつ例も存在する点は後一者的ともいえよう。また、b_2類の口縁部の隆帯やb_3類の体部にまでおよぶ施文を唐貝地貝層土器の特徴に似るとみることもできようが、唐貝地例の隆帯には各種の施文が見られるので、b_2類の無文とは異なるものとした方がよいのであろう。しかし、一応前記三群の土器に対比しておく。b_3類としたものの一部の施文手法（斜行する平行沈線・刺突文など）が第1群のそれに類似すること、また、a_1類・b_1類の胎土が第1群のそれに類似する点は既にのべた

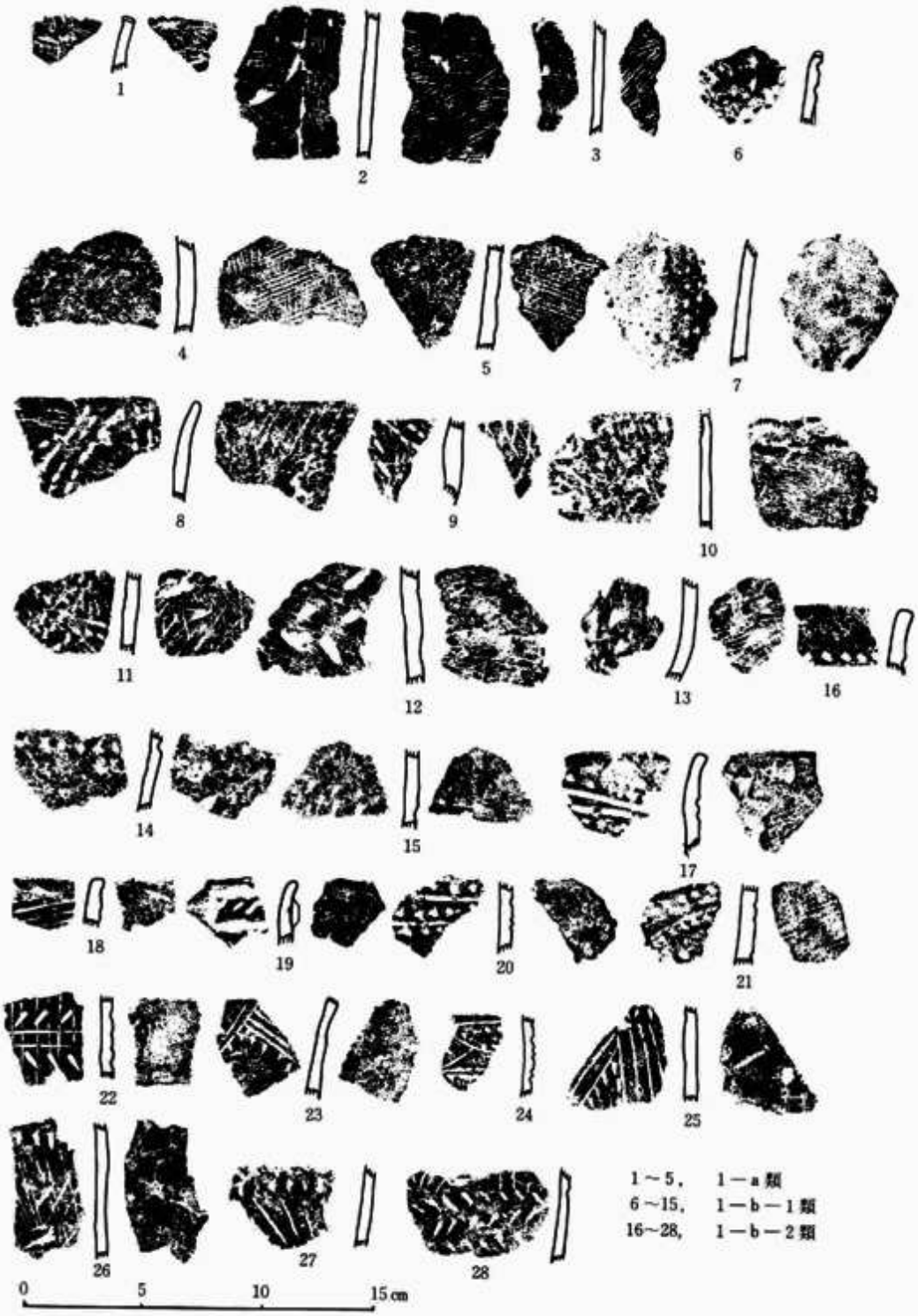
が、それぞれの類似性を単純に親縁関係の疎密におきかえてよいならば、a_1・b_1・b_3類などは、第1群と2群の中間に位置づけられる可能性もある。ムシリⅠ式と赤御堂式などの土器群の間に何らかの土器群を介在させるべきことについては、既に古く佐藤達雄氏らによる指摘がある。それによると、細隆起線文と絡縄体圧痕文及び撚糸文による文様をもつものである可能性が強いとのことであり、その種土器の型式的内容が明らかになれば、青森県地方の縄文盛行の開始について明瞭な資料を得ることができよう、とのことであった。a_1・b_1・b_3類などはこの指摘の前段とはあまり関係が無いと思われるが、後段に関係する可能性もあり、今後も検討されるべき課題であろう。東北南半においては、槻木Ⅱ式以降南関東からの影響を強力にうけ一種のコロニー化し、素山Ⅱb式期から再び独自性を回復したとの林謙作氏の指摘との関連もあり、該期の東北北半の具体相も明確にされる必要がある。

第3群土器: 本群も「縄文条痕土器群」に包括され、その最盛期に属すると思われる。具体的には東北北半の早稲田貝塚第五類、南半の梨木畑式などに近いと思われる。ただし、両者の特徴の一つとされる幾何学的な口縁部文様帯の描出法は、本群には顕著ではない。その他の点は大体よく類似しているといえる。なお、口縁部断面形態が先細りになり、口唇部に刻みを加えたc_2類・d類の一部には、後述の第4群に含めた方が妥当なものがある可能性もある。

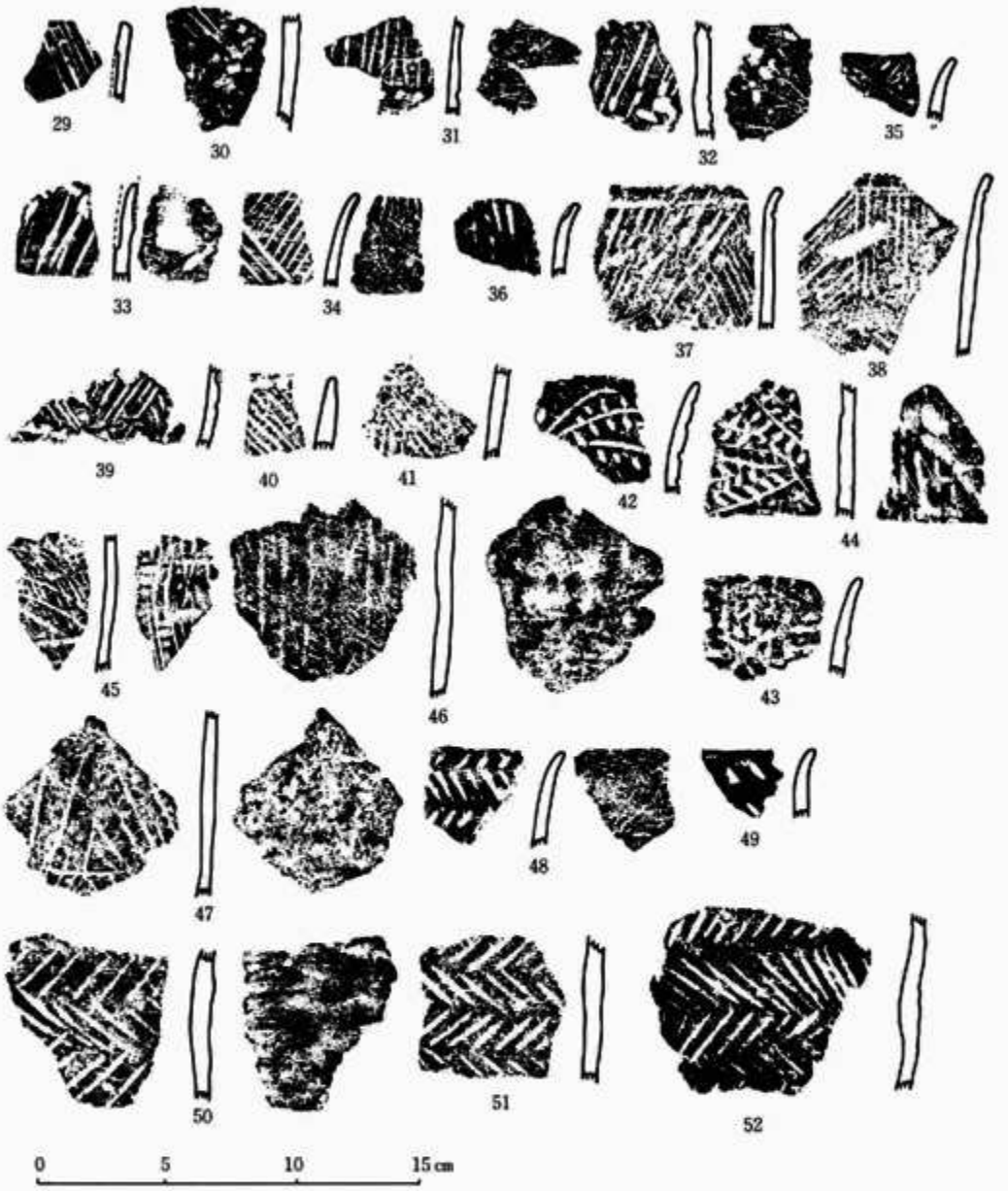
第4群土器: 本群は「縄文条痕土器群」の終末期にあたるものと思われる。類例は東北北半の早稲田貝塚第五類の一部、南半の船入島下層式などがあげられようが、後者により近いと思われる。裏面への縄文施文が消え条痕文ないし無文化される、単節斜縄文に加え、帯状縄文・羽状縄文も施文される、撚糸文をもつのも共伴する、などの諸特徴は、大略合致するものといえよう。第3群c_2・d類も本群に包括される可能性があることについては既にふれた。とくに口縁部断面形態が先細りとなり、口唇に刻み目を有し、表面に撚糸文を有するd_3類以下は、船入島下層式の特徴そのものとも見做しうるからである。

その他の土器群; ①・②ともに対比すべき良好な資料をもたないが、①は胎土の様子からすると第2群に類似する。ただし、表面の施文がいわゆる草創期の爪形文の一部に類似するとも見える点はやや気がかりである。②は第2群の仲間と考えられる。

以上のように、第1群から第4群までは、時間的経過を示しているといえよう。既述の第1・2群は最下層からも検出され、第3・4群は非常に少ないという現象もこれに矛盾するものではない。本遺物包含層は二次堆積層であるが、ある程度時間差を反映しているということになる。いずれにせよ、本遺物包含層出土土器は東北地方縄文時代早期の条痕文土器群の大半を包括することになる。竪穴住居跡は第3群の時期と思われることについては既にふれた。

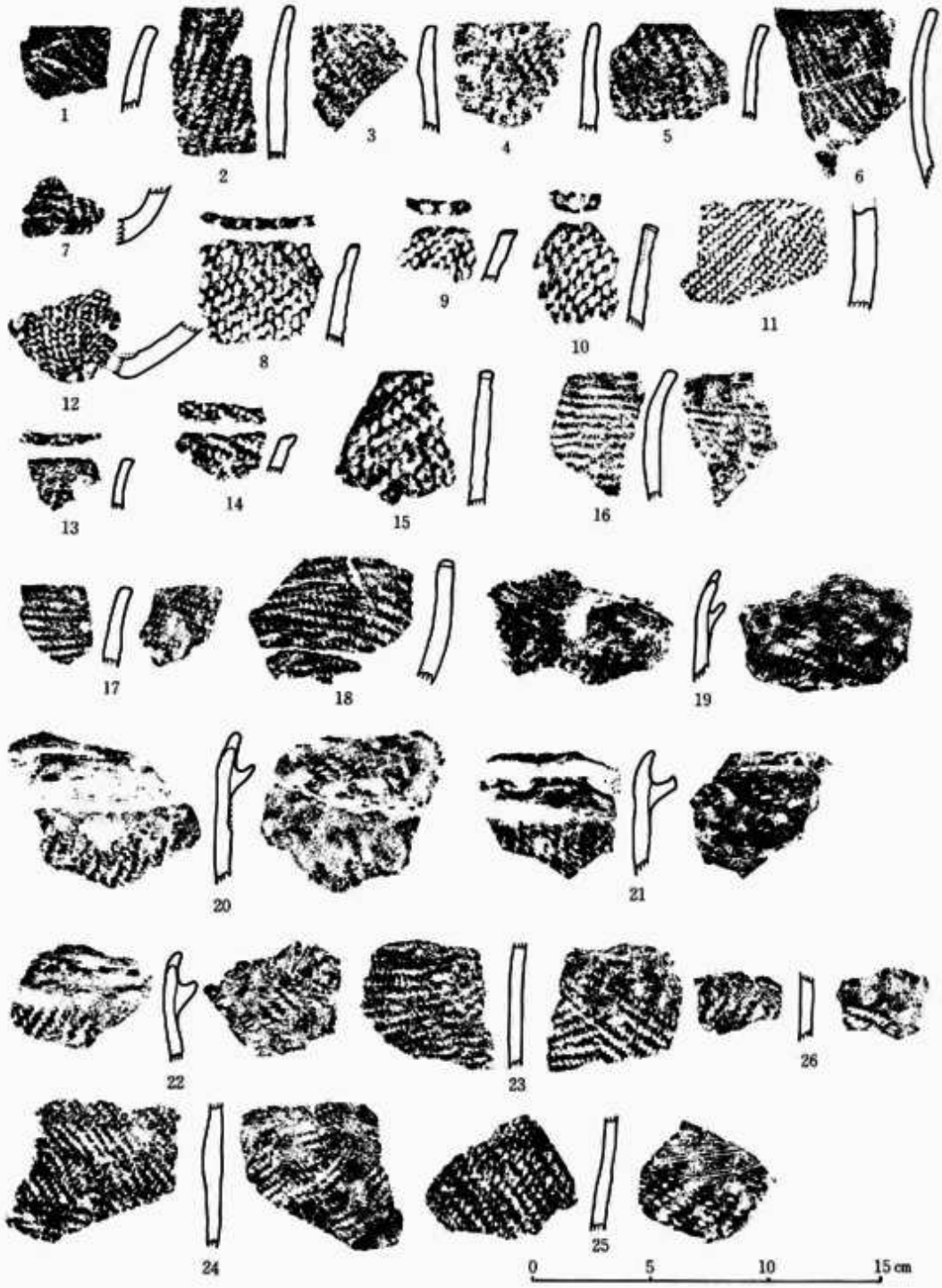

1
2
3
6
4
5
7
8
9
10
11
12
13
16
14
15
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
1～5, 1－a類
6～15, 1－b－1類
16～28, 1－b－2類
0
5
10
15cm

第9図　土器拓影図（1）



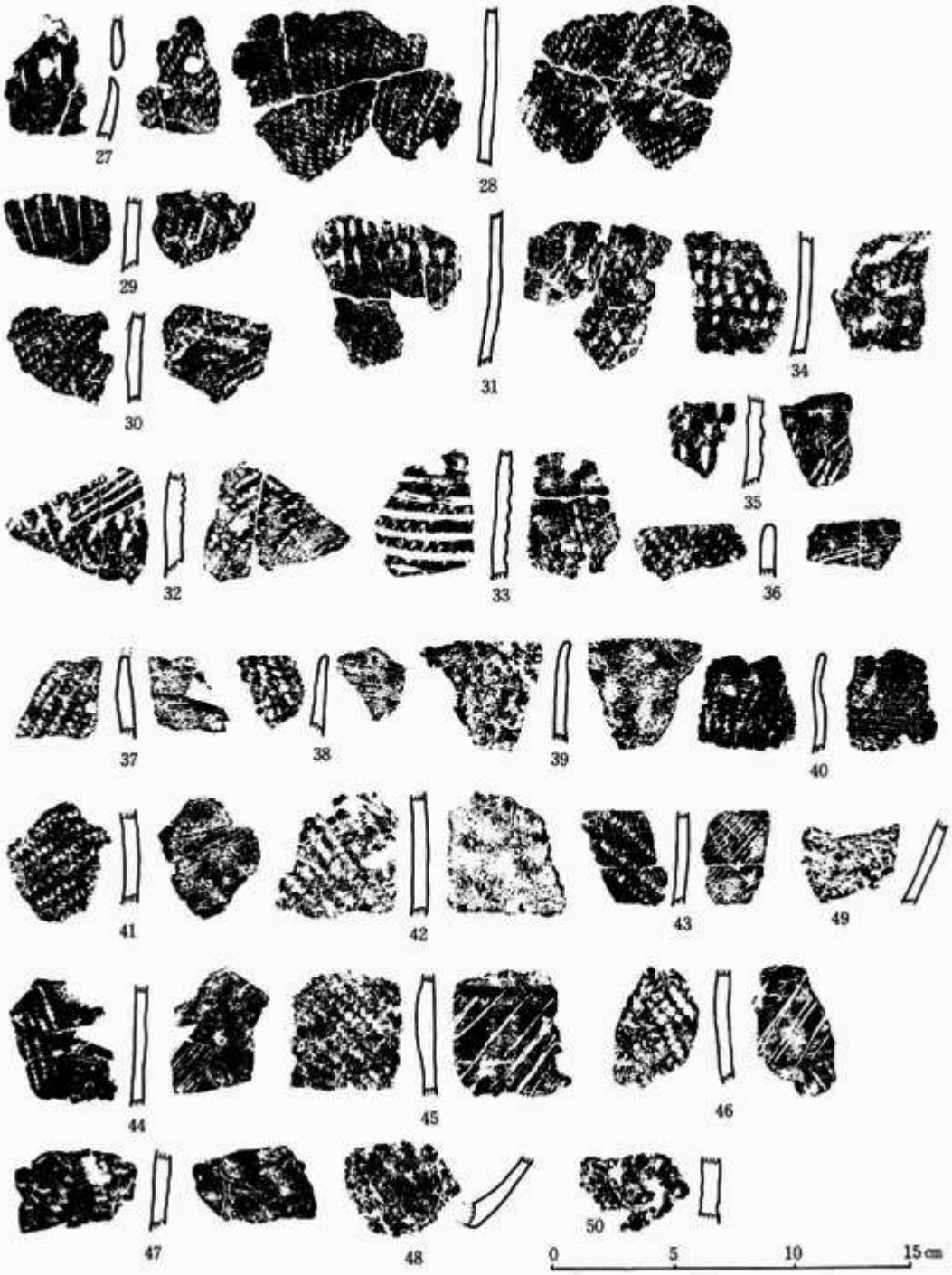
第10図　土器拓影図 (2)

29～33,　1－b－3類
34～41,　1－b－4 〃
42～47,　1－c－1 〃
48～52,　1－c－2 〃



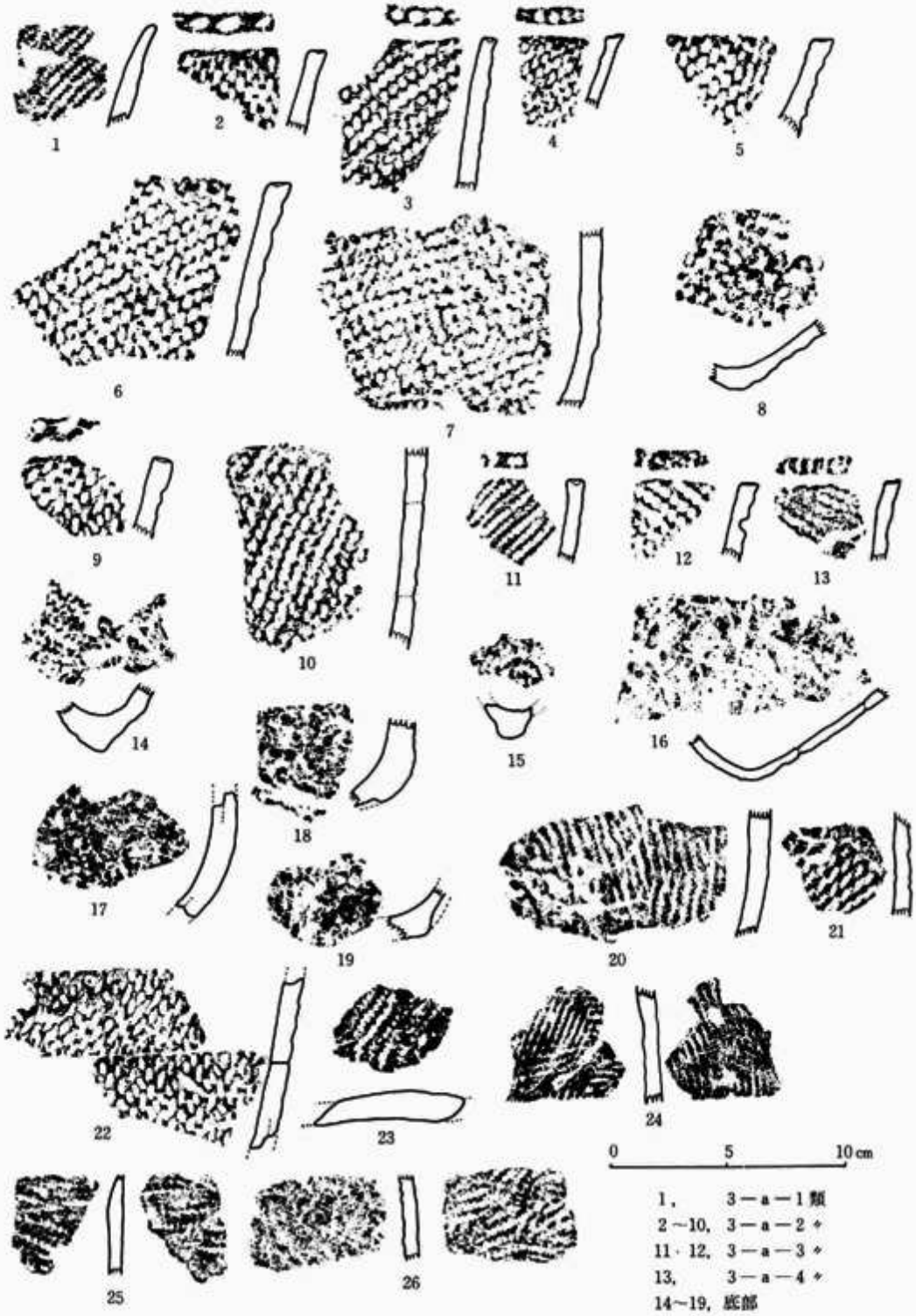
第11図　土器拓影図 (3)

1～7，2－a－1類　　16～18，2－b－1類
8～12，2－a－2＊　　19～26，2－b－2＊
13～15，2－a－3＊



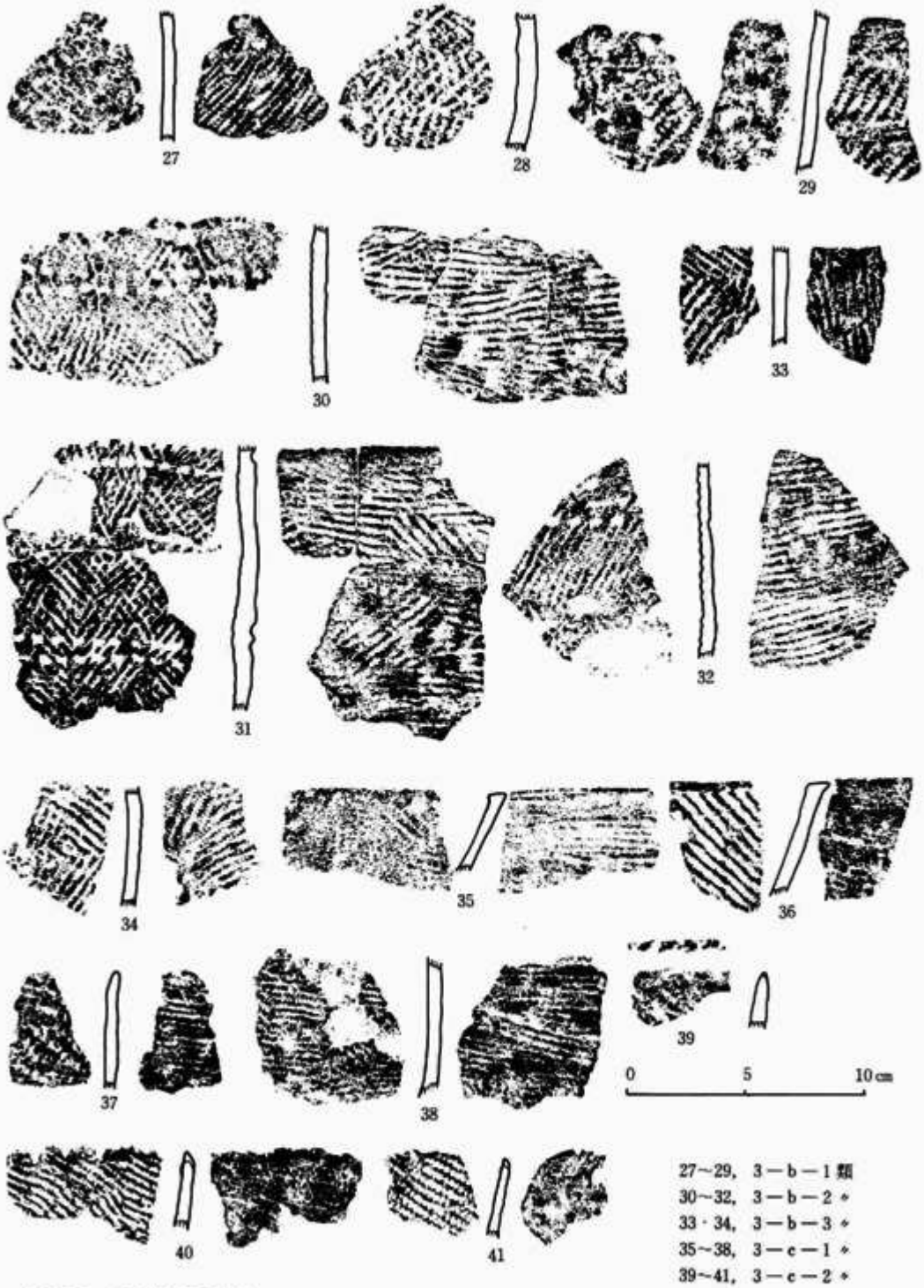
27～35, 2－b－3類　　50, 2－e類
36～46, 2－c類
47～49, 2－d＋

第12図　土器拓影図 (4)



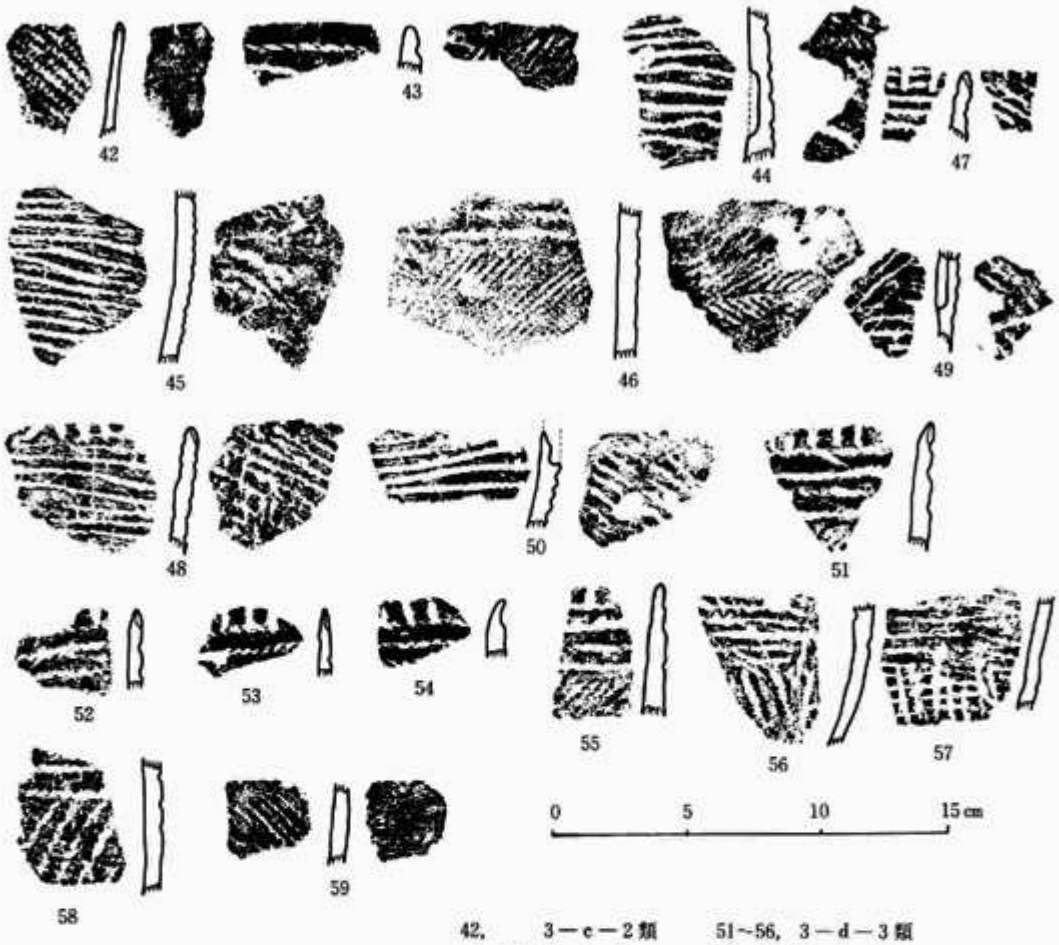
1, 3－a－1類
2～10, 3－a－2〃
11・12, 3－a－3〃
13, 3－a－4〃
14～19, 底部
20～22, 体部
23～26, 3－b－1類

第13図 土器拓影図 (5)



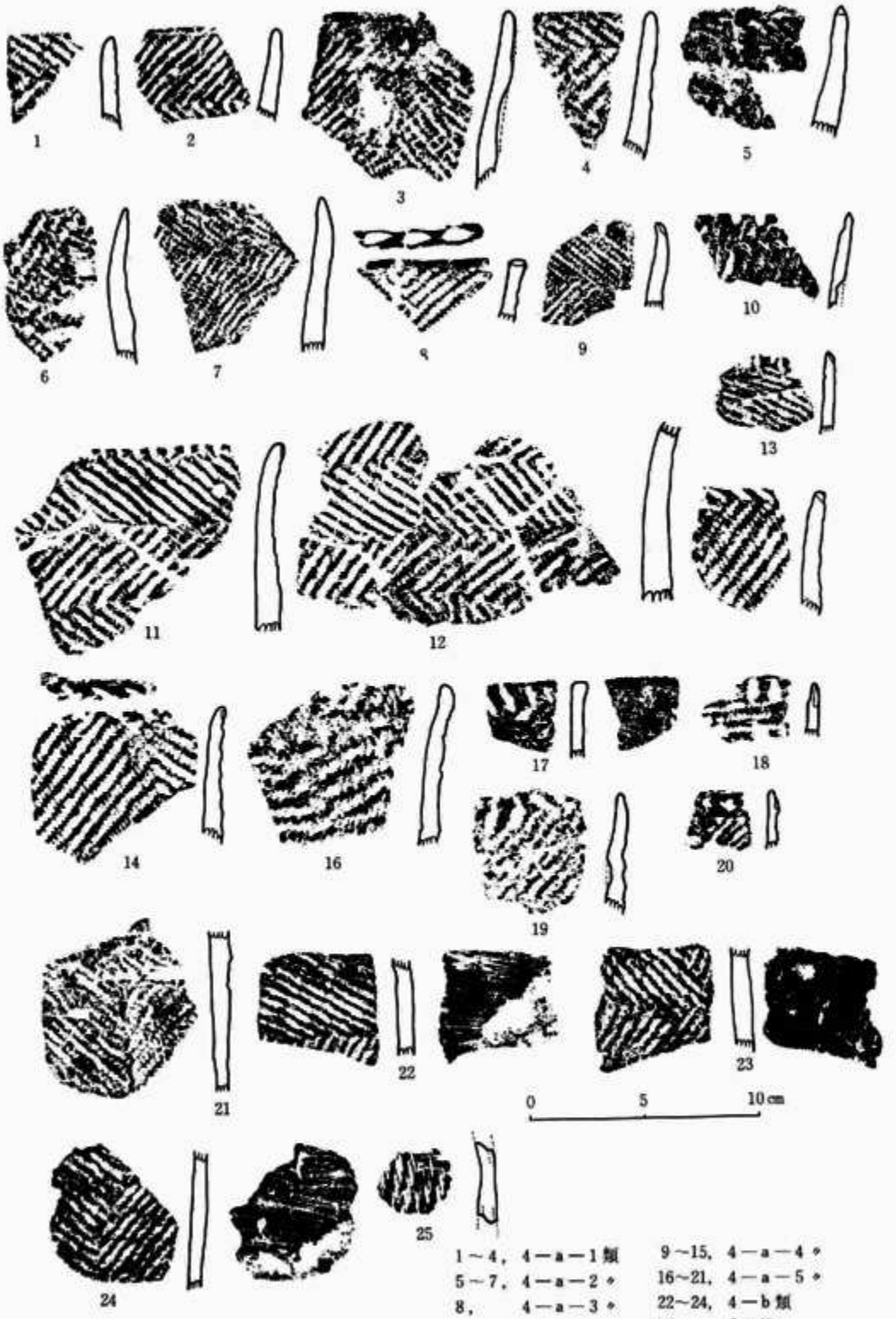
27～29, 3－b－1類
30～32, 3－b－2〃
33・34, 3－b－3〃
35～38, 3－c－1〃
39～41, 3－c－2〃

第14図　土器拓影図 (6)



第15図　土器拓影図（7）

42,　3－c－2類
43～46,　3－d－1＊
47～50,　3－d－2＊
51～56,　3－d－3類
57, 58,　3－d－4＊
59,　3－d－5＊



1～4，4－a－1類　　9～15，4－a－4〃
5～7，4－a－2〃　　16～21，4－a－5〃
8，　4－a－3〃　　22～24，4－b類
25，　その他

第16図　土器拓影図（8）

実測図	番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面		内面		焼成	胎土			その他
						色調	調整・施文	色調	調整・施文		色調	繊維	土性	
第9図	1	Bc50	Ⅱa	Ⅰ—a	口縁	暗茶褐色	浅い斜条痕	暗茶褐色	斜条痕	良好	極暗褐色	無	石英、雲母細粒、普通	口縁部刻み目
	2	Bd03	Ⅱa	〃	体部	茶褐色	交叉する条痕	極暗褐色	交叉する条痕	〃	〃	〃	石英粒子、白色粒子、粗	②③同一個体
	3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	4	Bc06	Ⅱb	〃	体部	明茶褐色	不明　無文?	暗茶褐色	交叉する条痕、炭化物	普通	暗茶褐色	〃	〃 〃 〃	
	5	〃	Ⅱa	〃	〃	茶褐色	〃	〃	交叉する条痕	良好	茶褐色	〃	雲母片、石英粒、普通	
	6	Bc50	Ⅰ	Ⅰ—b—1	口縁	〃	ナデかミガキ、刺突文	茶褐色	ナデかミガキ、無文	〃	〃	〃	白色粒子、石英粒、普通	
	7	Bc03	Ⅱb	〃	体部	灰がかった茶褐色	ナデかミガキ、刺突文二条	灰がかった茶褐色	〃	〃	〃	〃	石英粗粒、雲母片、粗	
	8	Bd06	Ⅰ	〃	口縁	暗茶褐色	斜位三条の列点文、地文条痕?	暗茶褐色	斜条痕	普通	暗茶褐色	〃	石英粗粒、雲母片、粗	
	9	Bd03	Ⅱb	〃	体部	〃	斜位の列点文	〃	交叉列点文	良好	〃	〃	雲母片、白色砂粒、精	
	10	Ba03	〃	〃	〃	〃	〃	〃	横斜位条痕	不良	〃	〃	雲母片、石英粒子、粗	⑩⑪同一個体
	11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	12	〃	〃	〃	〃	茶褐色	地文条痕、綾杉状刺突文	極暗褐色	〃	良好	茶褐色	〃	石英粒子	⑫⑬同一個体
	13	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	底部に近い?
	14	Bc06	〃	〃	〃	〃	地文条痕、段状刺突文	茶褐色	無文か条痕	不良	〃	〃	雲母片、石英粒子、粗	⑭⑮同一個体
	15	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	16	Cef24	Ⅰ	Ⅰ—b—2	口縁	暗茶褐色	ナデかミガキ、列点文	暗茶褐色	無文?	良好	茶褐色	〃	白色細砂、精	
	17	Ca09	〃	〃	〃	明茶褐色	ナデかミガキ、斜位平行沈線、列点文	極暗褐色	条痕文、煤	不良	〃	〃	石英粗粒、粗	
	18	Bab12	Ⅱa	〃	〃	極暗褐色	ナデかミガキ、斜位平行沈線	〃	条痕文	普通	〃	〃	石英粒子、普通	
	19	Bc06	Ⅱb	〃	〃	茶褐色	ミガキ、隆帯斜位沈線	茶褐色	無文か条文	良好	〃	〃	雲母片、精	隆帯下部に沈線
	20	Bc50	Ⅱa	〃	体部	暗茶褐色	平行沈線、刺突	暗茶褐色	ミガキ?、条痕	普通	〃	〃	石英粗粒、粗	
	21	Bc53	〃	〃	〃	〃	〃 〃	極暗褐色	条痕	〃	〃	〃	石英粒、白色砂粒、粗	
	22	Bc06	Ⅱb	〃	〃	〃	ナデかミガキ、交叉する平行沈線、刺突	灰褐色	条痕?	良好	灰褐色	〃	石英砂粒、粗	
	23	〃	Ⅱa	〃	口縁	極暗褐色	地文条痕、斜位平行沈線・刺突	極暗褐色	無文か条痕	普通	暗褐色	無?	雲母片、粗	口縁部刻み目
	24	Bb53	〃	〃	体部	茶褐色	ナデかミガキ、沈線+刺突	茶褐色	無文?	良好	〃	無?	石英粒、雲母片、普通	
	25	Bd03	Ⅱb	〃	〃	赤褐色	斜位平行沈線刺突、綾杉状刺突	極暗褐色	横走条痕	〃	〃	無	石英粒、白色粒子、粗	
	26	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	㉖㉗㉘㉙は同一個体
	27	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	裏面省略

実測図	番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	28	Bd03	Ⅱb	1-b-2	体部	赤褐色	斜位平行沈線刺突、綾杉状刺突	極暗褐色	横走条痕	良好	暗褐色	無	石英粒、白色粒子、粗	裏面省略
第10図	29	Cab53	Ⅰ	1-b-3	口縁	淡灰褐色	地文条痕、斜行沈線	灰褐色	無文か条痕	〃	灰褐色	〃	雲母片、石英粒、精	口唇部傾斜
	30	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	31	Bc06	Ⅱb	〃	〃	赤褐色	地文条痕、平行沈線＋刺突	赤褐色	条痕	〃	赤褐色	〃	石英粒子 〃	薄手
	32	Ahi59	Ⅱa	〃	〃	淡灰褐色	〃	極暗褐色	〃	〃	暗褐色	〃	〃 〃	
	33	Bd50	〃	〃	〃	茶褐色	〃	茶褐色	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	34	Cf12	Ⅰ	1-b-4	口縁	極暗褐色	斜位平行沈線	赤褐色	口縁に斜位沈線、斜位条痕	〃	〃	〃	雲母片、石英、粗	
	35	Bc06	Ⅱa	〃	〃	明茶褐色	〃	明茶褐色	無文か条痕	普通	明茶褐色	〃	〃 〃 〃	
	36	Bc09	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	暗茶褐色	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃 〃 普通	
	37	Bc03	Ⅱb	〃	〃	明茶褐色	〃	明茶褐色	〃	良好	茶褐色	〃	雲母片、石英、粗	
	38	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	㊳㊴㊵㊶は同一個体
	39	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	40	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	41	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	42	Bd06	Ⅱa	1-c-1	口縁	暗茶褐色	沈曲線＋刺突文	暗茶褐色	無文か条痕	不良	極暗褐色	〃	石英粗粒、粗	
	43	Bc50	〃	〃	〃	茶褐色	沈曲線＋矢羽状刺突	極暗褐色	〃	〃	暗褐色	〃	雲母片、石英粒、粗	薄手
	44	〃	Ⅰ	〃	体部	淡灰褐色	平行沈線＋矢羽状刺突	灰褐色	条痕？	良好	灰褐色	〃	〃 〃 精	
	45	Bb53	Ⅱa	〃	〃	明茶褐色	地文条痕、沈曲線	明茶褐色	地文条痕、沈曲線	〃	茶褐色	〃	〃 〃 粗	
	46	Bc50	〃	〃	〃	赤褐色	地文条痕、平行沈線	極暗褐色	横走条痕	不良	暗褐色	無？	石英粗粒、粗	裏面に煤
	47	Bc09	Ⅱb	〃	〃	淡茶褐色	斜位平行沈線	〃	無文か条痕	良好	〃	〃	石英粒、白色粒、普通	
	48	Bb53	Ⅱa	1-c-2	口縁	茶褐色	綾杉状短沈線	茶褐色	口縁部斜位条痕	不良	茶褐色	無	雲母、石英、白色粒、粗	口唇部刻み目
	49	Cbc74	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	暗茶褐色	無文か条痕	良好	〃	〃	雲母、白色粒、精	
	50	Bc53	Ⅰ	〃	体部	茶褐色	〃	〃	〃	〃	〃	〃	雲母、石英粒、粗	
	51	Bb53	Ⅱb	〃	〃	〃	〃	極暗褐色	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	㊷㊸同一
	52	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	個体
第11図	1	Bc53	Ⅱa	2-a-1	口縁	暗灰褐色	RL＜r/l？	暗灰褐色	無文、ナデかミガキ	良好	暗灰茶褐色	〃	石英粒、普通	平縁
	2	Ahi59	〃	〃	〃	暗赤褐色	〃	暗赤褐色	〃 〃	〃	赤褐色	〃	雲母片、精	〃
	3	Bb06	Ⅱb	〃	〃	茶褐色	〃	暗茶褐色	〃 〃	〃	灰褐色	〃	〃 〃	③④同一個体

実測図	番号	出土地点	出土地点	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
第11図	4	Bb06	Ⅱb	2—a—1	口縁	茶褐色	RL<r/r ?	暗茶褐色	無文、ナデかミガキ	良好	灰褐色	無	雲母片、精	
	5	Bc03	〃	〃	〃	極暗褐色	〃	暗褐色	〃 〃	〃	極暗褐色	〃	雲母片、石英粒、普通	
	6	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	明茶褐色	〃 〃	〃	〃	〃	雲母片、精	
	7	Bb06	〃	〃	底部	淡茶褐色	LR<l/l ?	暗褐色	不明	〃	明赤褐色	〃	雲母片、石英、粗	
	8	Bc50	Ⅰ	2—a—2	口縁	灰茶褐色	〃	暗灰褐色	無文、ナデかミガキ	〃	暗灰褐色	〃	小石、石英粒、普通	口唇部凹み
	9	Ahi50	Ⅱa	〃	〃	赤褐色	〃	赤褐色	多孔質	〃	極暗褐色	〃	石英粒、普通	〃
	10	Bab09	〃	〃	〃	茶褐色	LR<l/l	暗茶褐色	無文、ナデかミガキ	〃	黄茶褐色	無?	小石、普通	
	11	Bde71	Ⅰ	〃	体	明茶褐色	〃	明茶褐色	〃 〃	〃	明茶褐色	〃	石英粒、精	⑧⑨同一個体
	12	〃	〃	〃	底	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	13	Cbc77	Ⅰ	2—a—3	口縁	極暗褐色	RL<r/r ?	極暗褐色	無文、ナデかミガキ、煤	〃	極暗褐色	無	雲母、精	口唇部原体側面圧痕
	14	Bc50	〃	〃	〃	明茶褐色	〃	暗褐色	無文、ナデかミガキ	〃	暗褐色	〃	石英粒、粗	
	15	Bab50	Ⅱa	〃	〃	暗茶褐色	LR<l/l ?	明赤褐色	〃 〃	〃	暗茶褐色	無?	石英粒、白色粒、粗	クラック
	16	Bc09	Ⅱb	2—b—1	口縁	赤茶褐色	RL<r/r	極暗褐色	RL<r/r 煤	〃	暗褐色	無	雲母片、石英粒、粗	
	17	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	18	〃	Ⅰ	〃	〃?	〃	〃	明赤褐色	無文?	〃	明茶褐色	〃	〃 〃 精	体部の可能性あり
	19	Bcd53	〃	2—b—2	口縁	茶褐色	LR<l/l ?	茶褐色	LR<l/l	普通	暗茶褐色	〃	雲母片、石英粒、普通	隆帯状落波状口縁
	20	Bc50	Ⅱa	〃	〃	明茶褐色	LR<l/l	灰茶褐色	〃	良好	茶褐色	〃	雲母片、石英粒、粗	隆帯波状口縁
	21	Bc53	〃	〃	〃	〃	〃	明茶褐色	〃	普通	〃	〃	〃 〃 〃	〃
	22	Bb50	Ⅱb	〃	〃	茶褐色	〃	暗茶褐色	〃	良好	暗茶褐色	〃	〃 〃 〃	〃
	23	Bc09	Ⅱa	〃	体部	〃	RL<r/r	極暗褐色	RL<r/r	不良	極暗褐色	〃	〃 〃 〃	
	24	Cb77	〃	〃	〃	明赤褐色	〃	赤褐色	〃	良好	茶褐色	〃	〃 〃 〃	
	25	Cb74	〃	〃	〃	茶褐色	〃	極暗褐色	〃 十条痕	〃	暗褐色	無?	〃 〃 普通	
	26	Bb50	Ⅱb	〃	〃	赤褐色	LR<l/l	淡茶褐色	LR<l/l	〃	〃	無	〃 〃 精	
第12図	27	Bd03	〃	2 b—3	口縁?	〃	〃	赤褐色	〃	〃	褐色	〃	〃 小石、粗	補修孔あり
	28	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	29	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	30	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	㉚㉛㉜㉝同一個体
	31	Bc03	〃	〃	〃	〃	〃?	明赤褐色	〃	〃	〃	〃	白色細砂、精	上と同一個体?

実測図	番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	32	Cbc74	Ⅰ	2—b—3	体部	灰褐色	RL<r/r	灰褐色	RL<r/r	良好	暗褐色	無	雲母片、精	
	33	Bab12	Ⅱa	〃	〃	極暗褐色	地文RL<r/r、平行沈線＋刺突	極暗褐色	縄文？	〃	〃	〃	雲母片、石英粒、粗	
	34	Bc06	〃	〃	〃	暗茶褐色	地文縄文？、刺突	灰褐色	LR<l/l	不良	〃	無？	石英粒、白色砂粒、粗	
	35	Bd03	〃	〃	〃	茶褐色	刺突	暗褐色	〃	良好	〃	〃	雲母片、白色砂粒、普通	
	36	Bc50	〃	2—c	口縁	〃	RL<r/r	赤褐色	横位条痕	〃	茶褐色	無	雲母片、普通	
	37	〃	〃	〃	〃	極暗褐色	LR<l/l	極暗褐色	横位細条痕	〃	極暗褐色	〃	〃 精	
	38	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	横位条痕	〃	〃	〃	〃 〃	
	39	Ahi59	〃	〃	〃	茶褐色	RL<r/r？	茶褐色	浅い条痕	不良	暗褐色	〃	雲母片、石英粒、粗	
	40	Bc06	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	暗茶褐色	〃	普通	〃	〃	雲母細片、粗	
	41	Bd50	〃	〃	体部	茶褐色	LR<l/l	茶褐色	細条痕	〃	〃	無？	石英粒、白色砂粒、普通	
	42	Bc09	Ⅱb	〃	〃	淡灰褐色	LR<l/l？	灰褐色	〃	〃	〃	〃	雲母片、白色砂粒、粗	
	43	〃	〃	〃	〃	淡茶褐色	地文条痕、縄文？	茶褐色	交叉斜条痕	良好	〃	無	雲母片、精	
	44	Bc06	Ⅱa	〃	〃	茶褐色	LR<l/l？	〃	斜行細条痕	〃	〃	〃	〃 〃	
	45	〃	〃	〃	〃	〃	RL<r/r	暗茶褐色	斜行沈線	普通	極暗褐色	無？	石英粒、粗	
	46	Bc09	Ⅱb	〃	〃	明茶褐色	〃	極暗褐色	被杉状、沈線、煤	良好	暗褐色	無	雲母片、石英粒、精	
	47	Bab53	Ⅱa	2—d	〃	茶褐色	無文	暗灰褐色	無文	普通	灰褐色	〃	石英粒、白色粒、粗	
	48	Bc06	〃	〃	底部	暗灰褐色	〃	〃	〃	良好	〃	〃	雲母片、石英粒、普通	
	49	Bc03	Ⅱb	〃	体部	明茶褐色	〃	極暗褐色	〃	〃	暗褐色	無？	石英粒、白色粒、粗	
	50	Bb50	〃	2—e	〃	淡茶褐色	不明（無文？）	淡褐色	不明（無文？）煤	普通	淡茶褐色	無	雲母片、石英粒、普通	
第13図	1	Bc50	Ⅱa	3 a 1	口縁	極暗褐色	LR<l/l、煤	暗茶褐色	ナデかミガキ	不良	暗褐色	有	石英粗粒、粗	
	2	Bab12	〃	3—a—2	〃	明赤褐色	〃	明赤褐色	〃	良好	〃	〃	石英粒、精	
	3	Aj56	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	〃	繊維露出	〃	茶褐色	〃	〃 白色砂粒、粗	
	4	Bc50	〃	〃	〃	明赤褐色	LRL<r/r？	黄色	ミガキ	〃	黄色	〃	白色粒、精	
	5	Ai09	〃	〃	〃	灰褐色	〃	淡茶褐色	多孔質	不良	極暗褐色	〃	石英粗粒、粗	⑥～⑧同一個体
	6	〃	〃	3—a—2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	7	〃	〃	〃	体部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	8	〃	〃	〃	底部	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	尖底
	9	Bc50	Ⅰ	〃	口縁	明茶褐色	LR<l/l	赤褐色	ナデ？、繊維露出	良好	赤褐色	〃	石英粒子、精	

実測図	番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	10	Bc50	Ⅰ	3 a 2	体部	明茶褐色	LR<$^{l}_{l}$	赤褐色	ナデ?、繊維露出	良好	赤褐色	有	石英粒子、精	接合部
	11	Ce06	〃	3—a—3	口縁	灰茶褐色	LR<$^{l}_{l}$	茶褐色	繊維露出	普通	暗褐色	〃	石英粒子、白色粒、粗	口唇部原体側面圧痕
	12	Cbc68	〃	〃	〃	明茶褐色	RLRL<$^{r}_{r}$	暗茶褐色	ナデ?、煤	〃	暗茶褐色	〃	石英粒、普通	〃
	13	Ce06	Ⅱa	3—a—4	〃	暗茶褐色	〃	暗茶褐色	ナデ?、繊維露出	〃	暗褐色	〃	石英粒、小石、粗	口唇部爪形文
	14	Cc09	〃	〃	底	茶褐色	RL<$^{r}_{r}$	茶褐色	多孔質、繊維露出	不良	〃	〃	石英粗粒、粗	尖底
	15	Cef24	Ⅰ	〃	〃	〃	〃	灰褐色	不明	〃	灰褐色	〃	〃 〃	〃
	16	Ahi59	Ⅱa	〃	〃	〃	不明、縄文?	明赤褐色	ナデ?、繊維露出	良好	茶褐色	〃	〃 〃	〃
	17	Bc03	〃	〃	〃	〃	縄文?、右撚り?	暗茶褐色	多孔質、煤	普通	極暗褐色	〃	石英粗粒、雲母片、粗	丸底風
	18	Bc09	〃	〃	〃	赤褐色	RL<$^{r}_{r}$	〃	〃	不良	暗茶褐色	〃	〃 白色粒 〃	〃
	19	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	多孔質	〃	〃	〃	石英粒、白色粒、粗	錐部同一個体
	20	〃	〃	〃	体部	明茶褐色	無節?、左撚り?	淡茶褐色	ナデ?、煤	〃	茶褐色	〃	〃 雲母片、普通	
	21	Bd03	〃	〃	〃	茶褐色	五段?、左撚り?	茶褐色	ナデかミガキ、繊維露出	良好	暗褐色	〃	白色粒、精	
	22	Bb09	Ⅰ	〃	〃	〃	LR<$^{l}_{l}$	〃	〃 〃	〃	暗茶褐色	〃	小石、粗	接合部
	23	Bc53	〃	3—b—1	底部	極暗褐色	〃	極暗褐色	不明	普通	暗褐色	〃	石英粒、粗	平底?
	24	〃	Ⅱa	〃	体部	明茶褐色	縄文	〃	LR<$^{l}_{l}$	〃	〃	〃	雲母片 〃	
	25	Bd03	〃	〃	〃	赤褐色	RL<$^{r}_{r}$	〃	RL<$^{r}_{r}$、煤	〃	〃	〃	〃 石英粗粒、粗	
	26	Bc06	〃	〃	〃	〃	縄文	暗茶褐色	LR<$^{l}_{l}$	不良	〃	〃	白色粗砂石英粗粒、粗	
第14図	27	Bab53	〃	〃	〃	茶褐色	〃	極暗褐色	〃 煤	普通	〃	〃	雲母片、白色粗砂、粗	
	28	Bc50	〃	〃	〃	〃	LR<$^{l}_{l}$	淡茶褐色	〃 多孔質	不良	〃	〃	〃 〃 〃	
	29	Bc06	〃	〃	〃	赤褐色	縄文?	暗茶褐色	RL<$^{r}_{r}$、条痕	〃	〃	〃	石英粒、粗	
	30	〃	Ⅱb	3—b—2	〃	茶褐色	無節?、右撚り	極暗褐色	無節、右撚り、煤	普通	極暗褐色	有?	石英粒、白色粒、粗	錐部同一個体
	31	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	32	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	33	Bc53	Ⅰ	3—b—3	〃	極暗褐色	羽状縄文、二段	〃	LR<$^{l}_{l}$	良好	暗褐色	有	雲母片、普通	
	34	Ca77	Ⅱa	〃	〃	茶褐色	〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	石英粒、粗	
	35	Bc03	〃	3—c—1	口縁	暗褐色	縄文?	〃	横走条痕、煤	不良	〃	〃	石英粒、雲母片、粗	
	36	Bc06	〃	〃	〃	〃	RL≪ ?	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	37	Ahi62	Ⅰ	〃	〃	〃	RL<$^{r}_{r}$	〃	〃	普通	〃	〃	石英粒、粗	

実測図	番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	38	Bc06	Ⅱb	3—c—1	体部	暗褐色	RL<rr	極暗褐色	横走条痕、煤	良好	暗褐色	有	雲母片、普通	
	39	Cef24	Ⅰ	3—c—2	口縁	極暗褐色	〃	茶褐色	無文	普通	極暗褐色	〃	白色粒、普通	口縁部刻み目
	40	Bj68	Ⅱa	〃	〃	〃	〃	極暗褐色	斜行条痕、煤	不良	〃	有?	石英粒、茶色粒子、粗	〃
	41	Bb09	Ⅰ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 普通	〃
第15図	42	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	43	Bab03	Ⅱa	3—d—1	口縁	茶褐色	横位撚糸文?、右撚り	暗褐色	LR<l	良好	暗褐色	無?	石英粒、白色粒、普通	
	44	Bc03	〃	〃	体部	暗茶褐色	横走撚糸文、右撚り	暗茶褐色	RL<rr?	不良	〃	有?	〃 〃 粗	表面剥落
	45	Bc50	Ⅰ	〃	〃	〃	〃 〃	茶褐色	LR<l?	〃	〃	〃	〃 〃 〃	
	46	Bb53	〃	〃	〃	茶褐色	地文LR<l、横走撚糸文、右撚	〃	羽状縄文	良好	〃	無?	雲母片、白色粒子、普通	
	47	Aj56	Ⅱa	3—d—2	口縁	明茶褐色	横走撚糸文、右撚り	〃	斜行撚糸文、右撚り	〃	〃	無?	石英粒、普通	口縁刻み目
	48	Bc50	Ⅰ	〃	〃	暗茶褐色	〃 〃	明茶褐色	〃 〃	不良	〃	有	茶色粒子、普通	
	49	Bcd53	〃	〃	体部	明茶褐色	交叉撚糸文	茶褐色	〃 〃	〃	〃	無?	白色粒子、粗	
	50	Bb53	〃	〃	〃	茶褐色	横走撚糸文	〃	〃 〃	普通	〃	有	白色粒子、石英粒、粗	
	51	Bj77	Ⅱa	3—d—3	口縁	〃	口縁横走撚糸文、体部LR<l左撚り	〃	無文	不良	〃	有?	白色粒子、粗	口縁外面刻み
	52	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	52・53同一個体
	53	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	54	Bb53	Ⅰ	〃	〃	暗茶褐色	〃 〃 〃	茶褐色	〃	良好	茶褐色	無?	石英粒、普通	
	55	Bc53	〃	〃	〃	〃	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	有?	〃 粗	
	56	Bc06	Ⅱa	〃	体部	明赤褐色	〃 〃 体部RL<rr	暗茶褐色	〃	〃	極暗褐色	有	石英粒、雲母片、普通	
	57	Cj21	Ⅰ	3—d—4	〃	明茶褐色	口縁横走撚糸文、体部格子状	〃 暗灰褐色	〃	普通	暗褐色	無?	石英粒、粗	
	58	Bc53	〃	〃	〃	極暗褐色	口縁横走撚糸文、体部斜行	〃 極暗褐色	〃	不良	極暗褐色	有?	粗砂、粗	
	59	Ba50	Ⅱa	3—d—5	〃	茶褐色	斜行撚糸文	〃	条痕	良好	茶褐色	無?	雲母、普通	
第16図	1	Bc06	〃	4—a—1	口縁	明茶褐色	羽状縄文	明茶褐色	多孔質	普通	明茶褐色	〃	石英粗粒、雲母片、粗	平縁
	2	〃	〃	〃	〃	暗茶褐色	〃	暗茶褐色	ナデ?	〃	灰茶褐色	有	雲母片、小石、粗	〃
	3	〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃	黄褐色	〃	〃	極暗褐色	〃	雲母片、石英粗粒、普通	平縁、縦方向回転
	4	Bb06	〃	〃	〃	明赤褐色	〃	明赤褐色	多孔質	不良	赤褐色	無?	雲母片、石英粗粒、粗	
	5	Bd50	〃	4—a—2	〃	暗茶褐色	羽状縄文?	極暗茶褐色	ナデ?	〃	極暗褐色	有	〃 〃 〃	
	6	Bab53	Ⅰ	〃	〃	暗褐色	羽状縄文	暗褐色	ナデ、煤	〃	〃	〃	石英粗粒、白色細砂、粗	

実測図	番号	出土地点	出土層位	タイプ	部位	外面 色調	外面 調整・施文	内面 色調	内面 調整・施文	焼成	胎土 色調	胎土 繊維	胎土 土性	その他
	7	Bcd09	Ⅰ	4 a 2	口縁	暗褐色	羽状縄文、煤	暗褐色	ナデ?、クラック	普通	暗褐色	有	石英粗粒、白色細砂、普通	
	8	Cbc74	〃	4—a—3	〃	淡茶褐色	羽状縄文	明茶褐色	〃 繊維露出	良好	〃	有?	石英粗粒、普通	
	9	Aj56	Ⅱa	4—a—4	〃	極暗褐色	〃	極暗褐色	〃	〃	極暗褐色	無?	石英粒子、小石、普通	口唇部刻み目
	10	Bc50	〃	〃	〃	灰茶褐色	LR<1/1?	灰茶褐色	〃	不良	灰褐色	有	石英粒子、小石、粗	〃
	11	〃	〃	〃	〃	赤茶褐色	羽状縄文	暗茶褐色	ナデかミガキ?、繊維露出	普通	暗褐色	〃	石英粗粒、粗	口唇部刻み目 多孔質
	12	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃 〃	11と同一個体
	13	Bd06	Ⅰ	〃	〃	茶褐色	RL<r/r	〃	ナデかミガキ?	良好	極暗褐色	〃	石英粒子、精	口唇部刻み目
	14	Bb06	Ⅱa	〃	〃	〃	羽状縄文、横位回転	灰褐色	〃	〃	明茶褐色	無?	〃 粗	口唇部斜位刻み目
	15	Bb09	〃	〃	〃	極暗褐色	〃 ?	暗褐色	〃	〃	極暗褐色	〃	白色粗粒、普通	〃
	16	Ba06	〃	4—a—5	〃	淡茶褐色	LR<1/1?、口縁刺突	暗茶褐色	多孔質、口縁スリップ?	普通	暗茶褐色	有	石英粗粒、小石、粗	
	17	Bc06	〃	〃	〃	暗褐色	〃 〃	〃	無 文	〃	〃	有?	〃 〃 〃	口唇部原体圧痕
	18	Cbc71	Ⅰ	〃	〃	灰褐色	LR<1/1、 〃	暗褐色	〃	良好	灰褐色	無?	雲母片、精	
	19	Bc50	〃	〃	〃	暗褐色	〃 〃	〃	無文、多孔質	普通	暗茶褐色	〃	石英粒、雲母片、粗	
	20	Bc53	〃	〃	〃	〃	〃 〃	〃	無 文	良好	暗褐色	〃	雲母片、精	刺突は原体末端によるか?
	21	Bc50	Ⅱb	〃	体部	暗茶褐色	羽状縄文、縦横回転	〃	〃	不良	〃	有	白色小石、粗	
	22	Cj18	Ⅱa	4—6	〃	〃	無節羽状縄文?	極暗褐色	横斜位の細条痕	普通	極暗褐色	無?	石英粗粒、粗	
	23	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
	24	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
第16図	25	Aj62	Ⅰ	その他	〃	茶褐色	爪形文状	暗灰褐色	ナデかミガキ	良好	暗茶褐色	無	石英細粒、精	
計 186														